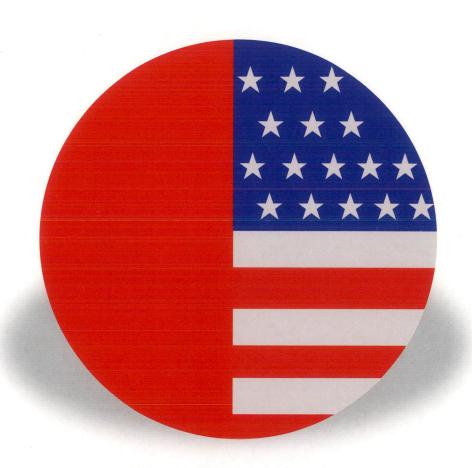
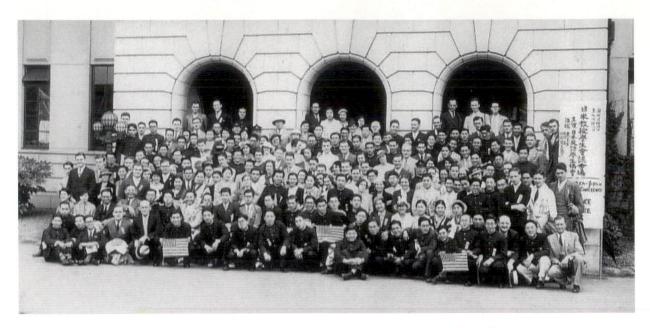
第61回日米学生会議日本側報告書

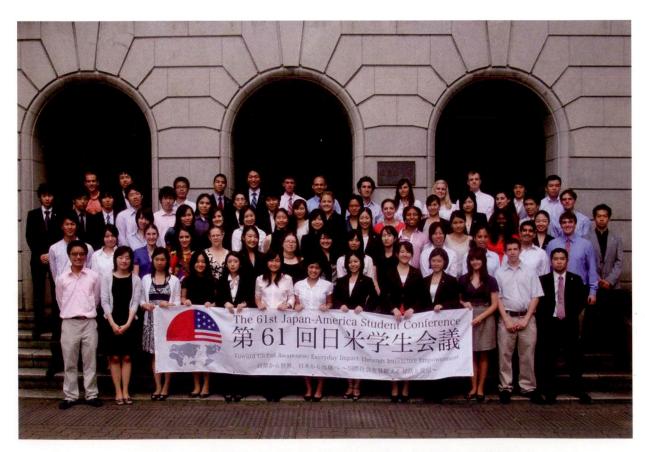
## The 61st Japan-America Student Conference



日常から世界、日米から地球へ 〜国際社会を見据えた対話と発信〜 Toward Global Awareness: Everyday Impact Through Interactive Empowerment



1934年 第1回日米学生会議 青山学院大学真島記念館前にて



2009年 第61回日米学生会議 青山学院大学真島記念館前にて

第61回 日米学生会議 日本側報告書

### 目 次

序直		日米学生会議概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	2 4 5
第1章	<b>1</b>	第61回日米学生会議概要	
		第61回日米学生会議概要	
		参加者名簿 日本側	11
		米国側·····	
		メディアへの掲載	··· 13
第2章	<b>音</b> :	事前活動および学生有志活動	. 19
7,5—		第61回日米学生会議報告会および講演会	
		日米学生会議in広島および第61回日米学生会議説明会	
		日米学生会議in京都および第61回日米学生会議説明会	
		春合宿	23
		英語ディベートワークショップ	
		お好み焼き教室・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
		学生有志活動 サハリン訪問	
		防衛大学研修	
		直前合宿	31
第3章	查	本会議・サイト活動	. 33
		東京	34
		函館	41
		長野······	49
		京都	57
<b>第</b> 73	告	本会議・分科会活動	. 67
35°	7	<b>本 公 様 き ガ 付 云 石 勤                                </b>	68
		国際開発と自立的発展一途上国と向き合う一	
		世界を動かす新興国一BRICsの台頭と日米一	
		世界の食糧安全保障一生産、流通、消費の再構築一・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	90
		現代社会と健康・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
		環境と持続可能な発展・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	107
		公と私:公共の利益は個人の権利と両立できるのか・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	105
第5章	辛	参加者の声	125
新ひ!			120
第6章	章	第62回日米学生会議概要	157
第7章	章	日米学生会議にご協力いただいた方々	163

## 序章

### 日米学生会議概要

日本側実行委員長挨拶	2
米国側実行委員長挨拶(	3
日米学生会議の歴史・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	4
麻生太郎前内閣総理大臣からの	
メッセージ!	5
過去の参加者からのメッセージ(	6
宮澤喜一氏	
ヘンリー・A・キッシンジャー氏	
本文中の略語について(	6

#### 日本側実行委員長挨拶

第61回日米学生会議実行委員会 日本側実行委員長 松本 秀也

75年という歳月の中で、学生は何を思い、学生の役割 はいかに移り変わってきたのか。この問いかけは、日米 学生会議において最大の命題、根本にある問題意識で あった。人々の移動と文化交流促進により、世界は多 様化する一方で、都市化や商業主義を受けて一元化の 様相も呈してきた。人々はいとも簡単に地球を一周し、 生命、自然科学の解明は、自然との共存の時代から自 然破壊を引き起こすに至り、世界はより難解かつ大規 模な問題に直面しながら、21世紀という時代を迎えた。 このような時代の流れを受け、日米の学生ができるこ とは何なのか。日米の学生が議論すべきことは何なの か。環境問題や核廃絶。気付けばそれらは、もはや日 米の問題のみならず、地球規模にまで拡大していた。

「日常から世界、日米から地球へ~国際社会を見据え た対話と発信~」このテーマには、まさにそのような地 球規模に発展した問題に日米の学生がいかに知恵を絞 り、日米学生会議の中でこれらの問題に言及できれば という想いがこめられている。

国際交流が盛んに行われる現代において、日米の学 生交流は、日常的で、自然なものとなってきている。我々 としては、そこに一抹のもどかしさを感じると共に、 一方でこの日米学生会議にしかできない対話や相互理 解の構築は、頻繁に交流が行われ、「最も成熟した二国 間関係」と評される現代の日米関係においてさえ、必要 不可欠であると感じるようになった。72名の学生が1ヵ 月寝食を共にし、議論を重ね、意見を交換し、価値観 を醸成していくプロセスは、何にも変えがたい意義な のである。

#### -日常から世界、日米から地球へ-

「環境と持続的な発展」、「国際開発」、「食糧安全保障」 という地球規模の問題を扱った各々の分科会では、歴 史を省み、より良い世界構築への糧となった。また教 育分科会では、「地球市民教育」という理念を目指し、 グローバルな世界で共有されるべき教育の在り方につ いて議論が行われた。またBRICs諸国の現状と今後の 日米とBRICsとの関係を考え、議論した「BRICs」分科 会は、より広範な世界の潮流を捉える意味で、日米学 生会議においても新しい一歩となった。国や組織の中

における、個人と公共の在り方、双方の関係を死刑制 度など具体的ケースを用いて検討し、日米双方の倫理 観や価値観の相違を確認し、共有した「公と私」分科会。 健康の定義が肉体的、精神的なものだけでは表現でき ない今日、多様な視点から健康の概念やQOLの定義を 模索した「現代社会と健康」分科会における作業は、現 代の生活様式や人々の精神的及び肉体的変化を知る上 で非常に有意義であっただろう。

振り返れば、東京で出会い両国学生の間に芽生えた 不安は、函館では疑念に、長野では友情に、そして京 都では信頼へと移り変わったように思う。1ヵ月とい う期間は、双方の「理解」を達成する上で十分なものと は言えないかもしれないが、各々が各々を理解しよう と努め、妥協し合う心は、深く長い交流の歴史、二国 間関係に蓄積のある日米両国の学生だからこそ可能で あると、私は強く実感した。言い換えれば、日本と米 国の築いてきた関係は、学生の我々の気持ちの中にも、 互いを深く見つめ合おうとする姿勢を自然に植えつけ てくれたものと思う。

会議の中で、自らの限界を感じることが多々あった。 しかしながらこの限界は、日米学生会議という特殊な 環境や、集まった友の思いにより克服されていった。1ヵ 月の中で繰り返される「日常」により乗り越え生まれた 相互理解は、何よりも強い。この相互理解、および1ヵ 月で培った信頼の積み重ねこそが、本会議後の各々の 人生において、やがては国際社会への「発信」、そして 世界の諸問題に日米で協調的に携る上で、大きな一助 となると私は信じている。

最後に、創立75周年という節目の日米学生会議に自 らが参画できたこと、未曾有の経済情勢悪化にも拘わ らず、変わらぬご指導、ご協力を賜った国際教育振興 会、企業各社、財団、日米学生会議アラムナイの皆様、 その他本会議でお世話になった各開催地の皆様を含め、 全ての人に感謝の意を表し、日本側代表として、ここ に第61回会議終了のご報告をさせていただきます。

-Toward Global Awareness: Everyday Impact Through Interactive Empowerment-

#### アメリカ側実行委員長挨拶

Colin Moreshead Chairperson, American Executive Committee 61st Japan-America Student Conference

The 61st Japan-America Student Conference began in the same way the Conference has in each year previously with the gathering of bright, young faces and a determination to conquer a number of monumental tasks over the coming month. That is, perhaps, where the specific similarities between the 61st Conference and previous ones end. Each year's conference is perfectly unique, and ours was no exception; on a personal level, I found there to be countless differences between the 60th Conference in America and the 61st in Japan. However, it was in combining this ardent dynamism with the knowledge of our deep-rooted traditions that we were able to produce a significant experience for our participants.

The Japan-America Student Conference looks very different now in 2009 than it did in previous decades. The topical issues have shifted entirely, and despite the bilateral nature of our Conference, the global community is more and more worthy of our concern. This year's theme was "Toward Global Awareness: Everyday Impact through Interactive Empowerment." Part of this theme's message was that neither Japan nor the United States can afford to think inwardly anymore. Even in our relationship with one another, we must begin to collaborate more on solving international problems rather than focusing only on our own. The 61st Conference's participants came to the table this year with the privilege of coming from two of the world's premier powers. They did not take that privilege for granted, however, and committed themselves to working hard as students on the international and community level. It is in that interest that JASCers renew their efforts every year in the hopes of attaining heightened understanding between two peoples.

We were honored to be at Aoyama Gakuin University for our 75th Anniversary event. Our day there was a resounding success for our Conference, and there were many alumni, friends and supporters in attendance. Having seen the photo of the first JASC delegation countless times, taking our anniversary photo there was a surreal and evocative experience. The 61st delegates, having only just begun their experience, were still unsure about what would be in store for them over the next month. Now, as we look

back on our Conference, we reminisce on the threequarters of a century that have passed and what the next three-quarters may bring.

During our stays in Tokyo, Hakodate, Nagano and Kyoto, we were met with overwhelming hospitality that could not possibly have been expected. Through all the time spent in roundtable discussion, traveling, and researching our various topics, the underlying factor that tied our Conference together was indeed the interaction we enjoyed with the Japanese people we met wherever we went. In particular, our stay in Nagano Prefecture's Obuse town stands out as a growing and empowering experience for our delegates. The town opened itself to us in such a way that we were able to meet and speak to people from all walks of life and see the inner workings of a community not so often seen by foreign visitors in Japan. Even for many of our Japanese delegates, it was a completely new setting with many surprises. As our theme was so focused on the relationship between community and the world, we took our few days in Obuse as a valuable opportunity to hear another perspective on world issues.

This year's Conference was a fantastic amalgam of urban and rural, new and old, local and global. Our scope was broad and our ambitions great, but after all, 72 people walked away from the 61st Conference with new understanding and the means to work together to solve modern problems. It is a testament to our program that both the Japanese and American sides received a considerably high number of applications this year. I am confident that next year will continue the tradition in much the same way; thanks to the continued support of our many friends and alumni, the future of the Japan-America Student Conference is bright. I would like to thank all of our supporters who continually make the Japan-America Student Conference possible. For those in both Japan and the United States, without the enthusiasm and kindness of such people, we would be unable to enjoy many of amenities that contribute to the success of the Conference. For this, I would like to extend thanks to everyone involved, on behalf of the 61st delegation and executive committee. Thank you very much!

#### 日米学生会議の歴史

日米学生会議は、1934年、満州事変以降悪化しつ つあった日米関係を憂慮した日本の学生有志により 創設された。米国の対日感情改善、日米相互の信頼 関係回復が急務であるという認識の下、「世界の平 和は太平洋の平和にあり、太平洋の平和は日米間 の平和にある。その一翼を学生も担うべきである」 という理念が掲げられた。当時の日本政府の意思と 能力の限界を感じた学生有志は、全国の大学の英語 研究部、国際問題研究部からなる日本英語学生協会 (日本国際学生協会の前身)を母体として、自ら先頭 となって準備活動を進めていった。資金、運営面で 多くの困難を抱えながらも、4名の学生使節団が渡 米し、全米各地の大学を訪問して参加者を募り、総 勢99名(うち22名は大学教授、およびその夫人でオ ブザーバー)の米国側代表を伴って帰国した。こう して第1回日米学生会議は青山学院大学で開催され、 会議終了後には満州国(当時)への視察研修旅行も実 施されるに至った。

日本側の努力と熱意に感銘した米国側参加者の申し出によって、翌年第2回日米学生会議が米国オレゴン州ポートランドのリードカレッジで開催され、以後1940年の第7回会議まで、以下の通り日米両国で毎年交互に開催されることとなる。第3回(1936年)早稲田大学。第4回(1937年)スタンフォード大学。第5回(1938年)慶應義塾大学。第6回(1939年)南カリフォルニア大学。第7回(1940年)津田塾大学。しかし、太平洋戦争の勃発に伴い、日米学生会議も中断を余儀なくされた。

終戦後、会議復活の声が上がり、当時の学生とかつての参加者の努力により、日米学生会議は1947年に再開し、第8回を迎えることとなった。しかし、当時日本は占領下にあり、米国からの学生を招くことが不可能であったため、在日米兵および軍属の中から、大学生の資格を持った者を選んでの会議再開であり、1953年の第14回会議まで日本のみでの開催が続いた。翌1954年、第14回会議に参加したコーネル大学の学生の提案により、第15回会議が戦後初めて米国の同大学で開催されることが決定した。しか

し、当時の日本の経済状況では、日本側参加者の渡 米費用を捻出することは容易ではなく、米軍の輸送 機の提供を受け、15名のみの日本側代表が参加する に留まった。

これがきっかけとなり、日本に留まった参加者の中から「2国間関係のみならず、多国間での学生による交流が行われるべき」との声が強まり、日米学生会議を国際学生会議に発展的に解消することが決定され、同じく1954年、アジア地域の学生との会議を主目的に第1回国際学生会議が開催されることとなる。なお、国際学生会議は現在も、関西地方を中心に、各国から留学生を招集する形態で継続されている。一方の日米学生会議は、この決定により、1954年をもって、再び中断されることとなった。

1963年に至り、翌1964年が第1回会議創立の30周年に当たることもあり、日米相互開催の形での会議再開を望む声が高まった。これを受け、第1回会議創始者が多数の理事を務めていた財団法人国際教育振興会が日本側主催者としての責任を取ることで会議が再開されることが決定された。第1回及び第2回の米国側参加者の努力もあり、1964年、日本側参加者77名と米国側参加者62名による、第16回会議が実現し、ゆかりの深いリードカレッジで開催されることとなった。1964年は、東京オリンピックが開催された年でもあった。

その後、日米相互開催の下、会議は継続されるが、1973年第25回会議において、当時の学生によって抜本的な改革がなされ、現在の会議の基本形態が整備されることとなる。それは主に、限られた日程の中での議論をより効率的かつ集中的に行うために、毎年の会議ごとにテーマを設定する、期間を1ヵ月間とする、などである。円が変動為替相場制に移行し、米軍が南ベトナムより撤退した1973年でもあった。1978年には、戦前の日米学生会議参加者有志により、会議の継続に必要な経済的支援を主目的とする、国際教育振興会賛助会が設立され、会議永続への道が開けることとなった。また、次いで第31回会議が開催された1979年には、米国においても戦前の参加者によりJASC、Inc.が設立され、米国側実行委員会をサポートする体制が確立された。

その後日米学生会議は、財団法人国際教育振興会とJASC、Incの協力の下、日米両国学生が主体的に企画・運営を担うという形態を取る中で、継続されることとなる。そして2007年度にアメリカ側支援団体であるJASC、Incは、ISC、Inc(International Student Conferences)と名前を変え、他国との学生会議開催も視野に入れ始めた。創設時と今日では日米両国を取り巻く環境は大きく異なり、会議の形態自体も変化している。現在の日米学生会議は、会議創設時の理念を受け継ぎつつも、時代の変化に対応し、今日に至っていると言えよう。

#### 前内閣総理大臣からのメッセージ

第61回日米学生会議の開催を、心よりお祝い申し 上げます。

日米学生会議は、1934年の開始以来、今日に至るまで75年にわたり、日米の学生の企画・運営により活動を継続してきました。日米学生会議が、両国の相互理解と友情の促進に大きく寄与してきたことを、喜ばしく思います。

日米両国は、自由、民主主義、人権の尊重などの 共通の基本的価値を基盤とし、安全保障を始め、政 治・経済等の幅広い分野において協調していく関係 にあります。また、東アジア地域には、現在も不確 実性が存在する中、日米同盟は、日本のみならず、 アジア太平洋地域の安定と発展にとって、不可欠な 役割を果たしています。

私は、本年2月に訪米し、オバマ大統領就任後、ホワイトハウスを訪問する最初の首脳として、会談を行いました。会談においては、北朝鮮問題、気候変動、核不拡散問題を含め、幅広い分野について話し合い、日米同盟を一層強化していくことで一致しました。特に強調したいのは、日米両国は、手を携えて、世界の平和と繁栄に向けて力を尽くしていくことで合意していることです。アフガニスタン、パキスタンへの支援、テロとの闘いにおける日米協力は、その例です。

本年の日米学生会議のテーマ「日常から世界、日 米から地球へ〜国際社会を見据えた対話と発信〜」 が示すとおり、日米両国は、世界が直面する地球規模の問題の解決のため、あらゆるレベルにおいて対話を重ね、ますます緊密に連携していかなければなりません。未来を担う皆様が、この日米学生会議を通じて、日米両国が国際社会において果たすべき役割や、明るい未来に向けた施策について、活発に議論し、多くの有意義な提言をされることを期待しております。

平成21年7月29日 日本国内閣総理大臣 麻生、太郎

Welcoming Remarks

I would like to extend my sincere congratulations on the holding of the 61st Japan-America Student Conference.

Over the 75 years since its beginning in 1934, the Japan-America Student Conference has been continuously engaged in activities through planning and execution by Japanese and American students. I am very pleased that the Japan-America Student Conference has contributed so significantly to the promotion of mutual understanding and friendship between Japan and the United States.

Japan and the United States enjoy a relationship in which we coordinate across a wide range of fields including security as well as politics and economics among other areas, with the common fundamental values of freedom, democracy, and respect for human rights serving as the foundation. In addition, within the ongoing context of uncertainty in the East Asian region, the Japan-US alliance plays a vital role in the stability and development of not only Japan but also the entire Asia-Pacific region.

In February this year I visited the United States for a summit meeting as the first Prime Minister to visit the White House after President Obama took office. Our discussions covered a

#### 序 章 日米学生会議概要

broad spectrum of areas including the North Korean issue, climate change, and nuclear non-proliferation, and we agreed to reinforce the Japan-US alliance even further. I would like to emphasize in particular that Japan and the United States are in agreement to work hand in hand in our efforts to bring about global peace and prosperity. Examples of this include cooperation between Japan and the United States in extending assistance to Afghanistan and Pakistan and also in efforts to counter terrorism.

As the theme for this year's Japan-America Student Conference, "Toward Global Awareness: Everyday Impact Through Interactive Empowerment" indicates, Japan and the United States must deepen its dialogues at every level and engage in even closer cooperation in order to resolve the global issues now facing the world. I hope that through this Japan-America Student Conference you who will play a major role in shaping the future will actively discuss the roles that Japan and the United States should play within the international community as well as policies and measures that will lead to a bright future. I very much look forward to numerous meaningful recommendations emerging from your discussions.

> Taro Aso Prime Minister of Japan July 29, 2009

#### 過去の参加者からのメッセージ

元内閣総理大臣宮澤喜一氏

1939、1940年日米学生会議参加者

As one whose own first involvement in Japan-U.S. relations was under the auspices of the Japan-America Student Conference in 1939, I can tell you honestly that it was one of the formative events of my lifetime. Having stood in your shoes

more than fifty years ago, I sincerely hope that you will take full advantage of your participation in the JASC.

元アメリカ合衆国国務長官へンリー・A・キッシンジャー氏

1951年日米学生会議参加者

I had had little opportunity, in this post-war period, to meet and exchange views informally with Japanese people. The Japan-America Student Conference provided that opportunity, and from it came many valuable new perspectives on Japanese culture and society. It was also at that time that my interest was awakened in Japanese artistic and aesthetic traditions, and appreciation which remains with me to this day.

#### 本文中の略語について

JASC(ジャスク): 日米学生会議(Japan-America Student Conference) の略。

JASCer(ジャスカー): 日米学生会議参加者。過去の参加者も含む。

**ISC, Inc**: アメリカ側主催団体であるInternational Student Confereces, Incの略。

**EC**:実行委員会、または実行委員Executive Committee の略。

AEC: 米国側実行委員会American Executive Committeeの略。

JEC: 日本側実行委員会Japanese Executive Committee の略。

デリ、デリゲート:日米学生会議参加者。Delegate。

ジャパデリ:日本側参加者。 アメデリ:アメリカ側参加者。

アラムナイ:日米学生会議の過去の参加者。

サイト:本会議開催地の意味。長野サイト等。

RT:参加者がいずれかに帰属する分科会のこと。 Round Tableの略。

**リフレクション**:参加者が会議の感想や反省点を話し合う場。

## 第1章

第61回 日米学生会議概要

第61回日米学	学生会議事業概要 · · · · · · · · · · · · ·	8
参加者名簿	日本側1	1
	米国側1	2
メディアへの	)掲載······1	3

#### "-Toward Global Awareness: Everyday Impact Through Interactive Empowerment-" 「日常から世界、日米から地球へ~国際社会を見据えた対話と発信~」

「世界の平和は太平洋の平和にあり、太平洋の平 和は日米間の平和にある。その一翼を学生も担うべ きである。」1934年、満州事変を契機に悪化しつつ あった日米関係を危惧した四名の日本人学生は、こ の理念を胸に抱き太平洋を渡った。これが日本初の 国際交流プログラム、日米学生会議の幕開けである。 創立以来、参加者たちは国際社会で起きている様々 な問題に深い洞察を加えると共に、日米両国の学生 間の相互理解を促進し、友情と信頼関係を醸成して きた。毎夏日米交互に開催される約1ヵ月間の会議 は、すべて学生の手によって企画・運営されている。

第61回日米学生会議は「日常から世界、日米から 地球へ〜国際社会を見据えた対話と発信〜」という テーマを掲げた。私たちはこのテーマに二つ意味を 込めた。

20世紀における日本とアメリカの二国間関係を 振り返れば、それは絶えず変化してきた。それでも、 第二次世界大戦と直後の米国による戦後統治、さら には安保闘争や貿易摩擦などの幾多の困難を乗り越 え、ついに2006年には日米両国間の関係は「歴史上 最も成熟した二国間関係」と表現されるまでに至っ た。しかし、この表現の正当性に留保をつけざるを 得ないであろう。テロリズムに代表される暴力の応 酬、環境問題、経済、貧困、民族問題など、日米だ けでは解決が困難な様々な課題が溢れていることに 加え、中国やインドなど新興国の発展にこそ世界の 注目が集まりつつあるからだ。今後日本と米国の二 国間関係の重要性は相対的に低下するであろう。こ うした現代の世界情勢を踏まえた上で、21世紀にお ける日米同盟の意義や国際社会における日米の役割 を考察したいという思いが、「日米から地球へ」とい う言葉に込められている。

また、私たち学生は、分科会において、文化や言 語の壁を乗り越えながら率直な議論を交わすことと なる。さらに、フォーラム、フィールドトリップな どにおいて、さまざまな人と出会い、学生としてい

かに社会に発信できるかを模索する機会がある。こ の過程で、参加者は自身の考え方や価値観の根幹を 見つめ直すことができるであろう。参加者には、第 61回日米学生会議を終えて、それぞれが学生として の日常生活に戻り、さらには社会に羽ばたく際に、 会議で蓄積された経験を生かし、自らの周囲に影響 を与え続けていくことが求められている。さまざま な場で「対話と発信」を繰り返していくことが、やが て世界の諸問題を解決する一助になるであろう。こ れが「日常から世界へ」という部分で目指すものであ

このような基本理念の下、第61回日本開催となる 本年度の日米学生会議は、東京、函館、長野、京都 の四箇所を主要開催地とし、議論と交流を重ねる。 私たちは、還暦を経て第61回開催を迎える当会議の 歴史と、それを支えてきた多くの人々の思いを受け とめ、両国学生間の対話の充実を目指し、学生のメッ セージを社会に投げかけていく。

#### 【主催】

財団法人 国際教育振興会

#### 【企画・運営】

第61回日米学生会議実行委員会

#### 【開催期間】

2009年7月28日~2009年8月21日

#### 【開催地】

#### 東京

江戸開府から四百余年。1300万人近い人口を擁 する巨大都市に成長した東京は日本の経済・政治 的中核であると同時に、常に最新の技術と文化の 発信地であり続けてきた。世界各国の企業、公 館、国際機関が集中している新宿や渋谷、六本木 を見れば、東京が国際都市であることは一目瞭然 である。また、ファッション街の「HARAJUKU」、 最新技術とオタク文化の聖地「AKIBA」がもはや 英単語となっている今現在、新宿から秋葉原まで、

どこに行っても人種や国籍の多様性が見られるようになった。様々な文化や価値観が交錯するこの大都市東京。その中心にある代々木の青少年総合センターより、第61回日米学生会議は国際社会を見据えた対話と発信を開始する。

#### 函館 一

100万ドルの夜景に朝獲れイカ刺し。現在の函 館は、年間500万人を集める観光都市として、ま た日本有数の漁業都市として名を馳せているが、 300年に及ぶ鎖国期には松前藩による蝦夷地交易 の一港にすぎなかった。しかし、今からちょうど 150年前に日米修好通商条約が締結されると日本 初の国際貿易港として開港され、洋館や教会を建 築するという形で外国文化をいち早く吸収して いった。一方で、幕末動乱の舞台となった五稜郭 も残っており、異国情緒溢れる街並みと日本の伝 統的雰囲気の双方をあわせもつ函館は、日本の近 代化とそれに密接に関わってきた日米両国の関係 を捉えなおす最適な場と言える。それに留まらず、 日米両国と国境を接するロシアを加えながら包括 的に国際関係を、また、日本の漁業から世界の海 洋資源を、アイヌ民族から世界の少数民族を、と 日米の枠を出発点にしながら様々な社会問題を世 界全体に敷衍して論じることを目指す。

#### 長野 一

日本アルプス、八ヶ岳などの雄大な山々、松本城、善光寺といった多数の国宝、重要文化財が存在する長野には年間9000万人程の観光客が訪れる。暑い夏をさわやかに過ごせる避暑地、喧騒から離れて自然を謳歌する保養地などとしても名高い。しかしながら一方、少子高齢化、過疎化、大都市との格差など今日の地方が直面する課題も表にはならない。経済活性化に向けた高度技術を制度進、信州農業と魅力ある農村社会へのビジシュではならない。経済活性化に向けた高度技術を製促進、信州農業と魅力ある農村社会へのビジシュを近近、地方県政の取り組みを知ることができる重要なサイトでもある。「ふるさと信州」の美しい風景と人々の暮らしを、ホームステイや地域住民の方々との積極的なコミュニケーションを通じて、都市では伝えきれない日本を体感したい。

#### 京都 -

明治維新まで千年間、日本の都であった京都。 足を踏み入れれば、その歴史を見守ってきた寺社 仏閣の醸し出す雰囲気に包まれ、日本文化を肌で 感じることができる。一方、多くの大学、ベン チャー企業、NGO、NPOが存在し、技術革新や 市民活動の先端を担っている。また、京都議定書 の採択に代表されるように多くの国際会議の開催 地でもある。このように世界に開かれた都市とし て現在も発展を続ける原動力になっているのは、 芸術や工芸などの成熟した伝統と新しい感性とが 刺激し合う相乗効果であろう。私たちも、この都 市、さらには国際社会を動かす新しい意見の一つ となることを目指して、第61回日米学生会議の1 カ月にわたる議論の成果を発表する。

#### 会議の過程

第60回日米学生会議の参加者から選出され、発足した実行委員会が、日本側の主催団体である財団法人国際教育振興会、米国側はISC, Inc.の協力の下、本会議開催のための準備活動を行う。4月に参加者の決定後、所属分科会のテーマに関するレポートを作成し、講演会や勉強会、合宿などの事前準備を行い、夏の本会議に臨む。

本会議では、日米各36名、合計72名の学生が約1ヵ月に渡って共同生活を送る。本会議の主な活動として、討論が中心となる分科会、各種のフィールドトリップ、そして様々な社会活動、終盤に開催されるフォーラムなどが挙げられる。参加者は7つの分科会に別れ、第61回会議のテーマである「日常から世界、日米から地球へ~国際社会を見据えた対話と発信~」の下、ディスカッションを行う。また、フィールドトリップでは、各自の視野を広げ、討論の充実化を図る。さらに、本会議では議論に止まらず、ホームステイやフォーラムなど積極的に地域の方々との交流を図っていく。また、フォーラムでは、分科会での討論の結果など本会議の成果を社会に向けて発信する。

本会議終了後には、参加者は会議の内容を報告書 にまとめ、第61回日米学生会議の総括とする。各参

#### 第1章 第61回日米学生会議概要

加者は、本会議で得られた経験を胸に、社会へと巣 立っていく。

#### 会議中のプログラム

#### 【分科会】

本会議においての活動の中心となる分科会は7つ 設けられており、日米双方5名ずつの学生が、本会 議期間中を通じて議論を重ねることとなる。事前活 動に加え、本会議中もフィールドトリップで関連機 関や専門家を訪問するなど、議論の質の向上を目指 す努力が続けられる。なお、第61回会議における分 科会は以下の通りである。

#### ●地球市民教育

Educating a Global Citizenly: What is the ideal education for a globalizing society?

- ●国際開発と自立的発展~途上国と向き合う~ International Development: Searching For Real Solutions
- ●世界を動かす新興国~BRICsの台頭と日米~ Economies: The Rise of BRICs in Relation to Japan and the U.S.
- ●世界の食糧安全保障~生産、流通、消費の再構築~ Food Security and the Future Accessibility of **Edible Commodities**
- ●現代社会と健康

Modernized Technology and Health Issues

●環境と持続可能な発展

Environment and Sustainable Development

●公と私:公共の利益は個人の権利と両立できるの

Public Interest VS Individual Right

#### [Field Trip]

分科会の議題や各開催地に対する理解を深める ことを目的に、政府機関、国際機関、企業、大学、 NGO、NPO、及び研究所などへの訪問研修を実施 する。事前活動におけるものと同様に、社会と直接 関わることのできる貴重な機会であり、議論をより 現実的視点から行うための礎とする。

#### **(Special Topics)**

限られた議題を扱う分科会とは異なり、参加者が

個々の関心に沿った議題を自由に設定し、異なる視 点からの議論を行うことを目的としている。また参 加者の主体的、自発的な参加により、問題発見、及 び議題設定能力を養う、同時により広い参加者同士 の交流を促し、新たな視点や発想の獲得により、会 議をより充実させることも求められる。

#### [Conference Wide Discussion]

分科会では扱わないテーマを対象とし、日米学生 会議アラムナイや専門家をゲストスピーカーとして 招き、第61回会議のテーマである「日常から世界、 日米から地球へ」を掲げ、参加者の見識を広め、新 たな課題や視点を発見することを目的とする。

#### [Conference Wide Reflection]

参加者が一同に集い、会議中に感じた悩み、不安、 感動、喜びなど、様々なことを自由に話し合う。自 分の思いを全体に伝え、また他者と思いを共有する ことで、自己を振り返り、他の参加者との相互理解 を促進することを目的とする。

#### [Forum]

各開催地のテーマに沿って随時行われる。第一線 で活躍する専門家や有識者の講演、または学生を交 えたパネルディスカッションなど、参加者に学術的 経験を得てもらうことを目的とする。さらには、分 科会の成果の発表を行い、現代社会が抱える問題と それに対する学生なりの視点を来場者と共有するこ とによって、第61回日米学生会議の成果を社会に発 信することも目的としている。

#### 第61回日米学生会議日本側参加者名簿

日本側実行委員	大学	学部・専攻	学年	RT
松本秀也*	慶應義塾大学	商学部	4年	
竹内友里**	東京大学	法学部	3年	BRICs
小野 元	京都大学	総合人間学部	3年	食糧
神馬光滋	国際基督教大学	教養学部国際関係学科	3年	教育
田中 豪	東京大学	法学部	3年	公と私
誉田有里	慶應義塾大学	法学部政治学科	3年	開発
松尾恵輔	早稲田大学	法学部	4年	環境
安川瑛美	一橋大学大学院	社会学研究科	修士課程1年	健康
*は実行委員長、**は	副実行委員長を表す。	and the second s	12 14 14 14 1	1-6-1-1-6

#### 日本側参加者

浅野泰史	東京大学大学院	工学系研究科社会基盤学専攻	修士課程2年	環境
安藤歩美	青山学院大学	国際政治経済学部国際政治学科	3年	BRICs
飯沼瑶子	早稲田大学	商学部	4年	教育
衣袋 聡	早稲田大学	政治経済学部国際政治経済学科	4年	BRICs
梅本勇基	広島大学	医学部医学科	6年	健康
大谷 翔	東京大学	工学部航空宇宙工学科	3年	公と私
大西すなほ	慶應義塾大学	文学部人間科学専攻	3年	健康
大宮 透	東京大学	工学部都市工学科都市計画コース	3年	教育
緒崎裕香	国際基督教大学	教養学部人文科学科	4年	健康
加藤 梓	慶應義塾大学	総合政策学部	2年	環境
坂田奈津希	東京大学	教養学部文科一類	2年	食糧
笹岡祐衣	立命館大学	国際関係学部	2年	開発
杉本友里	京都大学	総合人間学部総合人間学科	3年	環境
高木あかり	京都大学	医学部医学科	3年	公と私
高田修太	東京大学	教養学部理科2類	2年	健康
高橋央樹	一橋大学	商学部	2年	食糧
谷口貴大	国際基督教大学	教養学部アーツ・サイエンス学科	2年	公と私
谷原英利	東京大学	教養学部	4年	開発
趙 潤華	早稲田大学	国際教養学部	4年	食糧
徳地宜子	東京大学	法学部	4年	開発
中村誠一郎	海上保安大学校	航海科	3年	開発
中村梨紗	同志社大学	文学部	4年	教育
中村真理	東京外国語大学	外国語学部スペイン語専攻	2年	公と私
西野 緑	上智大学	国際教養学部	3年	教育
野津美由紀	国際基督教大学	教養学部国際関係学科	3年	BRICs
林 藤彦	慶應義塾大学	法学部政治学科	4年	BRICs
安川皓一郎	早稲田大学	法学部	4年	食糧
山本佳世	北海道大学大学院	国際広報メディア・観光学院	修士課程2年	環境

BRICs=世界を動かす新興国~ BRICsの台頭と日米~、食糧=世界の食糧安全保障~生産、流通、消費の再構築~、教育=地球市民教育、公と私=公と私:公共の利益は個人の権利と両立できるのか、開発=国際開発と自立的発展 ~途上国と向き合う~、 環境=環境と持続可能な発展、健康=現代社会と健康

第61回	日米音	学生会議ア	X 1)	71	即参加者。	名簿
MITTORY	$\square$ $\square$	丁上厶时	/ /		X120 71H 10 1	口行

アメリカ側実行委員	大学	学部・専攻	学年	RT
Colin Moreshead*	Wesleyan University	E. Asian Studies, Economics	Sophomore	
Jieun "Karen" Jung **	Dickinson College	E. Asian Studies, Pre-Health	Sophomore	Health
Jon-Michael Durkin	University of Akron	Political Science	Junior	BRICS
Kavoko Hirata	Cornell University	Urban and Regional Studies, Government	Sophomore	Food
•	The University of Tokyo	Systems Innovation	Junior	Environment
	Dickinson College	Int'l Business & Management	Junior	ID
Edward Phillips	University of Washington	Japanese	Senior	PvI
	Harvard University	E. Asian Studies	Senior	Education
*は実行委員長、**は				

#### アメリカ側参加者

Michelle Arguelles	Boston College	Int'l Studies	Sophomore	BRICs
Yudai Chiba	Princeton University	E. Asian Studies	Junior	Health
Daniel De Rienzo	Wesleyan University	Economics	Sophomore	Environment
Anthony Scott Dowdell	University of Hawaii at Manoa	Int'l Business & Management	Sophomore	Education
Leah Flake	Smith College	Engineering	Sophomore	Environment
Kelvin Ho	Tufts University	Int'l Affairs, Computer Science	Freshman	ID
Mariama Holman	Wake Forest University Economics	Freshman	Environment	T&M
Amie Hornick	St. Lawrence University	English & American Lit, Psychology	Junior	Health
Svetlana Ikonomova	Cornell University	Chemical & Biomoleculer Engineering	Sophomore	Food
Diane Lee	Smith College	English, Government	Sophomore	Food
Katherine Marshall	Columbia University	Political Science	Freshman	Education
Alisa Marie Modica	University of Illinois	Urbana-Champaign Political Science	Senior	BRICs
Madison Moss	Columbia College Chicago	Photography	Freshman	Health
David Myers	SUNY Geneseo	Political Science	Freshman	PvI
Ikuno Naka	Wellesley College	Undeclared	Freshman	Education
Jose Miguel Pulido	George Washington University	Undeclared	Freshman	Health
Emily Rath	University of Louisville	Political Science, Philosophy	Sophomore	BRICs
Paul Rockower	University of Southern California	Public Diplomacy	Graduate	Food
Risa Sakuma	Brown University	Int'l Relations	Sophomore	PvI
Aya Spencer	George Washington University	Undeclared	Freshman	PvI
Cassandra Stephenson	American University	U.S. Foreign Policy	Graduate	ID
Dylan Tracy	University of Idaho	History	Junior	Health
Quynh Tran	University of Connecticut	Int'l Relations	Junior	ID
Marie Watanabe	Wellesley College	Int'l Relations	Freshman	Food
Wrenn Yennie	Monterey Institute of Int' 1 Studies	Int'l Policy/Asian Security	Graduate	Education
Naoki John Yoshida	Cornell University	Applied Engineering Physics, Economics		BRICs
Victoria Zengo	University of Akron	Int'l Business	Senior	PvI
Xiao Min Zhao	Smith College	Physics	Senior	Environment

#### メディアの中の第61回日米学生会議

第61回日米学生会議実行委員会は、より多くの方に日米学生会議の存在を知っていただくために、様々な メディアを通した広報活動を行ってきた。 本会議中にも取材を受け、 記事として取り上げていただいた活 動やイベントもあった。以下に掲載するのはその主なものである。(掲載日順不同)

#### ヒロシマ討論 米学生

している。 ちのヒロシマへの多様な視点」をテー 局面03(3466)9679 nts08@gmail.comへ申し込む。事務 無料。希望者は電子メールjascprese の学生が日本語で議論を交わす。参加 考える視点ー不毛な議論を避けるため ら、中区の原爆資料館東館で「若者た に(仮題)」と題し基調講演した後、日米 23日中区 聴講者募る 「核問題を マに公開討論会を開く。聴講者を募集 広島市立大広島平和研究所の水本和 日米学生会議は二十三日午後一時か

▲『中國新聞』2008年12月18日

る中、環境保全と経済的 問題など七つの分科会の となる。国際開発や食糧 日までで、東京、京都、 い」と目を輝かせる。 文化を積極的に理解した 10年ぶりに参加する。「異 催)に道内関係者として 全保障などについて議論 区野のほか、函館が会場 **八学院生が経済問題や安** 地球温暖化が深刻化す 日本と米国の大学生・ 会議は28日から8月21 一第61回日米学生会 (国際教育振興会主 環境分野に参加す

やまもと山本 かよ生さん

ら会議を知り、応募。

過去に参加した知人か

は約10年間、東京の外資

何か学びたかった」

昨年4月に仕事を辞

系ホテルや札幌のテレビ

養試験や面接など約10倍



局などに勤めた。仕事の 市在住。両親、 北大大学院に入学、

でもできます」。北広島 れた。再スタートはいつ 論文のテーマは環境分野 ない私でもここまで来ら かわりたい。留学体験が つまずいた人の支援にか 来春の修了後は「勉強で での企業の社会的責任。 国際広報論を学ぶ。修士 妹と4人

▲『北海道新聞』2009年7月15日

(上村衛)

## 日米学生会議に参加する北大大学院生

学生が討論し、交流を深 などについて日米双方の 発展の両立を目指す実践 本代表36人に選ばれた。 札幌出身。

音楽好き」で札幌大谷短 大で声楽を専攻。卒業後 ーもともと

を学び、中国語の作文フ ったことも。「学生時代 に勉強をしなかった分、 ンクールで全国上位に入

200  $\check{9}$ 

『北海道新聞』2009年8月5日▶

#### 長と懇談した。 所を訪れ、 会主催)実行委の学生 合う「第6回日米学生 障や経済について話し 同生活しながら安全保 日米両国の学生が共 人が4日、 相 (国際教育振興 実行委の4人 互理解深めたい」 西尾正範市 函館市役 函館市長と懇談 世界のさまざまな問題 たちの柔らかい頭で、 生72人が7月末から約 まで滞在する。 る。函館市内には9日 巡り、議論を重ねてい を議論してほしい」と 1カ月間、国内各地を 西尾市長は「若い人

同会議は6日午後2 | 龍一氏らを招き、フォ 時から函館大で、外交一ーラムを開催する。 ジャーナリストの手嶋 料。 般参加も可能で入場無 (伊藤美穂)

空自衛隊の尾上定正空

函館大学で行われ、約

110人が参加した。 フォーラムでは、航

ストで作家の手嶋龍 将補や外交ジャーナリ 64年から毎年開催して 戦中戦後の中断を経て

と話した。

相互理解を深めたい」

プロセスを大事にし、

し、日本人学生が創設。 化した日米関係を憂慮

同会議は1934

満州事変などで悪

長の松本秀也さん(22) 激励。日本側実行委員

一慶応大一は「議論の

いる。今年は日米の学

西尾市長(右)と意見交換する日米学生会議の学生ら

#### ▼『北海道新聞』2009年8月7日

のフォーラムが6日、 話し合う国際交流団体 全保障や経済について 同生活を送りながら安 日米安保テーマに 日米学生会議」主催 日米両国の学生が共 手嶋龍一氏ら講演 函館でフォーラム 真一。 発テロ後、世界は敵か 尾上氏は「米同時多

ない米国の思惑があ 発言。手嶋氏は「日米 に進んでしまった」と 立ち上がることを許さ が再び軍事大国として 同盟の本質には、日本 味方かの極端な二元論

く批判した。 ーダーがいない」と鋭一変化があるか」など質 い、世界に通用するリーたら日米関係にどんな 日本には米国と渡り合 る」と指摘し、「今の

国連常任理事国になっ 問が上がり、活発な議 学生からは「日本が 重ね、函館には9日ま を訪問しながら議論を 約1カ月間、日本各地 論が交わされた。 で滞在する。 同会議の学生72人は

氏らが日米安全保障を テーマに講演した=写

◀『信濃毎日新聞』2009年8月14日

## 日米の学生 地 域一討論 フォーラムで

巡りながら交流している「第 61回日米学生会議」の一環と して、地域の在り方を考える 地域活性化フォーラム」が 日米の学生70人余が全国を一大学教授や企業経営者らの発 長野市内で開かれた= 般の市民も参加し、 の課題を考えた。 表やパネル討論を通じて地域 造販売「小布施堂」 施のまちづくりについて語 町)の市村次夫社長が、小布 パネル討論では、 栗菓子製 (小布施

いた。外から訪れる人にいい り、 が進んだ」と指摘した。 るのにいいと多くの人が気付 ことが、ビジネスや生活をす 印象を持ってもらう取り組み 「地域の知名度が上がる でいるとし、 米国に比べて日本は首都・東 教授(政治学・行政学)は、 京への一極集中が過度に進ん 明大政治経済学部の中邨章

若い世代を長野のような地方 いいか考えないといけない 都市に増やすにはどうすれば

「大学卒業後の

出た。日米の学生は9日から 日は京都に移動する。 小布施町と長野市に滞在。 デンティティーを保ちにくく 合併や、道州制は地域のアイ しないか」など活発に意見が 会場の学生からは「市町村

邨章教授(政治学・行政学)、上がテーマ。明大政治経済学部の中 野市新田町の市生涯学習センター アクサム(東京)の南山宏之代表 局井郡小布施町の市村次夫・小布 第61回日米学生会議」の一環と 日本と米国の大学生が交流する フォーラムは午前10時~午後3 午後2時15分からのパネル討 地方の在り方を考える「地 マに討論 「地域活性化」

長

で開かれる。

域活性化フォーラム」が13日、

日米学生会議がフォ 13日 ラム ほしい」と呼び掛けている。 井知事の基調講演もある。

9)年、悪化しつつあった日米関 働き掛けて設立された。現在は、 係を危惧した日本の学生が米側に <del>|</del> | 上際教育振興会が主催している。 「学生会議」は1934(昭和 9

は「まちづくりに携わる人、長野 松尾恵輔さん(22)=群馬県出身= 取締役がパネリストを務める。 市出身や在住の学生にも参加して 実行委員の一人で早大4年生の 村 いる。 毎年夏に日米で交互に開いている

日)もする。問い合わせは松尾さ 都や京都府などで交流する。長野 回は、7月28日~8月21日に東京 市の松代大本営地下壕の見学(11 県内には8月9~13日の日程で訪 ん (2070・6427・475 フォーラムを開いたりする。長野 会議はすべて学生有志が運営して たり、同町で10日にまちづくり れ、小布施町でホームステイをし 日米の学生70人余が参加する合

『信濃毎日新聞』2009年8月8日▶



小布施町中心部の修景エリアを見学する日米の学生たち

北斎館や栗菓子店が並ぶ修景エリ で「小布施のような田舎の小さな あり、文化の源がある。しっかり 町にこそコミュニティーの原点が に出席。市村良三町長はあいさつ 学生たちは町公民館での歓迎会 と呼び掛けた。学生たちは、 まちづくりに提言してほし

訪れる同町の地域づくりについて 策し景観を楽しんだ。 受けた学生70人余は初日、 布施町で始まった。町民の歓迎を 米学生会議」が9日、上高井郡小 を回りながら交流する一第61回日 日本と米国の大学生が全国各地 11日まで町内でホームスティ 年間約100万人の観光客が 施 、町を散

#### 「日米学生会議」70人訪問 交流地域づ 1)

ユニティーを大切にしてほしい

話していた。

た大都市だけでなく、小さなコミ

日。10日は町民とまちづくりにつ 見学。13日は地方の在り方を考え いて議論する。11日から長野市に を知るべきだと思った。長野の人 会場を移し、松代大本営地下壕を たちとの交流を楽しみたい」と期 「地域活性化フォーラム」を予 学生会議は7月28日~8月21 「国際的な視野を持つ前に日本 慶応大3年の營田有里さん(21) ◀『信濃毎日新聞』2009年8月10日

## 日米同盟の

手嶋龍一氏招きフォ ーラム

> フォーラム「そのとき、誰が 函館大学(高丘町5)で記念

> リカの関係性の変化について 崩壊前後における日本とアメ

61回日米学生会議(国際教育

正氏を迎えた。

基調講演で手嶋氏は、ソ連

函館市内で開かれている第

指令兼千歳基地司令の尾上定

には、表向きは対ソ連抑制とよって同盟の意義は薄れてし いう名目があったが、アメリーまった」と説明。また「アメ

振興会主催)3日目は6日、

作家としても活躍する慶応大 た。外交ジャーナリストの手 50人が参加。 ゲストには元 について激論を交わした。 向けた日米同盟のあり方など NHKワシントン支局長で、 教授の手嶋氏と、第2航空団 龍一氏らとともに、将来に 同会議の参加学生72人に加 一般市民ら合わせて約1

日本を守るのか」が行われ 「冷戦時代における日米同盟一ていた。そのためソ連崩壊に

身振り手振りを交えながら、 日米同盟の歴史と今後のあり 方について語る手嶋氏

ための抑制効果も埋め込まれ、防衛上のパートナーがワシン 力の戦略上の本音としては日 は、政権交代によって日本の リカが今一番警戒しているの トン(アメリカ政府)からこ り広げられた。 飛び出し、白熱した議論が繰 スカッションでは、学生に加 るかもしれないこと」と話し ューヨーク(国連)に交代す 続いて行われたパネルディ 一般参加者からも意見が

『函館新聞』2009年8月7日▶

知っていたが、こんなに素晴らし

ノリド・ホセさん(20)は「長野は

米ジョージワシントン大2年の

なども見学した。

い町があることは知らなかった」

「感慨深げ。「東京や京都とい



と長野高校(同)の生徒2人 泉女学院大(同)の学生了人 て「戦争と平和」について活 不学生会議の参加者が11日 日米の大学生各36人や、 、ている長野俊英高校(長野 その後、同校生徒を交え 郷土研究班の生徒らが客 を見学した。地下壕を調 市松代町の松代大本営地

を見学 営地 長野俊英高の生徒ら案内

県内を訪れている第61回日

長 野

ったときは)本当に原爆を落 方がなかったとあるが、 には広島・長崎への原爆投下 の女子学生は「米国の教科書 ーマにしたグループで、米国 は戦争を終わらせるために仕 中のマイノリティー(少数 の上に車座になり、「戦争の 徒らが、太平洋戦争末期に同 も参加した。郷土研究班の生 地下壕が造られた経緯や掘削 層材で考えを述べ合った。 征業の様子など、 これまで地 英語と日本語で説明した。 允住民らから聞き取った内容 平和は持続可能か」などの 近くの文武学校に移動した は10グループに分かれて畳 「愛国心と戦争責任」をテ 」「戦時下のメディア」

▲『信濃毎日新聞』2009年8月12日

県内には14日まで滞在す

日米学生会議は国際教育振

#### ▼『函館新聞』2009年8月5日



こと」と意義を語る。

西尾市長は「日本とアメリ

会が始まった日米学生会議 市青少年研修センターで分科 

市青少年研修センターで分科一て。函館開催に尽力した国際 日は西尾正範市長を訪問後、 の将来を英語で議論する。初 交ジャーナリストの手嶋龍一 講堂でフォーラムを開き、外 が両国関係や国際問題、世界一が、両国の相互理解を進める までの日程で、日米の大学生 | 係を憂慮した日本の学生有志 6日午後2時から函館大学

日、函館市で開幕した。9日 9) 年、悪化していた日米関

を動かす新興国」では、ロシ

自立的発展」などフテーマで 糧の安全保障」「国際開発と

学生が参加。分科会では「食

会議には両国から各36人の

議論を深める。分科会「世界

開催する第6回日米学生会議 ている。

国内4都市を移動しながら一料で、大勢の来場を呼び掛け

(国際教育振興会主催)が4

同会議は1934(昭和

目的で創設。歴史と伝統ある 本語弁論大会と合わせて開催 して、5月の外国人による日 教育振興会の大井孝理事長は 学生会議で、道内開催は初め 一開港150周年記念事業と まれているという。 位性を保つかという議論が生 進出する際、どう戦略的な優 応し、両国の企業は新興国に 台頭する中で、日米はどう対 アやブラジルなどの新興国が

が最初に始まった函館に学生 年の節目に、諸外国との交流 港150周年、学生会議75周 の考えを理解した上でどう問 ロセスが大事」、竹内友理副 議論は限られているが、互い 4年)は「限られた時間での 題を解決していくかというプ 松本秀也実行委員長(慶大 行委員長(東大3年)も「開

# あす手嶋さん基調講演

## 食糧、環境問題 英語で議論

どを会場に開催。分科会で食 4日から8日まで函館大学な 市で開かれる。。函館では8月一のキッシンジャー元国務長官 する一第61回日米学生会議」 両国関係や世界の将来を議論 (国際教育振興会主催)が今|参加者には39、40年に故宮沢 日本とアメリカの大学生が一米関係の役割だけでなく世界 函館市をはじめ国内4都 などがいる。 喜一元首相、51年にアメリカーロシアと独自の交流をし、 史と由緒ある会議で、過去の の諸問題を議論している。歴 今回のテーマは「日常から 会問題を敷衍(ふえん)して イヌ民族から世界の民族問題 生まれた独特の文化がある。 一港都市で、諸外国との交流で て、 を考えるなど、さまざまな社 一函館で開催する意義につい 同会議は「わが国初の開

函館など 4都市で

い」と話している。(高柳 きるような場面もつくりた で、地元の学生も参加、交流で 大学では「内容などを調整中

織

▼『慶應塾生新聞』2009年2月12日



んも、昨年の第60回会議では のは古くからの伝統。松本さ タッフとして積極的に関わる 画、運営に日米の学生がス 学生の中から選出される。企 員は前年度の会議に参加した 国際教育振興会だが、実行委 参加者だった。 現代社会と伝統」分科会の 松本さんが日

活躍したいという。 は国際的なビジネスの世界で 一つ」と語る松本さん、将来 イベントの主催は財団法人

野、京都の各都市を訪問する どを経て、7月28日から8月 かたちで開催される。各分科 は、事前勉強会や直前合宿な 会議 が、今回は「国際開発と自立 会の内容は年によって異なる 今年の第6回日米学生会議 はいかがだろうか。 ぐに過ぎ去ってしまう大学生 うした活動に参加されてみて 活だが、機会があれば是非こ が開催されている。存外、 毎年様々な国際交流イベント 流や世界青年の船事業など

「世界の食糧安全

18

月間にわたって共同生活を送 の学生が参加し、およそ一カ 分科会ごとに討論 長)など、各界のそうそうた な分野で活躍するOB・OG る面々が並ぶ。「自分と同年 と世代を超えた交流ができる のも、日米学生会議の魅力の

ることの上限を、限りなく引 と、また学生だからこそ出来 き上げてくれるのが日米学生 があるという。 パーとは、今でも頻繁に交流 学生では経験できないこ

さんは話す。確かにグロー たちの関心は意外に内向きの がなければならない」と松本 閣府主催の日本・中国青年交 ままなのかもしれない。 特にきっかけがなければ、 日米学生会議のほかにも内

まずは国 日米学生会議にかける情熱 を越えた交流

ト。日本とアメリカで毎回交 も学べることは大きい」 めの会議を働っている。自分 互に開催され、双方から同数 周年を迎える国際交流イベン 日米学生会議は、今年で75 氏、猪口邦子衆議院議員、 科学者)やグレン・フクシマ 元米国国務長官といった政治 家のほか、茂木健一郎氏(脳 元内閣総理大臣の故宮澤富 う。歴代のOB・OGには、 ンリー・A・キッシンジャー イベントに対する松本さんの

進める目的で創設。戦後は日

日米関係を憂慮した両国の学

両国の相互理解を一では8月5-7日に分科会を

本会議を開催する。 野、京都で約1カ月にわたり の東京を皮切りに、函館、長 が参加し、7月28-8月3日 信」。両国から各36人の学生 社会を見据えた対話と発 世界、日米から地球へ〜国際

函館大学

くる実行委員会が企画・運営 興会で、両国の学生たちでつ を開いた財団法人国際教育振 国人による日本語弁論大会」

を担当する。

函館会場の一つとなる函館

のようなイメージをお持ちだ

「大学生活」というと、ど

の一人だ。

一学生の視点で、

試験の勉強などに熱中する学 ろうか。おそらく学内のサー

のために汗を流す者もいる。 年に一度の国際交流イベント んどだろう。しかし中には、 生の姿を想像される方がほと クル活動やアルバイト、資格

実行委員長を務める松本秀也 第6回日米学生会議の日本側

りなから、

開く予定。

(昭和9)年、悪化していた 同会議は戦前の1934 り方などを考える。 担う学生たちが国際貢献の在 英語で議論し、両国の将来を

極安全保障や環境問題などを

している。

主催は、5月に函館で一外

論じることができる」と評価

が調和し、自分自身も変わら ちと交わる中で、互いの考え し、印象はからりと変わった。 く異なる両国の学生が、 というが、議論の方法も大き 期待は高いものではなかった を与え合う姿を目の当たりに い議論を交わした当時のメン 1カ月間近くにわたり熱 「ほかの文化を持った人た

などが可能だという。 多い。まずは国を越えた交流 たけにおさまってしまう人が 「どうしても自分たちの間

▲『函館新聞』2009年6月10日

## を は、大学2年の時。 就職を意 させるべきか迷ったが、 識してインターン活動を優先 展しといった7つのテーマが 障」、「環境と持続可能な発

められ参加を決めた。当初 に一人生が変わる」と強く勧

れている日本側参加者は28名 用意されている。現在募集さ 者も含めて誰にでも応募資格 学院などに在学予定であれ 定。来年度、日本の大学や大 であり、書類審査や面接、 養試験などを経て選ばれる予 式ウェブサイトより資料請求 受付けられ、日米学生会議公 がある。応募は2月28日まで 現在高校に在籍している

第61回日米学生会議 日本側報告書

## 第2章

事前活動

第61回日米学生会議報告会および講演会…20
日米学生会議in広島および
第61回日米学生会議説明会20
日米学生会議in京都および
第61回日米学生会議説明会22
春合宿23
英語ディベートワークショップ26
お好み焼き教室26
学生有志活動 サハリン訪問27
防衛大学校研修30
直前合宿31

#### 事前活動とは

第61回日米学生会議の事前活動は、2008年12月の第60回日米学生会議報告会から始まった。新しい参加者が決まる前は、日米学生会議の存在を世に伝えるため、そして実行委員が運営経験を積むことを目的として行われる。参加者が決まった後は、講演会、レクチャー、コミュニケーション講座、英語ディスカッション、など多岐に渡る、本会議をより充実させるための諸活動を行う。また、本年は事前活動以外にも参加者の有志や昨年の学生会議参加者により、JASC PRESENTSやサハリン視察が行われた。本章では、これらの事前活動と有志の活動の様子を紹介する。

## 第61回日米学生会議前年度の報告および講演会

#### 【企画概要】

日程:2008年12月13日(土)

時間: 13:30-16:30

主催: 財団法人国際教育振興会

企画・運営:第60・61回日米学生会議実行委員会

場所:慶應大学三田キャンパス 西校舎519号室

#### 【報告会内容】

慶應大学国際センターの後援の下、慶應大学三田 キャンパスにて、第61回日米学生会議説明会を兼ね た、第60回日米学生会議報告会を行った。

#### 【実行委員後記】

当報告会では第60回実行委員・参加者をパネリストに迎えたパネルディスカッション、第60回会議内容をサイト順に振り返ったプレゼンテーション、そして米国側・日本側参加者によるスピーチを行いながら、第60回日米学生会議を振り返った。日米学生会議への参加は自分のアイデンティティを再定義するきっかけになったと語る日系4世のアメリカ人参加者のスピーチの通訳をしながら私は、長い夏を共にした彼が心の中で考えていたことや抱えていた悩みについて初めて知った。同じ経験をしながらも、違った視点で事実を見て、十人十色の影響を受け

る。そんな日米学生会議内での多様性を実感した瞬間だった。

第60回の実行委員や参加者がそれぞれ日米学生会議への想いを語った後は第61回日米学生会議の説明及び質疑応答が行われ、撤収時間を過ぎてからも来場者と日米学生会議参加者との間で交流が続いていた。

報告会に出席するためだけに来日したというアメリカ人学生など、ひと夏を共に過ごした懐かしい仲間と第60回会議を改めて振り返りながら、そこで築かれた絆がいかに強固なものであるかを再認識し、第61回実行委員一同、自分たちが作り上げてゆく次の会議を大成功させたいとの想いを募らせながら、会場を後にした。 (竹内友里)



▲新実行委員による61回会議の説明

#### 日米学生会議 in 広島および 第61回日米学生会議説明会

日時: 2008年12月23日 13:00-16:00

主催: JASC Presents

場所:広島市平和記念資料館 東館地下一階会議室

(1)

基調講演:広島市立大学 広島平和研究所

水本和実准教授

パネリスト:盛島正人(第60回日本側参加者) 川口耕一郎(第59回日本側実行委員長) Joshua Schlachet(第60回米国側実行委員) 上野良輔(第59回日本側参加者)

モデレーター:渡辺恭子(第60回日本側実行委員) テーマ:「若者たちのヒロシマへの多様な視点」

~世界からヒロシマへ・ヒロシマから世界へ~

担当:新宮清香(60)、渡辺恭子(59-60)、

Joshua Schlachet (60)

参加者:大井あゆみ(60)、竹内菜緒(59-60)、 平田加代子(60-61)、松田弘道(58-59)、 田中豪(60-61)、Jon-Michael Durkin (60-61)

#### 基調講演:(水本和実准教授)

核兵器を安全保障の側面から見れば、その軍事的 な価値が強調されるが、核廃絶の立場からすると、 その道徳的な価値に焦点があたる。このように、一 口に"核"といっても、その切り口は多様で、自分の 立場からのみ議論していれば、違った立場の人と議 論したときに、なかなか話がかみあわない。有機的 な議論をしていくには、まず論点の整理が重要であ る。核兵器を論じるにも、国際法・危険性・被爆体 験・核拡散・エネルギーなど色々な見方がある。

#### パネルディスカッション:

(沖縄出身の盛島正人)

米軍基地を抱える沖縄には、基地によって恩恵を 受ける面と、害を被る面がある。両方の面に着目す ることが必要で、そのためには、当事者以外の視点 を取り入れることが必要ではないか。戦争経験者の 声があるとき、その声と対立しうるような他の意見 が出にくいという現状が沖縄にはあるような気がし て、似たようなことは広島で起こっていないのか。

(9.11前後にワシントンD.C.に滞在していた川口耕 一郎)

アメリカと日本の戦争教育や、学生の愛国心の抱 き方は大きく異なっていることを、日米両国の教育 を受けたことで痛感した。自分が通っていたワシン トンD.C.の高校で退役軍人の方の講演を聞き、好戦 的なことが話されたとき、スタンディングオーベー ションをする多くの学生の中で、自分はその気持ち になれなかった。

(フルブライトの奨学生として鹿児島大学で研究中 O Joshua Schlachet)

戦争の記念碑を作ることが重要である。広島が世 界により強いメッセージを発信していくためには、 被爆体験だけを強調するのではなく、多角的な視点 から訴えていくことが必要ではないか。

#### 会場との質疑応答:

「実際に被爆された方の意見とは違った話をしに くいのは事実かもしれない。でも、被爆された方の 前で武力に賛成することは人としてできない気がす るし、むしろ、積極的にしたくないと言えるのかも しれない」というパネリストに対する明確な反論や、 「広島での戦争教育は、被爆者の視点しかなく、ア メリカ側の視点は欠けているのかもしれない」とい う意見、あるいは、「平和運動の中での、広島の強 みは何か」というパネリストへの質問など、パネリ ストと会場の双方向的な意見交換があった。

パネリストを経験して:(海上保安大学校に在学中 の上野良輔)

広島の方々とは、ヒロシマや核兵器について、様々 な側面において考え方や捉え方が異なるということ を改めて感じました。また、広島は原爆の攻撃を受 けた都市であり、原爆の被害に遭われた方々が御存 命であるので、これらの問題について議論する際に は細心の注意を払う必要があることも再認識しまし た。しかし、国際社会は日々変化し、新たな問題が 顕在化していることも事実です。それらの問題につ いて、現実を踏まえて、より具体的な議論をしてい く必要があります。そのためには、お互いの立場を 尊重し理解した上で、現実に即した形で議論し、そ のレベルを向上させていかなければなりません。そ のためにも、今回のシンポジウムのような場を今後 も継続していければと思います。

※フォーラム直前の12月18日中国新聞朝刊地方面に 紹介記事が掲載され、当日の模様は23日午後6時の ニュースでは中国放送とテレビ新広島に、午後7時 ニュースではNHK広島に、と放送局3社に取り上げ ていただきました。また翌日の24日の朝刊では中国 新聞、毎日新聞、朝日新聞、読売新聞の4社に取り 上げられ、前者2社は写真付きで大きく掲載されま Lto

#### 日米学生会議 in 京都 および第61回日米学生会議説明会

日時: 2009年1月9日 14:00-17:30 主催:第61回日米学生会議実行委員会

場所:立命館大学衣笠キャンパス中野記念ホール

テーマ:「新たな日米関係をめぐって」

~大統領選後の日米と国際社会のゆくえ~

基調講演:在大阪・神戸米国領事館Edward Dong

パネリスト:廣田隆介(慶應大学法学部4年、第60回 日本側実行委員)

坂本朋美(京都大学大学院農学研究科博士課程1 年、第60回日本側参加者)

Jon-Michael Durkin (University of Akron, Junior)(第61回米国側実行委員)

モデレーター・通訳:伊関之雄(京都大学経済学部3 年、第60回日本側実行委員)

参加、準備:真田雄太(58)、今矢涼子(60)、

比嘉慎一郎(60)、平田加代子(60-61)、 小野元(60-61)、松本秀也(60-61)、

Catherine Simes (60), Robert Cooper (60)



日米学生会議に参加した1ヵ月を、どうその後に つなげていくか――これは支援してくださっている 方々からもきかれることで、また参加者一人一人が 模索するものでもあるのではないか。1月9日に立 命館大学にて開催された日米学生会議in京都ならび に第61回日米学生会議説明会は、そのひとつの答え といえるかもしれない。このイベントは、「日米学 生会議の議論を、本会議が終わった後も、特に地方 で続けていくことで、JASCの一つの目標である社 会発信を目指そう」という昨年夏の参加者の呼びか けではじまった企画「JASC Presents」の第2弾とも なっていたからである。

このようなイベントが開催できたのは、会場を貸 していただいた立命館大学国際課、基調講演を快諾 してくださったドン総領事、会の様子を取材してく ださった立命館大学広報部ならびに関西学生報道連 盟の方々、試験期間間近の授業のある平日に会場に 足を運んでくださった40人以上の皆さん、遠くは東 京やニューヨークから運営を手伝いに来てくれた日 米学生会議スタッフ参加者など、多くの方々のご厚 意、ご協力があったからだ。この場を借りて、改め て感謝申し上げる。

さて、簡単にイベントを振り返ろう。

当日はまず在大阪・神戸米国総領事のエドワード・ ドン氏が「新たな日米関係をめぐって~大統領選後 の日米と国際社会のゆくえ」というテーマに沿った 基調講演を行った。ドン総領事は「偽」や「変」といっ たネガティブなイメージが続いたここ数年の「一年 をもっともよく形容する漢字」の話題をとりあげ、 オバマ氏の当初のスローガンhopeにちなみ、新大 統領の就任は、「望」という漢字で形容されるような 一年を導くという期待を示した。また、日米関係の 安定を好意的にとらえる一方で、日本側も米国側の 政策に対して意見するような関係を望むと注文をつ けた。

会場との質疑応答では、米国の対東アジア政策 などについて活発な質問がとび、総領事はその一つ 一つに丁寧に対応していた姿が印象的だった。

会の後半は、第60回日米学生会議参加者による 発表と総領事・学生・会場の皆さんの三者を交えた ディスカッションが展開された。

まず廣田隆介さん(慶應大学法学部4年)が「バイオ エタノールから読み解く日米の役割」と題して、米 国のバイオエタノール政策が大量消費型社会の構造 を温存させ、エネルギーと食糧の問題を密接に関連 付けてしまったことや、日本がトウモロコシを含め た多くの食糧を輸入し廃棄している点を指摘し、日 米両国の市民の意識の問い直しがもたらす効果は大 きいのではないかと主張した。

次に坂本朋美さん(京都大学大学院農学研究科博 士課程)が環境分野における日米の役割について、 特に森林の違法伐採を取り上げ、日米国内ほど法整 備が進んでいない途上国で違法伐採された材が日米 両国に流入し、国際価格の低下が自国林業にも打撃 を与えていることなどから、日米が主導的に国際的 な森林保護に取り組むべきであり、また中心的な役 割を果たしうることをのべた。

最後にJon-Michael Durkinさん(University of Akron)が、伊関之雄さん(京都大学)の通訳を介し て、日米の自動車産業とその環境にやさしい技術の 導入状況を分析し、積極的に環境保護を進めていく 必要性を指摘した。

ーパネリストからは以下のコメントをもらいましたー 直前までビラを配ったことが功を奏したのか、会 には多くの来場者を呼び込むことができた。参加者 は皆熱心に話を聴いてくれ、質疑応答も比較的ス ムーズに進んだと思う。会終了後には来場者と話 す時間もあり、日米学生会議に興味はあるが英語力 に自身がない、専門知識を持っていないなど、私が JASCに応募する前に抱いていたのと同じ心配を口 にする学生らに、去年の自分が重なった。自分の経 験をもとに大いに激励したつもりだが、彼らが申し 込みという初めの一歩を思い切って踏み出すきっか けになっていれば本望である。

(京都大学大学院農学研究科 坂本朋美さん) 会場との討論では多くの鋭い質問を投げかけられ て正直たじろぎましたが、精一杯のお答えはできた と思います。しかし、時間の関係上会場とパネリス

トとの「議論」にまで発展しなかったことは、今後の 改善点だと思います。今後は是非、来場者の方がパ ネリストの発表や意見にチャレンジし、議論が発展 するような展開があると良いと思います。 最後に、 学生最後の年にこうして自由に意見を表明できる場 を与えてくれた日米学生会議に感謝したいです。こ の京都JASC Presentsをきっかけとして、関西圏か ら未来のJASCer、そしてパネリストが一人でも多 く出てきてくれることを願っています。

(慶應大学法学部 廣田降介さん)

#### 春合宿

5月2日~5月4日にかけて、代々木オリンピック センターにて第61回日米学生会議春合宿が行われ た。この合宿は、会議参加者が初めて顔を合わせる 機会でもある。第61回会議の概要説明や自己紹介、 アイスブレーキング、コミュニケーションワーク ショップや留学生との英語ディスカッション、アル ムナイの方々を招いてのレセプション、分科会セッ ションや講演会など、2泊3日という短い期間であり ながらも盛りだくさんの内容となった。それまで顔 さえ知らなかった参加者も、合宿を通じ親交を深め、 各々が本会議にむけての意気込みや目標を抱き、帰 路についた。

#### ●ディナーレセプション「ようこそ先輩」

さまざまな世代の日米学生会議参加者・実行委員 の方々を招いて立食パーティーおよび、グループに なっての交流会を行うのが本企画の概要である。本 年度で75周年を迎える会議には、様々な先輩がいる。 4時間余りのレセプションであったが、50名を超え る沢山の先輩方に参加していただき、有意義な時間 を過ごすことができた。OBひとりひとりのJASC での体験や、現在のお仕事について伺う中で、第61 回の会議参加者は「JASCとはなにか」「JASCが人生 においてどのような意義を持つのか」等考える機会 を得る。レセプション終了後の参加者たちは、先輩 方からの刺激と夏に対する期待で興奮しているよう に見えた。 (松尾恵輔)



▲ORとの座談会を前に緊張した面持ちの参加者たち

#### ● 留学生との英語ディスカッション

このセッションでは参加者にとって、留学生との 議論をすることによって各々がそれなりの課題点を 把握する上でとても大切なものであった。まず初め にお互いの自己紹介から始まり、その後分科会ごと に分かれて1時間程度議論をした。分科会では春合 宿始まって以来初の英語ディスカッションだったの で、英語で自分の意見を伝えることの難しさはきっ と誰もが感じたと思う。その後は場所を移動し、外 国人学生との立食パーティーを楽しんだ。その時に 参加者でも分科会の事を話し合う人、マジックを見 せて楽しませている人などいろんなコミュニケー ションの方法を肌で感じて、それだけでも学ぶこと が多々あった。3ヵ月後に向けて、自分に何が必要 で何が足りないのかを考える点でもこのセッション は大切だったが、なによりも異文化の人と話しそれ



▲留学生とのディスカッション

を理解することの楽しさを感じ取れたのは私にとっ てとても貴重な機会であった。 (高橋央樹)

#### Communication Workshop

講師:小田康之氏

講師としてVital Japanより小田康之氏をお招き し、日本側参加者の為のコミュニケーションワーク ショップが行われた。日本で暮らし、日本の文化に 慣れ親しんでいる我々は、我々にとっての「常識」が、 日本人にとっての「常識」にすぎないということを自 覚する機会はそう多くはない。海外経験がない、も しくは日本以外の国の人と接する機会が多くないと いう者にとっては尚更である。主に挨拶の仕方や、 握手の意味などをご教授いただいたが、文化圏の違 う人々の持つ習慣や常識について学び考えるという ことは、単純な誤解を避けるだけに止まらない。他 者を理解しようとする姿勢は、一つの価値観に捉わ れない多角的な視点を持つことや、人間関係の根底 を成し、集団生活において不可欠な思いやりや優し さにも繋がるということを強く感じた。夏の本会議 に向け、実用的なコミュニケーション方法から、コ ミュニケーションそのものについて考える良い機会 (谷口貴大) となった。

#### ●春合宿に参加して

春合宿は私にとって大きな衝撃だった。

初めて会う、第61回の日米学生会議参加者36名に 私は大きな刺激を受けた。志の高さ、機転の早さ、 分科会のメンバーのレベルの高さ、今までだったら 他愛もないと感じられる一人一人との会話の中に、 参加者の中からは常に新しく学ぶものがあった。参 加者は、みな一つの小さな会話のボールをどんどん 自分の考えをもって膨らませていく能力を持ってい た。

春合宿を経て、深い考えをすることが出来、たく さんの知識をもっている人に出会い、大変な場所に 入ってしまったなと感じた。しかしそれと同時に、 この初めて入る環境にとても魅力を感じ、私も彼ら のように引き出しを増やしてみなのようになりたい と思った。また、知的な参加者、優秀な学歴をもっ ている皆ではあるが、これからの目標がまだ定まっ ていない参加者、これから頑張らなくてはいけない と感じている参加者と出会い話すことで、皆を目標 にするとともに、共に本会議に向けて頑張りたいと 強く感じるようになった。 (加藤梓)



▲参加者同士の自己紹介の一幕

#### ●春合宿一言感想

- 【浅野泰史】一言で表すと、楽しかったに尽きる。 人との出会い、挑戦すべき課題、尽きることの ない議論。すべてが刺激的で、すべてが新鮮で、 すべてが五感を奮い立たせる。本会議が楽しみ である。
- 【安藤歩美】春合宿が終わり、このたった3日間の、 濃密な議論と志の高い仲間達との出会いがもた らした自分の変化に驚いている。そんな自己の 化学変化を楽しみつつ、来る夏を一回り成長し て迎えたいと願う。
- 【飯沼瑶子】春合宿では、夏の本会議に向けて、日 本側のメンバーと交流をする機会を事前に持て たことで本会議への期待やモチベーションがす ごく高まった。
- 【衣袋聡】一番の収穫は、自分達は今年無限の機会 と接することができるという希望を持つことが できたこと。先輩方による歴史と伝統に私達61 期も何か残せるように精一杯頑張ろうと思いま
- 【梅本勇基】JASCerに選ばれてから待ち焦がれて いた春合宿。JASCでは様々な熱い議論が行わ

- れ、自分の世界を広げることができる。この機 会を活用できるか否かは自分にかかっている、 そう感じた春合宿だった。
- 【大谷翔】メンバーそれぞれの光る個性に魅了され 続け、来る日米学生会議を期待させる春合宿で した。「主体性」という実行委員からの言葉が特 に印象的で、僕も積極的な関わり方をしていこ うと思います!
- 【大西すなほ】実行委員会のメンバーは箱は提供し てくれるけど、中身をどう埋めるかは参加者一 人一人次第と聞いた時に、夏迄の3ヵ月をどう 過ごすかも本番と同じ位重要かもなと思いまし to
- 【大宮透】「このメンバーとなら素晴らしい時間を 過ごすことができる! |
  - そんな確信を持てた3日間。だからこそ、最高 の会議を作り上げるために自分のすべきことを しっかりと実行していきたいと思った。
- 【緒崎裕香】春合宿は、喋って喋って飲んで考え て遊んで考えて喋った3日間。今までIsolated Crazy Utopiaの限られた世界で生きていたの で、ここで出会った皆との関わりは面白くて刺 激的。夏が楽しみです。
- 【坂田奈津希】JASCの第一印象は「濃い」!「濃い」 メンバーに「濃い」内容。自分の「薄さ」に不安を 感じるが、すべてを吸収しながらこれから「濃 く」していきたい!と前向きに考えている。
- 【笹岡祐衣】 1人で東京に行くのが初めてだったか ら、JASCに対する思いより、オリセンに無事 着けるのかの方が心配だった。でも今は3日過 ごしただけだけど、JASCへのいろんな気持ち でいっぱい!!
- 【神馬光滋】実行委員になり、はや7ヵ月。待ちに 待った28名との初集合。企画を直接発信できる 場所の出来た喜びと、集まった人間の素晴らし さに感動。モチベーションアップの春合宿とな りました。
- 【杉本友里】素敵な仲間との出会い、刺激的な議論 …全てに「圧倒」された3日間だった。自分の課 題に向き合いつつも、夏には2倍の仲間と10倍

の時間を過ごすと思うと、期待と興奮で胸が高 鳴るばかりだ。

【高田修太】春合宿では、はじめて英語で留学生と 会話し、OBOGと交流し、そして61stJASCers とも出会えて、非常に良い意味でショックを受 けました。それと同時に今年の夏が非常に楽し みになりました。

【高橋央樹】春合宿参加まで、本当に自分が溶け込めるか不安だったけど、終わってみればすごく楽しかった。日に日にすんなりみんなと話ができたし、自分にはまだまだ知らない世界があると改めてびっくりした。

【中村誠一郎】人と仲良くなるのに時間は関係ないのかもしれない。そう僕に思わせたのがこの JASC春合宿だった。合宿を終え、今出来ることを精一杯にやり通そうと思いながら、帰路に就いた。

【中村真理】英語ディスカッションでは隣にいた JMDが肩を叩いて励ましてくれて、皆の優し い言葉に、こんなに温かい場所に来られて本当 に良かったと思った。私が成長することで61回 をより最高のものにしたい!

【中村梨紗】春合宿。それは「これから何か物凄いことが起こるかもしれない。」という思いが、「これから何か物凄いことを起こしたい。」に変化した3日間。

【西野緑】春合宿はたった二泊三日だったが、十二分に刺激的だった。なんでって、ここまで情熱的&キャラの濃い学生の集まりに初めて出くわした気がするから。本会議に向けて良いスタートを切れたと思う。

【野津美由紀】ようやく皆と対面し、とにかく「安心」しました。予想に反して、とてもまったりとした雰囲気で、初対面でも沈黙が気にならない、そんな居心地の良い集団でした。モチベーション急上昇!

【林藤彦】こんな面白いメンバーが集まったらそりゃ面白いことが間違いなく起きると確信!まじ早くまたみんなに会ってゆっくり話をしたいわ~^^

そしてECのみんな、準備本当にありがとう! 【安川皓一郎】JASCのような団体の参加は初めてであったが本当に充実した時間を過ごせた。今期のチームの結束を高めるとともに、歴史ある団体の一員になるにあたっての心構えを学ぶことができた。

#### 英語ディベート教室ワークショップ

日時: 2009年5月23日 場所: ココデシカ 講師: 井上敏之氏

ネーティブアメリカ人学生との議論に備え、論理的に意見を伝えるための訓練の一環として日米学生会議の先輩で(有)スピーチディベート研究所代表取締役である井上敏之先生による、ディベートワークショップが開催された。

効果的に自分の考えを伝えるためのPoint (結論)、Reason (理由)、Example (事例)、Point (結論)というPREP構造を意識しながら一対一のスピーチ練習を行った後、3、4人ずつのチームに分かれ、実際のディベートラウンドを行った。『マクドナルドの世界展開を推進すべきである』、『AIBOは本物の犬より優れている』、『ウサギはカメより優等である』の3題について肯定派/反対派に分かれ、参加者は『とにかく実践を通して学びなさい』という井上先生の言葉通り習ったばかりのPREP構造を早速取り入れながら独自性とユーモア溢れる議論を繰り広げていた。

#### お好み焼き教室

日時: 2009年7月10日(金) 13:00-17:00 場所: オタフクソース株式会社、東京支店

【活動内容】

オタフクソース株式会社様に「お好み焼き教室」を 開催していただいた。同社社員の吉田裕章様に、本 年度のJASC参加者7名が、広島風お好み焼きと大 阪風お好み焼きの焼き方を教えていただいた。お好 み焼きは美味しいだけではなく、料理する過程から 楽しみがある。第60回会議の際も同社に提供いただ いた材料を素に、日米の学生が協力してお好み焼き を作り親交を深めた。この教室は、そんなお好み焼 き作りを通しての交流を今年も日本で成功させたい かと言う思いから、お好み焼き作りの研修を受ける べく開かれた。

教室では、キャベツを切り方からトッピングの仕 方にいたるまで、お好み焼きの作り方を丁寧にお教 えいただいたあと、作ったお好み焼きを実際に食べ ることも出来た。参加した学生の一人は「おいしい お好み焼きが自分でも作れることに驚いた。本会議 でも是非アメリカの学生にこの料理を伝えたい。」と 述べていた。 (松尾恵輔)



▲OBの井上さん、岩崎さんと参加者の一枚

#### 学生有志活動 サハリン訪問

日程: 2009年7月4日(土) - 7月7日(火) 主催:第61回日米学生会議実行委員会 協力:ITC Aerospace、サハリン航空、

サハリン国立総合大学、サハリン州政府

#### 【サハリンへの道】

実行委員会発足当初より抱いていた、「日米で世 界に出来ることは何か」という問いかけ。或いは日 米学生会議が創設されたときから、創始者の気持ち の上ではあったのであろう、凡そ75年前、日米の学 生で満州へ赴いたことがあった。この事が、75周年 の会議を迎える実行委員会の中では、1つのテーマ

として、発足当初の2008年9月から、脳裏に浮かん でいた。

日米学生会議には、アルムナイのご厚意により、 定期的に開催されるSalon de JASCという会があ る。80歳を超える方から現役の学生まで、参加者は 様々であるが、世代を超えた率直な意見交換の場と して、年に4回程開催されている。

キッカケは年明けのSalon de JASC。とあるOB の方から「サハリンに行ってみないか」というお声が けをいただいた。委員長松本の答えは、迷うことな く"YES"。しかし実現可能性については、甚だ確 信を持てずに、その場を過ぎた。サハリンに行く意 義について、その後実行委員会内での議論が行われ、 本会議前の段階で行くことの是非について、主に意 見がなされた。また実現可能性が見えない中での、 半ば夢を見るような空虚な議論は、いたずらに時を 費やすのみで、無駄である、諦めるべきであるとい う意見もあった。しかしながら冒頭にもある、日米 学生会議の視野拡大という点において、サハリン州 に出向き、現地の学生と意見交換し、日本とロシア、 米国の関係について、学生が率直に意見交換をする 場は、非常に意義深いことであると感じていた。

そんな中、世界の抱えるエネルギー問題はじめ、 サハリン特有の在サハリンの二世・三世の方々との 意見交換という企画が持ち上がった。それら全ては、 日米学生会議として、日米を超えた国・地域の価値 観や現状を踏まえた上での議論及びその考察を本会 議に活かせたらという気持ちがあった。

このサハリン訪問に際して、多くの方々にご協力 いただいた。Salon de JASCで話をし、そこから実 現までの一部始終を見守り多大な貢献をしてくだ さったITC AeroSpaceの中山智夫様、サハリン航 空の方々をはじめ、多くの方に企画の説明、ご提案、 協力要請に伺った。JASCでは多くの場で社会と接 し、協力を仰ぐことになるが、サハリン訪問は日米 学生会議にとっても稀な国外研修であり、その機会 を与えてくださった皆様に、この場をお借りして、 感謝申し上げたい。有難う御座いました。

(松本秀也)

#### 【サハリン渡航】

#### 7月4日

羽田空港に集合した後、新千歳空港へ。胸を含ま らせながら空港で待つこと数時間、遅れていた飛行 機がやっと空港へ到着し、一同サハリン州ユジノサ ハリンスク空港へ向かった。夜遅く空港へ着くとサ ハリン航空の方々が出迎えて下さった。日本国内と は一風違った景色をバスの中から眺めながらホテル へと向かい、その夜は素朴なロシア風デザインの毛 布にくるまれながら眠りについた。 (竹内友理)



#### 7月5日

軽い朝食を食べた後皆でひとつの部屋に集まり、 勉強会を行う。事前に下調べをしてきた担当学生が 順番にサハリンの歴史や日本との繋がり、エネル ギー問題、サハリンⅡプロジェクト等について発表 を行い、意見交換をした。ガイドブックだけでなく チェーホフの「サハリン島」を読んでくるなどしっか り事前勉強をしてきた学生もおり、それぞれのイ メージをもってサハリンへ来ているようだった。

この日はサハリンという土地やそこに住む人々の 暮らしをより間近でみるべく現地の方の案内のも と、街へ出た。日曜日であったため幸運にもミサに 参加することが出来、熱心なキリスト教徒が多いサ ハリン住民にとっての休日の朝を体験する。ロシア 正教では教会に入る前に女性は皆頭をスカーフで覆 う習慣があるため裸の長黒髪が特に目立ち少し恥ず かしくなりつつも思い切って足を踏み入れると、こ じんまりとした教会いっぱいのサハリン住民の方が 鳴り響くオルガンに合わせて聖歌を歌っていた。イ

エス・キリストの前で拝跪し足にキスをする女性の 姿、大きな皿に寄付金を集めて歩く男性。何もかも が新しい。

その後は近くのサハリン州立郷土博物館へ。昭和 13年に日本の城郭を模して建てられたという日本時 代の樺太庁博物館の建物をそのまま活用しており、 サハリンの町並みの中でも一際目立っている。中へ 入れば説明の表記は全てロシア語だったが、日本時 代の軍服や大砲を見ると少し複雑な気持ちになる。 すっかり東欧の香りがするサハリンの中で、確かに 日本とサハリンの間の歴史的つながりを実感できる 場所だった。

ミニバスを一時間半ほど走らせ、コルサコフのプ リーゴロドノエ村へと移動した。サハリンIIの天然 ガス積立基地付近の丘の上へ上ると、明治38年に日 本が日露戦争で勝利を収めた後、日海兵隊が樺太上 陸した際に立てた記念碑があった。「遠征軍上陸記 念碑」と刻まれたその石碑はもう垂直に立ってはお らず、地面に倒れた虚しい記念碑の残骸が高い雑草 に被われていた、といった方が正しいのかもしれな い。何十年も前に日本軍が喜びを分かち合いながら 記念碑を立て、そのまた数年後に誰かが憎しみや怒 りを感じながらその記念碑を倒したまた数十年後、 私達日本人の学生はその場所で笑いながら昼食のサ ンドイッチを食していた。目線の先には日本企業も 深く関わっているサハリンIIプロジェクトのLNGプ ラントが見える。過去と現在を同時に感じられる場 所だった。



▲倒れた「遠征軍上陸記念 硬工



プラントを背に

昼食後はミニバスでLNGプラント内を通り抜け 見学した。巨大な液化施設。日本企業から配属され た多くの日本人が住んでいたという、まるで拘留所 を思わせるようにずっと先まで続く画一的な宿泊 所。実際に企業が活動する末端の現場を見る機会 が少ない私達学生にとっては特に貴重な経験となっ た。もう少し車を走らせサハリン州最大の不凍港で あるコルサコフ港を見学し、帰路についた。

(竹内友理)

#### 7月6日

現地大学生との交流企画のため、サハリン州立大 学へと向かった。日本語学科の先生と学生に連れら れ大学内の施設見学をさせて頂いた後、大学ホール でセレモニーが開始された。サハリン州立大学生の 司会と学長、学部長等御同席のもと、記念品の交換、 日本・サハリンについてのクイズ企画、そして学校 教育についての意見交換を行った。経済が低迷し就 職が厳しくなっている現在、学生が抱える悩みは似 ているようであるが、「自分は本土へは行かずに出 来ればサハリンに残りたい」という学生が予想以上 に多かったことに驚いた。最後にサハリン州立大学 生によるプチコンサートが開かれ、セレモニーは幕 を閉じた。



大学の食堂でロシア風の昼食を頂き、夕方から は総領事館の表敬訪問、北海道庁サハリン支局の訪 問を行い、サハリンにおける日本企業や政府の活動 について伺った。参加者のうち数名は更にサハリン 残留日本人/二世の方々とお会いし、数十年もの間

に大きな変化を遂げてきたサハリンを間近で、複雑 な立場から見てこられた方々のお話を伺う機会を頂 いた。国境や国籍という人工的な概念が本当に人の 人生を苦しめることがあるのだということを感じさ せられるとともに、日本人としての自分たちの立場 について改めて考えさせられた。

長い一日の締めくくりは、日本食料理店での昼間 出会ったサハリン州立大学生との懇親会。美味しい 日本食料理を食べながらよりインフォーマルな空間 で相互交流を深めることが出来、夕食後も別れが言 えずに長い間、列を成して夜のユジノサハリンスク を散歩していた。 (竹内友理)

#### 7月7日

帰国日のこの日はチェックアウトをした後、 スーツ姿で最後の訪問地であるサハリン政府内の Committee for International, Overseas Economic & Interregional Relations of the Sakhalin Region へと向かった。

帰りの飛行機の中では笑いが絶えず、共にこの貴 重な経験を共有できた仲間との間で確かに親交が深 まっているようだった。 (竹内友理)



#### 【参加者感想】

Kayoko Hirata

Also familiar to the Japanese as "Karafuto," the elongated island of Sakhalin lies off the eastern coastline of mainland Russia and above Hokkaido. With its long history as a formerly disputed territory between Japan and Russia, it is a place shrouded in conflict and mystery. In early July, twenty members of the 61st JASC had an once-in-a-lifetime opportunity to travel northbound to this remote island to learn about its Japan-Russia relations.

Perhaps during the former socialist period, the region flourished and the capital bustled with people. However, after touring the city, we realized that this place has not been able to sustain under the pressure of capitalism and globalization. Although the oil and gas projects in the northern regions have flourished thanks to the investment by companies such as ExxonMobil and Gazprom, we were skeptical of the enthusiastic promises of economic development made by our tour guides.

Walking down the wide and eerily empty streets, there remain some traces of Japanese city planning, with the Kyoto-esque grid patterns. But mostly, the city is overshadowed by the strong presence of Soviet planning, seen in the Stalinist styled buildings lining the streets. Despite the burning of the city by Russian troops after WWII, there remains a few structures from the Japanese colonial era, such the old Karafuto government building, renovated to house the Sakhalin Regional Museum, the fallen Russo-Japan war monument in Korsakov, and what little remains of Karafuto Shrine. Most have been silently abandoned to disintegrate with time.

The people of Sakhalin were extremely hospitable people, eager to present their unique culture and learn about ours, however during our stay, I felt a sense of weariness from the place. True, Sakhalin is officially Russian territory, but it seems divorced from the activities of Moscow. Who knows what will happen to the island once the natural oil resources run out. But the trip was a remarkable eye-opener to learn about the development of a post-Japanese colony and a pre-

Conference opportunity to become acquainted with our delegates. Thus concluded our trip to Sakhalin, where we parted from our new local friends with promises to meet again in the future.

Thank you very much to our local tour guides, the students at Sakhalin State University, the Russian and Japanese government officials, and to our kind sponsors for making this extraordinary trip possible.



▲また会う日まで!

#### 防衛大学校研修

日時:2009年6月19日(金)

会場:防衛大学校(神奈川県横須賀市)

概要:一斉昼食、課業行進見学、施設見学

講義:「日米関係と安全保障」太田文雄 安全保障・ 危機管理教育センター長 分科会ディスカッショ ン、レセプション

私たちは、今後日本の防衛に直接関わってゆく同世代の学生と、日本における安全保障システムの実情について話し合うことが、会議においていかなる日米関係や国際政治の問題点を論じる際にも有意義であると考え、この研修を実施した。課業日であったにも関わらず、本年度も研修が実施できたのは、防衛大学校の全面協力があったからである。講義では、米国の安全保障にとっての日本の存在はどんな意義があるのか、日本が米国ぬきでの安全保障体制を構想することは現実的か、など率直な質問が飛び

出し、防衛大独自の現実的視点から丁寧に答えてい ただいた。分科会議論では、テーマを掘り下げられ、 米国側との議論の手がかりをつかんだとの声が多く 聞かれた。研修終了後、見送りにきてくれた防衛大 生との別れを惜しむ参加者を見て、短時間ではあり ながら双方の学生が絆を育んだことを実感した。



▲懇親会での一枚

#### 直前合宿

日時: 2009年7月26日(日)-28日(火) 場所:代々木オリンピックセンター

期待と不安が交錯する中、日本全国から第61回日 米学生会議の参加者たちが集結してきた。まだ全員 が全員を知りきっていない状況ではあったが、再開 の歓びで部屋が溢れ、松本実行委員長の挨拶により 直前合宿が始まった。合宿に関する諸注意の後、日 米学生会議事務局長である伊部正信様から激励を頂 き、ユーモアに溢れていながらも、本質的なお話に 36名の日本側参加者は真剣な眼差しで聞いていた。 その後は実行委員8名が「日米学生会議に対する思 い」を語らせてもらう時間を頂き、諸々の事務連絡 や東京サイトで行うスキット練習を経て皆で夕食を 食べた。19時からは「自分にとっての日米学生会議」 という対話セッションを設け、参加前の心意気や、 そもそもの参加動機、期待しているものや、会議の 意義などを共有した。

翌日、ラジオ体操に始まり、米国側参加者の歓迎

企画準備を野津美由紀の指導により行った。米国側 を日本に歓迎することが目的でありながら、副作用 として、実行委員を含まない参加者主体によるこの 活動により、互いをより知り、結束する機会になっ たようにも思う。その後には英語の口語的表現を紹 介するなどして、夕食後には株式会社ビズリーチ代 表取締役の南壮一郎様に講演をして頂いた。南様は 高校卒業後、単身米国タフツ大学に留学するが、ま だ大学での海外留学が一般的でなかった時代に、自 分の価値観とセンスで未来へと挑戦していった度胸 に敬服する。講演では本質をとらえることの重要さ を軸にお話頂き、米国側参加者が到着する前夜で あったにも関わらず、多くの参加者が夜遅くまで「本 質」について語り合っていた。

#### 【参加者日記】

#### 7月26日

36人のジャパデリ達は重そうなスーツケースを引 きずりながら、次々とオリンピックセンターに現れ た。そして全員が、春合宿ぶりにひとつの部屋に揃 う。

一いよいよ、日米学生会議が始まってしまった一。

今日は挨拶や激励、諸注意などの初日の一連の行 事の後、ECが一人一人「自分にとっての日米学生会 議」について、考えを発表した。そして夕飯後は参 加者全員が少人数のグループを作り、一人ずつこの 問いに答えていった。この会議に参加した理由は何 か。この会議を通じて、自分は何を成し遂げたいの か…。私には二日後にアメデリが到着することへの 不安があった。だがこの議論で自分の目標を再確認 でき、他のデリたちの会議に懸ける想いを聞けたこ とで、臆病にならずに挑戦していこう、と会議に向 けた覚悟を持つことができた。

くたくたに疲れてベッドに潜った初日の夜中。ア メリカ人には負けないぞ、と密かな闘志を抱いて、 眠りについたのであった。

#### 7月27日

日本側参加者の36人みんなでラジオ体操をして始 まった一日は、(株)ビズリーチ代表取締役の南壮一 郎氏による講演で締めくくられた。

#### 第2章 事前活動

この講演のキーワードは「とにかく動くこと」に あったように思う。アクションを起こせばその分だ け失敗するかもしれないが、成功するかもしれない。 だが、もしアクションを起こさなければ成功する可 能性すらない。失敗をすることのリスクを考えてい る方が、時間の無駄であり最も大きなリスクである。 これまでにいくつかの大きな人生の岐路を経て、そ の度に自分が心からやりたいと思うことは何かを考

えて選択をしてこられた南さんの言葉には迷いが無 く、生き生きとしていたのがとても印象的だった。

翌日からやってくるアメリカ側参加者たちと合わ さった72人で、どれだけアクションを起こせるか。 その中で自分はどんなことに挑戦できるだろうか。 これから始まる1ヵ月に対するモチベーションが高 められた一日となった。 (安藤歩美)

# 第3章

本会議・サイト活動

東京	34
函館	41
長野	49
京都·····	57

# 7月28日~8月3日

## サイトコーディネーター

神馬光滋 松本秀也 Ji Eun "Karen" Jung Yoshihiro Kanemitsu

#### 東京サイトスケジュール

7月28日(火) 米国側参加者歓迎

7月29日(水) オリエンテーション

井会式

猪瀬直樹東京副都知事講演

7月30日(木) 米国大使館訪問

外務省主催レセプション

7月31日(金) 青山学院ディスカッション

75周年記念撮影・レセプション

8月1日(土) 横須賀米軍基地訪問

横浜散策

8月2日(日) 分科会セッション

東京散策

8月3日(月) フォーラム

\* 宿泊場所:国立青少年オリンピックセンター

#### 東京サイト理念

江戸開府から四百余年。1300万人近い人口を擁す る巨大都市に成長した東京は日本の政治、経済の中 心であると同時に、常に最新の技術と文化の発信地 であり続けてきた。世界各国の企業、公館、国際機 関が集中しているところを見れば、東京が国際都 市であることは一目瞭然である。同時に、浅草や 上野など、日本の伝統文化が色濃く残る街もあれ ば、もはや英単語にもなっている、ファッション街 の「HARAJUKU」や最新技術とオタク文化の聖地 「AKIBA」もある。今や、どこに行っても人種や国 籍の多様性が見られるようになった東京。様々な文 化や価値観が交錯するこの大都市から、第61回日米 学生会議は国際社会を見据えた対話と発信を開始す る。

#### 7月28日(火) 米国側参加者歓迎

いよいよ本会議がはじまった。場所は代々木の青 少年交流センター、通称オリセン。直前合宿を終え

た日本側参加者は、米国側参加者歓迎の進備を午前 中から、米国側到着までの間進めていた。午後には 最後の日本側のみによる分科会セッション。最後の 事前打ち合わせとあって、期待と不安、また米国側 が到着するまでに日本側でしっかりと詰めておこう という緊張感が垣間見えた。

私は成田に米国側を迎えに行ったが、長旅で疲れ ているかと思いきや、会うなり固い握手を交わして き、多くの者が目をギラつかせ、これから異国で戦 おうかという迫力に満ちていた。また出会って間も ないとは思えない程、参加者の間に一体感が生まれ ていた。さすがにバスでは眠りに着くかと思いきや、 文字通り最初から最後まで、バス内での会話は絶え なかった。ほとんど体力を使っていなかった私の方 が黙り込んでおり、初対面の参加者の1人に、米国 の駄菓子を進められ、少々尻込んでしまった。これ が米国学生の勢いと多様性なのかと感心した。

代々木につくなり、日本側の助けにより、荷物を バスから降ろし、各々部屋に入った後は、日本側に よる歓迎企画。一人一人を暗闇の部屋に呼び出しス テージに登らせ、下から36名の日本人が名前を呼ぶ と同時に一気にライトアップしながら迫っていくと いう、サプライズでの初対面だった。日米双方疲れ



▲日本側参加者による日本文化紹介のスキット

の溜まった中で、お互いに新鮮な形で最初の出会い を果たし、初日は取り敢えず、ピザとサンドウィッ チで乾杯。まだぎこちない一方で、この72名が一体 となった時の壮大なパワーを感じる1日目であった。

#### 【参加者日記】

分科会ミーティングでは、1ヵ月の議事進行につ いて、今まで日本側が考えてきた事を整理し、米国 側分科会リーダーから送られてきた米国側の考えて いる内容と、どう折り合いをつけていくか話し合っ た。そしてそれらを7つの分科会がそれぞれ短い発 表を全体の前で行って、分科会については米国側代 表を迎える準備が整った。

米国側代表を歓迎する企画については、日本側 代表の一人が直前合宿よりも以前に企画案を練っ ておいてくれたものを日本側代表全員で実行した。 それは、真っ暗にした部屋に米国側代表を一人一 人入れていき、準備したステージの上に乗せ、電 気をつけると同時に日本側代表が全員で拍手をし、 Welcome to JAPAN!!と大声で言うという企画であ り、そのコンセプトは「一人一人を一人一人が全力 で歓迎する」というものだった。この企画は全員の 協力により大成功し、皆が今後1ヵ月の会議の成功 を願う一日となった。 (衣袋)

# 7月29日(水) オリエンテーション、開会式、猪瀬直 樹東京副都知事講演

2日目の朝、早速心配された日本の朝食(といって も洋食もあるが)も問題なくクリアし、いよいよオ リエンテーション。JASCのルールを一通り説明し、 自己紹介と、1ヵ月の流れについてのブリーフィン グ。参加者同十のプレゼント交換では、各々の文化 の紹介の場として、また参加者同士の交流の場と して、特に米国側がいよいよ日本に来たのを実感 している印象を受けた。午前中は分科会ごとにIce Breakingを行い、早速各々の分科会がはじまった。 ランチの後は、再び分科会セッションの後、開 会式が行われた。大河原前駐米大使のOpening Remarksをはじめ、主催挨拶、後援挨拶、両実行 委員長の挨拶が行われた。また75周年ということも

猪瀬氏による講演の様子▶



▲質問をする参加者



あり、ご来場いただいたアラムナイや賛助会の方々 と参加者が交流する場も設けた。現役と アラムナ イが交流することで、JASCの歴史や本年度75周年 を迎えるJASCがあるべき姿など、世代を超えて 様々な意見交換が行われていた様子は、JASCなら ではの空間であった。

その後東京都副都知事の猪瀬直樹氏による講演が 行われ、日米関係についての概略をお話いただいた。 導入部としての2日目は、分科会セッションから開 会式、JASCの歴史を感じると共に、基調講演もい ただいたことで、今後の日米関係を考えながら1ヵ 月の指針を探る日となった。

#### 【参加者日記】

昨夜アメデリと合流し、いよいよ61st IASCの本 格的な始動!

午前中のJoint Orientationでは各自のBuddyとプレ ゼント交換、参加者全員の自己紹介をし、ジャパデ リ&アメデリは楽しく交流することができた。

午後はまずRT Ice Breakingがあり、分科会毎に 分かれジャパデリ&アメデリが今まで準備してきた ことを発表し情報共有&意見交換。まだお互いに遠 慮しがちではあったが、面白いRTになる予感!

続いて61st JASC最初の公式プログラムである

Opening Ceremony、猪瀬直樹氏からのLecture。 日米双方の歴史を踏まえた上で、両国は現在世界に おいてどのような存在か、今後の役割は何かを再考 する機会となった。同時にこのような機会を得られ るIASCに参加できることの喜び・責任を改めて実 感した。

本日最後のイベントは、ジャパデリ&アメデリに よるSkitの披露。お互いの出会いを歓迎するため、 双方とも限られた時間で試行錯誤し準備をしてき た。これから始まる本格的な議論の前にまず親交を 深めるための、楽しく貴重な機会だった。 (梅本)

# 7月30日(木) 米国大使館訪問、外務省主催レセプ ション

東京サイトがいよいよ始まったと皆が実感したで あろう、この日は東京の猛暑日。米国大使館訪問の 為、スーツで移動をする参加者には疲れが見られ た。健康管理も1ヵ月の大きな課題である。1日1本 ずつ水が支給され、出来る限り万全の状態で生活す るよう、リマインドがなされた。午前中は米国大使 館に行き、大使館の方々よりご講演いただいた。普 段の業務についての説明を程々に、日米関係の大切 さを説く姿は、何より日本側参加者にとって驚きで あったようである。会終了後、米国側参加者より「大 使館の彼が言うように、日本人は米国が日本から離 れてしまうのではと心配しているけど、それは杞憂 さ。」という事を言われた。昨今言われる日米関係に ついて、多くの参加者が意見交換をしたようである。 JASCの魅力の1つ、分科会外での率直な意見交換が 早速なされ、参加者も徐々に打ち解け始めた。

昼の分科会セッションの後、新宿京王プラザに て、外務省主催のレセプションが行われた。外務省 の方々はじめ、国際教育振興会、また賛助会の方々 が多く見られ、参加者と意見を交わしていた。財界 の方が多く見えていた中で、堂々とJASCや日米関 係について語る両国学生は、将来の国際リーダーと しての資質の片鱗を見せていた。また参加者同士の 交流も活発に行われ、とても豪華な2時間となった。

#### 【参加者日記】

今日はかなり忙しい日だった。午前中にはアメ リカ大使館を訪問し、午後からはRT活動が行われ、 夕方には外務省レセプションが行われた。今日の活 動の中でも、RT活動は特に以前から望んでいた内 容であり、私の所属する「公と私 | 分科会ではRT活 動としてアメデリと共に靖国神社の遊就館を見学 し、日本の辿った歴史から日本人のルーツを探ると ともに「公と私」分科会の争点となりうる「特攻隊」や 「靖国参拝」について学んだ。時間が限られ十分に資 料に目を通すことが出来なかったが、それでもジャ パデリ、アメデリ双方にとって有益な情報を得られ たと思う。私個人としては、日本が鎖国状態から開 国して以来、いかにして外国から影響を受け、軍国 主義の道を辿ったかを詳しく知る、また筋が通った 理解ができた。明日のRTの時間では今日学んだ内 容のリフレクションを行っていきたい。お互いの歴 史認識の違いを確認したいと思う。 (大谷)

# 7月31日(金) 青山学院ディスカッション、75周年 記念撮影・レセプション

7月の最終日は、他の日にも増して象徴的な一日 となった。午前の分科会セッション後、第1回日米 学生会議を迎えた青山学院大学に電車で向かい、着 くなり、75年前の集合写真を模して、大学構内に今 でも存在する間島記念館の前で記念撮影を行った。 現役学生に加えアラムナイの皆様、また、青山学院 大学学長の伊藤定良様、国際政治経済学部学部長の



▲OBとのディスカッション



▲青山学院大学・仙波憲一学部長によるスピーチ

仙波憲一様にもお忙しい中加わって頂き、立派な写 真が残った。75年後にも同じことが行われることを 期待してみる。

その後、大きな部屋をお借りし、ディスカッショ ン・セッションを行う。仙波学部長のスピーチに始 まり、日米関係専攻であり、仙波学部長の生徒でも ある安藤歩美さんに今後の日米関係及び日米学生会 議の在り方に関するスピーチを行ってもらい、いず れも好評であった。ディスカッション・セッション では、事前に参加者主体で決めてあった9つのテー ブル・テーマに則り、アラムナイの方々なども交 え、有意義なものとなった。セッションの最後に は、経済テーブルに於けるディスカッションへの洞 察及び、人生の先輩としてのお言葉を青山学院大学 の元教授である佐野光質先生から頂き、その後全員 で青学会館でのレセプション会場へと移動した。75 周年記念行事の実行委員長である橋本徹様や、ISC のExecutive DirectorであるRegina Dull様のスピー チに加え、梅崎渉様を筆頭とするIASCソングの合 唱が行われ、大盛況の会となった。私たち学生はア ラムナイの方々とお話をすること(時には英語で)に 緊張もしていたが、大変多くの有機的な交流があり、 多くの魅力的な人々が参加してきたIASCの良さを 再確認する機会ともなった。

#### 【参加者日記】

午前中にRTにわかれてディスカッションをした 後、第1回日米学生会議が開催された青山学院大学

にてOBOGも交えて、ディスカッションを行いま した。(あんこ、青学での開催の斡旋や感動できる スピーチありがとう!)普段のRTとは異なるメン バーとのディスカッションということで、短い時間 でしたが多角的な視点を交えた議論ができたことと 思います。また、青学では後世に残されるであろう、 全体の集合写真も撮りました。その後、学校の近く のレストランにてOBOGも含めてディナーをいた だきました。いつもながら、色とりどりのケーキに 群がる女子の姿は、国境など関係がないことを肌で 感じました。夜は、オリンピックセンターに戻った 後、アメリカ側・日本側に分かれてリフレクション を行い、アメデリとジャパデリとの議論の仕方の違 い、わくわく感、フラストレーションなどについて シェアをしました。 (大西)

#### 8月1日(土) 横須賀米軍基地訪問、横浜散策

6時の起床にも関わらず、程良い緊張と期待に溢 れた朝となった。8月1日は横須賀米軍基地訪問の日。 日米の友好的交流を目的に、数年前より在日米軍基 地訪問の機会を継続して学生に提供して下さってい る山本東生様のサポートにより実現した。今回の基 地訪問は、横須賀市民に対する基地公開日と重なっ たため、基地中に飲食販売店やパフォーマンス等が あり、大変盛況の中での回覧となった。横須賀米軍 基地に入るなり、「ここはアメリカか」と錯覚するぐ らい、横須賀の日本風港町とは異なる風景に驚きを



▲米海軍の船を前に一枚

隠せなかったが、大きな道路や、アメリカ風の建造 物に懐かしさを覚える者も多かったと思う。

先ずは、米軍の方々に、これもまた大きなシアター に連れて行って頂き、弁護士や司令官の方々にお話 をして頂いた。普段接する社会人の方々とは異なる 経験や世界観によるお話だったために大変興味深い 1時間となった。その後、米軍軍艦及び日本の船舶 に体験乗船する者もいれば、日本の中でのアメリカ であった基地構内の様々なイベントをはしごする者 もおり、非日常な体験となり、満足度も高かった。 3時頃には基地とは別れ、東京サイト初の自由時間 を、開港150周年記念祭を開催していた横浜周辺で 過ごし、分科会を超えた対話が創出された。

#### 【参加者日記】

午前中は横須賀にある米軍基地を訪問した。基地 では最初に軍の方から、日本における安全保障上の 米軍の重要性等についてレクチャーしていただき、 その後は基地内を自由に見学した。この日は基地が 一般開放されている日でもあり、イージス艦見学や カーショーなども開かれ、まるでお祭りのような雰 囲気。日本に居ながらにして、アメリカを感じるこ とができた時間となった。

その後はフリータイムとなり、僕たちのグループ は真昼間からカラオケに行くことになった。異様な 盛り上がりのもと、今まで話したことのなかったメ ンバーとも一気に仲良くなることができた。

カラオケでの興奮を保ったまま、夜は六本木で飲 み放題のお店に。アメリカではあり得ない飲み放題 のシステムに、アメリカ側一同感動の様子。お酒を 飲みながら、真剣な話をしたり、日米のゲームを紹 介し合ったりした。議論以外でたくさん交流できた ことで、日米の絆がより深まった一日になった。

(大宮)

#### 8月2日(日) 分科会セッション、東京散策

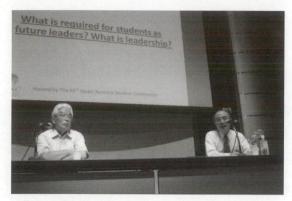
朝の分科会セッションは、自己紹介や、ミッショ ンの共有、事前活動内容の共有など、土台となる部 分がおおよそ固まってきた地点となり、より具体的 な話も増えてきていたように思う。3時間の知的交

流・衝突を経た後、東京サイトでの自由時間となる。 あいにくの小雨となったが、秋葉原にいくグループ もいれば、靖国神社に行くグループもあったりと、 それぞれが日本をより知りつつ、楽しく時間を過ご した。自由時間とするか、より枠にはまった時間と するかは、実は実行委員内でも議論となっていたが、 結果として、日本側の学生が米国側の学生を案内し、 また、自由に対話を繰り広げた結果、その後の会議 の円滑剤となるべく、お互いの友好とコミュニケー ションを一層深める、大事な時間となったように思 う。

#### 8月3日(月) 東京フォーラム

東京サイトも最終日、あとは翌日の移動までの数 時間というところまできた。参加者の疲労も徐々に 見えていたが、この日はメインのフォーラムが待っ ていた。朝の分科会セッションでは、少しずつ日本 側参加者の緊張もほぐれ、まだ改善点は多く見える ものの、少しずつ建設的な意見交換が多く見られる ようになった。ここに国際交流の難しさを見たが、 やはり、出会うって突然「さあ、アジェンダに取り 掛かろうか」というのは、中々難しいようである。 分科会の大枠の話や、お互いに準備してきた事をヒ アリングしながら批判を加え、双方の持ち寄った意 見や、両国の文化や価値観的背景といったものを土 台として出し合っていた。

分科会セッションが終わると、いよいよ午後の フォーラムへ。表参道の東京ウィンメンズプラザで 行われたこのフォーラムは、学生ならではの、キャ リアに重点を置いたものであった。国際機関での経 験とバックグラウンドを持つ明石康様と、伊藤忠商 事を含め長年ビジネスの世界に身を置く降旗健人様 にご登壇いただいた。フォーラムは御二方の基調講 演を行った後、学生との意見交換、という意味合い も含めて、長めの質疑応答の時間をとり、会場から 壇上のお二人へ矢継ぎ早に質問が投げかけられた。 1時間弱とっていた質疑の時間では物足らず、会場 が閉まるギリギリまで、講演者の周りに質問者の群 れが出来ていた。各々の分野で一流の方の話は、将 来道を切り拓いていく学生の参加者にとって、とて



▲明石氏と降旗氏によるパネルディスカッション

も有意義な時間となった。

#### 【参加者日記】

今日は、東京フォーラムで降旗さんと明石さんの 講演を伺った。テーマはリーダーシップとは何か、 未来のリーダーに何が要求されるかであった。

降旗さんと個別でお話して、いかに自分の考えを行動に起こすことが大切かを学んだ。降旗さんに分科会のテーマと関連して電気自動車の大量普及の具体的な方法に関して伺ったが、電気自動車(Eliica)に関心を持って頂いたのと同時に、それが普及しないには必ず欠落する点があるからだとういう御尤もな意見を頂いた。そういったEliicaの欠落した箇所に気づくためにも、他の電気自動車と比べなくてはならないこと、そしてその結果Eliicaが素晴らしいものだと感じたら実際に企業に紹介すべきだと伺った。

リーダーとは、「頭の中で考えるだけではなく、実際に行動に起こす人のことだ。」ということを、実際に降旗さんから教えてもらえた一日だった。(加藤)

#### サイトコーディネーター後記

神馬光滋

東京サイトをコーディネートする上で最も意識したのが、東京にあるリソースを活用すること。換言すれば、東京でしか出来ない事をする、ということであった。相談をさせて頂いた波多野綾子さん(58回EC)に頂いたアドバイスであったが、確かに、渋

谷は東京にしかないし、アラムナイがいるのも多くが東京周辺である。そういうわけで、アメリカン・デリゲーツを歓迎するということを頭に入れつつ、大都市東京のリソースをフル活用するプラン策定に走り、結果は、上記報告の通りになった。

今振り返ってみると、余りあるリソースをねじ込み過ぎたこともあり、観光の時間が十分に取ることができなかった。JASCは観光のために来るのではないし、優先すべきことは他にたくさんありそうだが、米国から来日したアメリカン・デリゲーツの身にもなってみると、教室の中で議論をしているだけでは、日本にわざわざ来た意味もなかろう。日本側参加者のつたない英語で日本を案内される中で、双方、互いの文化や前提に対する理解を深め、そこにもまたJASCの本質があるのだと思う。

松本秀也

第61回日米学生会議実行委員が発足し、各々の実 行委員がどのサイトを担当するか、所謂サイトコー ディネーターを決定する会議が行われた。東京、函 館、長野、京都の四開催地の中から一つを選ぶ中で、 東京は最も親しみのある街であったため、一番負担 が少なく、かつ最も色々な事が実現可能であろうと いう憶測のもと、東京サイトの担当を申し出た。安 易な気持ちでというわけではなかったが、少なくと も他の開催地よりも近場で想像がしやすく、サイト コーディネートもやりやすいであろうという気持ち があったが、企画を考え、その実現のための交渉を 進めていくうちに、その難しさに直面していった。 最初のサイトは、日米双方の参加者交流の場として 最も重要な意味を持ち、かつ様々な選択肢の中か ら、日米学生会議にふさわしいものにしなければな らず、東京という大都市は、そのバランスを保つ上 で非常に難しかった。数ある選択肢の中から選ばな ければいけない訪問箇所、講演者の決定、多様な交 通手段の取捨選択。そのどれもが、当初予期してい た状況とは異なり、全てが過酷な調整と吟味の連続 であった。本会議をイメージしやすいがために、参 加者の満足度や、企画としての充実度が日々頭をよ ぎった。講演会盛り沢山、移動の連続、それだけで

#### 第3章 本会議・サイト活動

終わらせてしまっては、第61回日米学生会議の理念 にある対話と発信の実現は難しく、東京に居ながら 「東京らしくない」企画も立案、実現していかなけれ ばならなかった。近年、学生会議やその他諸団体の 国際交流事業が増加し、助成金をめぐるせめぎ合い や、他団体が行っている企画との比較を行う中で、 我々にしか出来ないことは何なのか、他との差別化 を最も意識しながらのサイトコーディネートであっ たように思う。

実行委員として、委員長として、サイトコーディ ネーターとして、日々JASCの事を考えるうちに、 自分が何故この会議を成功させなければいけないの か、この活動の先に何が待っているのか、日々そん なことを考えながら、東京サイトにその思いを形に していこうと苦心していた。「枠にとらわれない自 分達だけのIASCを創る事」直近の若手OBによくア ドバイスを受けていた。例年開催地として選ばれる 東京サイトを担当するということは、正にこの言葉 への挑戦の連続であった。最初の一週間、1ヵ月の 中の貴重な一週間を割り当ててもらい、その中で何 が出来るのか、企画実現が出来たところで、参加者 の皆がそれをどう受け止め、JASCの中でそれをど う消化してくれるのか、本会議が終わった今も、第

61回の東京サイトがどういう意味合 いを参加者にもたらすことができた のかは、悩みがつきない。単なる観 光以上、JASCの第一サイト未満、 それ以上の何かを提供することが命 題であったのだろうが、日々の実行 委員の活動の中で、その事を忘れか けていた自分が居たようにも思う。

また1年間の東京サイトコーディ ネートの中で、様々な方にお世話に なったのは言うまでもない。日米学 生会議という名前は、私が想像して いたよりもはるかに、知れ渡ってい た。今年はどんな会議になるのか、 どういうテーマで議論を行うのか、 日米学生会議のアルムナイの方々の みならず多方面から、期待その他の声を聞く中で、 東京サイトにおける企画の可能性は日々増加し、そ れにつれて、サイトコーディネーターとしてのプ レッシャーも増していった。時には失礼な対応をし、 自分の至らなさを痛感したこともあった。一つの企 画を行うことが、どれだけの協力を擁し、責任を伴 うのか、学生生活では味わい難い経験を、東京サイ トのプランその他で経験することが出来た。お世話 になった皆様への感謝の気持ちと、至らない自分の 行動で多くのミスや失礼を働いてしまったことに対 し、再度お詫び申し上げたい。

この東京サイトを担当したことにより学んだ企画 の立案・進め方、リーダーシップ、礼儀作法、その 他の要素は、今後の人生において大きな意味を持つ と共に、自分が一生をかけて反省、回顧していくも のであると強く感じている。と同時に、このような 貴重な機会を与えてくださった財団法人国際教育振 興会、その他関係者の皆様、また日米学生会議とい う素晴らしい会に、そしてこのサイトコーディネー トをする上での一番のモチベーションであった、第 61回の参加者皆に、お礼を申し上げたい。二度と戻 ることの無い、東京での素晴らしい7日間に、「あり がとう。」



▲東京サイトコーディネーター (左から左からKaren、神馬、yoshi、松本)

# 8月4日~8月8日

## サイトコーディネーター

竹内友里 田中豪 Colin Moreshead Kayoko Hirata

#### 函館サイトスケジュール

8月4日(火) 函館到着

分科会活動

函館港祭り

8月5日(水) 市場見学

イカ学講義

自衛隊体験

リフレクション

8月6日(木) 分科会活動

フォーラム

8月7日(金) 大沼

ディナーレセプション

8月8日(土) 分科会活動

市内観光

8月9日(日) 長野サイトに出発

#### 函館サイト理念

100万ドルの夜景に朝獲れイカ刺し。年間500万人 を集める観光都市として、また日本有数の漁業都市 として名を馳せている函館も、江戸鎖国期には松前 藩による蝦夷地交易の拠点の一つにすぎなかった。 しかし、今からちょうど150年前に日米修好通商条 約が締結されると日本初の国際貿易港として開港さ れ、洋館や教会を建築し外国文化をいち早く吸収し ていった。また、戊辰戦争で最後の舞台となった五 稜郭も残っており、異国情緒溢れる街並みと日本の 伝統的雰囲気の双方をあわせもつ函館は、日本の近 代化とそれに密接に関わってきた日米両国の関係を 捉えなおす最適な場と言える。さらには、日米両国 と国境を接するロシアを加えながら包括的に国際関 係を、また、日本の漁業から世界の海洋資源を、ア イヌ民族から世界の少数民族を、と日米の枠を出発 点にしながら様々な社会問題を世界全体に敷衍して 論じることを目指す。

#### 8月4日(火) 函館到着、分科会活動、函館港祭り

10時20分羽田空港発の飛行機は定刻どおり11時40 分に函館空港に到着し、そこからバスで宿泊施設の 青少年研修センターふるるに向かった。ふるるは、 すべてが大人数部屋で、一部屋に6~10人が泊まる。 日本的な雑魚寝スタイルの部屋に驚いたアメリカ側 参加者もいたかもしれない。各自の荷物を部屋に運 んだ後、お昼に函館名物ラッキーピエロのハンバー ガーを食べ、その後各分科会に分かれて議論を行っ た。

そして、夕方になると、みんなで市内に向かい、 函館港祭りに参加した。イカ踊りに突撃参加する日 本側参加者、縁日初体験のアメリカ側参加者、みん なで露店をめぐりながらおいしそうな夕食を探す。 お腹を満たした後は、中央ステージ上のダンサーの 動きを真似して、みんなでよさこいを踊り、日本の 夏を楽しんだ。

#### 【参加者日記】

早朝、前もってパッキングしなかったことを後悔 しながら、荷物をスーツケースに詰め込み、羽田空 港へ出発。機内では即効眠りにつき、起きたらすで に函館だった。蒸し暑い東京から一転し、函館はと ても過ごしやすい気候。新しい宿泊先での初RTで 気持ちが引き締まった後、いざ函館開港祭りへ。お 好み焼き、焼き鳥、かき氷と屋台を巡り、お好み焼 きはアメリカ人の舌に合うことを発見。盆踊りで体 を温めた後は待ちに待った「いか踊り」!「函館名 物いか踊り♪イカ刺し、塩から、イカソーメン♪も ひとつおまけにイカポッポ♪イカイカイカイカ、い か踊り♪」ああ、楽しかった!!その他も、おみこし、 ふんどし姿、浴衣美人。日本の伝統的なお祭りに、 アメデリも思いっきり楽しんでくれたようでした。 (坂田)

#### 第3章 本会議・サイト活動



▲地元の方に混ざり、イカ踊りを楽しむ。



▲よさこい踊りを踊り、すっかり打ち解けた参加者たち

# 8月5日(水) 市場見学、イカ学講義、自衛隊体験、 リフレクション

函館を支える水産業についての理解を深めよう と、この日は早朝6時半よりセリの見学を行った。 朝市で海鮮丼の朝食を頼張った後は北海道大学水産 学部へ移動し、函館未来大学教授の長野章教授によ り函館で進められている函館市国際海洋都市構想に ついてのブリーフィング、及び北海道大学水産学部 教授の桜井泰憲教授による「イカ学」についての講義 を受けた。午後は6日に行われるフォーラムに先立 ち日本の防衛を間近で体験させて頂くため、函館自 衛隊駐屯地を訪問した。全参加者が自衛隊の訓練服 を身につけ、基礎訓練・行軍を行った後、野外で自 衛隊保存食の夕食をとった。この日の全体プログラ ムは暗くなる前に終了。函館山へ登って夜景に見惚 れるなど各々夜のフリータイムを満喫しながら、長 い一日を終えた。



▲セリ場の方に質問をする。

#### 【参加者日記】

1ヵ月あるJASCの中でも特に内容の濃い1日だっ たように思う。まず6時30分に起き、朝市に出かけた。 捕れたての魚やイカが並び、活気に溢れていた。いっ きに目が覚めた。アメデリはもちろんジャパデリに とってもめずらしい光景だった。その後函館未来大 学に行き、イカ学の講義を聞いた。イカの生態や環 境問題についてのお話で、大変興味深いものだった。 その後自衛隊の駐屯地に行った。訓練着に着替え、 整列や敬礼の練習をし、施設を案内してもらった。 たくさんの訓練施設や、敷地内を真剣な顔で走って いる人を見ると、日本は守られていると、普段実感 することのない気持ちを感じた。短い間にたくさん のものを見て、様々なことを考えた。大変充実した (笹岡:一部改) 1日だった。

#### 8月6日(木) 分科会活動、フォーラム

少し早起きをし、朝はみんなでおにぎりを作った。 ソフトボール大のおにぎりからピンポン大のおにぎ りまで、作り手の個性が光る。その後、バスで函館 大学に移動し、午前中は大学からお借りした教室で 分科会活動に励んだ。2サイト目ということで、グ ループのメンバーも徐々に打ち解け、議論が急に活 発になっていく。

午後は、待ちに待ったフォーラムである。函館 開港150周年と日米学生会議創立75周年を記念して、 日米安全保障を再検討する「そのとき、誰が日本を 守るのか」が開催された。

日米学生会議 函館フォーラム

「そのとき、誰が日本を守るのか」

日時:2009年8月6日(木) 14:00-17:00

会場:函館大学講堂

パネリスト:手嶋龍一慶應義塾大学大学院教授、

尾上定正空将補

モデレーター: Jonathan Hall Pomona College

レセプション:於 函館大学食堂

第61回会議全体を眺めると、その理念である「日 常から世界、日米から地球へ一国際社会を見据えた 対話と発信一」の言葉通り、グローバルな問題を扱っ た本会議の企画が多く、日米の二国間関係に焦点を あてたものは決して多くなかった。そこで、私たち が運営しているのは「日米」学生会議なのだから、本 会議の間に必ず日米関係を振り返るフォーラムを実 施したいと思い、本年度開港150周年を迎える函館 で実現することを決めた。

#### 【参加者日記】

8時15分、テレビで追悼式典の同時中継を見なが ら、すべてのアメデリ・ジャパデリが、64年前の原 爆被害者に黙とうを捧げた。たった一分間ーその間 に様々な想いが私たちの間にめぐったように感じ た。黙とうが終わった後も、ヒロシマに関する映像 や言葉を流す画面の前に佇んでいた数人の、真剣な 横顔が印象に残っている。

午前中はずっと分科会、午後にはこの日一番のイ ベント、日米関係や防衛についてのフォーラムが開 催された。ジャーナリストの手嶋氏と、自衛隊千歳 基地の尾上氏によってとても興味深い基調講演と活 発なパネルディスカッションが行われた。フォーラ ム終了後のレセプションでも、両氏の周りには学生 の輪が途切れることがないばかりか、会場のあちら こちらで今日のフォーラムについてどう思ったか、 日米関係についてどう思うか、といった議論が続け られていた。

今日ほど、日米関係について啓発された日はな かったのではないだろうか。私たちはそれぞれ日米 を代表し、また次世代を担う若者をも代表している からこそ、今日1日を共有したことに意味があると 思いたい。 (杉本)



▲手嶋氏による講演。

#### 8月7日(金) 大沼、ディナーレセプション

この日は函館からバスを一時間弱走らせ、道南最 大の湖と国定公園で知られる大沼へと向かった。到 着後すぐに新鮮な空気を吸いながらグループに分か れてディスカッションを行った後、ボートやカヌー、 サイクリング等をしながら、北海道の大自然を満喫 した。

夕方、市内へ戻った後はTシャツからスーツやド レスへ、皆少しお洒落をして再集合。創業明治12 年から今年で130周年を迎える老舗レストラン『五島 軒』でのディナーを楽しんだ。かつて天皇陛下もお 食事されたという『王朝の間』へ入れて頂き、長い歴



▲大沼にて、第二次世界大戦に対する学生たちの見解を話し合う



▲大沼でのパドリング

史を感じさせる趣のある空間に最初は少し緊張もし たが、立食形式の食事で色々な人と話しながらより 一層仲を深めることが出来た。

#### 【参加者日記】

快晴。函館サイトメンバーが企画するexcursion dayであった。

移りゆく郊外の建物の造りや植生をながめなが ら、バスで大沼国定公園に向かう。昨晩遅くなった ので切り上げた話の続きでひとしきりもりあがる。 到着してすぐにスペシャルトピックスに分かれる。 US Japan History from 1900 to 1945グループでは、 自分の国の歴史をどう思うのか、という問いから議 論を開始した。

昼食にはいか料理を味わうことができ、めいめい のスタイルでpaddling、cycling、horse ridingを 楽しんだ。火山が作り上げたという湖と島の点在す る風光明媚なこの地の150年前の姿を想像してみる。

函館に戻り、身なりを整えると、五島軒で立食ディ ナーである。主に61st IASCersのみの参加であり、 会話は大いに盛り上がり、20:00まであっという間 であった。その後、函館の夜の街に繰り出す人々も いれば、ホテルに戻り一階のラウンジにでてきて遅 くまで話し込む人々もみられた。 (高木)

#### 8月8日(土) 分科会活動、市内観光

#### 【参加者日記】

今日は函館サイトの実質的な最終日。フリータイ

ムとRTの時間が取られていました。函館開港150周 年記念のブルーインパルス(戦闘機)によるショーを 見るはずだったのですが、天候不良により中止。正 直、晴れていただけにかなり残念でした。その後、 RTベースでの活動をし各々五稜郭に行ったり、寿 司を食べに行ったり、ラーメンを食べたり、とフリー タイムを満喫しました。また、その後RTミーティ ングを行いました。そろそろファイナルフォーラム が近くなってきているので、焦らなくては…!ホテ ル1階のロビーは終始騒がしい様子で、まさに日米 学生会議、という感じとなり始めていました。

夜はGoes Around Cafeというレストランで食事 をし、親交を深めました。



▲ギターに合わせて日米の歌を紹介

#### サイトコーディネーター後記

竹内友理

改めてサイトコーディネーターとしての自分だ けを切り離してこの1年間の活動を思い返してみる。 実行委員としての必然かもしれないが、様々なジレ ンマを抱え悩み苦しんでいた印象が強い。

私生活の面では元々苦しいと言われていた法学 部の勉強とサイト計画のバランスがとれなかった。 「早めの予習」の誓いも言うは易しに過ぎず、実際は 時間が経つにつれ釣り合いがとれなくなり、また釣 り合いをとろうとすることも諦めた。夏の開催とい うデッドラインがあり、それを心待ちにしている参 加者がいて、その期待に応えるのがサイトコーディ

ネーターとしての責任。そう考えるとジレンマはジレンマでなくなった。

また、他作業とサイトのバランス。7月上旬に向けて計画していたサハリン渡航、自分が何より楽しみにしていた分科会活動。I want two more me. という実行委員安川瑛美の叫びに笑っていた私たちだったが、実際何度そう思ったことか。

これらは私がもう少し要領が良ければうまく両立さ せられたものなのかもしれない。力不足を感じてし まう。

しかし答えを求めて私が最ももがき苦しんでいたのは3つ目のジレンマであり、これに関しては今までも、これからも多くの実行委員がぶち当たってゆく壁なのではないかと思う。函館開催地自体のプレゼンスをどんなものにするか、という問題である。1ヶ月の会議において、2、3番目の開催地の重要性は高い。導入・締めの位置づけとして重要な第1、第4開催地に比べ白紙部分が多い、すなわち自由度が高い分、そこを様々な色で埋める作業をする方の責任は大きい。函館サイトの企画にあたっては、この色と塗り方を選ぶのに苦戦した。

怒濤の東京サイトの後の開催地として参加者が交流し、お互いに知り合う機会を提供すること。分科会活動ができないホームステイ期間を含む長野の前のサイトとして、分科会活動をはじめとしたアカデミックな活動の時間を確保すること。そのバランスをいかにしてとってゆけば良いのだろうか。函館担当とそこに住む人々を知れば知る程、函館担当実行委員の私達しか知らない函館の魅力を会議中に参加者に全て伝えたいという思いが募った。与えられたスペース内に各地特有の経験を盛り込もうとするためにアカデミック面と釣り合いがとりにくくなってしまうのは、開催地が4つあることの難しさかもしれない。

この点に関しては結果的に私達が経験した函館サイトを各参加者がどう受け取ったのかは私には完全には分からない。アカデミックとエンタテインメントのバランスという点については第60回日米学生会議を参加者として経験した私達実行委員で意見交換をした際に激論が起こったところでもあり、同じ

経験をしていたはずなのに受け取り方があまりにも 違っていたことに驚いたが、きっと一人一人の頭の 中の第61回JASCスライドショーの中の函館の絵も 72人72様である。私の頭の中にあるのは夜中数名の 参加者が函館のまちづくりについて議論していると ころ、自衛隊訓練服姿でイカ踊りをして笑っている ところ、自衛隊基地訓練後、米軍活動経験のあるア メリカ側参加者と話しながら拷問の是非について激 論が起きているところ、フォーラム後のレセプショ ンで参加者が尾上将補、手嶋先生を囲み日米関係の 是非や日本の存在感について質問をしているとこ ろ、大沼帰りのバスの中でみんなが疲れて寝ている ところ。そんな瞬間瞬間に参加者や他の実行委員が 本当にいい顔をしていたことは確かである。

函館という場所は不思議である。到着した瞬間か らほっとする感覚。国内をほとんど旅したことがな い私にとって初めての北海道が出張で訪れた函館 だったが、初日から「帰りたくない」「将来はこうい う所に住みたい」という気持ちにさせるような温か さと居心地の良さがそこにはあった。人との繋がり を大切にしてきたつもりの私だったが、出会ったば かりなのに何年も前からの知り合いであるかのよう に親切にして下さり、将来やら恋愛やらというやや パーソナルな事項にまで踏み込んで質問して下さる 函館の方々に親しみを感じるにつれ、東京という場 所で暮らしてゆく中で実は知らず知らずのうちに自 分が当たり前のようにどこかバリアを張ってしまっ ていたことに気づく。ラッシュアワーに痣が出来る ほど人口が密集しているからこそ東京では人間間の 身体的距離が心の距離に比例していない場面が多 く、面識のない人に対しては本能的にある種の警戒 心を覚えてしまうようだ。人生の半分をアメリカで 過ごし、残り半分は東京に馴染みきれないまま、あ るいは幼児で東京を東京と認識しないまま過ごし てきた私にとって出身地を聞かれた時の私の答えが 「東京」であったことはないが、「すげーなぁー、やっ ぱ都会っ子は違うなあ」「そうさーだって東京からき たんだものー!」という函館の方々の言葉が私の心 に妙に響き、自分は一体どこの人間なのだろうかと、 自分を相対的に見て考える機会も与えてくれた。

8時に入った大門横町の焼き鳥店で気づけば日が 変わった2時まで函館の方々と話していた。会社員 のお兄さんお姉さん方3名。青少年センターの指導 員の方1名。地元大学の学生1名。焼き鳥屋のけいちゃ ん。そして私達。ある夜たまたま同じ場所に集まっ た8名が、ただただ、「函館」について語っていた。 北海道・日本・世界の中での函館の存在感、函館内 部の地域活性化、大門地区の変化と函館の中での特 殊性。彼らはそれぞれ、「函館はこんな場所であっ てほしい」という絵を描いており、そのために自分 はこう貢献したい、という想いを持っていた。東京 には函館の何倍もの人が住んでいるが、世界の中で、 あるいは日本の中で東京がどうなってゆくべきで、 自分はそのためにこのように貢献したい、などと夜 通し語れる人間がどれだけいるだろうか。「××の ○○さん」と言えば分かってもらえるほど一人一人 の人間に確かな存在感があり、会う人会う人が目を 輝かせて函館への想いを語ってくれる。そんな函館 は本当に素晴らしい場所だと思う。

今回担当実行委員が日本側米国側あわせて4名し かいない中函館開催地における企画のひとつひとつ をこのように実現できたのは、私達が想いや行動に 応えて下さる方々との出会いに本当に恵まれていた からだと思っている。セリ見学、函館国際海洋都市 構想やイカ学についての講義、自衛隊基地訪問と訓 練体験・・・思えば実現した企画の多くは、たった ひとつの行動からどんどん広がっていったものだっ た。ある講演会で偶然出会うことができた方、イン ターネット上で連絡先を見つけ送信したメールに返 信をくださった方。色々迷惑をかけてしまうことも あったことと思うが、学生という立場である私のや る気を本気にして下さり様々なご提案、ご協力をし て下さった多くの方々にはいくら感謝してもしきれ ない想いである。

そしてまたこの一年を終え第61回日米学生会議以 後実行委員の座を継ぎ開催地を企画してゆく学生へ は、実現したいことに向けて一生懸命行動すべきだ ということを伝えたい。今回函館開催地を担当する 中で起こした行動のうち、花開かなかったもの、企 画へと繋がらなかったものは本当に沢山あった。そ

れでも会議後に残っているのは最初の一歩を踏まな かった後悔よりも踏んだことにより得られた幸せで あり、それこそが私自身一年限りの実行委員として 目指したかったところだと思うのである。

1年前は何も知らなかった函館だが、今となって は不思議と第二の地元のように感じられる。会議終 了後、第61回日米学生会議の参加学生とした函館再 訪の約束を実現するのが楽しみでならない。その時 も函館はきっと、都会人の私の胸を優しさで温めて くれるのだろう。

この場を借りて、第61回日米学生会議函館開催に 際し、多大なるご協力を賜りました関係者の皆様に 重ねて厚く御礼申し上げます。この度函館開催地を これほど充実したものにすることが出来たのはひと えにご協力下さった皆様のおかげであり、心から感 謝しております。皆様との出会いは私にとって、一 生の財産です。

田中豪

私が函館サイトを担当することになったのは、た しか2008年の10月頃だったと思う。釧路に小学生の ときに訪れたことを除いて、北海道に行ったことの なかった私にとっては、函館は未知の場所であった。 函館を担当することに決まってまず始めに向かった のは、自宅の近くの本屋だった。ガイドブックを 買って、函館にそもそも何があるのか、何ができる のか、を考えることから始めなければならなかった のだ。本やインターネットを通じて情報を集めてい くにつれ、知識は増えていくものの、やはりイメー ジはぼんやりとしたままだった。しかし、5月に実 際に函館を訪れると、状況は一気に変わった。それ までの脳内の想像上の産物が、臨場感を持ったリア ルなデータに置き換えられる。それが、本当の函館 サイトプランニングの始まりだった。

そこからはあっという間だった。宿泊先の決定。 フォーラムの打ち合わせ。バス会社との交渉。…。 他のサイト担当の実行委員と相談してプログラムが 重ならないように気をつけながら、そして、迫りく る会議に焦りながら、それでも、他にもっといい企 画はないだろうか、ともがきながら、振り返る暇も

なく一気に駆け抜けた本会議までの3ヶ月だった。

本会議が終了し1ヶ月が経った今、こうして後記 を書きながら振り返ってみると、駆け抜けた期間の 濃密さに気付くとともに驚く。そんな濃密な時間を プレゼントしてくれた函館とは、私にとってどうい う存在なのだろうか。私は、生まれも育ちも鎌倉で あり、祖父母も東京近辺に住んでいる。首都圏外の あらゆる都市は、観光地、あるいは訪問する対象と しての場所であり、函館も多分にもれず、そうした 地域の1つであった。この日米学生会議がなければ、 一生訪れることがなかった都市だったかもしれな い。しかし、現実には、5月に始めて訪れ、7月には 2回目のチャンスがやってきた。そして、本会議期 間中には1週間も函館に滞在した。その間、みんな からは、函館サイト担当として見られ、「函館で何 をするのか」と日本側参加者に聞かれ、「ハコダテの メイブツはナンデスカ」とアメリカ側参加者に尋ね られる。あたかも函館が自分の地元のように感じる 時もあった。観光地として、自分の好奇心の対象と して存在していた函館が、自分自身が保護者である かのような都市へと変わっていった。首都圏以外に 「地元」としての愛着を持ったことがない私にとって は、すごく不思議であり新鮮な感覚だった。

8月末の総選挙で民主党が勝利し、政権交代が実 現した。地方分権を謳い、これまでの中央集権的な 政治システムからの転換を唱えている。今後、日本 は大きく変わっていくのだろうか。しかし、その前 に、ここでいう「地方」とは何なのだろうか。また「中 央」とは何を意味するのだろうか。まず中心があり、 それ以外が周縁、すなわち地方となるのだろうか。 日本国内を広く見れば、政治的・経済的な意味での 中央がある。東京である。それと同時に、自分の生 まれ育った都市としての中央もある。私の場合は、 東京である。偶然にもこの二つの中央が重なってい た私にとって、この概念上の違いにこれまで気付か ず両者を同一視してきた。あるいは、頭では分かっ ていたのかもしれないが、それをはっきりとした形 で実感したことはなかった。

もちろん、函館を地元と言うには、私はあまりに 無知であるし、その資格もない。ただ、日米学生会 議の4人しかいない函館担当のうちの1人として1ヶ 月間生活し、函館を自分の担当、すなわちホームと 擬似的にとらえる感覚を通じて、これまで感じたこ とのない中央ー地方論に気付くことができた。函 館を通じて、自分の地元をわずかながら相対化して 見ることができた気もする。それとともに、首都圏 以外の場所を今までと違った見方で見られるように なったと思う。今後も、私は首都圏に住み続けてい くのかもしれないが、日本には全部で1800近くの市 町村が存在する。そのすべてに、それを中央だと思 い、愛着を感じ、守ろうとする人がいるはずだ。観 光地ではなく、首都圏に依存する都市でもなく、中 央から情けの対象として目をかけられる都市でもな く、自律した存在としての都市が存在しているはず

この発見をもう一段と深めて文字の形にするに は、現在の私の思考力と表現力では足りないようで ある。残念ながらには、この続きを書くにはもう少 し時間がかかりそうだ。それでも、会議終了以後、 ずっと頭を渦巻いているこの感覚を大切にしたい。 函館を担当していなければ感じることができなかっ ただろうこの新たな感覚を与えてくれた函館に感謝 したい。

#### 謝辞

この函館サイトをすすめるにあたり、様々な方の 力をお借りしました。こうした人々に負うところが あまりに大きく、いくら感謝しても足りることはあ りません。

函館水産市場の見学とイカ学の講義では、長野章 はこだて未来大学教授にお世話になりました。会 議中に朝6時から市場を案内いただいただけでなく、 7月に函館を訪問した際にも、長野先生のおかげで 市場や大学を見学することができ、様々なアイデア につながりました。

函館の自衛隊基地では、アメリカ側と日本側の参 加者が体験入隊し、敬礼をはじめとして基本教練を 学びました。夕食として野営食を食べたのは素敵な 思い出です。

フォーラムでは、函館大学の講堂を使わせていた

#### 第3章 本会議・サイト活動

だきました。溝田春夫学長と黒澤幹生事務局長に は、当日の準備をはじめとしてたくさんのご尽力を いただきました。また、ご多忙にもかかわらず、学 生・地元へのメッセージの発信という理念への賛 成から、尾上定正将補と手嶋龍一氏は、快く基調講 演を快く引き受けてくださりました。そして、同時 通訳の野口由紀子さんと丹下浩子さんのおかげで、 フォーラムをアメリカの学生にも伝えることができ ました。フォーラムの後にも続いた熱い議論は私た ちの財産です。

五島軒では、函館でお世話になった方をお招きし てレセプションを行なわせていただきました。

函館での会議全体を通して、函館市役所の高井暁 さんには、函館にフォーラムの広報から観光先のア ドバイスまで、様々な点でお手伝いただきました。 また、函館日米協会の中野晋専務理事には、函館に 行った際に会議の成功につながる地元の方々を紹介 いただいたとともに、フォーラムを財政的な面から 支援いただきました。

そして、ここに名前を挙げさせていただいた方以 外にも多くの方にご支援いただきました。ご支援く ださったすべての方に、この場を借りて御礼申し上

# サイトコーディネーター

# 8月9日~8月14日

松尾恵輔 安川瑛美 Edward Philips Mina Mahama

#### 長野サイトスケジュール

8月9日(日) 長野県小布施町到着

オリエンテーション(北斎館、おぶ せミュージアム散策)

小布施堂にてウェルカムパーティー ホームスティ

8月10日(月) まち歩き

小布施「まちづくり」フォーラム フェアウェルパーティー フローラ

ルガーデンおぶせ

8月11日(火) 小布施町出発

松代町到着…文武学校および周辺散

策と俊英学校の学生による

大本営跡地下壕の説明

地元学生を交えて「戦争と平和」ディ

スカッション

8月12日(水) 分科会

8月13日(木) 「地域活性」フォーラム

Amedele Lead Project 「キャンプ」

#### 長野サイト理念

日本アルプス、八ヶ岳などの雄大な山々、松本城、 善光寺といった多数の国宝、重要文化財が存在する 長野には年間9000万人程の観光客が訪れる。暑い夏 をさわやかに過ごせる避暑地、喧騒から離れて自然 を謳歌する保養地などとしても名高い。しかしなが ら一方、少子高齢化、過疎化、大都市との格差など 今日の地方が直面する課題も忘れてはならない。経 済活性化に向けた高度技術産業促進、信州農業と魅 力ある農村社会へのビジョンなど、地方県政の取り 組みを知ることができる重要なサイトでもある。「ふ るさと信州」の美しい風景と人々の暮らしを、ホー ムステイや地域住民の方々との積極的なコミュニ ケーションを通じて、都市では伝えきれない日本を 体感したい。

8月9日(日) オリエンテーション、小布施堂にて ウェルカムパーティー、ホームステイ

函館から東京に戻り、バスで長野県小布施町へ向 かう。小布施町到着後、町役場の講堂にて市村良三 町長よりお話をいただき、その後2つの班に別れて おぶせミュージアムと北斎館を含めた中心地域を散 策。小布施の修景事業、まちづくり等のお話を美し い町を歩きながら伺う。観光ではなく交流をという 町長のメッセージに日米両学生ともに聞き入った。 その後ホームステイのご家庭と合流し、各自ステイ 先へと向かう。

#### 【参加者日記】

今日で函館サイトは終わり、ついに3サイト目で ある長野サイトへの移動日。朝早く函館空港に向か い、羽田空港へ飛び、長野行のバスに乗り換えて小 布施の町まで6時間の長旅。移動中、IASCのみん な全員爆睡していた。そして小布施の町に到着する とこの町の景観がとてもきれいに統一されていて感 動した。長野1日目はホームステイ。すぐにホスト ファミリーと初対面し、緊張する中温かく迎えてく れた。そのあとのレセプションでは町の人とたくさ



▲オリエンテーションの様子

んお話をすることができた。また料理が本当にお いしくて、町の人みんながきらきら輝いていて、自 分が知らない日本の側面を初めて経験できた気がす る。夜もホストファミリーの人とお話をして、町の 事や政治の事から農業の事、自分が今まで知らない ことをたくさん教えてもらった。前日徹夜をしてい たせいか、そのお話のあとぐっすり眠り、体も心も 癒された一日だった。



▲あるホストファミリーとの一枚

8月10日(月) まち歩き、小布施「まちづくり」フォー ラム、フェアウェルパーティー フローラルガーデ ンおぶせ

午前からお昼にかけて7つのグループに分かれて まち歩きを行い、地元の団体の方がたのご協力をも とに小布施町を様々な角度から知る機会をいただ く。お昼は婦人会の皆様にご協力いただき、丸なす など長野、小布施の食材を楽しんだ。自由時間を挟 んだのち、公民館の北斎ホールにて「まちづくり」 フォーラムを行った。

まち歩き各班の内容:

A班:まちづくり会社の様々な取り組み。伝統野菜 としての丸なすの収穫など(ア・ラ・小布施)

B班:田んぼやりんご畑めぐり。桃の収穫。農家訪 問など(農村女性いきいきプラン推進協議会)

C班:お寺で野だて。史跡、畑めぐり。桃の収穫な ど (風の会)

D班:丸太ベンチやフラワースタンドの製作。 欅神

輿やほおずき市の取組みなど(さ~けんせっ てみね会)

E班:北斎館周辺、町並修景、オープンガーデンな ど町中心部(小布施塾)

F班:岩松院、浄光寺など町周辺部 (小布施塾)

G班: 皇大神社や岩松院めぐり。松葉屋(酒蔵)、穀 平(味噌蔵)の見学など(e-CLUB)

小布施町「まちづくり」フォーラム

場所:小布施町公民館 北斎ホール

コーディネーター:信州大学 中嶋聞多教授

パネリスト: 市川博之さん(小布施文化観光協会理 事)、市村次夫さん(小布施堂代表取締役)、小 山洋史さん(小布施まちづくり委員会会長)、花 井裕一郎さん(町立図書館長)、林靖人さん(信 州大学 イノベーション&地域ブランド 担当 研究員)

目的:「地方の『らしさ』と『くらし』の併存」を考え、 地域の価値を発掘し、活かす方法を考える。

地方にはそれぞれの地域が持つ気候・風土・自然 環境・都市環境の中から生まれてきた独自の文化が 存在する。都市の人々や他地域、あるいは海外から の人々にとっては、それは時に奇異に映り、時には 新鮮で、先進的に映る。このそれぞれの地方が持つ 「らしさ」は、その地方の価値であり、その地方の存 在を認識するためのアイデンティティに他ならな

しかし、都市への物質集中・意識集中は、地方の 「らしさ」に大きな影響を与えた。都市文化志向によ り、若い人々の中には、地方の「らしさ」を他と違う 悪いもの(共有・理解されないもの)、時代遅れで悪 いものとして認識してしまった者もさえもいる。ま た、これは同時に人口流出を加速させ、地方の過疎 化は一層深刻となった。加えて超少子高齢化社会の 到来により、地方には「限界集落」や「消滅集落」と呼 ばれ、コミュニティ維持や文化維持が不可能になり、 消えつつある地域が多数ある。この結果、地方にお いては「らしさ」を意識しても、自らの暮らしが成り 立たないが故に、やむを得ず「らしさ」を捨てざる得 ない状況も生まれてきていると言えよう。

このような状況の中、地方が「らしさ」を守ってい くためには、価値の再発掘や再認識、再定義を行い、 それを生活の一部やビジネスに組み込み、「くらし」 と「両立」「併存」させることが重要となる。それこそ が、まちづくりやソーシャルビジネス成功につなが るのである。

フォーラムでは皆さん自身が研究者となり、小布 施町をフィールドとして地方の「らしさ」の発見やそ れを「くらし」「地域活性化」の中にどのように位置づ けていくのかを学び、さらなる価値の発掘や地域の 活性化につながる方策を考えた。(林 靖人研究員)



▲街歩きにて、農家でリ ンゴの作り方を教わる

ープンディスカッ▶ ション形式を採った街 づくりフォーラム。



#### 【参加者日記】

見渡せば山々の緑が広がり、それらに溶け込むよ うな町並み。それは、まるで年を重ねた老人が記憶 の奥に仕舞いこんだ風景のようでもあったが、よく よく目を凝らせば決して古びた建物ばかりではな く、そう年月を経ていないだろう家々も少なくない。 落ち着いた雰囲気の中にも古びない美しさと、町の 人々の息吹が感じられる町。小布施は、過疎化が進 み地方の危機が叫ばれる日本において、いささか奇 妙な存在かもしれない。この日は幾つかのグループ に分かれ、テーマごとに町の方のお話を聞いたり、 散策をしたりと、小布施を肌で感じることが出来た 日だった。夜には、町民の皆さんのご厚意によりレ セプションが行われ、参加者は浴衣を着て、おいし い料理や日本の夏の雰囲気を存分に楽しんだ。レセ プションでの小布施町長のお話の中に、往きし日の 面影を留めつつ、生き残りをかけて絶えず新しさを 生みだそうとする熱意と努力を垣間見た気がした。

(谷口)

#### 【参加者による小布施滞在の感想】

「ここは本当に日本なんだろうか」

大げさかもしれないが、小布施を体験した私の頭 にまず浮かんだのは、この一言だった。景色や人々 の見た目が異質であるということではない。それは、 近年の日本という国やそこに住む私たち自身が失い かけている「何か」が、小布施にはあると感じたから

「都市と地方の格差問題の解決は、地方による魅 力創出が大前提だ」

滞在2日目に行ったフォーラムで、小布施の方が 発言した言葉が私の頭から離れない。それは、小布 施という町が共有する素晴らしい価値観を垣間見る ことのできた瞬間だった。単に都市の一極集中を批 判し、地方の農村に広がる過疎という問題を悲観的 に受容するのではなく、むしろ「こういう町を作り たい」という積極的な意思のもと、自ら魅力的な空 間を作ろうとする住民たちがいる。都市と地方の問 題は、今まで利益を受容する事しか考えてこなかっ た地方側にも責任がある。「私たち自身が価値を生 み出していかなければ生き残れない。」そんな彼らの 強い意志が、私の胸を高鳴らせたのだろう。

今、私たち日本人、ひいては世界中の人々にとっ て、必要なことは、まさに小布施が体現する、「あ るべき未来を想像し、それに向かって行動する意志 を持つ」という姿勢ではないだろうか。小布施が示 した未来へのビジョンと責任感を、私たちは今、見 習うべきだ。

今回の3日間の訪問では、ホームステイ先の家族、 町歩きでレクチャーしていただいた多くの団体の 方々、地域の方々に支えられ、素晴らしい学びと交 流の場を得ることができた。私たち日米からの72人 の訪問者を快く受け入れていただいた町長をはじめ



▲お世話になったホストファミリーの方々と

とする小布施の方々に、もう一度心から感謝を申し 上げたい。本当にありがとうございました!

(大宮透)

#### 8月11日(火) 松代「戦争と平和」フォーラム

場所:松代文武学校、松代大本営跡地下壕

参加者:清泉女学院大学、長野県立長野高等学校、

長野俊英高等学校、日米学生会議学生

協力:松代文化財ボランティアの会

午前は小布施町でお世話になった方々、ホスト ファミリーとのフェアウェルを行い、松代町に移動。 松代市内見学、松代大本営地下壕見学、「戦争と平 和フォーラム|を行った。

#### 1 松代市内見学

松代文化財ボランティアの会の皆様の案内で、松 代の「美しい日本の歴史風土100選」に選ばれた城下 町の落ち着いた町並みを見学した。美しい武家屋 敷や庭園、そしてその間を流れる水路からは、古の 町を保存しながらもそこに今も人の生活が息づいて いることを感じる。日米の学生からは、信州の自 然のなかに残る町並みの美しさについて語る声



▲松代城跡にて

が聞こえた。

#### 2 松代大本営地下壕見学

長野俊英高等学校の学生の案内の元、松代大本営 地下壕を見学した。松代大本営地下壕は、太平洋戦 争の末期、軍部が極秘に大本営、政府各省等の首都 機能を移す計画の下に構築した物で当時の金で2億 円の巨費と延べ300万人の住民及び朝鮮人の人々が 労働者として動員されたと言われている。

地下壕の土肌や、壁に突き刺さったままの工具 は、流れた時間の長さを物語っている。だが同時に、

未だ朽ちずに残っているその様子からは、かつて皇 居や大本営の移転が計画されていたころの影が色濃 い。太平洋戦争が自然豊かで平和に見える長野県ま で影響を及ぼしていたという事実には驚きを、労働 者として亡くなった住民や朝鮮人の人々の気持ちに 思いを巡らせると戦争の残酷さを感じる。また、そ の戦争が現在蜜月の関係にある日米の間で主に行わ れ、自分たちの祖先が60年前は銃を持ち向かい合っ ていたという事実には、複雑な気持ちにならざるを 得なかった。



▲地下壕内にて。長野俊英高等学校の生徒による説明を聞く 参加者。

#### 3 戦争と平和フォーラム

清泉女学院大学、長野俊英高等学校、長野県立長 野高等学校の学生と日米学生会議の学生で、文武学 校にて「戦争と平和フォーラム」を行った。フォーラ ムでは8組ほどのグループに分かれディスカッショ ンが行われた。グループのリーダーは日米学生会議 の日本側参加者とアメリカ側参加者がペアを組んで 務め、それぞれテーマを決めた。

議論は、歴史的な建造物である松代文武学校の畳 の上で、車座になってリラックスしたムードの中で 進められる。しかし、反面その内容は少し緊張感の あるものとなった。松代の大本営跡という戦争の遺 産を目の当たりにした両国の学生は、ともに立ち入 りにくい問題にも切り込んでいく。たとえば、ある グループではアメリカの原子爆弾の歴史的評価や、 それに対する個人的な感情などを話し合っていた。 会議を通して既に友人になった日米の学生が、両国 の歴史というセンシティブな部分について語り合う のは難しいが、真の相互理解を目指すためには避け て通れぬ重要な問題を話し合う機会となった。

また、地元の学生の参加してくれたことによる影 響は本当に大きい。日米学生会議に参加する学生は、 大都市の大学で学ぶものが多い。そんな中、地方に 住む学生意見を聞くことができるのは米国の学生に とって非常に重要で刺激的であったようである。あ る米国の学生は「この会議で参加した中で最も有意 義な議論であった。」とやや興奮気味に話していた。



▲地元の学生とのディスカッションの様子①



▲ディスカッションの様子。その②

#### 8月12日(水) 分科会フィールドトリップ

各分科会にわかれ、終日長野県内においてフィー ルドトリップを行った。

#### 【参加者日記】

今日は一日RT毎に動く日で、私たち食糧RTは長野 から約40分の桜沢と言う場所に向かいました。なぜ なら、農業体験をするためです。時期的に、トマト やインゲン豆、とうもろこし、きゅうり等が盛んで したが、私たちはプチトマトの収穫をさせて頂きま した。ヘタが取れないようにもぎ取るのが意外に難 しく、ヘタが取れてしまったものは自分の口に行く ので、ミニトマトでお腹がいっぱいになるという初 の経験をしました。有機農業を営んでいる農家の方 に、補助金の問題や人員不足で外国から研修生を招 いているお話等を直接伺い、農業経営を続けて行く 事の大変さを改めて考える機会になりました。

その後ホームステイでもお世話になった小布施町 を再び訪れ、JA須高の方から農協の役割や日本の 農業の現状等について、話して頂きました。

そして最後に、"highly recommended to go"で ある善光寺にも行き、長野の魅力満載な一日でした。 おみくじの結果は散々でしたが、気にしません!

(趙)

8月13日(木) 長野地方活性化フォーラム・Amedele Lead Project

1 長野地方活性化フォーラム

場所: TOiGO

パネリストおよびスピーチ:市村次夫(株式会社小 布施堂 代表取締役)、中邨 章氏(明治大学教 授)、南山博之(株式会社アクサム 代表取締 役)、村井 仁氏(長野県知事)

モデレーター: 岩井まつよ氏(SBC信越放送 取締 役)

開催趣旨:地方分権改革に関する議論がされて久し い中、地方自治にまつわる諸問題は中央との関係に かかわらず昨今の重要課題である。地方活性化は日 本国内における大都市との相対的な比較のうえで文 脈づけられるが、グローバリゼーションにともない 産業や人の移動がボーダーレス化するという国際社 会の文脈で地域活性の必然性と方法を議論すること は少ない。" Think Globally, Act Locally"といった 標語はグローカリゼーションといった言葉を生み出 しているが、このような時代の趨勢は地方行政とい かに関連するのだろうか。グローバリゼーション化 における行政や市民社会のあり方、そして地方ブラ ンディング実践の課題と今後の展望を多角的に考え たい。

概要:フォーラムは村井長野県知事の「長野県のブ ランディング戦略」に関するスピーチで幕を空けた。 それに続き、中邨教授による「日本とアメリカの地 方行政・地方議会の比較」、市村氏による「北斎・栗 を例にした地域のブランディング」、南山宏之氏に よる「地域ブランディングとアイデンティティ」、信 越放送取締役の岩井まつよ氏による「外国人との共 生」をテーマにしたスピーチが行われた。各スピー チは地域のグローバリズムというテーマをそれぞれ 別の観点から捉えている。フォーラムに参加した学 生は、「現在の日本やアメリカの地方が抱える問題 を認識するとともに、その解決策を模索するよい機 会になった。」と話していた。



▲長野フォーラム、パネルディスカッションにて

#### 2 キャンプ

場所:長野県練成センター

アメリカ側の会議参加者が主導して、Amedele Lead Projectが行われた。このプロジェクトにおい ては、キャンプとバーベキューを行う。キャンプで はボーイスカート経験のあるEdwardらを中心とし てテント張りが行われた。また、バーベキューでは、 マシュマロを串に刺し焼いたスモアー等のアメリカ 料理が登場した。生憎の土砂降りの雨の中であった が、両国の参加者はおいしい料理に舌鼓を打ち、さら にテントで寒い中毛布に包まりながら親交を深めた。



リカの伝統料理を楽しむ参加者たち。

#### サイトコーディネーター後記

松尾恵輔

長野サイトをコーディネートする上で、私たちは ローカルコミュニティーとの交流に重きを置いた。 ヒントになったのは昨年の会議のモンタナサイトで ある。モンタナでは、深い自然の中で現地の人とホー ムステイ、フォーラムを通じて交流し、参加者間だ けではなく、アメリカという国やそこに住む人々に まで、おぼろげながら「信頼」の念を持った。長野で も同様の環境で、米国の学生たちに日本を少しでも 身近に感じてもらえればと思ったのだ。

会議を終えて、上記の試みは成功したと感じてい る。一人の米国側参加者は会議終了後、次のように 話した。「戦争と平和フォーラムでは、地元の高校 生や大学生と、歴史問題について率直に語り合うこ とができた。小布施でのホームステイでは、3日間 寝食を共にする中で日本の普通の家庭の日常に触れ ることができた。更に、他の参加と仲良くなり、今 は彼らを兄弟のように感じている。」参加者たちは長 野サイトを通して、「日本人」の輪郭を手触りで掴み、 さらに親近感を抱いたようだ。

日米学生会議の設立当初からの目的に、「太平洋 の平和」があるが、思うにその達成には上述のよう な親近感が不可欠であると思う。人と人とがじっく りと触れ合うなかで、相手の事情や文化にまで想像 をめぐらす気持ちこそが相互理解につながると信じ

ている。

さて、長野サイトをこのようなすばらしいサイト にすることができたのは多くの方々のご協力のお陰 である。この場を借りて、第61回日米学生会議を 長野で開催するにあたり、多大なるご協力を賜わっ た関係者の皆様に心より御礼申し上げたい。私たち 学生の青臭い意見に耳を傾け、貴重な時間を割いて ご協力くださった皆様のご協力無しには、今回の長 野サイトを無事、成功裏に開催することは出来な かった。本当にありがとうございました。

安川瑛美

参加者に"何か"を感じとってほしい、一人ひとり が持っている日本のステレオタイプを崩すような体 験をしてほしい。このような思いで準備期間を走り 続けてきた。無事終了した今、まず私たちのような 学生の意見に耳を傾け、時間を割き、会議をよいも のにするという目標に賛同し、協力して下さった多 くの関係者の方々に心より感謝を申し上げたい。何 から手を付ければよいのかわからなかった始発点か ら振り返ると、素晴らしい方々との出会いが長野サ イト成功への原点にあると確信している。私が長野 開催地担当になった初めの頃は、長野はどのような 資源があるのかも会議にとってどのような意義のあ る開催地になりえるのかも分からず手探りであっ た。このような状態に手を差し伸べてくださった内 坂徹さん、由美子さんとの出会いは会議という文脈 だけでなく私自身に大きく影響したように思う。町 に訪れるたびに、ホームステイさせて頂いた上に 様々なアドバイスを下さり、純粋に小布施の町を楽 しませていただき、いろいろなお話を聞かせて頂い た。また、(財)ながの観光コンベンションビューロー の小川登志晃さんは長野市、松代等に関して多大な るご協力を頂いた力強いパートナーであった。

会議企画にあたっては、困難は多くあったものの 学んだことの方がより多かった。会議全体の日程か ら長野にてホームステイを行うということは決定し ていたわけだが、いざ72名もの学生のステイ先をお 願いするということは、そう簡単に事が進まないで あろうし、もしかしたら受け入れ先さえ見つからな

#### 第3章 本会議・サイト活動

いのではないかという懸念があった。初めて小布施 町を訪ね、市村町長にお会いしてホームステイを引 き受けて頂けないかという話をするにあたっては、 非常に緊張していたのを覚えている。なぜ日米学生 会議でホームステイなのかといった説明をし終わっ た後、私が発した「交流」という点に市村町長が熱い 思いを語ってくださった。ホームステイを受けて 頂けるというお返事を頂いただけでも大きな一歩で あったが、「小布施町だけで必ず必要なホストファ ミリー数は集めますから。」とおっしゃって下さった 時には、このご縁に深謝すると同時に町の期待にい かに答えられるかを考え続ける日々のスタートで あったように思う。毎回小布施町に訪れるたびに、 町の方々の温かさ、思い、我々に対する期待を感じ 取り、72名で小布施町に滞在するのが待ちきれない という思いが日に日に募っていったのを鮮明に覚え ている。

開催企画で重視した点が2点ある。ひとつは、「場 所」と向き合うこと。長野では短い滞在の中、小布 施町での「まちづくり」フォーラム、長野市では「地 域活性」フォーラムを開催した。JASCは安全保障 や国際問題に注目する傾向がある中、歴史上はじめ

ての内容なのではないかと思う。グローバリゼー ションが進む中でまちや地域といった「場所(ローカ ル) の現状に問題が潜んでいるのではないかという 問題意識から、当テーマを選んだ。フォーラムで は、外部者の意見とまちの伝統を融合させる革新 的なアイデア、地域ブランド戦略として地域のアイ デンティティを探ることの重要性などを学びなが ら、住民参加型の意思決定プロセスを前提にいかに 場所の資産を発掘するか、そしていかにそれらを活 用することができるかが今後の問題解決の糸口なの ではないかという点に集約された。また、長野では できる限り地元の方との交流を重視した。それは、 第61回のテーマでもある「対話と発信」(interactive empowerment)の特に対話に注目をしたかったとい うことと、この二つの要素は不可分なのであるとい うことを証明したかった。発信は対話から生まれる、 対話の蓄積も発信である。そのように信じながら、 相互啓発をキーワードに取り組んできた。

最後に、日本側サイトコーディネーターとして一 緒に走ってきたけいすけ、頼りになるミナ、いつも 何かできることがないか探してくれるエド、長野 チーム最高でした! (安川)

参考: 小布施町フォーラムにて利用したアンケートシート

1. Your impression of Obuse in comparis	
	(ex. Climate, Nature, and Living environment, Inhabitants, etc.
	「地方の独自性として価値を感じたところ que or valuable in terms of "Japanism" or "Qbuseism"? (ex. Agriculture, Foods, Landscape, Culture, History, People, et
<ol> <li>おぶせ「らしさ」、日本「らしさ」をど 優れている点・課題点・改善点</li> </ol>	のように活かし、「暮らし」「地域づくり」につなげているかを考え
3. How are Obuse locals making good u	se of <u>Obuseism</u> in daily and community life?
	(Positive points, Negative points, and Improvement points
4. 講評·総括	

# 京都 8月14日~8月21日

## サイトコーディネーター

小野元 誉田有里 Jon-Michael Durkin Rachel Staum

#### 京都サイトスケジュール

8月14日(金) 京都着

スペシャルトピック

8月15日(土) 分科会活動

金剛流能鑑賞

8月16日(日) 分科会活動

大文字送り火見学

8月17日(月) もんじゅ見学

原子力に関するフォーラム

小浜市長表敬訪問

8月18日(火) 京都フォーラム

8月19日(水) 62回実行委員選挙

裏千家茶道体験

宇多野ユースホステル移動

8月20日(木) 新実行委員ミーティング

自由観光ツアー

タレントショー/ファイナルリフレ

クション

8月21日(金) 解散

#### 京都サイト理念

明治維新まで千年間、日本の都であった京都。足 を踏み入れれば、その歴史を見守ってきた寺社仏閣 の醸し出す雰囲気に包まれ、日本文化を肌で感じる ことができる。一方、多くの大学、ベンチャー企業、 NGO、NPOが存在し、技術革新や市民活動の先端 を担っている。また、京都議定書の採択に代表され るように多くの国際会議の開催地でもある。このよ うに世界に開かれた都市として現在も発展を続ける 原動力になっているのは、芸術や工芸などの成熟し た伝統と新しい感性とが刺激し合う相乗効果である う。私たちも、この都市、さらには国際社会を動か す新しい意見の一つとなることを目指して、第61回 日米学生会議の一カ月にわたる議論の成果を発表す る。

## 8月14日(金) 京都着(衣笠セミナーハウス)、スペ シャルトピック

霧のかかる早朝、練成センターを後にいよいよ最 終サイトである京都へと移動した。お盆の時期とい うこともあり、交通渋滞に巻き込まれ約8時間のバ スの旅となったが、皆バスの中では深い眠りについ ていたため、一瞬のうちについてしまった。京都市 内に入ると、前日までいた大自然の中とはまたうっ て変わり、神社仏閣の景色に日本の伝統を肌で感じ る。衣笠セミナーハウスに到着後は、本会議最後の スペシャルトピックの時間である。バラエティに富 んだテーマで各々のグループで議論を楽しんだ。つ いに本会議も最終サイトまで来たこと、そしてこれ からファイナルフォーラムに向け、分科会ごとの準 備も追い込みであることを認識し、この日は床に就 いた。

#### 【参加者日記】

東京、函館、長野と移動してきたこの会議も、つ いに京都に上洛を果たした。

今、私の中には様々な思いが頭の中を巡っている。 ファイナルフォーラムまで時間が限られている中、 分科会での発表を成功させるための準備を十分にで きるか、最後までやり遂げることは出来るのだろう か。これまで幾度となく衝突を繰り返してきたから こそ、持ち続けてきたこれらの不安は、会議の終わ りが目前に迫り、更に大きくなって私を焦らす。

しかしながら大きくなったのは不安だけではな い。私達は苦しい時間を共に過ごしながら、まがり なりにもそれら全てを乗り越えてきた。目標に向か うことを諦めそうになったこともあったが、これま での努力を形にしたいと願う気持ちが高まり、そこ から生まれる希望もまた、大きくなった。

泣いても笑っても、残りは1週間。1週間で会議も

終わり、苦楽を共にしてきた仲間達とも別れのとき を迎える。後悔はしない。決意を新たに、いざ京都。 (中村誠一郎)

#### 8月15日(土) 分科会活動、金剛流能鑑賞

午前中に分科会活動を行い、午後は能を鑑賞した。 その後、京都各所で自由に夕食をとり、宿舎に戻り、 分科会活動を行った。

#### 金剛流能鑑賞

本企画は、京都の特徴の一つである日本の伝統文 化の精神に、実際に目でふれてほしいという思いを 快く受け止めてくださった金剛流宗家、金剛永謹氏 をはじめとした皆様のご協力により、実施すること ができた。

金剛流は能楽シテ方五流派のひとつである。古く は奈良の法隆寺に奉仕した猿楽座の坂戸座を源流と し、室町初期には春日興福寺に勤仕する大和猿楽四 座のひとつとなり、のちに金剛座、そして現在の金 剛流へと至った歴史を持つ。

当日は、130年以上前に作られた舞台をもつ金剛 能楽堂にて、能の歴史や所作の解説にはじまり、数 百年の歴史ある装束や面の紹介、実際に抑揚をつけ た「羽衣」の地謡練習、「羽衣」、「岩船」の仕舞と充実 したプログラムを実施した。金剛氏はさまざまな質 問にも親切に対応してくださり、日本側の参加者を 含めた大多数の能初心者も、その魅力に引き込まれ ていった。その後、宿舎に帰ってからも「羽衣」のメ ロディーを口ずさむ参加者の姿が見られた。



▲能楽堂見学、この後能を鑑賞。

#### 【参加者日記】

今日のハイライトは何といっても「能鑑賞」。一同、 京都御所の西隣に位置する「金剛能楽堂」へ向かっ た。アメリカ側参加者に限らず、能を生で見るのが 初めてという人が多く、能の舞台を間近にし、皆興 奮した面持ちだった。鑑賞前には、能で使われる面 のお話を聞いたり、唄を教えて頂き実際に歌ってみ たりと、楽しみながら能について学ぶことができた。 能鑑賞後は、夜の分科会ミーティングまで自由行動。 皆が京都観光や、おいしい日本食を求めて出かける 中、私は金剛能楽堂から徒歩10分の寮へ戻り、留学 で2年間離れることになる第二の故郷、そして友に 別れを告げた。 (中村梨沙)

#### 8月16日(日) 分科会発表準備、大文字送り火見学

立命館大学の会議室にて、フォーラムに向けて分 科会発表の準備に取り組んだ。原稿を作り上げた夜 は、大文字の送り火を見るためにセミナーハウス周 辺を散歩した。



▲ファイナルフォーラムの発表準備に熱が入る。

#### 【参加者日記】

ファイナルフォーラムが間近に迫ったこの日、 IASCer達は1日中立命館大学の寮にこもって、RT 発表のための準備のラストスパートを行った。パソ コンと、資料と、ホワイトボードと、お菓子と…の 中にJASCTシャツのみんながいる、RTごとの作業 部屋の風景。廊下で、ロビーで、自販機の前で、他 のRTのみんなと進み具合の報告。でもそれも他の 色んな話に移って、例えば応募前の日常を、9月か

らの予定を、そしてJASCを振り返るコメントを聞 く中で、彼/彼女の知らなかった想いに触れて新た な一面を発見する瞬間が未だに沢山あることに気付 く。みんな終わりが近いことを確実に意識していた けれど、何だか現実感が沸かないのは、72人でのこ の生活が今の日常だからかもしれない、と思った。 隣に必ず誰かが居るJASCが、ずっと続いていくよ うな気さえしている。

とにかく明後日は、61回テーマの「対話と発信」を 見据えて、5月から目標にしてきたファイナルフォー ラム。 (中村真理)

# 8月17日(月) もんじゅ見学、原子力に関するフォー ラム、小浜市長表敬訪問

関西電力株式会社、日本原子力研究開発機構の全 面協力のもと、日米学生会議in敦賀を開催した。午 前中は、スタッフの方々によるわかりやすい解説つ きで実際の施設を見学しながら、難解な原子力発電 のしくみを理解した。また午後は教授と学生の発 表、ディスカッションという形式で、国際政治、環 境・エネルギーなどの視点から原子力の未来を検討 1 to

その後、小浜市を訪問し、8.4メートルという世 界最長の塗り箸(ギネス認定)の前で、松崎市長とア メリカ側実行委員長Colinがスピーチ交換をし、日 米の友好を深めた。Think globally, act locally とい う視点の重要性を確認した。

#### 日米学生会議in敦賀

主催: 財団法人国際教育振興会

共催: 関西電力株式会社、独立行政法人日本原子力

研究開発機構

日時:平成21年8月17日(月) 9:30-16:00

会場:高速増殖原型炉「もんじゅ」、MCスクエア

(福井県敦賀市)

開催趣旨:現代文明を支えている原子力発電につい て、エネルギー生産の現場を実際に見学した後、「原 子力の平和的利用がいかにして可能か」について、 研究者たちと学生とがディスカッションすること で、学生がより現実的な視点を得ることができ、学 生の立場から原子力による社会貢献を再考する貴重 な機会と期待し、施設見学及び討論会を開催した。 概要:

- ①原子力、もんじゅについてのビデオ上映
- ②もんじゅ見学ツァー
- ③竹田敏一氏 講演 "Why is nuclear energy indispensable for human being?" (福井大学附属国際原子力工学研究所所長、大阪

大学名誉教授)

④久野祐輔氏 講演 "Peaceful Use of Nuclear Energy and Nonproliferation" (日本原子力研究開発機構 核不拡散科学技術セ

ンター 次長、東京大学大学院工学研究科客員教 授 原子力国際専攻)

- ⑤ Emily Rath "Student Empowerment: Changing the Face of Nuclear Energy"
- ⑥林 藤彦 "Challenging the NPT and GNEP" ⑦パネルティスカッション(パネリスト:竹田氏、
- 久野氏、Emily、林 モデレーター:澤田哲生氏 東京工業大学原子炉工学研究所)
- ⑧プレスブリーフィング
- ⑨小浜市長 松崎晃司氏 表敬訪問(小浜市役所にて)



▲討論会会場のMCスクエア前にて、お世話になった皆様と共に

#### 討論会内容

竹田氏はエネルギー需要の増大、化石燃料は埋蔵 量の限度や地球温暖化の問題を考慮すると原子力は 人類の希望ともいえることを述べた上で、経済性、 安全性を高めた次世代の原子炉開発のためにも、日 本の研究開発炉としてもんじゅは重要な意味を持っ

ているとした。久野氏は、同様の観点から原子炉の 数は増やすべきであり、原子力の平和利用と軍事転 用の関係を断つために、断固たる核の安全保障政策 が望まれるとした。具体的にはIAEAでのご自身の 経験を踏まえつつ、IAEAの包括的保障措置協定に よる査察の重要性を説き、核燃料サイクルの国際管 理など体制を補完する新たな動きについても解説し た。林は、NPTやGNEPといった核不拡散体制に おける、核保有国やウランの供給国がもつ偏った優 位性が、体制を脆弱にしている点を問題提起する一 方、外交の一環性や経済的な観点から日本の核保有 の可能性は現実的ではないとしつつも、核がタブー とされ国民がそれについて思考停止に陥る危険性を 指摘した。Emilyは会議の参加学生への核に対する イメージ等を資料として用いながら、決して悲観的 になるのではなく、過去の失敗を繰り返さぬように 市民が安全で倫理的な研究開発を支援していく方向 性を打ち出した。

パネルディスカッションでは、一貫した原子力政 策と安全性を高める一層の技術革新、核物質の管理 をめぐる国際協調などが今後の課題として確認され た。また、核保有国である米国と、高い核技術水準 をもちながら批准後規定を30年以上にわたり規定を 遵守している日本を比較し、核不拡散における両国 の果たすべき役割などにも話題が及んだ。短い時間 ではあったが、原子力技術について様々な立場から の意見が出されたため、参加者にとっては理解を深 めるよいきっかけになったであろう。



▲見学ツアーにて、解説に聞き入る参加者達。



▲「もんじゅ」におけるパネルディスカッション の様子。



▲小浜市長を表敬訪問。

#### 当日の取材記録

当日の模様は、福井新聞、中日新聞、福井テレビ ニュースにより報道された。

#### 【参加者日記】

今日は早朝からバスに乗り込みもんじゅに向かう。 もんじゅでは施設見学に加えて、福井大学の竹田敏 一教授と日本原子力研究開発機構の久野祐輔氏、学 生会議からは日本側代表林とアメリカ側代表エミ リーが核技術についてのプレゼンテーションを行っ た。1995年に事故が起きているもんじゅにという場 所で核の是非を考えることは何か感傷深い気持ちに させた。この会議が始まって以来、日米関係を語る 上での核技術の大切さを意識させられてきた。だか

#### ▼『福井新聞』平成21年8月18日

に参加している学生た 国による安全管理の重要

61回日米学生会議

え意見交換した。日米両

もんじゅで日米学生会議

敦 賀

で、現実的な平和利用の

ちが17日、敦賀市の高速 増殖炉「もんじゅ」を見 について研究者を交 核拡散などの国際問 原子力の平和利用 指す日本人学生たちによ た。 性を訴える意見などが出 日米相互の信頼回復を目 同会議は1934年、



ムシースクエア について意見を交わす **習市の原子力機構工** 子生と研究者―17日

どを巡っている。 21日まで、東京や京都な 加し、7月28日から80月 今年は日米36人ずつが参 ら国際的な問題を討論。 議を開いている。約1カ 営し毎年両国で交互に会 月間共同生活を送りなが この日の会議は、運転 創設された。学生が運

収集の必要性を強調し 理や世界各国からの意見 を挙げ、徹底した安全管 壊力の両面があること 境問題への可能性と破 ースさんは、原子力は環 米国側のエミリー・ラ

産現場を実際に見た上 で原子力エネルギーの生 らは原子力の仕組みや原 発の現状などを説明し 国際原子力工学研究所長 竹田敏一・福井大附門

原子力平和利

用 探 る

り組みは二重基準で不 的な核拡散防止への取 設エムシースクエアで さん(慶応大)は「国際 行われた討論で、林藤彦 あり方を探ろうと企画さ 原子力機構の関連施 がある」と語った。 を持って考えていく必要 も、われわれ市民が責任 題があるが、持続可能な エネルギーの観点から は「原子力には複雑な問 終了後、 小野元さん(京都大) 同会議実行委

加している学生らが十

バマ大統領応援活動で話

学生たちはこの後、

才

長を表敬訪問した。 題の小浜市の松崎晃治市 のか」と疑問を投げ掛け の核武装化はないと思う がある」と指摘。 処理でも核拡散のリスク 利用のための核燃料の再 完全な状態にあり、 本当に信頼していい

# 原子力の平和利用で討論



る日米学生会議に参 が議論し、交流を深め い分野で日米の大学生 ネルギー問題など幅広 日米学生、 国際関係や環境、エ もん 問。見学後、原子力機 原型炉もんじゅを訪 子力機構)の高速増殖 子力研究開発機構(原 七日、敦賀市の日本原 じゅ訪問

|構の展示館で原子力|学した後、討論会では の中央制御室などを見 この日は、もんじゅ

で開いてきた。

東京、長野、京都など 計七十二人が参加し、 方から三十六人ずつの で日本で開催。日米双 ら今月下旬までの日程 る。今年は先月下旬か

た。 表敬訪問し、 訪れ、松崎晃司市長を 変えて討論会を開きな 時期に、両国で一年ご 日程で各地でテーマを とに開催。約一カ月の り、毎年夏休みのこの などが日米で学生を募 団法人国際教育振興会 に関する討論会を開い ディスカッションの参加 テーマに討論するパネル 者=敦賀市白木で 原子力の平和利用などを 日米学生会議は、 り かの学生らは聞きる させないことが大切 などの意見が出た。 鮮などを国際的に孤立 PTに関しては「北朝 マに英語で討論し、 止条約(NPT)や原 カッション。核拡散防 専門家三人を交えた 計五人がパネルディス 原子力機構の研究員ら 両国の学生一人ずつと 力の平和利用をテー 質疑応答もあっ

ている小浜市役所を バマ米大統領を応援 (立石智保) 学生らはオ 懇談し ▲『中日新聞』平成21年8月18日

終了後、

らこそ、核の重要な役割をふまえた上でのそれの社 会的影響の熟慮は日米学生会議メンバー皆にとって 非常に大きな意味を持っていただろうと思う。午後 は福井県小浜市に移動。市長からの挨拶とオバマ米 大統領の後姿のプリントされた小浜市伝統工芸の可 愛らしいお箸をいただいた。またバスに乗り込み宿 舎に移動。夜は各分科会、迫るファイナルフォーラ ムに向けて精を出した。 (西野緑)

# 8月18日(火) 京都フォーラム

日米学生会議の活動のまとめとなる京都フォーラ ムを一般公開で開催した。分科会でのこれまでの議 論の集大成を発表する場であるから、この日の主役 は参加者全員である。朝方まで準備していた眠さを こらえながら、それぞれはフォーラム会場で直前練 習を続けた。準備・運営も実行委員だけでなく参加 者全体で協力して行う姿に、一カ月間で培われた関 係性が垣間見えた。

#### 【第61回日米学生会議京都フォーラム開催概要】

日時: 2009年8月18日(火) 13:30-18:00

主催: 財団法人国際教育振興会

後援:京都府、京都府教育委員会、京都市、京都市 教育委員会、立命館大学、京都日米協会、京都

商工会議所、大学コンソーシアム京都

企画・運営:第61回日米学生会議実行委員会

会場:京都市国際交流会館

75年前の日米学生会議設立理念は、「世界の平和 は太平洋の平和にあり、太平洋の平和は日米間の平 和にある。その一翼を学生も担うべきである」とう たう。この理念を継承しつつ、私たちは次の段階へ、 すなわち日米の枠をこえた様々な問題にどう対処で きるのかを追及しようと試みている。本フォーラム では、簡単に答えが描けない問いへの学生からの答 えとして、1ヵ月にわたる議論を重ね、また日常生 活の中での発見をもとに練り上げた意見を発表す る。来場されるみなさんとの対話を通して、今後参 加者がさまざまな場で「対話と発信」を繰り返し、世 界の諸問題を解決する手がかりとするための第一歩 を踏み出す。

#### 【フォーラム内容】

フォーラムは同志社大学法学部村田晃嗣教授によ る基調講演で幕を開けた。村田教授は 「多極化す る世界での日米安全保障のゆくえ」というテーマで、 経済状況をふまえても、軍事・防衛状況をふまえて も、日米関係が重要な節目を迎えていることを指摘 Ltc.

続いて、参加者を代表し、Leah Flake、杉本友里、 大宮透、Jose Pulidoが東京・函館・長野・京都で の活動を紹介するスピーチを行った。その後、各分 科会が議論の成果を発表した。10分という限られた 時間ではあったが、ビデオやスライド、寸劇などを 駆使した興味深い内容であった。詳細は次章の各分 科会の項を参照されたい。

幕間には、京都学生祭典ダンスチームによるオリ ジナルダンス「京炎そでふれ」が披露された。学生同 士の連携を深める意味でも有意義であったと思われ る。

なお、本フォーラムでは、京都サイト開催にあた り大変お世話になった方々を代表して、京都国立国 際会館の天江様、京都府教育庁の宮野様にご挨拶を いただいた。

大ホールでのプログラムを終え、小さな会議室に 移動し交流会を行った。これは、来場者がそれぞれ 興味を惹かれる分科会のブースに行き発表内容を掘 り下げることのできる、自由な意見交換の場として 設定したものである。各分科会は、パンフレットな どを準備し、舞台では発表できなかった詳しい内容 を、高校生や大学生、OBらの質問に答える形で説 明していた。この日の最後には、JASC関係者を中 心としてレセプションが開かれた。衣袋聡、Amie Hornikによる会議全体を振り返るスピーチでは、 多くの参加者が自らの体験を振り返ることができ to

#### 【参加者日記】

約3週間にわたる分科会での議論の成果を発表す るファイナルフォーラム当日。連日の準備で疲れが たまりながらも、会議のクライマックスへ向け、や や興奮気味で会場へ出向いた。フォーラム開演前の

待機部屋では、大声でスクリプトを練習する者、人 目をはばからず寝る者、全力ではしゃぐ者などまち まちで、互いに素を出し合える信頼関係が出来上 がっていることを改めて感じた。フォーラムの分科 会発表は、3週間にわたった議論やフィールドトリッ プがようやくひとつの形となり、アウトプットされ たことが非常に感動的であった。発表以外にも、会 議の総括スピーチや最後のレセプションなど、会議 の終わりを思わせるコンテンツが多く、いまひとつ 実感は持てないものの、何となく物悲しい気持ちに させられた。しかし何よりも、ファイナルフォー ラムという大仕事を終えた後に感じた72人全員が繋 がった感覚、連帯感が私の中で強く印象に残ってい る。 (野津美由紀)



▲分科会の最終発表



▲村田教授による基調講演



▲ファイナルフォーラム終了後、日本側参加者による記念写真



▲ファイナルフォーラム終了後、アメリカ側参加者による記念写真

# 8月19日(水) 新実行委員選挙 茶道体験 宇多野 ユースホステルへ移動

ついに第62回日米学生会議実行委員が決まる日 がきた。新実行委員選挙である。候補者は、各々の 思いを参加者の前でスピーチし、スピーチ後には参 加者から鋭い質問が飛び交った。一人ひとりの勢意 や思いをひしひしと感じながら投票、夜の結果発表 を前に茶道体験へと移動した。裏千家茶道資料館に て、裏千系の講師であるブルース浜名氏のご厚意で 茶道のレクチャーをうけた。和菓子のいただきかた やお茶の点て方等、アメリカ側参加者はもちろん、 日本側参加者の中の多くにとっても初めての体験で あった。そして夜、第62回日米学生会議実行委員が 発表された。



▲茶道体験で作法を学ぶ

#### 【参加者日記】

18日のファイナルフォーラムが終わったのも束の 間、19日の午前中には第62回JASCのECを選ぶ選挙 が控えていた。多くの立候補者達が深夜から早朝に かけて、今年のECと相談し、考え込んでいた。自 分はECになってどうしたいのか、JASCにどう貢献 できるのか、自分で本当にいいのか、何を犠牲にす ることになるのか、どうして自分の名前がEC候補 者名簿に書かれたのか、それぞれがそれぞれの悩み を抱えていた。選挙前、最後まで考え込み、涙を流 す人もいた。一度立候補を取り下げたものの、再び 立候補をした人もいた。皆が非常に複雑な思いを抱 いていた。それだけJASCや応援してくれる仲間へ の強い想いがあったのだと思う。…限られた時間の 中で、心を決めた人たち全員に、心から感謝したい。 そしてその日の夜には、投票の結果が発表された。 それぞれが違った風に、投票の結果を受け止めたと 思う。選挙が終わり、いよいよJASCが終わってし まうのかととても寂しさを感じる夜でもあった。

(林藤彦)

# 8月20日(木) 新実行委員ミーティング、 自由観 光ツアー、 タレントショー/ファイナルリフレク ション

第62回新実行委員を除いた参加者は、各自、自由 に京都の町を楽しんだ。分科会や設定されたグルー プ編成といった枠を超え、自由に参加者同士が街に 繰り出し、最後の思い出を作ったに違いない。そし

て夕方は、全員で仁和寺の食事処にて夕食を食べ、 タレントショーを行った。歌にダンス、マジックや コント等、個性あふれるパフォーマンスを楽しんだ 後は61回会議を振り返るファイナルリフレクション である。ファイナルリフレクションが終わり宿に帰 ると、遅くまでIASCレターを書いたり、仲間と語 りあかしたりしながら最後の夜は更けていった。



▲日米コンビが歌を歌う!



▲参加者の隠れた才能に驚く!

# 8月21日(金) 第61回日米学生会議解散、 米国側参 加者帰国

本会議が終わり、第61回日米学生会議参加者が解 散する日である。飛行機の関係で先に出発しなけれ ばならない米国側参加者を、日本側参加者で見送る。 別れを惜しみながらも、かわらぬ友情を誓い合い会 議は終了した。

#### 【参加者日記】

ついに別れの日が来た。朝早くに空港へ向かうア メデリと彼ら彼女らを見送るジャパデリが、バス出 発の間際まで互いに言葉を交わし、ハグをした。多 くのデリたちが予想以上に涙した。

JASCerの大半は学部学生であり、本会議での約 1ヵ月間は感性豊かなデリたちにとって格別の時間 である。日本とアメリカから集まった72人もの学生 が、寝食をともにしながらディスカッションを重ね、 他愛もないおしゃべりに花を咲かせる経験はこの上 なく新鮮だ。それだけに、別れの切なさもまた鮮明 なのである。

4都市、8ヵ所に宿泊しながら共に過ごした夏を、 決して忘れることはないだろう。そうしみじみ感じ ながら、楽しい時間を共有してくれた仲間たちへの 感謝の気持ちが込み上げてきた。 (山本佳代)



▲別れの朝。別れを惜しむ。

#### サイトコーディネーター後記

誉田有里

この場を借りて、京都サイトの企画運営にご協力 いただき、力を貸してくださった全ての皆様に深く お礼を申し上げたい。京都サイトが開催できたの も、至らぬ点も多くあり、ご迷惑をおかけすること も多々ありながら、寛大な心で私たち京都サイト責 任者にご協力いただいた皆様がいたからである。

最終サイトとなる京都には、サイトの内容を企 画していく上で、たくさんの思い入れがあった。日 本の伝統文化を体験してもらいたい、文化体験のみ ならずアカデミックな側面においても何かできない だろうか、京都フォーラムで社会に確実に日米学生 会議の「落し物」をするにはどうしたらいいのか、そ れまでの会議で蓄積された疲労やストレスが蒸し暑 い天候と重なり、参加者全員の体調に負担が出ない ようにするにはどういったスケジュールの組み方が よいのか等、多くの思いが交錯した。第61回日米学 生会議参加者が京都に滞在する時期は、丁度お盆 と重なる時期であったにも関わらず、宿泊をはじ め、能鑑賞や茶道体験といった文化体験に、原子力 フォーラムや京都フォーラムの開催等、それらの思 いが実現までに至るまでには、実に多くの方の力添 えがあったとことを忘れないでほしい。

一年間、常に寛容な心で向き合ってくれた Rachel と John Michaelには何度も助けられた。 そ して、京都サイトをコーディネートするにあたり、 現地で走り回り頑張ってくれた小野には心から感謝 したい。三人に助けられたことは多くあり、本会議 中、見事なチームワークで動くことができたのも、 一年で培った互いへの信頼と思いやりがあったから だと思っている。本当にどうもありがとう。

小野 元

はじめに、第61回日米学生会議京都開催に際し、 多大なるご協力を賜りました関係者の皆様に、この 場をお借りして厚く御礼申し上げます。京都サイト の企画・運営は、第61回日米学生会議実行委員以外 の本当に多くの方々のご協力のおかげで成り立ちま した。特に一斉休暇中にも関わらず本会議宿泊施設 使用を許可してくださった立命館大学国際課の皆様 に深く感謝いたします。

本サイトの活動は、「京都」と「最終開催地」という 二つの要素を強く意識して計画されました。

まず、いかにして京都地方の特色を生かすのかが 大きな課題でした。本年度が日本開催であることか ら、訪問する日本の各地を米国側に紹介する意識は、 サイト計画上欠かせません。本年度はなるべく本物 の伝統文化にふれてほしいという思いから、能、茶 道、送り火などを企画しました。結果として単に米 国側への文化の紹介にととまらず、日本の参加者か

らも新鮮だったとの声がきかれたのは収穫でした。 国立京都国際会館の天江喜七郎館長、能を披露して くださった金剛様、茶道の解説をしてくださったブ ルース浜名様などに大変お世話になりました。 ま た、もんじゅ見学、原子力討論会では、関西が誇る 技術力の先端を見学し、環境やエネルギー、国際政 治の知見を深められました。この企画を一から共に 作り上げてくださった関西電力の梅田様、日本原子 力研究開発機構の北端様には感謝の気持ちでいっぱ いです。

もう一つ、「最終開催地」であることは、第61回会 議を総括し、それぞれの今後の生活や第62回会議 につなげていく役割を意味します。分科会は、京都 に入ってから連日準備に明け暮れ、京都フォーラム でその成果を発表しました。フォーラム内容をまと めるためにはこれまで以上に議論を尽くし、ときに 妥協する必要があり、参加者の顔には疲労の色が濃 くなっていきましたが、納得できる「発信」のために 「対話」を重ねる姿勢は、本年度のテーマを体現して いました。長時間にわたる学生発表にも関わらず フォーラムにきてくださった皆様方から終了後に多 くの質問や意見をいただき、参加者との間に新たな 「対話」が生まれたことにも感謝しています。フォー ラム後の参加者の笑顔が忘れられません。また、新 実行委員選挙やリフレクションでは、第61回会議に おける個人の総括を全体で共有することができたと 思います。

後援などをいただいて今回の企画が実施できたの

は、過去の会議の実績による部分も大きく、プログラム内容に関しても、気候やお盆との関係等で貴重なアドバイスをいただきました。實槻徹様、竹本秀人様、近年の京都実行委員には大変お世話になりました。辛抱強く見守ってくれ、常に協力的だったアメリカ側担当のJMDとRachel、夜行バスで京都まで出張してくれた松本や、ずっと支えてくれた誉田にも感謝しています。

私にとって、サイト準備の活動は、小さな作業が 運営上重要であることを理解する上で欠かせない経 験でした。また支援してくださる外部の方々とふれ あい、多くを学ぶことができる仕事でもありました。 支えてくださった方々からは、「いちいち感謝する 必要はない。自分はこの会議を支えたいと思って やっているのだし、若い世代がやりたいようにやれ ばいい」という激励をしばしばいただきました。義 務感からではなく、学生会議のために動いてくださ る方々の姿に何度も背中を押されたことが思い出さ れます。第61回ひとつでみれば、全く実績のない私 たちの活動に何らかの価値があると期待をかけてく ださることは、本当にありがたかったです。思い描 いた通りに準備が至らなかった点は数えきれないほ どあり、申し訳なさを感じます。しかし、支援して くださっていた皆様からは会議で学んだことを会議 後に生かしていくことを含めての期待をしていただ いていたのだと、前向きにとらえたいと思います。 最後に、本会議の活動に精一杯活動に取り組んでく れた参加者達に、心から感謝します。

# 第4章

分科会活動

地球市民教育68
国際開発と自立的発展75
一途上国と向き合う一
世界を動かす新興国81
―BRICsの台頭と日米―
世界の食糧安全保障90
一生産、流通、消費の再構築一
現代社会と健康 100
環境と持続可能な発展 107
公と私:公共の利益は個人の権利と両立
できるのか 115

# 地球市民教育

Educating a Global Citizenry: What is an ideal education for a globalizing society?

### 分科会メンバー

神馬光滋\*

飯沼瑶子

大宮透

中村梨紗

西野緑

Rachel Staum\*

Anthony Dowdell

Ikuno Naka

Katy Marshall

Wrenn Yennie

(\*はコーディネーターを示す)



## 分科会概要

グローバル化が進む日米の社会では、教育はしばしば他国と比較される。経済協力開発機構(OECD)が発表している「図表で見る教育」や、米Newsweek誌の「世界の大学ランキング」はその代表例である。教育は市民や国民としてのアイデンティティを形成する上で必要不可欠な役割を担い、時には社会変革の手段ともなる。また、国際化やIT化が進む中、教育の媒体や手法は変化を遂げてきた。しかし、地球上の市民が相互に依存しあう現代社会において、個人が市民や国民の枠を乗り越え、地球市民としてのアイデンティティ形成もできる教育内容になっているであろうか。

当分科会は地球市民教育についての議論を深め、 国際比較教育学などの視座も踏まえつつ、今後の教 育のあるべき姿を検討し、私たちの見解を社会に発 信していく。

# **Round Table Description**

In America and Japan, we often discuss education in terms of the nation--how are our

children performing compared to those of other nations? How can we educate children to become productive citizens of our nation? Indeed, education has always been considered one of the most powerful means of changing society and forming national identity; the Greek philosopher Diogenes said, "The foundation of every state isthe education of its youth." But in today's rapidly globalizing world, are our old ways of thinking about education sufficient? If not, what form should a "global education" take? Our roundtable will examine current issues in global education and identify potential improvements in our educational systems, focusing on both domestic and international issues and comparisons between the American and Japanese systems. Some of the specific issues we will address in our discussions include the conflict between internationalism and nationalism, foreign languages, multiculturalism, global levels of education and literacy, and barriers to education.

## 地球市民分科会物語

(はじまり)地球市民教育分科会。私たちの旅は、 シンクロニシティから始まった。米国開催の第60 回日米学生会議が幕を閉じる少し前、新任の第61回 日米学生会議実行委員会16名は翌年度の分科会決め を行っていた。新任実行委員以外がボストン・コモ ンズで最後の時間をたしなんでいる中、宿泊寮の一 室にこもっての実行委員会会議だったが、新しい何 かをチームで創る時の、あの独特の緊張と希望で溢 れていた。日本側8名、米国側8名の実行委員が互い に共通する関心から分科会パートナーを決めるのだ が、地球市民教育分科会は即座に決まった。価値観 や歴史観を基調とした「悲劇の記憶分~歴史認識と 教育の役割~」分科会出身のRachel Staum、そして、 「まずは知ること」を重要な価値観と位置づけた「マ イノリティと多文化社会」分科会出身の私が同時に 口にした言葉は、もちろん、"Education"であった。 お互いの分科会でいろいろ議論した結果、結局、世 界の諸問題の根本的解決を目指すにあたって、教育 の重要性からは目を背けることはできないだろう、 という単純なロジックであった。Rachelと私の間 に生まれたシンクロニシティ(意味のある偶然の一 致、共時性)を大事にし、実行委員会全員で設定し た会議理念に"Education"を当てはめた結果、世 界に目を向けるという文脈の中で地球市民教育と設 定されたことは自然の流れであった。

(暗中模索)このわくわく感を胸にRachelは宿泊 寮から数駅のハーバード大学へ、私は日本に帰還し た。ここから暗中模索とも言うべき、現実味を帯び た挑戦が始まった。だって、教育のことなんて、何 も知らない。しかし、私は地球市民教育に関する本 を読破し、専門家の話を聞きまくり、持論を持って、 その後出来る地球市民教育分科会の新しい仲間達と 未来を切り拓いていく。少なくとも、そのはずだっ た。実行委員としての会議準備業務も新しいことだ らけで、全てがぎりぎり。そんな中、分科会活動は 後回しになってしまった。Rachelとのメールも分 科会に関する内容は決して十分な量とは言えず、そ

のまま新しい仲間の選考に突入。決して人を選考で きるような立場ではないし、特に地球市民教育とい う分野においてはアマチュアもいいところであった が、地球市民教育分科会を志望してくれた、第61回 日米学生会議の潜在的参加者たちは皆可愛く、最終 的には日本側4名の参加者を選出した。飯沼瑶子・ 大宮透・中村梨紗・西野緑。彼らと第61回日米学生 会議を過ごせたことは、本当に何よりも、かけがえ のない財産だ。

(開眼)この旅に4人加わったことにより、視野が 拓けた。何よりも、皆が違うものを持っていた。飯 沼瑶子は率直に、天才である。右脳の発達が著しい と思われる。ダニエル・ピンク著『ハイ・コンセプ ト』から言葉を借りるが、「機能」だけでなく「デザ イン」、「議論」よりは「物語」、「個別」よりも「全体の 調和」、「論理」ではなく「共感」、「まじめ」だけでな く「遊び心」、「モノ」よりも「生きがい」。そんな人間 だ。大宮透も負けていない。東京大学工学部と聞く とあたかも理系だが、彼は専攻が都市計画。クリエ イティビティーが求められる専攻である(と思う)。 人間的魅力が先行する中で、その洞察力と思慮深さ は「半端ない」。常に対話に深みを与えてくれる存在 だ。中村梨紗、通称ボンちゃんは、ボンちゃんは、、 いろいろある。まず彼女は寮長だ。そして子供が好 き。すっごい好き。加えて、何よりもビートルズファ ンで、ずっと日本に住んでいながら、英語の発音が 完璧。もちろん、ビートルズ効果である。そんな彼 女も思考が深い。鋭い意見で議論に刺激を与えてく れた。最後に、西野緑。彼女はいわゆる、出来る女。 ケンタッキー・フライド・チキンの接客コンテスト 優勝というところから始まり、複数の学生団体で の活動経験。前提を疑い、本質をえぐる。更に、強 いのは言葉だけでなく、実際に行動するところ。分 科会への貢献は言うまでもない。尚、アメリカ側参 加者はこの後、しばらくしてから決定。Anthony Dowdell · Ikuno Naka · Katv Marshall · Wrenn Yennie。本会議までは電波上でしか交流できなかっ たが、彼らのインテリジェンスは既にバレバレで あった。

(再出発)アメリカ側参加者と日本で会えるまで

は、日本側参加者5名で事前準備活動に励んだ。一 発目は、5月30日(土)には教育フォーラム2009~新 しい教育のカタチ~に参加。藤原和博氏、鈴木寛氏、 船橋力氏をパネルに迎え、情報編集力の台頭とその 重要性が議論された。パネル曰く、情報編集力とは、 「正解のない問題」にアプローチする力である。すな わち、正解が一つとは限らない問題に対し、その環 境や状況に応じた納得できる答を導く力であり、そ のために、過去の経験や知識、技術のすべてを組み 合わせ、物事に関係性を見つける必要がある。パター ン思考という人もいるかもしれない。この知識を得 られただけでなく、分科会の日本側メンバーとして 初めて集まり、共に時間を過ごせたことがこのとき は重要であった。

6月10日(水)には、(財)国際ビジネスコミュニケー ション協会元専務理事・事務局長の松崎浩さんにお 話を伺う機会を頂けた。カフェに詳しい松崎さんに 素敵なカフェに連れていってもらい、教育の在り方 から社会問題まで多くを議論した。その中でもヒッ トしたのが、「原体験」。何か活動を始める原点、きっ かけ、更にはその活動を継続する理由にもなる原体 験の重要性と魅力。準備活動を通して得られた最大 の気づきであったことは間違いない。

さらに、翌週6月17日にはボンちゃんが母校の神 戸市立葺合高等学校、茶本先生を訪問。教育委員会 の現状を含む、現場の貴重な声を持って帰ってきて くれた。 6月20日(金)には日米学生会議全体で防衛 大学校を訪問。地球市民教育分科会は、防衛大学校 の学生と「愛国心」、「歴史教育」について議論。防衛 大学校の仕組みや教育に興味津々であった私たちは 質問攻めだったが、非常に有意義な議論を繰り広げ られた。6月22日(月)は、インターネットを使った グローバルリテラシー教育を行う早稲田大学の中野 先生にお話を伺う。中野先生のお話から持ち帰った ヒントから、教育におけるインターネットの可能性 に対する認識が急激に高まり、ITを軸にリサーチ を展開することにもなった。結果、ウェブ関連の本 や、シブヤ大学学長左京泰明氏の活動に魅了され、 訪問の機会も頂いた。左京氏からはシブヤ大学のハ イブリッドなモデルの魅力から、問題意識、未来予 想図までいるいるとお話頂き、教育におけるイン ターネットの可能性を再確認しただけでなく、教育 の従来の形態を(創造的に)破壊する「生徒は、先生 になれます」、「いつまでたっても卒業しない」モデ ルに大変刺激を受けた。というところで、準備活動 が幕を閉じると同時に、本会議に突入。

## 本会議

本会議とは、日米学生会議が日米両国の学生72名 で行われる、7月-8月にかけた約一ヶ月間の会議の ことである。準備活動や事後の発展を含めての日米 学生会議なので、一応定義しておいた。さて、本会 議では東京一函館一長野一京都と4サイト周りなが ら、地球市民教育を追及していったわけなのだが、 東京サイトコーディネーターであった私(神馬)は出 発点であった東京での活動を把握しきれていない。 その中途半端なスタートを言い訳に、会議を通じて 最高の集中力とパフォーマンスを発揮できなかった ことに大変反省している。そういう事情もあり、私 より全体像を掴んでいる分科会メンバーのまとめを 以下に掲載し、まとめとする。



Wrenn Yennie: Reflecting the Education Round Table

The Education roundtable discussed myriad topics concerning global education over the course of the conference. Initial discussions included a comparison of Japan and America's education systems from the elementary to college level and particularly a comparison of foreign language education and school admissions process. Delegates then individually led discussions on various topics including: globalization and education, education reform in Japan and the U.S., One Child Left Behind, gender inequality in education, and education conditions for Nikkei Brazilian immigrants and Korean immigrants in Japan. A summary of the roundtable's findings and activities can be found below.

#### American Education System

Currently in the United States and in Japan, education systems are in need of reform. In the United States, education administration is decentralized, 90 percent of funding lies with state and local governments. As a result, the quality of education you receive varies based on where you live and how much you earn. Moreover, the No Child Left Behind Act of 2001 penalizes schools with low math and reading scores. The effects of this law are twofold: first, states lower their standards for academic achievement, and second, programs are cut in order to prioritize math and reading. Gifted and talented programs, foreign language classes, art, history, and science education are often underfunded or cut entirely as a result. The once multi-faceted American education system has slowly been whittled down to cover only the most basic of subjects.

#### Japanese Education System

Education administration was centralized in pre-War Japan; however, the American occupation insisted on the decentralization of educational control. The Japanese subsequently recentralized the system under the Ministry of Education, thereby creating a far more uniform system than that of the United States. The

challenges faced in Japan are also more consistent due to a standardized curriculum and entrance exams. The result of the intensive preparation required for these exams is a general lack of interest in non-test related subjects. Certain skills such as spoken English are often ignored entirely. Moreover, there are few opportunities for Japanese students to express their own opinions in classroom discussions; this may lead to an overall lack of creativity among students. Japanese students also have limited exposure to foreign cultures due to Japan's own homogeneous nature. In fact, non-Japanese citizens are not even required to attend school.

#### Roundtable Activity

Over the course of the month, through research, discussion, and a visit to the Ministry of Education, the roundtable came to a greater understanding of the broad topic of global education. The issue of how global perspectives are represented in the classroom became a focal point of RT discussion. The concepts of mindset and skillset and how these two concepts contribute to an individual's global perspective became an enduring roundtable theme. In Nagano, the roundtable had the opportunity to meet with 6 high students and challenge them to consider global perspectives while employing their mindset and skillset. For the American delegates it was the first time to have the opportunity to interact with Japanese high school students and to hear student's opinions about Japan's current education system. The student's insight was invaluable and the discussion in Nagano ended up being the focus of the roundtable's final forum presentation and the concepts of mindset and skillset became a main theme of the education roundtable.

#### 【飯沼瑶子】

地球市民教育分科会は、分科会のメンバーそれ ぞれがこれまでに受けてきた教育について語り合 うことから始まった。公立に通った人、私立に 通った人、軍隊に所属していた人、学校に通わず Homeschoolingという形式で勉強をしていた人。 日本とアメリカという国の違いだけでなく、教育的 背景にも大きな違いがあり、このように全く異なる バックグラウンドを持った人たち同士で、地球市民 教育とはどのようなものか、どうすれば達成できる かを考えた一か月間で、私の中にいくつもの新しい 視点が出来たように感じる。

地球市民という言葉一つをとってもその捉え方は 様々で、世界の問題を自分のこととして捉えられる ような人を地球市民とするのか、それとも地球に住 む人々すべてを平等な存在とみなして地球市民とす るのかなど、定義をする過程にもメンバーの意見や 考え方の違いがよく表れた。

最終的に私たちの分科会は、国の違いなどに捉わ れることなく、多面的に物事を考えられるような人 を教育することが地球市民教育であると定義したう えで、長野高校の生徒に対して模擬授業を行った。 この模擬授業においては、真珠湾攻撃と原爆投下を 題材として取り上げ、同じ事件についてアメリカ側 視点で書かれた資料を提供されるグループと、日本 側視点で書かれた資料を提供されたグループでどの ような意見の違いが出るかを実験した。実際にアメ リカ人参加者を含めて行われた議論では、よく取り 上げられるこれらの事件について、お互い知らな かった事実が想像以上にあることに高校生のみなら ず、私たちも驚かされることになり、とても有意義 だった。

しかし、この模擬授業において私たちの試みは、 あくまで日本とアメリカという二つの国だけを取り 上げたものであったため、これら二国だけをもって 地球市民教育と言うことができるのかという課題を 残してはいる。とはいえ、歴史だけでなく、どのよ うな物事も語られるときは一面的であることばかり だ。この模擬授業を通して私たちは、そんな当たた り前な事実に目を向け、あえて多面的に考えをめぐ

らせてみようとするきっかけを作ることができたの ではないかと感じている。

この分科会に参加したことをきっかけに、近年ま すます声高に叫ばれるようになった国際化という言 葉についても考えるようになった。現在、私は大学 の国際化戦略の違いをテーマに、日本における留 学生数で一位二位を争う早稲田大学と立命館アジア 太平洋大学を調査対象として卒業論文を執筆中であ る。どちらの大学も「国際人」の育成といった理念を 掲げた教育を行っているが、経営的な意図との両立 に苦戦しているようにも感じる。日本の教育が今後 どのように世界と協同し、学生にどのような機会を 提供していくのかにも注目したい。



#### 【大宮透】

「今まで得たことがないような、素晴らしい経験 がしたい。」そんな思いで日米学生会議に応募し、迷 わず地球市民教育を志望した。日米の教育制度を単 純に比較することは出来ないし、どちらが良いとか 悪いとか、そういう単純な二元論だけには終わらせ たくない。そんな思いを持って本会議を迎えた。結 論から言ってしまえば、会議前に抱いていた思いと は裏腹に、自分の力不足から、1ヶ月のなかで思う ような結論を見出せなかった部分が大きい。せっか くメンバーにも恵まれた環境があったのに、それを 活かせなかったことは、今振り返っても、本当に悔 やまれる。

それでも、後悔ばかりではない。アメリカ側参加 者との議論の中で、何よりも一番大切なことは、「自 分の意見を持つこと」だと気づかされ、その意味で は自分に自信を持てた部分もあった。みんなで夜を 徹して準備した長野高校フィールドトリップでは、 参加者の高校生から非常に高い満足度と、達成感を 得ることが出来た。何よりも、かけがえのない収穫 は、最高のメンバーたちと濃密な時間を過ごせたこ 20

いつも「あのな、全然関係ないねんけど」から話を はじめる、陽気で笑顔が素敵な京都出身のムード メーカーよーこ、接客のプロであり、どこまでも負 けず嫌いで、チャレンジ精神旺盛なアクティブ人間 のみどり、なぜか毎回メールの最初に色んな国の挨 拶を付けてきて、いわゆる留学経験のない「純ジャ パ」なのに、めちゃくちゃ英語が上手な努力家ぼん ちゃん、クールかつ大胆で行動力があり、仕事が早 く、その落ち着いた印象や態度に何度も助けられ た我らが日本側リーダーのこーじ、頭脳明晰で都会 好き、マイペースで少しあきっぽい(笑)けど、知的 なことから下らないことまで、何でも話せるニュー ヨーカーのKaty、2つも年下なのに、議論が滞っ たり問題発生時には、率先してアメリカ側と日本側 の架け橋となってくれた、笑顔の可愛いIkuno、一 番好きな日本語は勿論「さけ!」(笑)、いつも陽気で 皆を笑わせていて、それでも、議論になれば真剣 な表情で自分の問題意識を発言するハワイアンの Tony、会えば「Toru-!」と気持ちのいい笑顔で話し かけてくれて、知識も人生経験も豊富、マラソンが 趣味の美人さんWrenn、そして、ユーモア溢れる 議論進行役で、どんなにシビアな状況でも必ず雰囲 気を和ませてくれる、源氏物語が大好きなアメリカ 側リーダーのRachel。たくさんの刺激と後悔、自 信を与えてくれたかけがえのないEducation RTの 仲間たちに、何よりも感謝したい。自分の限界を知 ることで、人はきっと成長できる。分科会で得られ た色々な感情は、今後の自分自身にとってかけがえ のない原体験となることは、間違いないだろう。

#### 【西野緑】

グローバリゼーションが進み、異文化の交わりが 増えつづけている現代において、地球市民教育とい うテーマが世界に目を向けようとする日米学生会議

の中に上がったことには大きな意義があったように 思う。私はこの"グローバリゼーション"という言葉 が、時に違いの認識を拒否するように安易に使われ る事があるように感じている。そんな中で真の意味 での地球市民とは一体何か。また、そのような地球 市民を育てるにあたって教育の担う役割は何か。同 分科会では様々なバックグラウンドを持つ学生と、 これらの問いに対する答えを模索しながらの議論を 行うことが出来た。

そもそもの私個人が地球市民教育を志望した理由 は"内なる国際化"のあるべき姿に対する問題意識か らだった。"グローバリゼーション"は経済的統合の 意味合いでよく使われるが、文化的観点から見たら それはまた違う意味合いを持つ。人の行き来が盛ん になればなるほど私たちは国境の内側の異文化を意 識し、その異文化との付き合い方を考えていかなけ ればならないだろう。文化的価値の尊重を考えた時 "郷にいっては郷に従え"の考え方は多少の危険性を はらんでいる。私は日米学生会議参加をきっかけに、 単一文化社会といわれる事の多い日本と、多文化社 会(マルティプルポット/サラダボール)と言われる アメリカを比較し、両国の現状と問題点について考 えRTペーパーの題材とした。このテーマに関して は、時間的制限や自らの語学力の問題もあり、あま り本会議中に議論することは出来なかったが、今後 さらに考えを深めていきたい自らのテーマとして、 今回の挑戦は決して無駄にはならなかったと思う。

本会議中の分科会全体としての軸は国や文化を超 えた相互理解にあった。そして、その相互理解を可 能にする二大要素として"マインドセット"、すなわ ち文化的知識や歴史認識、"スキルセット"、すなわ ち語学能力やコミュニケーション能力等が存在する と考えた。私たちはフィールドトリップの一環とし て長野高校の学生に協力してもらい、マインドセッ トとスキルセットの向上を目的としたディベート式 の模擬授業も行った。このプロジェクトを準備する 段階では、日米の学生の間でコミュニケーションが 上手くいかず四苦八苦しながら概念や目的、内容を 確認しあった事もあった。しかし、最終的にはなん とか形にしてビデオに収め、ファイナルフォーラム

においてその様子を報告することができた。

地球市民教育という大きなテーマのもとに集まっ た日米の学生で、1カ月間幾度も議論を重ねた分科 会での経験は非常に貴重なものであった。私たちが メインプロジェクトとして行った模擬授業は、もち ろん実験段階にあり、地球市民教育の完成版とは成 りえていない。しかし、国境を超えた絆や、長野高 校の生徒達の希望に満ちた笑顔は少なくとも大きな 成果として残すことができた。今後グローバリゼー ションは更に進み、地球は表情を変え続けていくだ ろうが、その中で、分科会活動中に巡らせた思いを 忘れずに、社会のあるべき姿、そして自らのあるべ き姿を追求しながら生活していきたいと思う。

# 分科会コーディネーター総括

シンクロニシティから始まった地球市民教育の 旅。多様性を体現していた地球市民教育分科会チー ムの出会い・衝突・融和・創出。ここでは、日米学 生会議全体と地球市民教育分科会に、少し違った角 度から考察を入れたいと思う。まず、「日米」として の日米「学生」会議。そして、もはや日米では世界の 課題は語れないということで、グローバルを志向し た私たち。分科会発足時にピンときた教育と、グロー バルの波に乗った上での地球市民教育。素晴らしい チーム活動であった。今年もう一回チャンスがあっ

たならば、地球市民教育でのリッチな経験を踏まえ て、社会的企業をテーマにするであろう。

ここで、後世の日米学生会議参加者に伝えたいこ とがある。テーマの専門家になって、課題に対して ソリューションを出すのは、日米学生会議の目的で はない。どうか、同じ時間があったならば、知識を 詰め込むことよりも、一緒に時間を過ごし、議論や 対話をすることに時間を使ってもらいたい。もちろ ん、最低限レベルの知識は必要だけど、対話を通じ てお互いの断片的な知識を共有することもできるだ ろう。そして、何が一番面白いかって、本質をえぐ る議論や対話を通じた洞察である。また、私は会議 後に知った対話手法だが、ワールド・カフェも是非 取り入れてみたら面白いと思う。断片的に説明をす ると、ワールド・カフェは心地の良い場創りに重き を置き、相手の話を本当に聞くスタイルだ。大学を 卒業してからではできない議論や対話、またそこか ら生まれる新しい何かがあると思う。考察をすると 宣言したところ、全くまとまりのない、流れる文章 になってしまった上に、とても総括と言えるような ものではないが、これで、終わりとする。

(神馬光滋)

ありがとう。



【地球市民教育分科会】

# 国際開発と自立的発展 -途上国と向き合う-

~ International Development: Searching For Real Solutions ~

# 分科会メンバー

誉田有里\* 笹岡 祐衣 谷原 英利 徳地 宜子 中村 誠一郎 Fausia Mahama\* Jose Miguel Pulido Quvnh Tran Kelvin Ho Cassandra Stephenson (\*はコーディネーターを示す)



# 分科会概要

先進国と途上国の関係は、様々な視点から検討さ れなければならない。貧困や暴力、低就学率、男尊 女卑やエイズなど、途上国には発展を妨げる数多く の問題が存在する。これらの問題を解決すべく、先 進国や国際機関、NGOなど様々なアクターが国際 協力や支援活動を行っているなか、途上国とアク ターはどのような相互関係を持つべきなのだろう か。当分科会では、途上国で自立的な発展を促すた め、各アクターがこれらの活動に取り組む際に直面 する困難、そしてその困難の背後にある問題につい て考えていく。国際政治における途上国のプレゼン ス、途上国内の社会問題や汚職、政治的不安定、植 民地を経験した歴史的背景など、様々な視点から国 際開発問題を考えたい。途上国問題に興味と問題意 識を持つ、様々な学部の学生から参加を期待したい。

# 事前活動

開発という言葉は多様な意味を持つ。実際春合宿 でもメンバーがイメージする開発は様々だった。そ のため分科会内で開発についてある程度整理する必

要があるということになり、RTペーパーを書く前 に分科会の核を成す開発とはどのようなものかを各 自大学の教授に尋ね、自分なりの開発の定義を探る ことになった。その後RTペーパー作成に向け、事 前活動を行うことになった。私は学部で開発を専門 にしておられる教授にお話を伺った。そこから、開 発とは個人、団体、国家が長期に自立していくため のプロセスであるという教授の言葉が印象に残り、 RTペーパーは自立を促す開発について書くことに 決めた。それがUNHCRによる難民支援だった。テー マが決まればアメリカや難民と名の付く講演会や ワークショップに参加したり、UNHCRと共にアフ ガン難民支援をしていたガールスカウトの人にお話 を伺いに行ったりした。このRTは各自が定めたテー マが様々であったこと、メンバーが関東・関西に住 んでいたことから個人で行う事前活動が多かった。

日米学生会議を成長の機会にしたいと考えていた 私は、なるべく多くの人の話を聞き、自分なりの意 見、視点を持とうと考えていた。京都を中心に大阪、 神戸など関西圏を短い期間に何回も訪れた。その結 果、以前より知識が深まったのはもちろんだが、自

#### 第4章 分科会活動

分で計画を立てたり、アポントメントを取ったりと、 これから社会に出るための大切なスキルも学ぶこと ができた。今から振り返ると、もう少し事前活動に 行けたかもしれないという気持ちはあるが、自分な りに頑張ることができたと思う。 (笹岡祐衣)

#### 1. 春合宿

春合宿は初めてメンバーとの顔合わせの機会でも あった。学年も専攻も異なるメンバーではあるが、 国際開発に対する思いや問題意識は皆熱く、これか ら始まる事前活動に期待がうまれた。自己紹介を終 えた後、さっそく分科会の方向性について話し合っ た。分科会のテーマが広すぎるのではないかという 共通の問題意識のもと、議論をどのような方向に 持っていくのか、そのためにはどういった事前活動 が適しているのか等、今後の分科会活動の軸を定め ていくことしにした。結果、国際開発という問題に 対し、4つの異なるアクターからアプローチしてい くことで合意し、アメリカ側に提案することになっ た。 4つのアクターとは、政府、国際機関、NGO そしてビジネスである。アクターごとに担当を振り 分け、各自がそのアクターの即したテーマでRTペー パーを書くことになった。





#### 2. 防衛大学校訪問

防衛大学校の学生との議論は、非常に興味深いも のだった。私達は分科会単位で防衛大学校の学生た ちと話し合った。憲法9条の政府解釈と自衛隊の存 在についてや、防衛庁から防衛省へと変わったこと に伴う自衛隊の位置づけの変化などがその内容であ り、また私が海上保安大学校の学生ということもあ り、海上自衛隊と海上保安庁の協力関係についても 意見交換を行った。

一般的な大学生とは異なった環境に身をおき、将 来幹部自衛官となる彼らと話し合う機会を得られた ことは、とても有意義であったと私は感じている。 ソマリア沖の海賊対策で、自衛隊の海外派遣が取り ざたされてから間もない時期の防衛大学校訪問だっ たが、まさにそういった現場へいつか赴くかもしれ ない立場にいる彼らの言葉には、感じるものが多々 あった。

あくまでツールである自分達は、国民の意思決定 に従って最大限の努力をするだけ、といった言葉を 耳にしたときには、驚いてしまった。それは彼らが、 彼ら自身の立場を本当に深く理解していればこそ出 てきた言葉であると思う。

今回の経験は、自衛隊の抱える問題、日本が安全 保障の面でずっと抱えてきた問題を再考する良い機



▲議論の様子



▲記念に一枚

会となった。その当事者となるであろう学生たちの 生の声を聞き、自分の考えを投げかけ、短い時間で はあったが交流したことは大きな意味がある貴重な 事だと確信している。今回、通常の課業時間であっ たにも関わらず私達と交流してくれた、防衛大学校 の学生方に感謝を述べて終る。(中村誠一郎)

# 本会議

本会議 分科会セッション:

- ●各自のRTペーパーに即したディスカッション
  - An overview of aid (Cassandra)
  - Human right in Burma (Hidetoshi)
  - Sex trafficking in Southeast Asia (Quvnh)
  - Think the new way of aid ~ Refugees and UNHCR ~ (Yui)
  - NGO's and Small Arms Trade in South Asia (Jose)
  - International Development focus on NGOs (Seiichiro)
  - Rethinking Traditional Health Care: Alternative Solutions to Medical Brain Drain in Sub-Saharan Africa (Kelvin)
  - Resource Business and Development in Africa (Yoshiko)
  - ■地球市民教育分科会との合同ディスカッショ
  - ■医療と健康分科会との合同ディスカッション

本会議では4週間掛けて、4つのサイトを回った。 その中で、分科会テーマに関わらず、日米関係の 将来からイカの繁殖まで、正に様々な内容のレク チャーを聞いた。また、日本の歴史から、日米の恋 愛事情の違いやハリーポッターまで、日夜議論に明 け暮れた。分科会では、各自が事前に書いたペーパー に基づいてプレゼンをし、知識を共有した。そのあ と、本会議の集大成となる京都サイトでのファイナ ルフォーラムに向けて準備をした。開発のあまり一 般化することができないという特殊性に鑑み、我々 はファイナルフォーラムでは広く浅く開発について 語るのではなく、ある国を選んで、根本にある問題

をいくつかに分け、それぞれがどうそれぞれに関連 し、特にどうその中でも最重要な貧困という問題に つながっているのかについてプレゼンテーションを 準備した。我々は、深刻な問題を抱える開発途上国 の典型的な特徴を持っているフィリピンを対象国に 選んだ。また、ファイナルフォーラムのメッセージ 性についても我々は特に注意を払った。即ち、今回 のファイナルフォーラムのプレゼンテーションが単 なる知識のお披露目に終わることなく、何か聴きに 来る人の動力になるようなもの、何か未来につなげ るものを提示したいと考えていた。

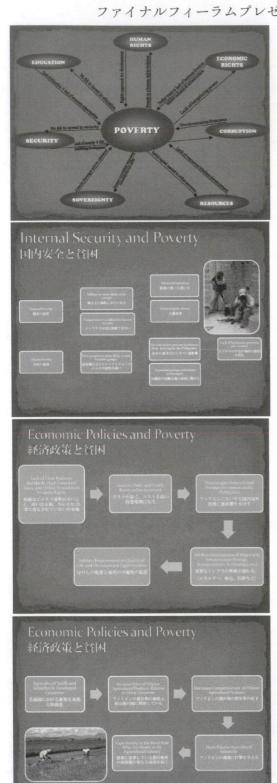
そこで、途上国向けのマイクロファイナンス、つ まり小さいビジネスのスタートアップ資金となるよ うな小口融資を行っているKIVAという団体に目を つけた。我々はKIVAに登録している人々に融資す るための基金のようなものを作り、それに対しファ イナルフォーラム会場で募金を募った。また、開発 に興味をもっている人のために、開発についての基 礎知識や、参考になるメールマガジン、開発を仕事 としている職業の紹介を内容としたパンフレットも 作成した。本会議では様々なことを様々な視点から 考える機会が与えられた。しかし、何よりも大切な のは、この一ヶ月の本会議を通して、我々は全く違 う人生を歩み、全く違う文化背景を持ったかけがえ のない友人を多数得たことであろう。こうした人と 人との深い繋がりこそ、これからの日米、そして世 界の発展につながるものであると信じている。

(徳地宜子)

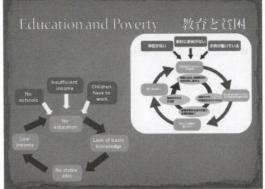


#### 第4章 分科会活動

# ファイナルフィーラムプレゼンテーションよりいくつか抜粋:











# 分科会参加者の声

#### 【笹岡祐衣】

テーマが広すぎたというのが分科会に対する率直 な感想である。これには2つの面がある。1つは広す ぎたために議論が上手くいかなかったというマイナ スな側面で、1つは広すぎたことで開発に関する様々 な考えを聞くことが出来たというプラスな側面であ る。前者については、私の知識不足、英語の能力不 足のせいもあり、聞きなれない単語が飛び交う議論 に参加するのはなかなか難しかった。私自身のRT ペーパーについて話す際も同様で、あまり活発な議 論がみられなかった。それがすごく残念だった。後 者については8人が8通りの視点でRTペーパーを書 いていたため、視野が広がった。私が考えもしなかっ たような問題、途上国における頭脳流出を取り上げ ているメンバーもいたのには驚いた。この経験は今 後学部で勉強を続けていく上でも貴重なものになる と思う。

議論を重ね、ファイナルフォーラムに向けて準 備をする段階になると、何をどのように7分内でま とめるかという問題が出てきた。8つのテーマを全 て平等に取り上げる事は不可能であったし、観客を 意識すると専門的な言葉を多用するのもよくないと 思われたからだ。その結果、日本ともアメリカとも 関係の深いフィリピンを取り上げることになった。 それはよかったのだが、発表のまとめがインパクト に欠けるものになってしまい、事前学習と1ヵ月の 議論の成果を100%出したとは言い難いものになっ てしまった。後悔が残る分科会だったが、議論だけ でなく、様々な場でRTメンバーとは交流を深める ことができたと思う。

#### 【徳地宜子】

分科会活動ではその目的の共有について根本的な 問題があったと感じる。分科会が何を目指し、どこ に進んでいくのかについて日本側、アメリカ側関わ らず、共有がしっかりとなされていなかった。即ち、 前半のペーパー内容の共有と、後半のファイナル フォーラムプロジェクトに内容の一貫性がなく、ど ちらも比較的浅いもので終わってしまった印象があ る。個々のペーパー内容があまりにもかけ離れすぎ て、事前知識の欠如が建設的な質問や、議論が行わ れなかった一因と感じる。また、ファイナルフォー ラムを本会議全体の集大成と位置づけるのであれ ば、春合宿の時点でそれについて話し合い、一ヶ月 の本会議を総括する形でなければならないとも思 う。

#### 【中村誠一郎】

日米学生会議の分科会での活動は、私を大きく前 進させたと思っている。

私は事前活動で、他大学の教授から日本が抱える 開発分野での問題点を伺い、また国際開発NGOの 職員の方からは、主に教育分野での国際開発の現状 を伺った。また初めて国連大学を訪れ、UNHCRの 主催するフォーラムに参加し、難民関連の様々なト ピックにも触れた。

本会議が始まってからは、開発におけるたくさん の知識をもつメンバーに恵まれたことで、自分ひと りでは決して思いつかなかっただろうアイデアを数 多く得る事ができた。また、議論のスキルが高いメ ンバーからは、会議を進める方法について学ぶこと が出来た。そういったこともあり、出会った人から 得られたものが多かった。

反省すべき点も多くあった。

本会議が始まる前にメンバー間の連絡をもっと密に 取るべきであったと強く思う。私達の分科会では、 事前活動は個別に進められたのだが、そのフィード バックにもっと力を注ぐべきであったことも否めな い。本会議が始まる段階で、参加者同士が共有して いた情報が不足していたように思う。個々に進めて きた活動は、クオリティとしては十分であったにも かかわらず、活かしきれなかったことが残念である。 当事者意識の不足から起こったことのように思う。 これも円滑に会議を進めるということ、より満足度 の高い目標を達成するということに関して、とても いい勉強になった。

個人的には、更に多くの反省点が挙がった。事前 準備の段階で私が努力すべきであったことの半分も

達成できたか自信を持つことができない。この点に 関しては、私が分科会に対して貢献できた事が少な かったこともあり、会議が終った今、貴重な成長の 機会を活かしきれなかったのではないか、と深く反 省しているところでもある。

とはいえ、事前活動を含めた分科会活動を通じて、 私は様々な人と出会い、今まで訪れることのなかっ た場所を訪れ、数多くの貴重な経験をした。このこ とは、今後私があらゆることを選択していくときに、 よい判断を下すことの助けになるだろうと確信して いるし、そうでなければならないとも感じている。

手放しで喜べる結果ではなかったと思うが、次の ステップを明確にすることの出来た、非常に有意義 なものだった。

# 分科会コーディネーター総括

事前活動から本会議が終わるまで、強く感じたこ とがある。それは「共有」することの難しさだ。問題 意識や議論の方向性、個人の意見等を、自分だけが 理解するのではなく、全員が共有している状態にす ることは想像以上に難しかった。結果として、分科 会全体として何を問題意識としてこの分科会で議論 をしていくのか、分科会全体としての問題意識や、 この分科会でどういったことを成し遂げたいのか、 分科会全体のビジョンが曖昧になり混乱してしまっ たように思う。

それでは何故「共有」がうまくいかなかったのか、 それには様々な要因があるだろう。主に2つ挙げた い。コミュニケーション、そして当事者意識であ る。ここで意味するコミュニケーションは幅広い。 分科会責任者として、分科会のあり方やファイナル フォーラムの位置づけ等をきちんと説明するとい う、説明という行為も含めるし、自分の抱えている 問題意識や疑問を相手が理解するまで伝える、伝達 という行為も含める。共有されることをただ待つの ではなく、共有しよう、共有したい、という自発的 な意識があれば、いかに伝えるか、どうすればいい のか、という次につながる思考へと繋がっていくよ うに思えるのだ。これは二点目の当事者意識にもつ ながってくるが、共有しようと思うかどうかが重要 なのであろう。

ここまで実に批判的なことしか述べておらず、分 科会について批判しかないように思われるかもしれ ない。しかし決してそうではない。真剣な時とはじ ける時のオンとオフがはっきりとし、常に問題の本 質を見抜こうと思考を巡らせる、実に頭の切れるメ ンバーとは、分科会中も実にたくさん笑いあった。 また、本会議が始まって間もない一回目の分科会の あと、皆が言葉の壁の存在を認識し、少し焦りを覚 えていたことがあった。しかし、次の分科会には、 話すペースを落とし、シンプルな文と単語を用いな がら説明、皆が理解できているか確認しながら進め て話していくアメリカ側と、分からないところは分 かるまで説明を求め、積極的に発言する日本側の、 双方の変化に感動したこともある。「共有」するため に、双方が変化していくのを感じながら、私自身助 けられたことも多くあった。新ためて感謝したい。

(營田有里)

# 世界を動かす新興国 -BRICsの台頭と日米-

Globalizing Economies: The Rise of BRICs in Relation to Japan and U.S.

# 分科会メンバー 竹内 友理\* 安藤 歩美

衣袋 聡

林 藤彦

野津 美由紀

Jon-Michael Durkin\*

Alisa Modica

**Emily Rath** 

Naoki John Yoshida

Michelle Arguelles

(\*はコーディネーターを示す)



## 分科会の趣旨

世界経済の勢力地図は今、変化の渦中にある。以 前は「第三世界」とみなされることもあった新興諸国 が近年急速に発展しており、ポスト冷戦の米国一極 集中型パワーバランスも新しい台頭勢力の影響を受 けて変わりつつある。中でも「BRICs」の総称で知ら れるブラジル、ロシア、インド、中国の4国は30年 後にはGDP合計でG6を追い抜き、40年後のGDPラ ンキングでは中・米・印・日・伯・露の順で、日米 と並んで上位6ヶ国を占めるとまで言われている。

当分科会では4カ国で世界の陸地の30%、世界人 口の42.5%を占めるBRICs諸国の成長の今後の趨 勢、及びそれが世界経済、とりわけ現在主要経済大 国である日米両国に対してもつ意味合いを吟味す る。また、資源枯渇、環境保全、格差、投資、国際 的な政治交渉など様々な観点から躍動するBRICs の可能性と課題について幅広く検討することで日米 の枠組みだけでは語れなくなっている21世紀の世界 における、新しい共生のあり方を探究したい。

# 事前活動

事前活動として、まずこれからBRICsについて 議論するにあたり、BRICs各国の基本的知識を得 るためリサーチをした。日本側参加者とアメリカ側 参加者が二人一組でペアとなり、一国の行政や産業 構造、外資の状況、日米との関係やカントリーリス クについて調査して各自レポートを作成し、情報を 全員で共有した。6月に行われた防衛大学校生との ディスカッションでは、議題を「中国の台頭と日米 関係」とし、BRICsの中でも最も成長が予想されて いる中国に焦点を当て、安全保障、経済的相互依存、 歴史認識問題など多角的な視点から、日米はこれ から台頭する中国とどう付き合っていくべきかにつ いて活発な議論を行った。また本会議前の知識の充 実をはかるため、環境、エネルギー、ビジネスなど BRICsに関するさまざまな諸問題についての論文 を全員が執筆し、各自10分程度のプレゼンテーショ ンを作成した。日本側とアメリカ側の参加者の意見 交換や意見の刷り合わせは本会議直前までメールや ウェブ会議を通じて定期的に行われ、本会議におけ る議論の方向性や、本会議で何を達成したいのかな



▲事前勉強の一環として行った国別リサーチからの抜粋。事前にリサーチ項目を定めておくことで各国の状況の大枠について全員で 共通認識をもつことができた。内容だけでなくプレゼンテーションも図表等を交えて非常に分かりやすく、効果的だった。 (左側は中国、右側はインドについて)

どについて討論し、準備を進めていった。

#### 【事前論文】

全員での話し合いに基づき、①環境/サステナビリ ティ、②ビジネス/企業倫理、③国際関係/安全保 障、④情報通信技術という4つのテーマを軸に、各 自事前論文をまとめた。

以下、各メンバーの事前論文の概要。

#### ●安藤歩美

本会議前の事前リサーチとして、BRICsの成長 と地球温暖化問題についての論文を書いた。これか らBRICs諸国の急激な経済成長により世界が直面 する一つの大きな課題が、地球温暖化問題である。 BRICs四カ国を合わせたCO2排出量は、2025年に は世界全体の排出量の32%を占めるとも言われ、今 後地球温暖化問題の解決においてこれらの国々の協 力は不可欠となる。しかしながらBRICs諸国は地球 温暖化問題について消極的な姿勢を貫いており、そ の最たる国際的枠組みである京都議定書においても 殆ど削減義務を負っていないのが現状である。よっ て我々はこれからのBRICsの台頭に伴い、BRICs 諸国をいかに新たな国際的枠組みに取り込み、地球 温暖化問題に関与させるか、という大きな課題を今 まさに考えなくてはならない。一つの解決策として、 温暖化への取り組みが必ずしも経済発展を阻害する ものではないことを途上国に示す必要があろう。例 えば日本にはオイルショック以降目覚ましく省エネ 技術を発達させてきた経験がある。こうした省エネ 技術を途上国に積極的に援助することで、経済発展 にブレーキをかけない形での温暖化対策が可能であ ることを提示し、BRICsの温暖化対策への関与を 促していく必要があろう。

#### ●衣袋聡

本会議を前に「日本企業はBRICsにおけるビジネ スに注目している」という、私達の中で漠然と共有 されている意識を、より実証的に示された具体的な データとしておくことで本会議における議論が円滑 に進むだろうと考えた。

先行研究では英国の地理学者Peter Dickenが企業 の国際化には大きく分けて市場を狙ったものと、進 出先の資産(安い労働力や豊富な資本)を狙ったもの の2つがあると指摘していた。そこで、2008年度分 の日本の代表的(TOPIX Core 30を構成する30社)の アニュアルレポートを分析し、BRICsにおけるビ ジネスに関する記述を抽出し、日本の代表的企業は BRICsをどう捉えているか整理した。

その結果、分析対象企業においては全てではな いが大部分の企業がアニュアルレポートの中で BRICsのビジネス機会について言及していること、 また、日本の企業もBRICsへの進出にあたっては、 Dickenの理論が示す2つの動機に則っていることが 分かった。またこの動機は製造業・非製造業によっ て異なり、一部の産業ではBRICsを必ずしもビジ ネス機会として言及していない例もあることが分 かった。

#### ●野津美由紀

リサーチペーパーでは、ICT (Information

Communication Technology) 産業に焦点をあて、 BRICsの中でもとりわけ中国とインドにおいて 発展している要因を探った。結果、両国に共通して、 「政府による長期的な投資」と「シリコンバレーとの つながり」の二つの要素が産業の成長に大きく貢献 したことが分かった。中国政府は70年代後半より、 インド政府に至っては50年代という早い時期から リサーチ基金設立等を通して計画的な投資を行って いる。また、両国からの移民として先進国、特に米 国にて教育を受けた者の多くがホスト国のICT産業 で就労する傾向があり、例えば、シリコンバレーに おける移民労働者のうち、中国人とインド人の比率 は抜きん出ている。ホスト国で得た技術や人的つな がりを活かして母国で起業する者が多く、そういっ た人材が両国のICT産業の発展に大きく寄与したと 考えられる。

#### ●林藤彦

経済の急速な発展に伴うエネルギー需要の急増 と、原油の海外依存度の高まりを受け、中国政府は 自国のエネルギー安全保障を向上させるため奔走し ている。その戦略は、大きく分け、十分な供給量の 確保、適正価格の維持、輸送ルートの確保の3つに 集約される。

十分な供給量の確保:原油の安定的な供給なくして、中国共産党の至上命題である高い経済成長を実現することは出来ない。このため、中国政府は「走出去」(外に出る)戦略を打ち出し、原油供給量の拡大と、供給源の多元化のため、アフリカや中東地域において活発な動きを見せている。

適正価格の維持:原油価格の高騰は中国社会の不 安定化につながりかねず、政府は補助金を通じ価格 を安価に抑えようとしているが、急激な原油価格の 高騰は財政当局を悩ませている。

輸送ルートの確保:約80%もの輸入原油がマラッカ海峡を通過するにも関わらず、中国はその輸送の安全を米軍に大きく依存している。有事の際の米軍による海上封鎖に対応するため、中国政府はパイプライン敷設による輸送ルートの多元化や抑止力としての海軍増強を急いでいる。

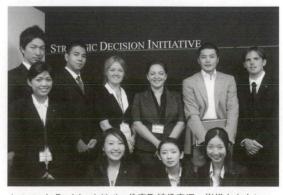
一見綿密に計画された国家プロジェクトの様に映る中国のエネルギー政策であるが、実際のところは、中国石油企業の市場原理に基づいた企業戦略の延長線上にあるにすぎない場合も多い。また、イランやサウジアラビアを巡っては、中国政府は自国のエネルギー安全保障よりも米国との協調を優先している。このような状況を考えれば、ユノカル買収の際に沸き起こった様な米国の中国に対する感情的反応は好ましいものとは言えず、むしろ、米国は中国の国内課題を踏まえ、中国とエネルギー分野においてさらなる協力を進めていく必要がある。

#### 本会議活動

#### Strategic Decision Initiative訪問

私たちは分科会最初のフィールドトリップとして、新興国市場のリサーチ会社、SDIを訪問する機会に恵まれ、代表取締役の森辺一樹様よりお話を頂いた。会社の各種サービス概要をお話頂いたあと、日本企業の新興国マーケットへの参入の現状を米国との比較を交えてお教え頂いた。海外にモノを売ることに関して、日本は欧米より10年遅れている状態であるとのご指摘が印象的であった。森部様は、その理由の一つとして、日本企業のリサーチの甘さ、現地化への消極性を挙げられ、現地化の大切さを認識することができた。

森辺様のお話より、日米間で新興国マーケットへ の進出状況に違いは見られるものの、両国にとって 現地化が成功の鍵であると学べたことで、分科会の



▲strategic Decision Initiative代表取締役森辺一樹様とともに

#### 第4章 分科会活動

方向性を定めることができた。実際にマーケット調 **査に携わっておられる方であるからこそ伺えるお話** が多々あり、新興国に対する興味がより一層深まっ たと同時に、私たちのその後の議論に大きな影響を 与えて下さった。 (野津美由紀)

#### 野村総合研究所 岩垂好彦様訪問

企業のグローバル戦略を中心に幅広く研究をされ ているNRI研究創発センター兼グローバル戦略コン サルティング2部の岩垂好彦上級コンサルタントよ りお話を頂いた。

具体的には精通していらっしゃるインドにおける 外国企業進出事情を例にとりながら、民族衣装を洗 濯する必要があるため洗濯機の通常と比べ優しく洗 浄ができるような設定を設けるなど適切に商品を現 地文化に合わせて『ローカライズ』することの重要性 について教えて下さった。また、企業が他国進出を 行う上で一般的に考慮しなければならないソブリン (カントリー)リスクやその他ビジネスリスク等諸リ スクの整理を行った上で、多くの日本企業が新興国 においても先進国同様の高品質商品を提供し続けよ うとするがゆえに発生してしまいがちな現地ニーズ との不均衡や、日本企業の一般的傾向として挙げら れるR&D国際化への消極性により新興国進出にお いて競争不利な状況におかれている可能性があるこ と等についてもご指摘を頂いた。

当訪問では新興国における日本企業・米国企業の 進出方法における相違点について考えることも出来 た。振り返ってみればここで岩垂様に伺ったお話を 基に行われた事後ディスカッションが後の私たちの ファイナルプロジェクト回想へと直接繋がっていっ たように思える。御多忙中のところ私達のためにお 話をして下さった岩垂様、及びこのような機会を設 定して下さったコーポレートコミュニケーション部 の墨屋様、小原様へこの場を借りて厚く御礼申し上 げたい。 (竹内友理)

#### 日本貿易振興機構(JETRO)アジア経済研究所訪問

2009年8月2日、私たちは三尾寿幸様からブラジ ルの金融リスクについて伺うため、IDE JETRO (Institute of Developing Economies, JETRO)を訪 れた。

三尾様は、ブラジルの金融リスクについてお話を して下さる前に、経済を専攻している学生ばかりで ない私たちに配慮して下さり、まず非常に丁寧に基 本的な通貨システムや金融政策のお話をして下さっ た。とりわけ、ブラジルがハイパーインフレーショ ンに苦しんだ経緯を踏まえ、インフレーションが起 こりうる要因分析や、それに対して政府がとりうる 政策について説明をして下さった。

そしてブラジルについては、1994年のレアル・プ ラン導入後、ブラジルがいかに慢性インフレを断ち、 通貨価値への信頼を取り戻していったのかについて 教えて頂いた。また、ブラジルの最大の課題であっ た公共部門の赤字体質が改善し、それに伴い巨額の 政府負債が徐々に減少し、とりわけ2004年以降政府



▲野村総合研究所 岩垂好彦コンサルタントとともに



▲IDE-JETRO 三尾寿幸様とともに

財政が順調に健全化している状況から、ブラジルの 金融リスクは相当程度低下したといえるというアド バイスを頂くことが出来た。

その後のRTの活動において、ブラジルの金融リ スクについては何度も議論が交わされたが、その都 度、三尾様による貴重な講義が大変大きな助けと なった。日曜日にも関わらず、わざわざ庁舎へと出 向いて下さり、丁寧にお話をして下さった三尾様に 対し、心より御礼申し上げたい。 (林藤彦)

#### 経済産業省訪問

東京サイトにおいて、私たちは経済産業省を訪問 した。経済産業省では岡本様、石川様のお二方に、 主に地球温暖化問題に対する日本の取り組みと国際 交渉の現状についてお話を伺った。

地球温暖化問題に関する交渉はBRICsをはじめ とする途上国と先進国の意見対立により難航してい るが、これから新たな国際的枠組みを創設するにあ たりこれら途上国の参加は不可欠なものとなる。お 話の中では日本が現在BRICs諸国、特に中国に温 暖化対策における多様な技術協力を行っていること を説明して下さり、日米が今後BRICsにどのよう な協力を行い、それによりどのように国際的枠組み に取り込んでいけるかを考える上で非常によい示唆 を与えて頂いた。また温暖化対策に不可欠な日本の 技術革新についてもお話を頂き、将来経済的地位が 低下し少子高齢化の進んだ日本が、どのようにその 技術力を活かして国際競争力を保っていけるか、そ

の戦略と課題について深い洞察と鋭い視点から説明 して下さった。

BRICsが台頭し、日本経済が大きく後退すると いわれる将来において、日本はどのようにBRICs と付き合い、国際社会においてどのような地位を占 めるべきであるのか。経済産業省への訪問は、私た ちの分科会の核となるこの問題を考える上で大きな 示唆を与えてくれた。貴重な機会をいただき、また 私たちの質問にも丁寧にお答え下さった両氏に、感 謝を申し上げたい。 (安藤歩美)

# ファイナルプロジェクト プロジェクト構想

東京サイトでのフィールドトリップを参考に、私た ちは、日米とBRICsのWin-Win Relationsを構 築しやすいビジネスに焦点を絞っていった。今後大 きなマーケットとなるBRICsへの進出に成功す ることは、日米企業にとってもプラスであり、製品 やサービスを享受するBRICs側にもプラスであ る。議論では、Localization、つまり製品の形態か ら経営の仕方まで相手マーケットに合わせることが 進出成功の鍵であることを認識し、そのために我々 が学生としてできることを考えた。そして、BRI Csへの進出に関心を持つ者と現地の者が自由に意 見交換できる場が必要であると結論付け、分科会で そうした場を実際に作ることを目標とした。理想 は、BRICsでのビジネスに関心を持つ者が、同 じくビジネスに関心のあるBRICsのユーザーか



▲経済産業省にて



らインターネット上のフォーラムを通じて、例えば 考案したビジネスモデルについて、現地の状況を踏 まえたフィードバックが貰えるといった場の提供で ある。特に企業に属していない学生にとって、こう いった現地の意見を聞く機会は非常に貴重であると 考え、すべての人に開かれたフォーラムを作ること は意義があると考えた。私たちは残りの分科会活動 期間でフォーラムを備えたホームページを設立し、 フォーラムに投稿する3つのビジネスモデルを創っ to.

#### 中国都市部におけるマイクロファイナンスモデル

作成したウェブサイトの掲示板上でビジネスモデ ルを議論していくためには、会員登録した者が掲示 板上にビジネス案を提示することが初めの一歩とな る。掲示板に提示するビジネス案の一例として、本 グループではひとつ中国における中小企業向け金融 という切り口での提案を試みた。

これのビジネス案の概要は、中国において金融分 野における新規参入についての規制緩和が行われた 場合、特に中小企業・もしくは起業家向けの金融に おいて資金需要が豊富にあるということ、そしてそ の需要を豊富な国内資本を持つ日米のような国の金 融機関が満たすことで、その需要を中国における新 規ビジネス・事業投資の成長機会に、また日米金融 機関の収益機会にできるというものである。

このビジネス案を第61回日米学生会議BRICs分 科会が検討した意義は以下の点に集約されると考え る。すなわち、ウェブサイト作成というプロジェク トは議論というよりも作業が時間を要する性質を持 つ。その中でも日米の学生が一堂に会するというこ の機会においては議論の時間も会議の意義をより深 くするためには欠かせないものである。ビジネス案 を共に考えることで、日本・米国はどういった特徴 を持った経済主体で、新興国と共栄していくために は社会のどの部分に注目しビジネス化していくか意 識を共有できたことを私達は実感している。

会議の終わりをこのプロジェクトの終わりにする のではなく、これから社会人として、もしくは学生 として成長を続けようとする私達が、その過程で出 会ったアイデアをこのウェブサイト上の議論を通じ て一段階高めようとする試みが脈々と続けていこう という意志を通じて私達の分科会の意義は失われる ことなく続いていくことだろう。

#### ブラジルに於けるアグリビジネスモデル

ブラジルでのビジネスモデルとして、私たちはブ ラジルでのアグリビジネスを考えた。このビジネス モデルは、ブラジル中東部に位置するセラードと呼 ばれる未開発の土地を買収し、農地に転用し、大豆 生産をする一方で、輸出の際に問題となっているブ ラジル国内のインフラ整備に日本のODAを活用す るというものだ。

日本政府は、歴史的な経緯からブラジルの発展に 貢献したいと考えており、また今後さらに日伯経済 関係を強化したいと考えている。その一方で、自国 の政策課題として、低下を続ける食糧安全保障の問 題を抱えている。他方、ブラジル政府は、今後とも 持続的な経済成長を実現していくことを政策目標と し、そのために必要な国内インフラ整備に注力して いる。このような両国政府の思惑を合致させ、ブラ ジルでのアグリビジネスのチャンスを活かすことを 私達は意図した。

日本の食糧自給率を品目別に見てみると、小麦、 大麦、大豆が圧倒的に不足している。一方で、ブラ ジルは世界第二位の大豆生産国であり、世界の大豆 生産の20%のシェアを占めている。大豆輸入を90% 米国に依存している日本としては、今後大豆の供給 源を多角化するという意味においても、ブラジルの 大豆は非常に魅力的といえる。

また、ブラジルには膨大な未開拓の農地転用可能 地がある。米国農務省の試算によれば、ブラジルに は、アマゾン地域を除いてもなお、6500万ヘクター ルものセラードが存在する。日本の農地全体が470 万ヘクタールであることを考慮すれば、その規模が いかに巨大であり、ブラジル農業の潜在性が依然と して非常に高いものであることがわかる。

ただ、このアグリビジネスにおけるボトルネック は、港や道路といったブラジル国内のインフラ未整 備に起因する高い輸送コストである。そこで、この 問題を解決するため、私たちは日本政府を巻き込む ことを考えた。具体的にはODAを通じて、道路整 備、港の運営能力向上のための技術支援を行うよう 日本政府を説得することである。日伯関係の強化や、 ブラジルの発展に貢献するとともに、日本のビジネ スを支援し、日本の食糧安全保障を向上させるプロ ジェクトであることを考えれば、このようなODA は実際に実現可能だと私たちは考える。

私たちは具体的にブラジルのどのエリアに進出す るべきか、またどの港を用いるべきかなどを会議中 に検討したが、今後とも引き続き、為替リスクや生 産コストの増大などの問題について、ウェブサイト 上で有益な議論をしていきたいと考えている。

# 第61回日米学生会議終了後の活動

ファイナル フォーラムでは 私たちの考えた BRICsにおける 日米企業のビジ ネスモデルを紹 介したが、これ らが私たちの最



終的な本会議の成果ではない。私たちが目指すもの は、本会議後も行われる継続的な議論であり、また その場の提供である。会議中に創設した"GLOBE" というウェブサイトは、BRICsにおけるビジネス に関心を持つ日米の人々と現地のBRICsの人々が 新たなビジネスを始動させるための意見交換と議論 の場を提供することを目標としている。ここではサ イトに登録した人が自分の考えたビジネスモデルを 提示して意見を求めることができ、それに関心を 持った人とパートナーとしてビジネスを展開するこ とも可能となる。よって分科会メンバーは会議後も このサイトを管理・運営し、より多くの人々がこの サイトを使いBRICsへのビジネスの進出を促進で きるよう努めていく。現在日本語版のサイトも作成 中であり、今後はより多くの言語に翻訳することで BRICsの現地の人々の参加を促していくことも検 討中である。

#### 分科会コーディネーター総括

分科会を進めるにあたり、アメリカ側リーダーの ジョンマイケルと私が特に意識していたことが2つ ある。メールやスカイプ、直接会っての話し合いを 通じて、2人で大事にしてゆこうと決めた2事項で ある。

まず、分科会は『デリゲート』『一人一人』のもので あるということ。これは大きく2つのことを意味す 3.

まず、分科会リーダーの役割。分科会リーダーは "My RT (Round Table)"として自分の分科会を指 すことが多いのだが、これは円卓所有者としての意 味でもあり得るし、所属者としての意味でもあり得 る。私達にとってここでのMyのイメージは囲む人 の一員としての後者であった。リーダーが分科会の 方向性を定めてしまうことで参加者が窮屈に感じて しまう、あるいは主体的になりきれずに不完全燃焼 に終わってしまう分科会があったことを私も、ジョ ンマイケルも知っており、それだけはしたくなかっ た。中身を定めること、言葉の定義付けをすること は、一人一人の参加者に任されて然るべきと考え、 私たち分科会リーダーは一参加者としてその場に参 加し色を加えるという形をとりたかった。

また、一人一人の声が反映されるような土台を作 ること。日本側は事前に会う機会が多いため、自分 たちの中で物事が進んでしまうということがとても 多いことには特に注意すべきだと思う。春合宿の 時点で最終発表の方向性まで決めてしまい、それに 沿って事前活動を進めてゆくような場合、カウン ターパートであるアメリカ側にそれがきちんと共有 されているのか、そして彼らがそれに対してどう感 じているのか、ということを意識しなければならな い。メンバーの半数で決めた方向性を全体で共有す るのは難しく、全員の共通認識がない限り、本会議 に行ってからの議論は双方にとって心地よいものと ならない可能性が高い。

二つ目に重用視していたことは、議論からアウト プットをつなぐ軸を持つことである。広範にわたる 問題を扱おうとしたがために分散した議論をまと めることが出来なくなってしまう、あるいは最終

#### 第4章 分科会活動

フォーラムにおける発表を目的としてしまい議論に おいても発表においても結局妥協を重ねてしまうと いう失敗を私もジョンマイケルも見てきており、そ れを避けるために事前の知識共有や、会議直前・開 始直後からのすりあわせ作業は非常に重視してい to

以上が大きく2点、気をつけていた事項。

結局BRICs分 科会がどんな分 科会だったのか。 一言で言うなら ばその一言は決 まっているだろ う。事前活動で



はそれだけでもかなり負担となる通常のRTペー パー随筆とは別に各メンバーがBRICsの中の一カ 国を担当し、下調べとプレゼンテーションを行っ た。東京サイトでは他の分科会が冷房の効いたオリ ンピックセンターでディスカッションを進める中、 BRICsだけ毎日早起き、毎日汗をかきながらスー ツでフィールドワークを行うべく駆け回っていた。 最初は他の分科会のメンバーにそう噂されているだ けだったが、京都につくころには自称『INTENSE』 軍団として団結していた。本当に、BRICs was INTENSEだった。私が敢えて総括として動かな かったことで戸惑う瞬間もあったかと思うが、一人 一人のメンバーが主体となってくれた。見事に自分 たちの分科会、を形作ってくれた。計画的で、作業 の早さも最終発表前夜にお菓子を持ち寄って作った ホームページの開設祝いが出来てしまうほど。

しかし、BRICsの素晴らしさはそんなストイッ クな環境の中に常に温かさがあり、笑顔が絶えな かったことだと思う。とにかくみんなが輝いており、 居心地の悪さがあったことは一度もない。分科会時 間中の休み時間にも部屋を出ず、みんなで喋ってい るということ。分科会外の時間まで全員一緒にい て、みんなで踊ったり、クリーニング屋さんへ行っ たり、メンバーの筋トレを応援したりしているとい うこと。最終発表を終え分科会時間というものもな

くなっている会議最終夜に、分科会で集まっていつ ものように笑っていたこと。これは、本当に特別な ことだと思うのだ。分科会として一緒に頑張る仲間 という以前に、一緒にいて楽しい仲間だったのだろ う。そんな分科会に浸り、また時に実行委員として の仕事に追われ傍観しながら、私は最高に幸せな気 持ちだった。

最後に、BRICsのみんなへ。 一番最初に送った手紙を覚えてますか?

私は自分が参加者だった時、幸運にも最高の分科 会の一員となることができ、一生付き合っていきた いと思えるメンバーとともに、様々な議論を重ねま した。そして分科会の中で一人一人が輝くことの重 要性も感じました。最終的に作り上げたものや得た ものというのは、一人でも欠けたら絶対にあり得な かったものだったから。

だからBRICs メンバーの選考 の時も、一番時 間がかかって、 最後まで悩んで いたのを思い出 します。今では



そんな偶然かもしれない出会いも運命のようで、こ の4人、そしてアメリカ側の5人と一緒にこの分科 会で過ごせたことを心から嬉しく思います。家族と しての分科会ということを最初の手紙で書いたと思 うけれど、今それを少し読み返して少し照れくささ を感じながら浮かぶのはみんな一人一人の顔です。 BRICsは本当に家族みたいだった。常に全員でい るのが当たり前だったから、会議後に日本側だけで 会ってもやっぱり何か欠けているような気がしちゃ うのが不思議だね。いくら離れてもこんな絆がずっ とずっと続いてほしい。メーリスへの近況報告は続 けてますか?

正直、自分がとっても興味を持って作って準備を 進めてきていた分科会だったから、サイト計画・運 営などに手を取られて思うように関われず何とも言 えない悲しさとやるせなさを感じることもありまし

た。でも『こっちは任せて、大丈夫!』と言ってくれ るみんながいたから、安心して他のことにも集中 できたし、合流した時の『おかえり』がすっごく嬉し かったよ。限られた時間の中で一生懸命楽しみ、吸 収し、あらゆる状況においてベストを尽くすという みんなの姿勢は分科会の枠を超えて、アメデリ歓迎 企画、青学でスピーチ、もんじゅでのパネリスト、 最後の代表リフレクションでの活躍、全体リフレク ションでの発言や、日々の行動として表れていると 感じました。

『よろしく』のあの手紙を書いてから数ヶ月。こう して私はまたみんなに手紙を書いています。最高の 分科会を持つという幸せをくれたみんなには、感謝 しても感謝しきれない想いです。本当に、ありがと う。そしてこれからもよろしくね。

Kanzenni, Daisukidayo.

友理

最後に、勉強会というかたちで私達BRICs分科 会のメンバーに貴重な機会を与えて下さったストラ テジック・デシジョン・イニシアティブ株式会社 (SDI)、日本貿易振興機構(JETRO)、野村総合研 究所(NRI)、そして経済産業省(METI)の皆様にこ の場を借りて深く御礼申し上げます。皆様から刺激 的なお話を頂くことが出来たからこそ、充実した分 科会活動を行うことが出来ました。本当にどうもあ りがとうございました。

#### 〈報告書をご覧の皆様へ〉

BRICs分科会ファイナルプロダクトである 「GLOBE」ウェブサイトに是非アクセス、ご登録頂 ければ幸いです。

http://www.globepartnership.net/

(竹内友理)

# 世界の食糧安全保障 -生産・流通・消費の再構築-

 $\sim$  Food security and the future accessibility of edible commodities  $\sim$ 

# 分科会メンバー

小野元\* 坂田 奈津希 高橋 央樹 趙 潤華 安川 皓一郎 Kayoko Hirata\* Diane Lee Marie Watanabe Paul Rockower Svetlana Ikonomova (\*はコーディネーターを示す)



## 分科会概要

近年日本では、農薬汚染や産地偽装などにより、 食の安全や食糧自給率の低さに関心が高まり、地産 地消の動きも見られる。一方、途上国の人口増加や 経済発展による食習慣の急速な変化は、世界の食糧 需給市場を逼迫させつつある。食糧が多国籍企業を 介して広範囲に流通し、金融商品として投機の対象 になり、同時に国家による囲い込みが進んだ状況下 に、どのような危険が内在するのだろうか。

当分科会では、そもそも食糧安全保障とは何かという問いを念頭におき、緑の革命で生まれた高収量 農産物が水や土壌に与える負荷、遺伝子組み換えやバイオ燃料生産の是非、フェアトレードとWTO自 由貿易の論争、加工流通技術の発達に伴う食生活の 変化などを分析する。最終的には、生命の礎となる 食糧を未来に確実につなぐために、地球規模で持続 可能な食糧生産、流通システムをいかにして構築す るか、多角的な議論を重ねたい。

# 事前活動

日本側参加者は5月春合宿において初めて討論を 行った。そこで、単に生命の脅威が脅かされない「消 極的平和 | ではなく、より多くの人々がよく生きら れる「積極的平和」を達成するために世界的な食糧安 全保障について議論するという目的が合意された。 同時に、食糧需要がなくならないために、生産・流 通·消費において悪循環が存在しても、それが断ち 切られにくいという問題意識から、そのような悪循 環をよい循環に切り替えるための具体的な取り組み 案を作成するという方向性も定まった。扱うアク ターや分野、提案のタイムスパン等は、官公庁、企 業、NPO、市場などさまざまな視点から分析を試 みた後に検討することとなった。その方針にもとづ き、まず基本文献を読んだ上で、6月以降参加者が 主体となって以下の勉強会を開催した。また、アメ リカ側参加者を交え、インターネットを通して4回 にわたる勉強会を実施した(この詳細は事前活動7を 参照)。これら事前活動の結果、直前合宿ではさま ざまな組織間のよりよい連携を考察する必要性など が確認された。

#### 1. TABLE FOR TWO International

日時:6月20日(土) 場所: 早稲田大学

講師: 仲本千津様 TABLE FOR TWO International

事務局

TFTは、主に様々な企業の社内食で健康にやさし いメニューを提供し、その価格の20円分をアフリカ の学校給食の援助資金とする活動をしているNPO 団体である。世界の67億人の人口のうち、10億人が 飢えに喘ぐ一方で、10億人が肥満など食に起因する 生活習慣病に苦しんでいる「食の不均衡」を、先進国 の私たちと開発途上国の子どもたちが、時間と空間 を越え食事を分かち合うことによって解決してゆく のがねらいだ。

私が何より感心したのは、学校での給食を提供す ることがその国での将来の人材を育み、かつ安定的 な支援を行えるという、そのビジネスプランであ る。しかし一方で、私たち自身の寄付意識の欠如や、 このような活動を行っている団体の存在を知ったこ とは、政府や国際機関ベースでトップダウン的な思 考のもと、食糧問題にアプローチしようとしていた 姿勢を顧みることにつながった。また仲本さんのよ うな、実動ベースで社会問題を解決しようとする姿 勢をこのとき学んだことは、学生としてとても重要



だった。 (高橋央樹一部改)

※参考図書: 「20円」で世界をつなぐ仕事 - "想い"と "頭脳"で稼ぐ社会起業・実践ガイド(TFT事務局長 小暮 真久著)

※この勉強会は安川皓一郎がコーディネートした。

#### 2. 二子玉川ファーマーズマーケット

日時:6月20日(十)

場所:東京都世田谷区二子玉川ファーマーズマー ケット

講師:橋本隆男様、金子理史様 IA東京中央

食糧の流通から安全保障を考える一例として、消 費者が生産者から直接農産物を購入する二子玉川 ファーマーズマーケットを訪問し、農家の方にお話 を伺った。扱っている商品は農家が自家消費用に栽 培するのと同様に育てた野菜や園芸品50種以上であ り、市場規格(見かけなど)よりも味重視という傾向 がみられる。驚かされたのはその人気ぶりで、朝9 時の開店前には40人以上の行列ができるそうだ。人 気の理由は、地域との密着が生む信頼関係(安全、 安心) にあるのだろう。農作業が近郊で行われるた め住民に可視化され、近所から農薬をかけないよう 要望されることもあるという。生産者側も直売所に 顔を出し、消費者の反応が手にとるようにわかるこ とが励みになっているようだ。

このような小さな地域単位の食糧安全保障の一つ の形も、マクロな視点では異なる様相を呈す。東京



▲ほぼ完売御礼の店舗を背に橋本様、金子様と

23区で最大の農地を保有する世田谷区ですら、跡継 ぎ不在などにより農地が縮小を続け、市場出荷量を 確保することが困難になったことが、農家の多くが 少量多品種の直売所に軸足を移さざるを得なくなっ た原因である。農地の跡にマンションが林立する街 並みを見渡しながら、「来季は何を栽培しようか」と 語る橋本さんの笑顔を日本農業の打開策につなげる ためにはどうしたらよいのか考えなければならない と感じた。 (小野元)

#### 3. アジア学院研修

日時:6月22日(月)~26日(木) 場所: 学校法人アジア学院(栃木県)

日米学生会議の食糧安全保障分科会として、「食 糧」を作る場を学ばない手はない。

私は、6月22~26日にかけて栃木県の西那須 野 に あ る、Asia Rural Community Leadership Institute (アジア学院)という学校で、第三世界か ら集まった志高い人々と共に一日中農作業に明け暮 れた。この学校は、キリスト教精神に基づき、全て の運営は世界中のクリスチャンのコミュニティによ る寄付金によって賄われている。学校内には2へク タールの農地があり、酪農と農業を組み合わせて、 完全な資源のクローズドループを創り上げている。 外部から購入するのは、電気と油だけで、それ以外 はフンから取れるメタンガスを料理に利用すること に始まり、全て学校内で作られたものを利用してい 3.

アジア学院における経験は、食糧安全保障という 問題をそれぞれのコミュニティのレベルから解決 すべき問題であると感じさせてくれたと共に、「毎 日食べられる」ということが、いかに人々へのエン パワーメントになるのかと言う事を考えさせてくれ た。インドの最下層のカーストの出自の人も、スリ ランカの女性も、食べられるコミュニティを作り上 げることが、自分達弱き者が希望を見つけるファー ストステップだと言っていた。

食を第三者から受け取るのではない、自ら作り自 ら食べる。この行為が単なる「自給自足」という言葉 には表わしきれない、とても重要な事であると、肌 身に感じると共に、考えさせられた。

実際に、食を作ると言う事は生半可なことではな い。朝6時に起きて雑草取り。夜7時まで腰をかがめ て作業する。さらに、極力機械を使わず、その場所 にあるものとアイデアで農産物を作ると言う過程に は、あらゆる知恵が利用されていた。

日米学生会議として食糧安全保障を述べる時、私 達は国家戦略としての食糧の確保、世界全体規模で 見た時の食糧問題に囚われがちであった。しかし、 人が自ら作り、自ら食べると言う過程と真摯に向き 合い、自らの国ではそれすらまともに出来ないとい う方々と言葉を交わした時、食糧問題とは、本当に 小さなレベルから考えるべき事なのだと言う実感を 得ることができた。 (安川皓一郎)



▲農作業の合間、アジア学院の研修生と共に

# 4. NPO法人国連世界食糧計画WFP協会勉強会

日時:7月1日(水) 場所:パシフィコ横浜

講師:桜井裕介様 国際連合世界食糧計画WFP

協会 事業部

7月1日, United Nations World Food Programmeの日本での民間窓口であるNPO法人、 国連WFP協会を訪問した。

WFPは政府からの拠出金と、民間企業、個人等 からの寄付を活動資金とし、途上国での食糧支援を 行っているが、寄付文化のない日本では、民間や個 人からの支援を促していく事には課題が残るという

ことであった。しかし、写真展やチャリティーコン サート、広告キャンペーン等を行い、徐々に増えて いっているという。

どういった食糧支援が行われているかについても 伺った。その一つとして、Food-for-Workがある。 生活するうえで必要な農地や社会インフラを整備す るプロジェクトを受益者参加型事業として実施しそ の労働の対価として基本的な食糧を支給するプロ ジェクトで、食糧支給と共に自立を促す事も目的と している。また、世界の飢餓人口の70%が女性と子 どもということで、女性や子供対象のプロジェクト も行っている。食糧持ち帰りプロジェクトがその一 つで、給食を持ち帰れるようになることで、より多 くの少女が学校に通わせてもらえるようになり、栄 養面の改善だけではなく少女たちの教育機会を向上 させる事に貢献している。

また、食糧引換券プロジェクトについても興味深 く聞かせて頂いた。これはブルキナファソの首都ワ ガドゥグーで食糧価格高騰の悪影響に苦しんでいる 12万人を対象とし、食糧輸送費や貯蔵費の削減や、 市場に食糧はあるが価格が高すぎて買うことができ ない都市部等の地域経済の活性化などのメリットが 期待できるという。

これらの話を伺い、飢餓や食糧危機という問題に 対しても様々な取り組みが可能である事を改めて考 えた。支援といえども食糧を配給する事が全てでは なく、そこからさらに地域の活性化や自立支援、女 性・子供の機会向上といったサイクルを作っていけ るという点で、食糧安全を保障する事によって何を 改善、達成したいのか、そのためには何が必要にな るかについて私たちが本会議で考えていく上でも大 変勉強になった。 (趙潤華)

※この訪問は、趙潤華がコーディネートした。

#### 5. 日本モンサント株式会社勉強会

日時:7月22日(水)

場所:日本モンサント事務所

講師:佐々木幸枝様、内田健様 日本モンサント株

式会社バイオ作物情報部

「科学」による食糧安全保障の可能性を勉強するた

め、日本モンサント社の方々にお話を伺った。モン サント社とは、遺伝子組み換えの技術により開発さ れた除草剤とその除草剤に耐性を持つ種子のセット 販売に成功した、世界有数のアグリビジネス企業で ある。最も衝撃的だったのは、私たち消費者が遺伝 子組み換え作物についていかに無知であるかという ことであった。お話を伺う前、私は漠然と遺伝子組 み換え作物に懐疑的であった。しかし、それもメディ アによる影響にすぎず、食物に表示されている情報 と現状にはかなり大きなギャップがあることを学ん だ。日本も既に大量の遺伝子組み換え作物を輸入し ているにもかかわらず、飼料や加工食品など表示義 務のない方法で摂取されているため、消費者は遺伝 子組み換え作物を摂取していることに気付かない。 遺伝子組み換え食物をただ漠然と危険視するのでは なく、きちんと遺伝子組み換えの知識を正しく理解 した上で、遺伝子組み換え作物のメリット・デメリッ トを考えるべきだと思った。(坂田奈津希)

※この訪問は、坂田奈津希がコーディネートした。

#### 6. 防衛大学校ディスカッション

日時:6月19日(金) 場所:防衛大学校

防衛大学校生5人と、主に日本の食糧安全保障の ための具体的な施策について検討した。民間企業に よる海外農地買収は途上国の優良農地を買いあさる ことになりかねず、国際的な規制が必要であるこ と、日本の食糧備蓄量は不足しており、災害など供 給不足時に国際市場で買い負ける事態を想定してい ない点で脆弱といいうること、地域型食糧備蓄ネッ トワークは割当量などの点で各国間の合意形成が進 んでいないことなどが指摘された。

国際協調の実現には、互いにとり利益があること が欠かせない。他国が日本と相互依存関係を作りた いと思うような枠組みを、食糧分野で構築できるだ ろうか。食糧輸入用の海上輸送路を確保するための 軍事的な安全保障など、食糧だけを切り離して考え るのではなく、安全保障全体の中に位置づける必要 があるという視点は、現実と向き合う防衛大生だけ に説得力があった。

#### 7. 事前スカイププレゼンテーション

6月下旬から7月上旬にかけて、日米の参加者が一 人ずつペアになり、スカイプチャットを通じパワー ポイントによる発表を行った。食糧問題に関して基 本的な知識を得ることおよび日本側参加者と米国側 参加者の英語を用いたコミュニケーションを促進す ることができた。各ペアのテーマは以下の通りであ る。発表を終えた後は参加者全員で質疑応答を行い、 理解を深めた。

- Marie, Hiroki "The Effect of Trade Barriers in World Food Trade"
- Svetlana, Natsuki "Food Borne Illnesses"
- Paul, Yunhwa "A History of Food Security"
- Diane, Koichiro "Food Injustice"

主要参考図書: Paul Roberts "The End of Food", 山下一仁「フード・セキュリティー」

# 本会議活動概要

事前活動をふまえ、本会議では一回のセッション で2人程度RT paperの発表を行い、発表者の提示し た質問を中心に議論した。各人のテーマは次の通り である。

Paul "Free Trade and Food Security"

Diane "The Causes of Food Insecurity: Is there a way to successfully help developing countries in a more humanitarian way?"

"Global Food Crisis and Protectionism in Marie Agriculture"

Svetlana "Ethanol vs. Food Security: Can the Dispute be Solved?"

坂田 "GM crops and Food Security"

趙 "The role of agriculture: is agrarian reform effective enough to increase food supply in developing countries?"

""Neo colonialism" and development of 安川 local community: Land Acquisition and Foreign Investment"

高橋 "International Approaches towards Food Safety "

はじめに焦点になったのは食糧価格高騰と一部地

域での備蓄量不足の構造的要因である。要因の一つ には、各国の食糧分野における保護主義的政策があ げられる。このように農業分野で市場をゆがめる政 策が多くなされていることからは、食糧は他の産業 生産物と異なり、市場原理に適さない面があるのか、 文化面を含む多面的機能が現代社会にどのような影 響をもたらしているかという問いが引き出される。 仮に、農業分野に対し国家の補助が必要だとすれば、 自立を助けるための効果的な方法とは何か。また、 農産物価格設定における消費者の責任とは何か。こ れらは分科会全体を通しての問いとなっていった。

食糧問題の国際性が改めて確認されるにつれ、問 題の打開策として、国際協調をどのように達成する かという点が何度も形を変え議論された。具体例を あげれば以下のとおりである。WTO交渉を進める ために各国に求められることは何か。発展途上国が 市場で競争力を持つためには、どのような枠組みが 可能か。援助、貸付を含む人道的アプローチはどの ように効率化されるか。経済的なインセンティブ(投 資など)によってインフラなどの整備を進めていく 場合、土地を買収された地域への保障、自然災害時 のセーフティネット、生態系の保存をふくめた土地 の力を維持する方法とは何か。

これらの問いを議論しつつ、東京と長野では後 述するフィールドトリップを行い、函館では「公と 私」分科会と合同で国際社会の食糧流通における公 と私について議論した。そして、多岐にわたる討論 内容の中から発展途上国の農業に焦点をあて、京都 フォーラムで発表した。この概要は本項末尾に記載 されている。

# 本会議中のフィールドトリップ ①農林水産省日米学生会議意見交換会

日時:7月30日

場所:農林水産省本館

講師: 牛草 哲郎様 農林水産省大臣官房食料安全 保障課 食料自給率向上対策室室長

> 強谷 雅彦様 農林水産省大臣官房国際部国 際協力課 課長

食糧安全保障に向けて政府が何をできるかを学ぶ

ため、日本をケーススタディとし、農林水産省の国 際協力課と食糧安全保障課の方々にお話を伺った。 レクチャーでは、近年の食糧の価格高騰により世界 中で飢餓・貧困問題が悪化し、各国で暴動まで起き てしまっている状態にあること。そして、そのよう な状態から脱するために、日本は様々な貢献をして いることを知ることができた。特にアフリカにおけ るコメ生産倍増する計画は興味深かった。また、国 内の食糧安全保障についてもお話頂いた。グローバ ルな観点からは日本のコメの関税を下げる必要があ るが、日本の伝統を守るのも重要であり、簡単な問 題ではないこと。また、今後は農地を最大限利用し ていくことが大切であり、放棄される農地の増加を 防ぎ、農地の賃借をしやすくするための対応がなさ れなければならないことを学ぶことができた。トッ プダウンとボトムアップ、両方から動かなければ、 食糧安全保障は実現されないということを痛感し た。 (坂田奈津希)



▲農林水産省にて

#### ②長野農業体験

日時:8月12日(水)

場所:柴本無農薬菜園(長野県中野市桜沢) 講師:柴本勤様 柴本無農薬菜園 代表

柴本無農薬菜園では耕作放棄地を借入れるなど して、4.5haほどの農地できゅうり、トウモロコシ、 なす、インゲン豆を栽培し、主に大都市に出荷して いる。柴本さんは脱サラした上、JAも脱退し、30 年前から本による独学と試験場での実践で有機農法 に取り組む「変わり種(自称)」である。 どうしても

入手したい層には既に有機農産物が行きわたりなが ら、農産物市場全体に対する有機シェアは1%台に 留まる閉塞気味の現状を打開するため、健康に関心 の高い妊婦に有機推進法の予算で有機農産物購入チ ケットを配布する、農産物を加工して単価を上げる など、いくつものアイデアを伺った。

また、有機農法を実践する困難として、研修生が 脱走してしまい人手不足であること、消費者が生産 現場を知らないことが、「農業が儲からない=農産 物が安すぎる」ことを理解できない要因となってい るという指摘、国が農産物を管理するよりも、直接 支払制度を実施し、農家の自主性に任せるべきでは という意見が興味深かった。

照りつける日差しの中、実の色や葉の見分け方を 教わったのち、2時間ほどミニトマトの収穫に取り 組んだ。収穫時にへたがとれてしまうと出荷できな いため、20個以上のミニトマトがメンバーの朝食と なった。甘みも酸味も濃く、無農薬というブランド よりもおいしさで自然とリピーターを獲得したいと いう柴本さんの思いを味わった気がした。(小野元)



▲柴本無農薬菜園にて 収穫したミニトマト



収穫方法などについ て柴本様から指導を うける

#### ③JA須高小布施支所勉強会

日時:8月12日(水)

場所: JA須高小布施支所(長野県小布施町)

講師: 滝沢 聖様(営農生活課 支店長代理課長)、

小渕由美子様

市場での食糧分配の不平等を是正し小規模農家を 保護する組織の一例として、果物を中心に取り扱う IA須高で勉強会を行った。農協が品質を保証し生 産物を管理することで、流通面において有利になる という日本特有のシステムの説明には、特に米国側 参加者が関心をみせた。株式会社などの農業参入が 進むと予想される中で、農協が非効率な農家を温存 していると指摘や、小泉政権以降の農協への補助金 削減の流れに対し、農業は補助金がなければ利益を 上げられず、農地も農業従事者も確保できなくなる 懸念を示し、今後の農協の存在意義を主張したもの の、農地分配など小規模農家を保護するための具体 的な施策に関してはまだ模索中で、総選挙での支持 政党も持たないとのことだった。

また、農家は消費者の嗜好の変化を受けいれざる を得ない。農協による農家への技術指導のもと、例 えば種なし果実の開発などが進められてきたが、こ の傾向は不自然かもしれないという生産者の正直な (小野元) つぶやきも耳に残った。



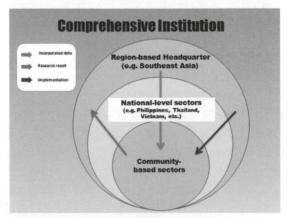
▲JA須高にて滝沢様、小渕様を囲んで

# 京都フォーラム発表内容

地球全体では全ての人たちが十分に食べてゆける だけの食糧が生産されているにもかかわらず、8億 人以上が飢餓に苦しみ、気候変動、燃料生産、貿易、 土地の分配、農業の持続可能性などと関連する構造 的な食糧危機が起こっている。特に発展途上国にお ける農業分野は最大の雇用機会を保持するものの、 国際市場において競争力のある作物の生産を効率的 に行うだけの資源が不足しているといえる。

<発展途上国の食糧生産に関する提案>

食糧生産の効率性に関する問題点として、農業の 知識が十分でないために行なわれている不適切な十 地利用について、土地の分配、農地経営の方法、災 害時におけるリスクマネジメントの3点に焦点を当 てた。まず土地の分配とは、農地をセクション毎に 分けそれぞれのセクションに適した様々な作物を育 てるためのものである。農地経営とは、分配された 土地において適切な灌漑技術、資源の利用の仕方を 農家の人が学べる機会の必要性を意味する。これら は適地適作を達成するために不可欠な条件となるか らだ。また災害時において途上国の小規模農家は、 対応するシステムや知識がないことでより深刻なダ メージを受ける傾向があり、十分な質と量の食糧生 産が出来ずにいる。これら途上国における農業の基 礎を改善するため、私達は農業の調査と実践の双方 を包括的に行う組織を提案した。つまり、異なる地 域における農業環境等の調査データの相互組み入 れ、実践への利用を通して、改善することが出来る と考えた。この組織は3つのレベルに分かれていて、 地域本部が最上位、国レベルの支部が中間、そして その下に多くのコミュニティセクターが位置してい る。まず科学者や農業技術者、専門家が、土地、気 候、利用可能な資源などの農業環境について、各コ ミュニティにおいて調査する。その土地に最も適し た農耕法を見つけ、天災等の危機的状況への対応を 調査するためである。このデータは国レベルの支部



▲農業の調査と実践の双方を包括的に行う組織のモデル

に報告され、ここで各国のコミュニティの報告が集 約される。地域本部は国の支部において集約された 情報を、さらに集約。地域本部はその後、各国レベ ルの情報を共有可能な状態にし、それらの情報を互 いに利用し、それぞれの農業システムを発展させる 環境をつくる。この組織は調査を行なうだけでなく、 調査を通して得られたデータを基にどの作物を育て いかに経営するべきか等、各コミュニティにおける 農業への実践もサポートする。 (銷潤華)

#### <発展途上国の食糧流通に関わる提案>

国際機関によって安定的な生産が可能となる要素 が途上国の人々にもたらされた後に、農家の人々が、 持続可能的に利益を出せる農業体制を考えた。なぜ なら、農業が持続的な産業にならなければ、その後 農業の繁栄は難しいからである。まず農家には、た とえ途上国であっても、資本を持つことで多くの 作物を生産できる大きい農家と零細な農家の二つが 混在している。零細農家は気候変動や災害の影響に よって不作に陥ることが多く、また生産できる数量 が限られているために大きい農家による独占体制へ の免疫がない。これらの問題点に対して、小さい農 家同士が地域レベルで単一作物の農協を作るという 考えに達した。まず農協を設けることの利点は、農 業の市場におけるその特殊性にある。農業は基本的 に肥料、機械、品種など最初に投下する資本によっ て、生産高が変化しやすい。そのため農業はその機 械や肥料に対してどんなに高い値段を業者からつけ られたとしても、それらを買わなければそもそも農 業ができない。よって小さい農家は機械購入などに 際して値段交渉ができないのである。これに対して 小さな農家同士が協力してある程度大きな規模の組 合を作ることで値段交渉を平等に行い、機械などの 資本を安く、安定的に購入することができるのであ る。次に、地域レベルに限定する理由は、農業組合 はある一定の規模を持ちそれ自体が市場を独占して しまうと、小さい農家はその独占によって不利益を 被る可能性である。地域レベルでは自身がその農協 の経営体制に常に監視をしていき、行き過ぎた農協 経営などに農家自身が参加していける利点がある。

最後に単一作物である理由は、途上国ではその技術 性と資本からいって、多様な作物を生産することが 難しいことにある。そこで単一作物に特化した農協 は、市場のニーズをその高めた専門性によって柔軟 に対応しやすく、また地域ブランドなどの付加価値 を途上国であっても付与しやすい。このような地域 レベルでの単一作物農協組合は、途上国の持続的な 農業に貢献するだろう。 (高橋央樹)



▲小さい農家同士が構成する地域レベルで単一作物の農協モデル

# 分科会コーディネーター後記

なぜ食糧を切り口に設定し、何を目指したか。冒 頭の分科会理念で記述したように、食糧問題は現代 社会を分析する上で多くの材料を提供してくれる。 したがって、何を問題と捉え、どこに解決の糸口を 見つけるかは人ぞれぞれである。個人的には、そこ に各人の社会に対する価値観が表出することを期待 した。また理念を現実化する取り組みを通して、地 に足のついた社会構想を目指した。この二点の目標 について、振り返ってみたい。

まず、議論においてどのような価値観が観察され たのか。一つは公平性(Fairness)である。WHOに よる食糧安全保障の定義が「すべての人が、あらゆ る時に、活動的で健康な生活を送るのに必要な食事 上の条件と食の嗜好を満たすのに十分な量の、安全 かつ栄養のある食糧を、物理的にも経済的にも手に 入れることができる」であることからも、公平性が 要請されるのは明らかである。当然、食糧が生産さ れ、流通し、消費される一連の機構にみられる様々

#### 第4章 分科会活動

な対立は、公平性の観点のみで判断できるような単 純なものではない。例えば、遺伝子組み換え技術の 利用をめぐる問題では、種子供給の平等性と衝突す るのは、開発を支える特許権である。また、自国民 の食糧確保を国家の役割の一つとみれば、食糧安全 保障の範囲を限定せざるをえない面もある。しかし、 公平性を念頭におき、それぞれの施策が一体誰のた めの食糧安全保障になっているか考えたことは、最 も不利な状況におかれているともいえる途上国の小 規模農家に焦点を当てたフォーラムでの提案とどこ かでつながっているように思う。

具体的な提案には結びつかなかったものの、食糧 生産からは、他にもいくつかの概念を取り出すこと ができる。例えば、農業の特徴とされる、土地の性 質や気候、肉体労働、保存の困難さなど、さまざま な制約からくる「多様性」や、農産物の収穫により、 時間をかけた自分の労働成果を実感する「労働所有 感覚」。これらは製造工程が複雑化し、画一な工業 製品と対比した場合、明確になる。さらに、濃密な 人間関係を背景に資源や労働力を地域内で分かちあ う「共有性」は、しばしば都市からみたコミュニティ への郷愁として描写される。

消費に目を広げてみよう。生産者の顔がついてい るパッケージやトレーサビリティー制度の普及に は、単なる安心以外の欲求、すなわち生産者と特別 な、直接の関係になりたい、という消費者心理を見 出しうる。特別な、(「顔」の見える)関係になるとい うことは、生産者が対面している制約にもとづく多 様性、直接性、労働が所有に結び付く感覚、などを 商品と共に購入し、共有することでもある。

規格品外の多様性を許容し、直接的な感覚を共有 する対象として、食糧が選ばれやすいのには、少な くとも二つ理由があるだろう。ひとつは日常的であ り、それほど高価でなく手軽であること。もう一つ は直接口に入れる、身体=生命に関わるものである ことだ。細胞を構成する物質が一定周期で入れ替 わっており、食べ物は体内を素通りするのではな く、身体に吸収され健康に影響することや、生産者 側から農産物をまるで「生き物」としていとおしむよ うな発言をきくこともある。世界規模でみれば、主

に自分たちの食料を確保し、「生きる」ために農業が 行われている地域も多い。身体や、生への意識が食 をめぐる消費行動変化の背景に潜んでいる可能性は ある。

次に、多様な価値観を理解した上での理念を現実 化する作業はどうだったのか。現状をどのように 改善していけばよいかという提案内容については、 フォーラム発表内容で紹介しているので、ここでは 作成過程について簡単に述べておく。拙くても具体 的な提案作成を試みるのか、あるいは食糧問題の現 状を紹介することに力点をおくのかは、長野から京 都サイトにかけて、自由時間も使っての長い議論に なった。結局、直接聴いた全ての方々のお話からも、 事前に扱った文献からも、食糧生産が岐路に立って いることははっきりするものの、具体的な施策につ いては模索している段階と感じられたことが、具体 的な提案作成に向かう一つの原動力になっていたの ではないだろうか。フォーラム発表内容は、無論先 行研究の検討など不足点は多いものの、各自の視点 から真摯に食糧問題に向かい合う彼らから、「今後 を考えるべきはあなた達の世代だ」と言われたこと に対する感謝と応答の第一歩である。

食糧生産において見出される概念が分科会の議論 そのものと似ていると感じたことがある。日米の二 つの言語の存在や、議論方法の違い、専攻する学問 分野の違いなどは、「制約」であり、「多様性」でもあ る。進行する立場は特に「公平性」も問われる。限ら れた時間や知識を分かちあう「共有性」が必要とされ る。セッションごとに有意義になるように試行錯誤 し、その成果が展開に直接あらわれるから、議論と いう「生き物」と対峙している気がしたこともある。 自分たちで作った作物=議論だからおいしい、とい うのはこじつけすぎだろうか。自分が設定した問題 を真剣に考えてくれる仲間がいるというのは、とて もぜいたくで楽しいことだ。一年間一緒に取り組ん でくれたKayokoと、粘り強く考え続けてくれた参 加者達に心から感謝したい。(小野元)



▲京都フォーラムを終えて

# 現代社会と健康

~ Modernized Technology and Health Issues ~

# 分科会メンバー

安川 瑛美\* 大西すなほ 緒崎 裕香 高田 修太 梅本勇基 Ji Eun "Karen" Jung\* Amie Hornick Dylan Tracy Yudai Chiba Madison Moss (\*はコーディネーターを示す)



## 分科会概要

近代化による技術発展は利便性を増進し生活を豊 かにする一方で、地球温暖化、環境汚染といった弊 害をもたらしている。個人レベルに目を向ければ、 自殺率の増加、ストレス過多など、情報化社会、リ スク社会に生きる私たちにとって心身の健全なバラ ンス維持を困難にする要因が増大している。当分科 会では、現代人の健康の現状とその社会的背景を明 らかにすることを目的とし、医療技術の可能性と限 界を考慮しながら、私たちにとって健康とは何なの か、健康的な生活はいかに実現されるのかを考える。 現代社会に内在するこのような課題を日米の事例の みならず世界へ視野を広げ探索し、医療、技術そし て健康観などについて議論する。

# 事前活動

# 1. 講師:鈴木信行様 日本二分脊椎症協会 相談役 日時:6月11日(木)

二分脊椎症という疾患を持つ鈴木信行氏に「いの ちについて考える」という題目でお話を伺った。全 く同じ人間などいないことを指摘したうえで、中絶

の是非を問いながら、障害を抱える人とそうでない 人という二分法が疑問視されるべきであることを繰 り返し強調された。自分でできることは国の機関に 頼ることなく、自立しようとする強い意志を持つ鈴 木氏からは良い意味での衝撃を受けた。議論を通じ て、患者側のニーズに応えるような医療を見つめる きっかけにもなり、またアメリカと日本の患者会の 在り方の比較は有益な視点であったと思う。カフェ を経営し、これからの夢や目標を熱心に語られる姿 は前向きで力強いパワーを感じた。 (大西すなほ)

# 2. ジョナサン・クーパーフィールド様 テキサス A&M大学准教授

日時 7月11日(土)

東京工業大学でフルブライト研究員をされていた クーパースミス准教授に現代社会と技術という観点 でお話を伺った。同教授は技術の歴史学を研究され ている数少ないアカデミアの方である。近代化は かつての村社会を変容させ、技術の発展は個人と 社会の関係性を複雑化させている。ヨーロッパでの "precautionary principle"という事例を用いて、技 術の良し悪しは最終的には使用してみないとわからないのではないかと指摘され、使用者である我々との関係性が重要であることを再確認した。健康という観点から考えてみれば、医療技術が万全ではなくまた「健康」という概念が変化する中、治せない病気に対して医療は戸惑い続けているのではないかという指摘が興味深かった。技術によって対処不可能な不治の病と向き合うことで、健康という概念や医療そのものと人間の関係も再考されるのではないだろうか。 (安川瑛美)

# 3. 講師:川越厚様 在宅ホスピス協会顧問 日時7月19日(日)

在宅ホスピスケアの第一人者である川越厚先生 に、ホスピスケアの歴史・現状・チーム医療の課題 等について先生の経験も含めて話を伺った。単に制 度として枠組みを与える手法でなく、地域の力を活 かしたボトムアップによる実質的なホスピスケアの 提供について熱心に語ってくださった。癌で亡くな る人は、一年に34万人であるにもかかわらず、在字 で亡くなる人はわずか6%という現実から、死が私 たち現代人にとっていかに遠いものであるか、死は 本来生活の中で学ぶものであるにもかかわらず、死 を病院に追いやることで、見えないようにしている のではないかと思った。私自身、無機質な病院体制 に疑問を感じてこの分科会に所属しているので、24 時間拘束されているのにもかかわらず「やりがいが あるからこそ頑張れる」と言い切り、目をキラキラ と輝かしていた先生の仕事に対する情熱に触れるだ けでも、大変刺激的であり有意義な経験であった。

(大西すなほ)

# 本会議活動

グループプレゼンテーション

①「メンタルヘルス、自殺とインターネット」

担当:緒崎、Hornick

鬱病、精神疾患、そして自殺は現代における社会 的な問題だ。精神疾患に対しアメリカでは向精神病 薬による治療が一般的だが、日本では制度上の問題 から認可されていない薬も多い。技術それ自体には 限界があり、副作用や倫理的な懸念も指摘されている。抑鬱を訴える人は増加傾向にあり、薬物治療だけで全ての患者を治療することは不可能だ。更に、鬱病がもたらす甚大な影響として、自殺問題がある。アメリカでは16分毎に一人が、日本では平成10年以降毎年三万人が自殺している。これは死亡数のみの統計であり、未遂者や志願者の数は更に多い。特に、最近は青少年の自殺増加が顕著である。

青少年の自殺と、インターネットとの関連性に注目したい。インターネットは世界中からアクセス可能であり、遠く離れた人とも交流しコミュニティを創出できる。便利さの半面、これは同時に危険でもある。いわゆる自殺系サイトでは自殺願望を持つ個人の日記、自殺や薬物に関する情報が公開されており誰でも自由に閲覧可能である。簡単に情報が手に入るからこそ、影響を受ける人の数も爆発的に増えてしまうのだ。例えば今までは学校やクラス単位でしか広まらなかったリストカット等の自傷行為が、インターネットを通して広まる。掲示板での自殺予告、遺書の掲載を見て自らも自殺願望を抱く可能性もある。利便さ故の弊害であるが、規制によりこれらを全て取り締まることは不可能だ。

個人化が進み人との繋がりが希薄になっている現代社会で自殺問題が如何に深刻な問題であるか認識されていないのではないだろうか。現状を知り、考えてもらうことが大切である。現状を認識した上でインターネットの技術を正しくヘルスプロモーションに利用し、人々の意識改革を行えば自殺予防の可能性もある。肉体的な健康と同様、精神的な健康も重視されることは健全な社会のために不可欠である。 (緒崎裕香)

### ②「メディアと健康」

担当:高田、Chiba

まずは、「ヘルスプロモーション」という概念を紹介し、メディアとの関連性について論じた。ヘルスプロモーションとは、WHO(世界保健機関)によると「人々が自らの健康とその決定要因をコントロールし、改善することができるようにするプロセス」と定義されている。その具体例として、「乳がんの

日本における検診率の増加を行うプロモーション」 を紹介した。政府の補助によって、ガン検診は安価 に受けることができるにも関わらず、その事実すら 国民の多くは知らない。それを広報することで検診 率の増加、そして早期発見に因る治療、ひいては健 康の意識そのものを増進する、という結果になる。 このようにメディアを介して情報を人々に広めるこ とで良い影響を生む側面がある一方で、負の影響一 一例えば、ダイエットを扱うテレビ番組にいかに日 本人が影響されやすいか――のような異なる側面も 紹介した。

そこでYudaiは、ファーストフード業界をメディ アとの関連で取り上げた。映画や本で取り上げられ ているように、ファーストフードの摂取しすぎは高 カロリー高脂肪のため健康に悪影響を与えている。 しかし一方で業界は子供向けのセットや人気のキャ ラクターで幼いころからファーストフードを食べ慣 れさせ、また宣伝等も積極的にやっている。肥満の 消費者を増やす一助になっていることは確かであ り、メーカーは自己の利益だけでなく、自身の消費 者の健康も保てるよう意識すべきだ、ということを 述べた。このようなプレゼンテーションを元に、最 終的に問題提起を3つ行い、ディスカッションをし た。1)メディアによるポジティブなヘルスプロモー ションは可能なのか? 2)消費者側に責任はない のか 3)家庭内の問題、子供の育成問題について 指摘されたが、例え家庭にも問題があるとしても、 社会全体の問題である肥満問題を解決へと導くため には何をすればいいのか? (高田修太)

#### ③「技術的可能性と倫理的可能性の相違」

担当:梅本、Tracv

私達のペアは、「(医療分野において)技術的に可 能なことと倫理的に可能なことには相違がある」と いうテーマを掲げた。即ち、技術的に或る疾患の診 断(出生前診断、遺伝子検査等)又は治療(臓器移植、 再生医療、薬物の使用等)が可能である場合、その 応用に際し安全性が十分に担保されていることは前 提として、倫理的側面からもその妥当性を極めて慎 重かつ十分に検討しなければならない、ということ

である。

現在の科学技術のレベルは非常に高く、今後もよ り多くの技術が開発されることは想像に難くない。 一方で倫理学の進歩は技術のそれに遅れをとってい る。従って新たに開発された技術を応用する際、そ の倫理的妥当性の検証が不十分なまま、漸次応用さ れているのが現状ではないか。私達が医療技術の進 歩・応用による多大なる恩恵に浴していることは事 実であり、これらを無視・否定するつもりはない。 しかし同時に、生命が尊いものであるからこそ、技 術はヒトの生命に過度・無秩序に介入してはならな いと考える。

具体例を提示する。1997年制定の臓器移植法によ ると、脳死臓器移植には脳死患者本人の生前におけ る臓器提供の意思表示が必要であった。しかし2009 年の改正法によると、必ずしも脳死患者の生前意思 は必要なくなった。更に改正法は「脳死はヒトの死 である」という死の定義の変更をも含んでいた。確 かに脳死臓器移植という技術は、それによらなけれ ば余命が極めて限られる患者の命を救う画期的な技 術であり、またWHOの声明等、日本においては脳 死臓器移植件数を増やさなければならない情勢では あった。しかし、このことは技術を臨床応用する際 の倫理的妥当性の検証を疎かにして良いということ にはならない。また、法改正に向けての議論は、脳 死「患者」及びその「家族」に対する配慮を大きく欠い たものであったと思われる。

技術の応用による恩恵とその倫理的妥当性。私達 はこれらを独立して考えては決してならない。

# ④「終末期医療~真のQuality of Life(QOL)とは~」

担当:大两、Moss

終末期医療において'QOL'が、死を迎えるまで どのように生きるのかという生ばかりに重点がおか れ、死の問題がぼやかされているのではないか、加 えて、QOLという定義だけが一人歩きし実際の医 療現場とずれが生じているのではないかという指摘 から、まずはQOLの定義から議論が始まった。そ して、死をどのように迎えるかという問に対し、家 で看取る、つまり在宅ホスピスに焦点があてられた が、家族の立場を考慮した際、死の淵にあるものを 在宅で看取ることは、現実的には時間の拘束・緊急 事態の対処への不安感があり、理想と現実では異 なっていることを改めて実感した。最後には、家族 だけで完結しない、周囲の人々を巻き込んだコミュ ニティの構築の重要性を再認識した。二つ目のテー マは、ボディ・イメージについてである。メディア や雑誌による過剰なまでのステレオタイプ的なスタ イルへの奨励は、現代人の身体認識を歪め、女性を 追い詰めるだけでなく、摂食障害・鬱・自尊心の低 下といった社会問題を引き起こしている。このよう な問題意識から、Doveのキャンペーンなどを用い ながら話し合いをした。

今回日米の比較で顕著に顕れたのは、アメリカで は摂食障害は女性だけでなく、男性にたいしても深 刻な問題を引き起こしているということであった。 あるいは、日本はCUTEを重視する一方で、アメリ カではHOW TO BE SEXYを重視する、といった 傾向も見出すことができた。後半では、自分の体に 対する自尊心の構築・私達の身体性に対する認識を どう変えていくかについて焦点があてられた。家族 がその役割の一部を担っているという意見に対し、 家族が理解を示していても正常な子で辛い状況にい る人々は多数いる、といった指摘がされ、情報技術 自体がもはや健康問題となっているのではないかと 問題提起がされた。

# 本会議中フィールドトリップ ①神馬征峰教授

日時:7月30日(木)

場所:東京大学本郷キャンパス

JASC OBで東京大学医学部国際地域保健学教授 の神馬征峰先生との勉強会を本会議中に行った。神 馬先生のご専門であるヘルスプロモーション、公衆 衛生をトピックに講義形式勉強会が行われた。ガザ 地区で働いていたころの経験から、地域医療に関し ての話もしていただいた。特に印象に残っているの は、" Health promotion creates environment."とい う文章である。健康を増進できる環境を作り出すこ とが最大の目的であり、対面しているひとつひとつ の健康問題を解決するのではならない、ということ だ。先生は、赤ちゃんが川に流れてくる比喩を用い て説明していたが、要するに、目の前の患者を治療 しても根本的な原因を解決しない限り、新たな環境 は作られないのである。ここで得たことを元に、グ ループプレゼンテーションやパンフレットを書くこ とができた。 (高田修太)

#### ②小泉典章様

日時:8月12日(水)

場所:長野市生涯学習センター

小泉さんは長野県精神福祉センターの所長として 行政、法律、制度、ヘルスプロモーションの面から 自殺防止の活動をされている。日本における自殺の 現状、背景にある日本人のメンタリティについてお 話を頂いた。特に農村部の高齢者の自殺は孤独死よ りも家族への重荷になりたくないからという傾向が あるらしい。西洋の個人主義に対し、共同体の関わ りを大切にする日本独特の考え方であるという。現 代では死が日常から隔絶されたものとして取り扱わ れ、同時に宗教の持つ影響力も減退している。故に、 死について考える機会も必要なのではないか。自殺 は個人だけではなく社会や国として改善しなければ ならない問題である。制度面からの改革を行うマク ロの視点、個々の事例に基づいてカウンセリング等 を行うミクロの視点の両方が必要とされているそう だ。 (緒崎裕香)

#### ③色平哲郎様

佐久病院を中心に農村医療、精神医学に携わって いらっしゃる方で、特にスピリチュアルケアの重要 性についてお話を伺った。日本では医療従事者の数 が不足しており、個々の患者に対し細やかなケアが できない。病を治す医療だけでなく患者を支える医 療が必要であるという。ラテン語でCUREは苦しみ や憂いを示しており、SECURAは手を出さないこ と、断絶を示している。現代社会はCUREに対して SECURAの状態にあるのではないか、という問題 意識を提示された。また、日本の仏教の僧侶は衣の 色が黒く、死の瞬間に重点をおいている。対して、

タイの僧侶は衣が黄色であり、人が死んでしまうこ とを認めた上でそれをどう受け入れるか。更に、ど のように生きていくかを説くのだという。世界に対 する認識、自らの生に意味を見出すためには宗教的 な視点も必要不可欠だそうだ。 (緒崎裕香)

# ファイナルプロジェクト

技術の進歩は生活の質を上げることに成功した が、同時に様々な問題を喚起している。メディアや ITの普及と共に医療技術は確かに発展したが、世 界的な問題として青少年の自殺や鬱病の増加、肥満 など健康に関する課題は山積する。技術の発展だけ では人間の健康を改善することはできないのではな いだろうか。また、果たして肉体的に疾患がない状 態が本当に「健康」であるのか。現在の医療は人間を 総体として診るのではなく、部分ごとに分けそれぞ れの部位を治療する傾向が強い。総合的に「健康」と いう概念を捉え直し、現代社会の諸問題にアプロー チする必要があることを分科会の議論を通じ実感し た。

技術は個人主義的な社会を可能にした。個人と社 会が容易に断絶し、個人の中でも精神と肉体との間 に齟齬が起きやすいのではないだろうか。だからこ そ、相互に関連する四つの概念によって健康が認識 され、治療されるべきなのではないかと提案したい。

(1)人間の肉体に関する身体的認識(Physical)、(2) メンタルヘルス等の精神的認識(Psychological)、 (3)人間の相互関係、共同体を示す社会的な認識 (Social)、(4)哲学、宗教など人が生きる意味、そし て死について考える信条の認識(Spiritual)。これら を考慮し、人間の身体を肉体的な観点のみではなく 総合的包括的に捉えてこそ効果的な治療ができ、「健 康」を目指すことができるのではないだろうか。

ターミナルケアを一事例として説明したい。現状 では目前にある患者の痛みを緩和する事に集中し、 肉体的治療を過度に重視するために患者の精神的、 社会的、信条的なケアを看過している。死を迎える 患者にとって身体的痛みの緩和は必ずしも最優先事 項ではないのだ。

# HEALTH Spiritual vsical Psychological

まず、死に対する不安や恐怖、体が思うように動 かないことへの苛立ちや無力感といった精神的な痛 みへの対応が軽視されると抑鬱や無力感は自殺願望 を導き、患者が生きる希望を失くし治療を拒否して しまう場合さえある。故にquality of life(QOL)だ けではなく、死を迎える瞬間に注目したquality of death(QOD)という観点を重視し、精神的な苦痛を 改善することも終末期における患者に必要だ。さも なければ、病気に対する医学的な治療が無意味にな る可能性もある。

また、社会的な繋がりも重要である。現在は死を 病院で迎えることが多く病院の中で人生の最期を過 ごしている患者にとって、他人との関係の希薄化や コミュニケーションの不足は当然起こり得る。しか し、仮に患者が在宅介護を希望して自分の最期を自 宅で家族に看取られながら迎えたいと願っても、必 ずしも実現するとは限らない。理由として、一つに 家族が自宅で介護するための十分な時間的、精神的、 経済的な余裕がないこと。二つ目に患者自身が家族 の重荷になりたくないと考え、この望みを伝えるこ と自体を躊躇ってしまうことが挙げられる。病院と 在宅介護の違いは、患者と周囲の関係性の密度が後 者ではより高いこと、また病院では患者自身が生活 者として扱われず治療の対象として主体性を抜き取 られていることである。人は他人との関係性の中で 精神的な安定を得て、生きていることを確認できる のだ。

最後に、一番認識されていないのは哲学や宗教などによって信条や信念をもつ、思想もしくは信条的認識の重要性である。これらは生きる目的や理由に強く関係しており、個人がそういった自らの基盤になるものを持っていないならば早い段階で生きる希望を失ってしまう可能性もある。「信条や信念」は自分の行動や思考の指針であるため、特定の信仰をもつことだと思われるかもしれない。しかしながらここで強調したいのは、自分の死生観について話す、生きる目的や大切さについて考える、それらを周囲と共有することの重要性であり、必ずしも宗教である必要はない。信条的な健康を獲得する第一歩は「死」をタブー視せずに、深く考え人と話すことではないだろうか。

多くの医療分野において患者の健康は未だ肉体的 な側面のみで捉えられており、ターミナルケアはそ の事例のひとつにすぎない。科学技術の発展により 病院で死を迎えることが一般的になり、科学的治 療の恩恵の下に身体的苦痛が最小限に抑えられて 残された人生を過ごせるのは確かである。しかし、 QOLそしてQODは十分に考えられているのだろう か。死への謙虚な洞察があってこそ、真の意味で「生」 を考え理解することが可能になるのではないだろう か。現代社会は身体的、精神的、社会的、思想もし くは信条的という四つの側面により包括的に健康を 捕え、治療方針および「健康」を再考する必要性があ る。限定された側面からのみ健康を捉える弊害は大 きく、それを乗り越えるためにも我々一人一人が自 分自身を見つめなおす必要があるのではないだろう か。

# 分科会感想

#### [Dylan Tracy]

What I found most interesting about RT is this. Our topic was Modernized Technology and Health. This meant to me and to most of us I believe that we would be discussing how certain technologies have impacted society's health. In all our discussions about terminal care, organ transplantation, suicide, fast food media etc., we always arrived at a discussion of ethics. Indeed, one of the big themes of final forum was that what you can do technically and what you can do ethically are not the same. In a world where we like to say that there are no moral absolutes, that each person has different moral beliefs and thus we cannot agree on what is morally right and wrong, I found this very interesting.

Why? Because all of us would agree that websites encouraging "efficient" ways to commit suicide are not only damaging to society's health, but they are ethically wrong. All of us would agree that marketing a drug which you know causes heart problems is unhealthy and ethically wrong. We all came to the agreement that much of the problems in health in today's society stems from the family itself. Parents either neglect to teach their kids about proper health, or they indulge them too much, leading to rising levels of obesity and general unhealthy lifestyles in children. If we are arguing that parents ought to teach these things, is this not an ethical responsibility?

Thus, in our topics, I found it very interesting that the discussion always centered on "We should not do X," or "X is unhealthy," which meant in most cases that we were arguing these statements on ethical grounds. Thus, the depth of our topics went beyond just health. We were arguing on moral/ethical grounds as well.

#### 【梅本勇基】

全人的医療の必要性が叫ばれて久しい。しかし、 実際には何処まで医療は変化してきたのか。現在 の医療技術は極めて高水準にあり、私達は多大な る恩恵に浴している。従って、私は先進医療を否 定はしない。しかし、私達は「技術」主義に偏重し ているのではないか。当分科会では、医療に関し てspecialist⇔generalist、technology⇔religion、

#### 第4章 分科会活動

individual⇔community等の一見相反する関係のサ イクルに関して議論をした。私はこの議論を通して、 これらは絶妙なバランスの下に静止しなければなら ないと考える。即ち、individualである患者にとっ て、特定の疾患に対してはspecialistやtechnology の介入が必要であるが、一方で精神面(広義の religionが関係しcommunityも重要な役割を持つ)

をも含めた全身的ケア(generalistが行う)が重要で ある、ということである。前述のサイクルにおいて、 その一方が独立して重要な訳ではないのである。

私は将来generalistとして医療を行っていきたい と考えているが、RTでの議論はgeneralistの重要 性を再認識させてくれる大変貴重な機会であった。



▲ファイナルフォーラムの後レセプションにて

# 環境と持続可能な発展

~ Environment and Sustainable Developmen ~

# 分科会メンバー

松尾 恵輔\* 浅野 泰史 加藤梓 杉本友里 山本佳世 Yoshihiro Kanemitsu\* Daniel De Rienzo Leah Flake Mariama Holman Xiao Min Zhao (\*はコーディネーターを示す)



# 分科会概要

現代の世代が、将来の世代の利益や要求を充足す る能力を損なわない範囲内で環境を利用し、要求を 満たしていこうとする「持続可能な発展」は、京都議 定書やアジェンダ21など、環境問題を始めとした地 球規模の問題に対する世界的取り組みの理念であ る。しかし、1987年に国連の「環境と開発に関する 世界委員会(ブルントラント委員会)」がその報告書 "Our common future"でこの理念を広めて以来、20 年が経過しているにもかかわらず、地球温暖化や資 源枯渇等の問題は悪化、複雑化の一途をたどり、我々 の社会の発展が持続可能であるかは疑問である。本 分科会では、持続可能な発展の意義や可否を複眼的 に考察し、今後我々の世代は環境保全と社会的、経 済的発展との調和をいかに達成すべきか、模索して いきたい。

#### はじめに

#### 1. 分科会テーマへの思い

「幸せな生活とは何か。」この問いへの答えが現代

ほど曖昧になっている時代はないだろう。

一義的に、物質的な欲求を追及する事が幸せとさ れていた高度経済成長以降の日本。そして強欲な資 本主義に支配されていたアメリカ。これら二つの国 の人々はそれぞれ、バブル崩壊・金融危機を経て、 人と人とのつながりを重視し、物質だけでは満たさ れない「精神的な豊かさ」に焦点を当てるようにな りつつある。こうした時代背景の中で、改めて「人 間はどうあれば幸せか」を考え、それを実現するた めの社会モデルを「環境」という視点から導き出した い、という思いでこの分科会のテーマは作られた。

#### 2. 分科会メンバーへの思い

分科会リーダーは参加者に、分科会のディスカッ ションを通し、「自分たちのバックグラウンドとそ こから生まれる価値観の違いに触れる。」「どの様な 生き方が望ましいかという、参加者自身の人生にも 関わる問いに立ち向かう。」「議論の過程、自分の疑 問を決して放棄しない。」事を望んだ。

## 事前活動

#### 1. 春合宿

日時:5月2日(土)~5月4日(月)

場所:国立オリンピック記念青少年総合センター

日本側の分科会メンバーが初めて顔を合わせた。 メール上では自己紹介を済ませていたが、直接会っ て話をしてみると、期待以上に個性溢れる顔ぶれ だった。今後の方向性を決めるため、まずはそれぞ れの関心や問題意識を共有した。一口に環境問題と 言っても、その内容や種類は多岐に亘る。メンバー からは環境教育や生物多様性保全の重要性、里山理 論の尊重、途上国開発における環境問題への指摘、 そして環境CSR (企業の社会的責任)の応用による 環境保全まで、さまざまなアイディアが出た。次に、 テーマに対する定義を明確にすべく、「環境」とは、 そして「持続可能な発展」とは何か、といった具合に ブレインストーミングを行った。最終的に、「人」を 軸とし、「人間と環境の調和」を議論の柱にしていく ことで合意した。専攻分野の異なる仲間から多くの 刺激を受けた3日間であった。 (山本佳世)



#### 2. 小池百合子氏訪問

日時:6月30日(火) 17:30-から18:00

場所:衆議院第一議員会館

小池先生に伺った点は3つ。(1)日本が環境分野でリーダーシップを発揮するためにはどうしたらよいか。(2)環境大臣時代に政策を行う上で困難と感じたことは何か。(3)クールビズなど小池先生が行われた政策の自己評価。である。(1)について、小池先生は環境税など国内法を整備する必要性を挙げられた。日本人の優れた点である「もったいない等の

環境を大事にする精神」と、「環境技術」の二つを活かすために、政府による枠組み作りが重要であるからである。(2)については、省庁の縦割り体制の弊害を挙げられた。海外との国際的な条約作りを行う際も、省庁間での打ち合わせに時間と労力を割かれ、なかなか交渉を思い通りに進めることができないという。そして、その解決策として政治の力で縦割り行政を潰す必要性を挙げられた。(3)について、毎日の生活の中の行動から意識変革を起こすクールビズは大変意義があると仰っていた。服だけでなく、生活の隅々にまでクールビズを広げていくことが必要である。 (松尾恵輔)

#### 3. 清水教授

日時:7月14日(火) 17:00-

我々は新川崎にある慶應義塾大学環境情報学部教 授の清水浩教授の研究室に訪問した。ここでは、清 水教授の長年の研究の成果である高性能電気自動車 (EV)のEliicaに試乗した。Eliicaとは、リチウムイ オン電池、ネオジウム鉄磁石を使ったインホイール モーター、そしてIGBTというトランジスタを使っ たインバーター (モーターの動きを司る機械)を中心 として、車輌下部に走行に必要な機器を集積させる 新しいEVの構造、「集積台車」をベースとした従来 の車輌と異なる現在社会で注目を浴びている電気自 動車である。我々は、運転する清水先生の助手席に 乗り、140mほどの距離を時速100キロで乗車した。 実際にEliicaに試乗することにより、清水教授が話 す、Eliicaの特性である「加速感」「乗り心地」「スペー ス感」を体感した。Eliicaは、世界で一番早い時速 最速370キロで走行する点、通常の4輪ではなく8輪 で走るという独自性からも注目を浴びている。2009 年8月には、慶應義塾大学発のベンチャー企業とし て、清水教授らが新会社「SIM-Drive」を立ち上げた。 これは、インホイールモーター技術をベースとした 集積台車構造による電気自動車の普及を目指したも (加藤梓) のである.

#### 4. ICETT

6月18日、我々はICETT(財団法人 国際環境技術

移転研究センター)に訪問した。ICETTとは、我が 国が蓄積した環境保全に資する産業技術と行政施策 を活用することで地球環境の保全を目指した財団法

ICETT職員から設立背景を伺うことで、環境問 題を解決するには、企業側の発展のみでなく住民が 声を上げること、産官学の協力が必要不可欠だとい うことを改めて痛感した。

アルゼンチン、ブルキナファッソ、ガーナ、トルコ、 など7カ国からの研修員とのディスカッションの中 で、ガーナやブルキナファソといった同じアフリカ にある国でも環境教育に関する達成度に大きな違い があること、トルコのように失業率が国の大きな論 点であるために環境問題は大きく取り上げられない 現状を知った。

そして何よりも「先進国」側が何かを「途上国」側に 何かを「してあげる」という概念を消し去り、共に同 じ土俵に立って解決していくという考え方でなけれ ばならないことを強調された。 (加藤梓)

#### 5. 国立環境研究所 增井利彦様訪問

日時:7月15日(水)

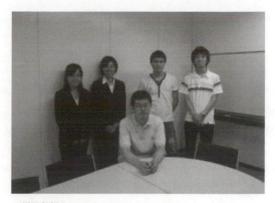
場所:東京工業大学 社会工学研究室

講師: 増井利彦様 国立環境研究所 社会環境シス

テム研究領域 統合評価研究室 室長

東京工業大学大学院社会理工学研究科 連携 准教授

そもそもの持続可能な発展の定義から、持続可能 な社会の長期ビジョン構築、ビジョン達成のための シナリオ分析についてのお話を伺った。その後、今 後の環境政策や持続可能な発展のために、産官学の 各セクターに期待される役割について議論をした。 この議論には、増井先生の研究室に所属している学 生さんにも、参加していただいた。議論の中で、日 本にとっての課題として、政治家の明確な意思決定 の重要性と、特に他国の注意を引けるような戦略的 な報道力などが指摘された。他にも人材育成や幼少 から価値観を養うための教育、メディア、企業、研 究者による情報発信の重要性まで、多岐に渡る議論 となり、様々な側面から持続可能な発展について考



▲増井教授と。

えることができた。

(杉本友里)

#### 6. ESDJ

日時: 2009年7月17日(金)

場所:環境パートナーシップオフィス エポ庵

講師:佐々木雅一様、村上千里様

NPO法人「持続可能な開発のための教育の10年」 推進会議(ESD-J)を訪問した。ESDに関する基本的 な考えや、実例をもとに紹介していただいた後、参 加していただいたボランティアの学生の方も交え、 テーマを挙げてディスカッションを行った。

今回の事前活動を通して印象的であったのは、2 点ある。

1点目は、挙げていただいた事例に関連し、宮城 県で小学1年生から6年生の子供達を対象に、それぞ れの学年にあった環境に対する教育プログラムを 行っていたことである。各学年で体験することが、 点で終わらず、線となって方向性を示していること に意義を感じた。

2点目は、小さいころに体験したことが、将来に 役立つ可能性を秘めているということである。理解 できなくとも、とりあえず体験したことが、成長し ていく上で、貴重な財産になることを感じた。(浅野)

#### 7. 毎週の分科会ミーティング

春合宿から本会議まで、「環境と持続可能な発展」 に関する勉強をするべく、毎週スカイプによる勉強 会を行った。分科会の目的、目指す方向性といった 全体的なことから、各自が取り組んできた勉強の共 有、次週までに各々がどのようなことを行うかと いった個人の活動まで、幅広く網羅して行った。

スカイプミーティングを行う上で、最も重要だと 感じたことは情報の共有である。環境と持続可能な 発展という幅広く抽象的なテーマを一般論で終わら せない方法は、より問題の焦点を絞り、具体化する ということである。その切り口はメンバーで異なり、 各自のテーマで具体化するため、定期的に情報を共 有しなくては方向性が一致しなくなってしまう。こ のスカイプミーティングを本会議まで行うことで、 一人では知りえない情報や各人の考え方、意見など を共有し、本会議までの時間を有意義に過ごし、メ ンバー内のコミュニケーション向上にも役立った。

(浅野泰史)

# 本会議活動 本会議中のフィールドトリップ

①清水先生

7月30日、9時より我々は清水教授の研究室に再度 訪問した。本FWでは、大きく3つのことを行った。 まず、初めに清水教授からEliicaに関する説明を受 けた。その後にEliicaに試乗し、最後に、慶應義塾 大学の西山敏樹講師に我々からの質問に答えて頂い た。清水教授と西山講師とのお話の中で、問題となっ たのは環境に優しい技術は十分あるにも関わらず、 それを大量普及させる手段がないことだ。日本の企



▲電気自動車ELICAに試乗!

業の中で、どうしても中小企業を守ろうとする傾向 がある中で、自動車内部の構造が従来と全く異なり、 部品数が従来の自動車より減少する電気自動車はな かなかうまく普及しない。これを背景に、Eliicaな どの慶應型の電気自動車も、普及に向けて連携する 相手は自動車会社に限らず、IT企業や鉄道車輛製 造会社等に広げる可能性もあるのではないかと考え られる。本FWで環境技術において求められるもの は、研究費を注ぎ込むのではなく、その技術におい て知的財産を仲介するコンサルタントの育成や、そ の連携先であることを学んだ。 (加藤梓)

②イクレイ日本訪問

日時:7月30日(木)

場所:コスモス青山 環境パートナーシップオフィ

ス内

講師:岸上みち枝様 一般社団法人 イクレイ日本

事務局長

「イクレイー持続可能性をめざす自治体協議会」 (ICLEI:International Council for Local Environmental Initiatives)とは、気候変動などの 地球規模の課題の解決に向け、自治体レベルで持続 可能な発展につながる取組を推進している国際的な 連合組織だ。今回は、イクレイの概要や、各自治体 による具体的な取り組みの事例とその効果ついてお 話を伺い、質疑応答を行った。たとえば日本では、 CO2排出量削減のために自転車の企業を援助した り、米では雇用の創出や福利厚生の改善に貢献した りしている。アメリカは州レベルでの自立度が高い ために、自治体の持つ力にも日米で差がある、とい う話が印象的だった。自治体という身近な視点から 持続可能な発展について考える機会となり、議論も 充実した。 (杉本友里)

③北海道大学大学院水産科学研究所訪問

日時:8月6日(木)

場所:北海道大学大学院 水産科学研究院(北大函 館キャンパス)

水産と環境を融合させた研究をなさっている齊藤 誠一教授に勉強会を開いていただき、同教授ならび にI Nyoman Radiarta氏、Robinson Mugo氏の三 氏より講義をしていただいた。はじめにRadiarta 氏とMugo氏よりRS(リモートセンシング:対象を 遠隔から測定する手段)ならびにGIS (地理情報シ ステム)についてのレクチャーを受け、最後に、齊 藤教授がこれらの技術を利用した漁業システムにつ いて、具体的事例を交えたレクチャーをして下さっ た。漁船に搭載する機器を実際に見せていただいた り、それを使用した際の効果をパワーポイント上で シュミレーションしていただいたりと、非常に興味 深かった。齊藤先生は産学連携による水産海洋情報 センター機能を持つ事業組合にて技術顧問もなさっ ている。 (山本佳代)



▲齊藤教授との質疑応答

④C.W.ニコル

日時:8月9日(日)

場所:財団法人 アファンの森事務局

講師: C.W.ニコル様

イギリスウェールズのご出身で、日本では作家、 環境保護活動家、探検家として名高いC.W.ニコル 氏を訪問した。財団事務局の職員の方にもご同行い ただき、実際に森を散策しながら、1986年から行っ ている里山の再生活動とその効果、ご自身で設立 されたアファンの森財団や、ニコル氏が世界各地で 過去に行ってきたお仕事についてお話を伺った。ア ファンの森は、これまでの再生活動で、昆虫から大 型の動物まで種数の回復を見せ、豊富な遺伝子資源 として機能するようになっているそうだ。途中、色

とりどりのきのこをはじめ、珍しいトンボや、カワ セミの姿も見ることもできた。様々な生き物が息づ く雑木林の中を、ざくざくと歩くのは、普段のフォー マルなFTとは全く違って一同楽しんだようだった。 (杉本友里)



▲C・Wニコル氏を囲んで

#### (1)本会議の流れ

In our first meeting, we learned about just how diverse environmental sustainability was we each had different definitions and goals for our topic. However, we all learned that despite our differences in perspective, we could all agree on some universalities. We defined environmental sustainability as a self-sustaining conservation of environmental resources for the benefit of future generations. We all decided that all of our solutions to environmental problems, such as Corporate Social Responsibility, Environmental Education, Electric Cars, Environmental Infrastructure, and other presented ideals, required two basic forces: awareness and technology. As one delegate diagramed early in to the conference, awareness signifies the cultural change that society needs to initiate changes in its decision making process. Many day to day consumption and production decisions are based on costs. Each producer and consumer looks to receive the best financial gain- the cheapest

product for your quality for consumers, and the highest cost for your supply, as a producer. Society is a stake holder in this model, since both government, business, and the general public are informed by the influence of money. The environmental roundtable agreed that awareness is crucial for changing society so that money is utilized in a way that encourages environmental consideration instead of environmental degradation. Awareness can restructure culture so that it is more affected by the environmental problems in the world, for one cannot be truly concerned about an issue that they know nothing about.

As, we discovered that the biggest issue facing all of the topics our research discussed was the lack of awareness, we devoted our time to finding ways to fix this problem and encourage sustainable development. (Mariama Holman)



▲ファイナルフォーラムに向けた議論の様子

# 分科会参加者の声 【浅野泰史】

個人的に感じたことは以下の2点。1点目は、日本語でも英語でも意見を説明する義務があることだ。本会議までは、日本側参加者でミーティングを行い、ギャップを埋めることは問題ではなかった。しかし本会議が始まり、アメリカ側が参加すると、今までの議論は崩れ、一から立て直す必要が出てきた。知

識や背景が異なる故の当然の結果だが、私が考えたことや腑に落ちない点をしつかり表現し、説得する、この重要性を強く学んだ。

2点目は、アカデミックな議論はできないということである。分科会のメンバーは専攻や学年も異なり、多様性に富む。しかし、多様性の脆さは、あるテーマを共通して深堀りできず、フランクな意見交換に終始することだ。だからこそ、置くべき重点は、アカデミックさの追求ではなく、多様性のメリットである、「その人」の考え方や理念の追求であると感じた。

最後になるが、この会議への参加が将来役立つと 信じて、日々成長したいと願う。

#### 【加藤梓】

環境RTを終えて感じることは、我国では果たして効率的な環境技術における資金協力が出来ているのかという点である。このことに関しては、国立環境研究所の方の言葉を引用するならば、「日本はアメリカのように、もっと集中的に思い切った投資をする必要がある。」環境RTの事前活動そして本会議を通して日本とアメリカが双方から環境面で学べる点を、多く学ぶことができた。

また国家間のみでなく、本会議ではアメリカのデリゲーションからの刺激を常に受けていた。引き出しの多さ、ファシリテーション能力の高さ、着眼点の鋭さ、学ぶことが多くあった。日米の学生が互いに切磋琢磨し、成長し合う中身の濃いあっという間の1カ月だった。共に、日米、そして世界の問題について真剣に考え、共に1カ月、RT以外でもあらゆる壁にぶつかりながらも乗り越えたことで、我々は個と個の繋がりではあるが、今後の日米関係に必要な確かな絆を結ぶことが出来た。

#### 【杉本友里】

『人と環境が調和した社会』を実現する方法とは。 私は生態学を勉強していて、生物多様性や外来種問題などに興味がある。最初の頃は環境問題と言ってもそれしか関心がないと言っていいくらいだった。 しかし、議論が始まってみると、メンバーの多様さ

故に、様々な問題意識とアプローチが浮かび上がっ てくる。途上国の環境問題、技術移転、環境教育、 CSR、など、自分の意識に上ることのなかったも のが次々登場し、それらは瞬く間に私の視野を広げ てくれた。また、環境問題の解決は、経済の発展を 阻むものではなく、むしろ生活を豊にする重要な手 段だと再認識することができた。私は冒頭の間の答 えをまだ見つけていない。しかし、環境分科会に参 加したからこそこの問いを得て、そして今後も問い に挑戦していこうと思うようになったことは、大き な収穫だ。最後に、事前活動から数えて全9回もの FTを通じて、環境RTにご協力頂いた全ての方、そ して他でもないRTメンバーの一人一人に、改めて 感謝の気持ちを伝えたい。

#### 【山本佳代】

「環境」も「持続可能な発展」も、最近よく見聞きす る言葉だ。グローバリゼーション下に生きる私達は、 足元を見ながらも地球規模で物事を考えていく必要 に迫られている。国境を超えて、さらには地球規模 でこういった問題を概観する時、そこには様々な利 害や思惑があるという現実を目の当たりにする。そ ういう認識を念頭において参加した分科会であっ た。環境教育、環境CSRを上手く活かし、問題の 改善に成果を見出せないものかと模索する中で、現 実を知り、失望感を味わうこともあった。しかしそ れは、現状を踏まえた上で建設的な策を考えるため の大切なステップでもあった。私達の分科会は活動 的だった。特に開催国である日本側のメンバーは、 「産学官」の各方面に亘る多くのフィールドトリップ を実現させ、いくつもの貴重な体験をした。また、 学生同士が社会科学、自然科学それぞれの視点から 意見交換をする中で、互いに新しい発見ができたよ うに思う。

# 分科会コーディネーター総括

私の分科会のコーディネートは、「学生らしい物 なんてまっぴら」というひねくれた思いからスター トした。近年環境問題を取り扱う学生団体は増えて いる、だがその一つ一つが「自分の身近から環境を 変えよう!」という結論に終始してしまっている様 に見えたのだ。一人ひとりの行動を呼びかけること は重要だが、社会の"枠組み"を変えなければ持続可 能な発展は不可能なのではないか。本分科会では、 身近な行動に目を向けながらも、より実効的な解決 策を、社会システムに着目しながら発見することを 目標とした。

そこで私たちが着目したのは、環境技術をどのよ うに社会に還元させるかという問題だ。慶応大学に 清水教授を訪ねたとき、優れた環境技術があるにも かかわらず、なかなか社会に普及しない現実を目の 当たりにしたからである。そこで、私たちは"環境 技術の社会への還元"を一つの目標に話し合いを行 い、ファイナルフォーラムでは、①電気自動車の技 術の移転②人々の環境意識を高めること、の2点に ついての発表を行った。

一ヵ月を終えてみて、はじめの目標を達成するこ とができたのだろうか。思うに、技術移転の有効な 解決策については不十分であった。この原因は、分 科会の時間の短さ、参加者の知識不足であろう。ま た、言語の違いにより分科会内のコンセンサスをと ることに時間がかかったという問題もある。考え出 した解決策についての検証が不足していた。

しかし、上記の問題点を認識しながらも、ファイ ナルフォーラム終了後の分科会で私は、達成感と満 足感を感じた。その原因は、お互いに「歩み寄ろう」 という日米両国の学生の姿勢であろう。残念ながら 1ヵ月という会議の期間は、持続可能な社会を導く 方策を考え出すことには不十分ではあったが、今後 の世界で、国や民族の利害の衝突を超え、対話と合 意を繰り返していかねばならぬ学生が、「相手の言 うことにしつかりと耳を傾け、納得するまで聞こう という」という態度を常に持ち続けていたことは大 きな収穫である。

このすばらしい経験を、我々は社会に還元する責 任がある。私たちが課題としてきた「環境技術の社 会への移転」ではないが、どんなすばらしい技術も 研究も、社会で生かされなければ意味がない。各メ ンバーには、この会議で培ったグローバルな視点や

#### 第4章 分科会活動

ションすらも活かして、それぞれの分野で活躍して ほしい。

最後に、この分科会をともに作りあげてくれた分

熱い心、そして社会や自分に対するフラストレー 科会コーディネーターのYoshi、大好きな分科会の メンバー達に心から感謝を表し、筆を置きたい。み んな本当にありがとう。

(松尾恵輔)



▲長野サイトで浴衣を着た分科会メンバーたち

# 公と私:公共の利益は個人の権利と両立できるのか

~ Public interest VS Individual right ~

# 分科会メンバー

田中豪\* 大谷翔 高木 あかり 谷口貴大 中村 真理 Edward Phillips\* David Myers Sakuma Risa Aya Spencer Victoria Zengo (\*はコーディネーターを示す)



## 分科会概要

公共の利益と個人の権利はいかなる時に両立し、 対立するのか。当分科会では、まずギリシア哲学な どの古典に目を向けて公共概念の歴史的変遷を学 び、次に現在の世界の事例を分析しながら両者の理 想的なバランスを探る。

扱うトピックは幅広い。プライバシー権や徴兵制 度、公的資金導入、フランスにおける公教育の場で のスカーフ着用問題などの政治、経済の問題から、 たとえば特許の帰属、すなわち、技術を発明した権 利主体による独占ではなく、社会に広く還元される べき点はないのか、あるいは税金が主要な財源であ る医療費が重病患者の余命を数か月伸ばすためだけ に投入されることは真の公共の福祉なのか、など科 学や倫理につながる分野までを扱う。そして、国際 連合などの国際機関による人権侵害を理由にした内 政干渉や集団安全保障、あるいは、地球温暖化をめ ぐる先進国と途上国の対立など、国際関係における 公と私、すなわち「地球益」と国益の関係までを論じ ていく。

#### はじめに

2008年8月20日-ファイナルフォーラムの翌日で あり、第60回日米学生会議の終了を翌日に控えてい たーがこの分科会の始まりだった。ボストンの中心 部にあるSuffolk Universityの一室に第61回会議の 実行委員が集まり、次年度の分科会のテーマとリー ダーを決める。どんなテーマがよいのか、と心の中 で思い描いている間に、他の実行委員たちは次々と ペアを決め、テーマを選び、輪から抜けていく。私 を含め4人が取り残されるまではあっという間の出 来事だった。すばやく決まった最初の5つの分科会 とは対照的に、そこから話はなかなか進展せず、結 局決まったのは期限の直前であった。ただ、誰より も時間をかけたという自負は、自分の決断ーLead "Public Interest Vs. Individual Right" Round Table with Edward Phillips-からあらゆる迷いを 取り去った。これこそが私の分科会への取り組みを 支える一年間の原動力だった。

それから半年間、分科会のメンバーに新しい参加 者を加えるまでに私とEdwardの間で決めたことが 2つある。一つは、第61回会議の参加者こそが分科 会を進める主体であるということ。もう一つは、分 科会のテーマに沿った具体的なトピックを参加者が それぞれ選び、そのトピックの専門家になることで、 自信と責任を持ってもらうということ。分科会で扱 えるトピックの幅が広いという特質を最大限に生か してほしかったからだ。

そして、2009年春に日米あわせて8人の新メン バーを加え、私とEdwardは彼らに運転席を譲り、 「公と私」は二度目の出発を果たす。加速すれば、減 速もする。前進すれば、バックもする。右折もすれば、 左折もする。目的地を変えたこともあったかもしれ ない。以下、10人でハンドルを、アクセルを、ブレー キを握った五ヵ月に渡る私たちの分科会の軌跡を書 き記す。 (田中豪)

# 事前活動

#### 1. 春合宿

日時: 2009年5月2日(土)-5日(火)

場所:国立オリンピック記念青少年総合センター

日本側の5人のメンバーが始めて顔を会わせる日 である。リーダーとしてこの日を心待ちにしていた。 分科会の時間になり、みんなが一つの机の周りに集 まって自己紹介をする。僕にとっては、本当に嬉し い瞬間だった。最初はこれまで大学でやってきたや 趣味の話をし、徐々に分科会のテーマに話題を移し ていった。春合宿では、今後の方針を決めることを 目的にしていた。主に、各自が興味を持つ分野を共 有した後で、それをどう分科会の中で生かしていく かを話し合った。科学技術の使用のあり方(大谷)、



▲春合宿にて

一人の決断と社会の決定の関係性(高木)、個人の権 利と政治権力(谷口)、国際関係における公と私と戦 争期の公私概念(中村)に興味を持っているようだっ (田中豪)

#### 2. 大川正彦先生

日時: 2009年6月9日(火) 場所:東京外国語大学

公と私を決める一つの要素として「正義」があるの ではないか、と考え、『正義』(岩波書店/1999年) の著者である大川雅彦東京外国語大学准教授のもと に中村真理・大谷翔・田中豪でうかがった。私は、 今回が人生初の外大訪問だったが、キャンパスのき れいさに感動した。落ち着いた雰囲気も素敵だった。 大川先生には、正義という言葉を定義することは可 能か、世界全体であてはまる普遍的な正義概念はあ るのか、正義の反対語である不正義とは何か、といっ た質問をなげかけていただいた。その答えを考える プロセスを通じて、今後公と私を僕たちが考えるに あたって参考になりそうなアイデアを見つけること (田中豪) ができた。

#### 3. 宮下紘先生

日時: 2009年6月18日(木)

場所:駿河台大学飯能キャンパス

防衛大学校研修の前日、JASCのOBであり、現 在駿河台大学法学部で教鞭をとっておられる宮下紘 先生に勉強会を開いて頂いた。憲法をご専門に研究 され、私人間効力を素材として私達の分科会のテー マであるpublic/privateに関して博士論文を書かれ た宮下先生にお話を伺うことができ、分科会の進め 方や扱う内容を試行錯誤していた私達にとって新た な発見に溢れた有意義な勉強会となった。まず始め にアメリカ側との共有が難しい'public'の定義につ いて、'public=government'と範囲を限定する考 え方と、'public=communityに代表される公共な るもの'としてpublicの範囲を広く捉える考え方と があり、前者のpublicは強制力を持ち、後者は強制 力を持たないという違いを確認した。宮下先生ご自 身は前者の考えに立たれ、「public/privateは例えれ

ばコインの表と裏の関係にあり、人や文化によって 捉え方の違いがより生じやすいために定義が安定し ないprivate/privacyからのアプローチよりも最初に publicを限定することで、残りの領域をprivateと して捉えることが可能となる」と教えて頂き、日本 側だけでも統一が難航していた定義の議論に新たな 一歩を加えることが出来た。そしてこの考え方の背 景として、憲法学者である先生が、「憲法を研究す る上では'いかに国をconstituteしていくか'つまり governmentに関わる部分が命題となるため」とおっ しやっていたことが興味深かった。

その他に、実際の事件をモデルとした公務員 の職務に関してのケーススタディ、2つの正当性 (legitimacy とjustification)を整理した上でのpublic reasonに関する議論、ニュースを賑わせていた足 利事件への言及や、アメリカにおける刑務所や日 本における郵便の民営化(privatization)に関する問 い(「民営化に伴うpublic/privateの位置づけ、再 構成をどうすべきか」)など様々な観点からpublic/ privateについて学ばせて頂き、参加者一人一人に とっても分科会にとっても大変貴重な機会となっ た。最後には先生が参加された当時のIASCでおっ しゃったという 'A man may die, a nation may rise and fall, but an idea lives on.(J.F.Kennedy)' とい うメッセージを頂き、アカデミックな面からも友情 を育み得るJASCの精神を考え、JASCerとしても自 覚を新たにした1日であった。お忙しい中貴重なお 話を聞かせてくださった宮下先生、本当にありがと うございました。 (中村真理)

#### 4. 防衛大学校訪問

日時:2009年6月19日(金)

場所:防衛大学校

私達の分科会では、防衛大生達と田母神論文を影 響力のある公人が個人の意見を自由に述べることに 対しての事例として取り扱った。公として影響力の ある人物の発言は、国全体のみならず、この場合は 東アジア諸国との国際関係にも関わる重大な問題で ある。議論では、政府見解にそって発言することの 正しさと間違いをまとめ上げ、意見を交わした。ま た彼らとは歴史解釈など田母神論文の内容そのもの や各国の軍備増強についても意見を交わした。

ここで驚かされたのは、防衛大生であっても個々 で問題の捉え方が違っていたことだ。訪問前には特 殊な校風と生活環境から考え方に大きな偏りがある のではという先入観を持っていた。しかし、実際に は防衛大生同士でも討論が交わされ、個々の主張が 強調されていた。まだ学生という立場だから出来る ことなのかもしれないが、同世代の彼らと率直に自 由な意見を交わせて本会議の良い準備になった。

(大谷翔)



▲防衛大学校の学生と

#### 5. 国立ハンセン病資料館訪問

日時:2009年6月20日(土) 場所:国立ハンセン病資料館

6月20日のフィールドトリップでは、4名が国立 ハンセン病資料館を見学した。大谷藤郎氏が「自ら に課したのが差別・苦難の歴史を世に残すハンセン 病史料館の建設とらい予防法の廃止の二つ」であり、 1993年に「高松宮記念ハンセン病資料館」が開館し、 1996年に「らい予防法の廃止に関する法律」が施行さ れ、2007年に「国立」資料館としてリニューアルし、 2009年に「ハンセン病問題の解決の促進に関する法 律」が施行された。

「公と私」分科会では、正義がどういうものであり どうやって作り上げてゆくのかについて混迷してい たから、現実に当初の正当性の根拠が失われても継 続された政策としてのハンセン病強制隔離について 見ることを提案した。

#### 第4章 分科会活動

都心から電車とバスを乗り継ぎ、樹木に囲まれた 広い敷地の中の新しい建物の中に到着すると、まず 日本における「ハンセン病問題」についての資料の東 をもらう。昔の生活を再現したもっぱら視覚的な展 示は、強制隔離された人が、「秩序」の維持された村 のようなコミュニティで、様々に生きがいを模索し てきたことを描く。「証言者インタビュー VTR」で は後遺症の「程度」や療養所の位置づけや隔離の歴史 と自己の体験の結びつけ方および社会復帰のあり方 が一人一人異なることを確認する。解釈は見る者に ゆだねられている。

法律(らい予防法)は患者と患者でない者という二 分法により直接に生活空間を分断した。それを端的 に表すものだが、今日ハンセン病患者診察経験のす くない/ない医療者向けおよび病院受診の手引きと いうパンフレットには、「はっきり既往歴を言えな いことをご理解ください。」「診断名のカルテへの記 載などにもご配慮お願いします。」という注意書きが ある。向かい合った人間同士は、もっと素直に、観 察し、話をし、訊くことに没頭してもいいのではな いか、と思う。 (高木あかり)

#### 6. 山田文比古先生勉強会

日時: 2009年7月15日(水) 場所:東京外国語大学

この日は中村真理の企画・立案のもと、彼女が通 う東京外国語大学の山田文比古教授を田中・中村・ 谷口の三人で訪問し、国際関係や外交における公と 私の在り方から、山田先生ご自身の経験まで、多彩 且つ貴重なお話を伺うことが出来た。山田先生は本 来外交官をされており、外務省と東京外大の交流事 業の一環として2年間に限り教鞭を取っておられる 方で、外交官としては湾岸戦争時の安全保障や沖縄 サミット、基地問題などに携わり現場の第一線で活 躍されてきた。勉強会では先生ご自身の外交官とし ての信念や、国際社会では一つの「個」に過ぎない日 本の外交政策がいかにあるべきか、国内と国外の二 つの主張の板挟みとなる外務省はどのような立場で 臨むべきか、我々は大学生として今何を学ぶべきか などを踏まえた上で、国際関係上の公と私の在り方

についてお話をしてくださった。

どのお話も山田先生ご自身の経験をもとにされて おり、机上の空論ではない、重みのある現場の緊張 感に溢れたものだった。その中でも、四書五経の一 つである大学の条目の中の四つであり、朱子学にも 通じる「修身・斉家・治国・平天下」についてご自身 の経験や信念を交えて語られ、身近な物事にも「公 と私」という大きなテーマを、実感を伴って考える ための大事な要素があることや、日常でも個人が絶 えず学び続ける姿勢を持つ必要があることを改めて 認識させられる、とても印象深いお話であった。ま た、奇遇にも先生は沖縄に赴任されていた際に、過 去の日米学生会議参加者とお話をされたことがあ り、勉強会は終始和やかな雰囲気に包まれていた。

(谷口貴大)

#### 7. 市民パワーと民主党の懇談会見学

日時: 2009年7月14日(火) 場所:民主党本部5階ホール

最近、公の主体としてNPOやNGOが注目されて いるので、実際にNPOやNGOがどのように政治に 取り込まれているのかを考えるヒントを得るために この懇談会を田中豪と谷口貴大で見学した。NPO が現状の問題点やその改善策を政治家にぶつけると いうスタイルだったが、印象的だったのは、NPO による陳情という側面を強く感じてしまったこと だった。

たしかに、NPOの活動の中には、公共と大きく 関係する領域もあり、実際にオンブズマン制度など を通じて徐々に現実の政治に対しても影響力を持ち 始めたが、全般的には、政府ではカバーできない部 分をカバーしたり、政府に対抗したりできるほど、 NPOはまだ独り立ちできていないのではないか、 と思ったのが私の正直な感想だ。一方で、民主党の 政治家が「公の担い手であるNPO」という言葉を何 度も繰り返していたのが印象的だった。個人的には、 一義的には政治家こそが公の担い手だと思っていた し、現実との乖離が見えてしまったからだ。

(田中豪)

# 本会議活動

#### 1. 東京

#### <概要>

東京では、各自が4月から取り組んできたリサー チを共有するとともに、京都で行うファイナル フォーラムで何をしたいのか、を話し合った。Ava は豚インフルエンザをめぐる世界の混乱とその規制 の仕組みを、Davidはアメリカにおける令状なし盗 聴を、Risaは沖縄の米軍基地問題を、Victoriaは千 代田区における路上喫煙の禁止をめぐる議論につい て調べていた。始めのうちは、発言することに尻込 みする人も多かったし、言語の問題からお互いの言 いたいことが伝わりにくい場面もあったが、1週間 もすればそんなことにも慣れ、議論は徐々に活発に なっていった。東京では、フィールドトリップとし て、靖国神社と併設の遊就館を見学した。

#### <靖国神社を訪れて>

靖国神社へは、日本人参加者のみで事前活動とし て一度、それから本会議中にも米国参加者と共に訪 問した。中学高校で受けた歴史教育は反戦教育の一 点張りであったのに対し、遊就館(靖国神社内の資 料館)では武士道、奉公などの伝統的な日本的思考 から歴史的な事実を並べて戦争に至った経緯が示さ れ、ある意味で資源の限られた日本が富国を目指し て戦争という手段を選んだことは納得がいくものと 捉える見方もできた。一方、米国参加者達は、戦勝 国として日本との戦争は真珠湾奇襲や硫黄島、ミッ ドウェー海戦での快勝に焦点が置かれていたもの が、日本の見解を知ることで戦争の無残さをより 深く感じていた。ここでは、ひとつの事実に対し て、視点を変えれば違った側面に触れることができ ることを実感した。特に、戦時下という極限状態の 「公と私」ということで特攻隊に焦点を当てて議論を 行った。国一丸となって戦う中、本来最も大切であ るはずの人命までもが犠牲にされる、国のためにと 強いられた、自ら志願したという事実は今では信じ がたいが、「滅私奉公」が究極に要求される事例だ。 さらに小泉元首相に代表される首相靖国神社参拝の 是非についても議論し、賛否両論のディスカッショ

ンができた。以下に影響力のある人物でも個人の権 利を持ち、参拝は批判されるべきではないという意 見に対し、国を背負う者として国際関係を意識して 公の役割を最優先するべきだという考え方が出され to. (大谷翔)

#### 2. 函館

#### 〈概要〉

函館のフォーラムが日米関係をテーマにしていた ので、Risaが調べていた沖縄の米軍基地をめぐる 問題をメインに話し合った。沖縄の中に目を向ける と、米軍基地の近くに住んでいる人と遠くに住んで いる人で騒音の感じ方は大きく違うし、基地から経 済的な恩恵を受けている人もそうでない人もいる。 もっと大きな視点から見れば、日本の安全保障は、 沖縄の米軍駐留部隊に大きく依存しているが、沖縄 住民の生活(=私)を犠牲にした日本全土の安全保障 政策(=公)と見ることもできる。このように、基地 問題を一つとっても、そこには公と私の関係が重層 的に存在しており、答えは単純には導きだせない。 議論は多いに白熱した。また、食糧分科会との共同 ディスカッションも行った。WTOを中心とする世 界の貿易秩序の是非や政府の農家補償の問題点につ いて話し合った。

#### <感想>

8月6日から7日へと日付が変わろうとしていた 夜、実行委員会のミーティングを終えると、廊下で Edwardに呼び止められた。真面目な顔で、「ちょっ と分科会の話をしたい」と言われ、彼の部屋に入る。 なぜか部屋が暗い。すると、突然電気がつけられ、 身を潜めていた分科会のメンバーから風船を一気に 投げつけられる。Happy Birthday to Youの歌とと もに。Surprise Partyだった。部屋に素敵なデコレー ションもあって、びっくりした。でも、本当に嬉し かった。分科会のメンバーのみんな、本当にありが とう! (田中豪)

#### 第4章 分科会活動



▲RT Birthday Party

#### 3. 長野

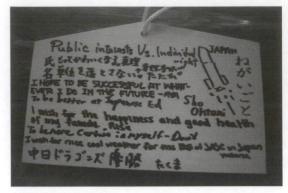
#### <概要>

長野では、小布施でのホームステイが長かったこ ともあり、分科会の議論をしたのは1回だけだった。 その時は、京都でのファイナルフォーラムでのプレ ゼンテーションのブレインストーミングと各自が小 布施で学んだことを共有した。観光都市である小布 施町が町の景観を守ろうとした結果、24時間営業の コンビニエンスストアや生活雑貨店が街から消え、 車を持たない高齢者に不便が生じているという点の 分析を試みた。

また、オフの時間には分科会のメンバーで善光寺 にお参りし、皆でそれぞれの願いを絵馬に託した。



▲小布施町のフローラルガーデンにて



▲絵馬をみんなで書いて

#### 4. 京都

#### <概要>

京都では、ファイナルフォーラムでのプレゼン テーションの準備に力を注いだ。プレゼンテーショ ンの時間は限られているので、これまで話し合って きたたくさんのトピックの中でどれを特に発表した いか、という点を中心に議論を重ねた。最終的には、 プレゼンテーションの始めの時間に寸劇をして観客 にリラックスしてもらい、その後で議論してきたこ とをサイトごとに発表する、という形に落ち着いた。 また、プレゼンテーションで扱えなかった内容もな んとかして形に残したいという点で一致したので、 分科会の新聞を作成し、当日に会場で配布すること にした。



▲ファイナルフォーラムに向けて作業中…

# 分科会参加者の声 【大谷翔】

公と私というテーマは初めて踏み込む世界だっ た。本当に答えがなく、全く終着点の見えない議論 をしてきたように思う。一ヶ月間、それぞれが思い 思いの考え方をぶつけ続け、追及してきた過程や結 論は決して綺麗にまとめられるものではなく、そし て英語の壁に苦しむ時も度々あった。正直、答えの なかなか見出せない議論にはもどかしさを感じるこ とさえもあった。しかし、今、会議を振り返ってみ ると、この分科会での活動を通して多様な価値観に 出会えたことはひとつの大きな収穫だったと思う。 公と私を考えるにあたり、問題には様々な側面が存 在し、バランスを探ったり、個を活かした社会貢献 を達成するには必ず多角的な視点が必要とされる。 結論はケースバイケースだが、ひとつひとつの問題 を深く掘り下げて、価値観をぶつけていく作業はす ごく楽しかったし、将来的に様々な対立問題に直面 する際にこの経験が役に立つはずだ。

結局、会議中は分科会メンバーと共に行動するこ とが多く、お互いを本当によく知ることができた。 事前活動でお世話になった方々と分科会メンバーに 深く感謝したい。

#### 【高木あかり】

公と私というテーマは、ともすれば、議論の焦点 を見失いやすい。

分科会では、まず、「公と私」およびPublic interest and Individual rightsの定義が並行して進 められ、「公共性」という言葉を考慮し政治の及ぶ範 囲に限局せず固定せず比較的緩やかに構造をとらえ ることを確認した。つづいて、公共の利益と個人の 権利のバランスを事例分析によって描くことを試 みた。論点は、社会〈公〉における決定を個人〈私〉の 自己決定の集積に還元できるとする考え方がどこま で有効なのか(もっとも、常識や道徳の影響をうけ ずに個人の自己決定がなされるというのは難しい)、 集団的な意志決定に還元できないことがらがあれば どこに根拠を求めることができるのか、ということ であった。しかし、議論をどうすすめるか確認しな

かったためもあっただろう、もどかしい思いで議論 を見守っていたメンバーもいたはずである。

限られた時間と集まるメンバーについてよく考え ておく必要がある。具体的に正義や道徳を並べてみ て、もし対立するならば、そこからどのように共通 項を引き出すことが出来るかといういわばデモンス トレーションをすることができたかもしれない。た だ対立を描くだけでは面白くないものだ。興味関心 は別として、異なる専門を修めようという10人であ る。言葉の裏にどのような思いがあるのか懸命に想 像しながら耳を傾け、意見を求めた。

#### 【谷口貴大】

JASCにおいて最も多くの時間を過ごす分科会と いう場、そしてその時間を共有する分科会のメン バーに、何を求め、何を得たのかという問いに、私 は一口に答えることが出来ない。ただ、確かであっ たことを述べるならば、分科会とは与えられたテー マについて各々の学生が思考と発言を繰り返す、学 生による議論の場であるという点において、そこで 何を述べるか、そしてそこに何を求めるかは、それ らが個人の考えに基づいた分科会の性質に合ったも のである限りは、全く自由である、ということであ る。例えば、与えられたテーマについて深く追求し ても良いだろうし、アメリカの学生と議論するとい う貴重な機会を活かした、自身のコミュニケーショ ン能力の実験と捉えても良いだろう。目的は無限に 見出せる。

しかし、自由であるということほど難しいことは ない。自分が分科会において自由を認められるなら ば、それは同時に他の分科会メンバーにも、同じく その自由を認めなければならないからである。当然、 個人間での意見や目的の不一致も生まれるだろう。 分科会はテーマが設定される以上、関連した事実を 調査し、確かさを積み重ねていく場でもあるが、同 時にその議論の過程と結論の行方には、多分に不確 かさを孕んでいる。そうした不確かさを解決するた めに、不一致を乗り越え、許容点を探ることはもち ろん重要である。しかし、意固地にならず相手の考 えを良く理解した上で、自分のそれとの不一致を受 け入れ、それでも尚主張したいことを見出せた時、 思ってもみなかったような自己の考えや、分科会に おける自分の新たな目的の全容、もしくはその片鱗 を見ることが出来るのではないだろうか。最終的に は結論という確かさを求められるかもしれないが、 その前に今一度自分に問いかけ、思考を巡らせるこ とで気づき得るものは、結論という結果より素晴ら しいものかもしれない。

「公と私 | 分科会において、私が求めたものの全て が満たされることはなかった。それが不確かである ことは確かであったのだから、当然の結果とも言え る。しかし、その不確かさゆえに私が見つけたもの は、当初私が思い描き、求めたものをはるかに凌ぐ 価値を持っていると確信する。そして、その存在に 気づかせてくれた分科会のメンバーに心から感謝し たい。

#### 【中村真理】

自分にとって全く馴染みが無いと思っていた「公 と私」という分科会テーマ。だけれども沢山のトピッ クから沢山の考えを重ねるうちに、私の日常にも、 様々な機関・組織・人が様々に形を変えて「公と私」 の構図を持ち浮かび上がるということに気付く。「公 と私」そして「Public Interest vs. Individual Right」 という定義そのものを捉えようとする苦労に加え、 戦時中の特攻、科学技術の扱い、ハンセン病といっ た具体的な事例を通しての検討。理想的なバランス を探ることは到底出来なかったしすべきではなかっ たのかもしれないけれど、これらを通して苦しんだ こと、考えたことを忘れないでおきたいと思う。

そして興味関心や価値観を超えて集まった10人の 出会いと共に過ごした時間、その中で感じたこと、 考えたことは、議論の内容そのものよりも強い印象 を持って私の中に確実に残り、これからも私に影響 を与え続けるだろう。はっとさせられたいくつかの 言葉、自分と差異が大きいからこそ驚き感心させら れた考え方や行動の仕方、といったものに全く触れ ていない自分を今では想像できないほどである。特 に日本側の皆とは沢山の時間を過ごしていたこと で、アットホームな雰囲気と仲の良さはお墨付き

だったね!どうもありがとう。

# 分科会コーディネーター総括

「公と私」というテーマ。哲学的な問いでありなが ら、現実とも大きく関係するテーマ。政治的であり、 経済的であり、文化的なテーマ。扱える領域もアプ ローチも、何もかもが、とてつもなく大きかった。 よく言えば野心的なテーマ設定。ただ、「無謀」の二 文字の方が本質を突いているかもしれない。第61回 会議を通じて、この分科会は、そして私は、何を得 たのだろうか。

この分科会を通じて、様々な体験を重ねることが できた。できたこともあれば、できなかったことも あった。予想通りだったこともあれば、予想外だっ たこともあった。成功したと思ったこともあれば、 思い通りにいかなかったこともあった。本当にいろ いろだった。そんなことを思い出しながら、一年前 を、そして、この一年間に渡って自分自身が考えて きたことを思い出し、それらをできるだけ丹念に繋 ぎ合わせようとしてみる。そんな作業を続けている と、ずっと忘れていた自分の原点を思い出した。昨 年の夏にボストンで実行委員になった時、本会議の 終了を終わりにしたくない、むしろ新たなスタート にできる会議を作りたい、そんな思いを胸に秘め、 一年間活動を続けてきた。それが私の原点だった。 分科会についても同じである。会議が終了しても、 分科会のメンバーのみんなと離ればなれになって も、たとえ日米学生会議のことを忘れても、ずっと 考え続けられるテーマを目指したのだった。たしか に、「公と私」というテーマは、1ヶ月で議論し尽く すには「無謀」なテーマだったかもしれない。しかし、 今後の人生をかけて答えを探していくには、なかな かやりがいのあるテーマと言えるのではないか。そ して、たとえ、将来、どんな世界に飛び出していっ ても、必ず考えなければならないテーマだと個人的 には思っている。遠く離れた無人島でさびしく一人 で生活しない限り、このテーマから逃れることはで きないだろう。正直に言えば、この一ヶ月で話せた ことはごくわずかだったかもしれない。議論もそん なに深くならなかったかもしれない。しかし、これ はあくまでスタートである。この後に続く、何十年 もの人生での宝探しのスタートではないか。

そんな目的地の見えない旅に突然に強引に誘い込 んだにもかかわらず、分科会のメンバーは本当に一 生懸命に取り組んでくれた。旅に同行してくれた分 科会のメンバーには心から感謝したい。一人ずつに コメントを書こうと思う。

大谷翔くん。数学が得意でロケットを勉強中の理 系青年は、いつもクリアに話をすすめてくれた。哲 学的な話になりがちな分科会の議論に、科学の観点 を加えることで何度も刺激を与えてくれた。そして、 のんびりしがちな分科会のお尻を叩き、軌道を何度 も修正してくれた。将来は日本の宇宙産業をリード していってくれるのだろうか。

高木あかりさん。みんなの意見を漏らさずにまと められたノートは、貴重なデータベースである。い つかそのノートを見ながら、みんなで今年の夏を振 り返ってみたい。僕の「滑った」冗談まで書き留めら れていないか、という心配はあるが、医療技術や研 究活動そのものだけでなく、それが使われる社会に

対しても疑問を持ち続け、何度も分科会で質問をぶ つけてくれた。将来はどんなドクターになるのだろ うか。

谷口貴大くん。始めは、英語に苦労し発言しにく かったかもしれないが、途中からは躊躇せずにどん どん発言してくれた。そのストレートな意見は、止 まりがちな議論をいつも活性化し、若さと元気さで も分科会を盛り上げてくれた。今後も引き続き日本 哲学を勉強していくのだろうか。

中村真理さん。春合宿直後から分科会を積極的に ひっぱり、企画してくれた勉強会は分科会の大きな 財産となった。時には繊細さで、時には鋭さで、分 科会に新たな色を添えてくれた。来年の夏は実行委 員として素敵な第62回会議を作ってほしい。

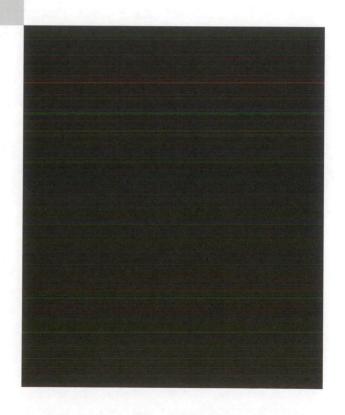
最後に、私たちの議論にスパイスを加えてくだ さった先生方には、いくら感謝しても足りることは ない。研究活動で多忙な中、勉強会を快く開催して くださった、大川正彦先生、宮下紘先生、山田文比 古先生には心からお礼を申し上げたい。(田中豪)



▲最終夜の記念写真

# 第5章

参加者の声



#### 浅野泰史

日米学生会議は私にとって非常に貴重な経験で あった。それは文化や背景、考え方、言語の異なる 学生とともに1ヶ月という期間共に過ごし、相互に 理解をしあうということが全く初めてであり、戸惑 いながらも分科会やフォーラム、見学などを通して 親交を深めるということは非常に刺激的であった。 ほとんどが素晴らしい記憶として決して忘れること のできないものであり、学生のうちにこのような経 験ができたことは私の視野を広めることにつながっ

#### 安藤歩美

現代世界を、何と形容すればいいだろう。

冷戦直後のフランシス・フクヤマの答えは「退屈」 であった。すなわち、世界でイデオロギー対立が終 焉したことで、これからは平和で、「退屈」な時代が やってくる一。ところが我々が今目にしているのは、 「混沌」たる世界ではないか。退屈どころか、内戦、 テロ、破綻国家を抱えるようになった国際社会は、 大変動の最中にある。

そんな混沌とした世界をより住みやすい場所にし たい、という漠然とした夢を胸中で描くものの、田 舎育ちの凡人。それを言葉に出すほど実現への自信 はなかった。私がこの日米学生会議に参加した理由 も、社会を主体的に変えていく人間になるだけの、 自信と覚悟をつけるためだったように思う。JASC への参加は私の中で、日本を、世界を動かすエリー トたちの仲間に入るための挑戦であった。

しかし会議では、自信をつけるどころか寧ろ限界 を感じることの方が多かったように思う。だがそれ は必ずしもネガティブなものではなく、自分とい う人間を見つめるいい機会になった。72人もの、文 化も思想も考え方も違う個性豊かな人間が集まる IASCという社会。その中で自分はどのような弱み を持っていて、逆にどの点で強みを持っているのか。 自分はどのような人間で、人間関係の中でどのよう な役割を果たすべきであるのか。いろいろな人と関 わり、ホテルの中、バスの中、散歩中、居酒屋など で毎日突発的に始まる議論を重ねるうちに、自然と 自分が逆照射され、自分の考えや人格を見つめなお すことができた。

アメデリが加わってからは、「日本人」としての自 分の特性をより意識するようになった。この会議で 再発見したのは、日本人の思考の深さは世界一なの ではないかということだが、国際舞台において活躍 するというとき、こうした日本人の特性や豊かな独 自の文化思想的背景を強みとして渡り合っていく人 間になりたいと、会議を通じて強く感じた。グロー バルな人間になるということは欧米的な価値観を持 ち合わせた人間になるということではなく、おそら く世界中のローカルな文化の美徳は国際社会におい ても活かすことができるのではないだろうか。背後 に独特の文化や考え方があるからこそ人はおもしろ く、世界に多様性が生まれる。アメデリと太平洋戦 争のことや現在の日米関係についてなど核心となる ような議論をした際、本当に語るべき考えがある際 には向こうも私の拙い英語を真剣に聞こうとしてく れた。こうした経験は、将来「日本人」として他国の 人々と付き合っていきたいという私の思いを強くさ せた。

日常から、世界へ。世界は様々な人の様々な働き によって成り立っている。東京のお偉いさんたち、 函館のイカ漁師さん、小布施町の農家の人々、京都 の能役者さん…それぞれがそれぞれの能力を活かし て社会を支えている。私には、この世界で何ができ るであろう。その答えはこの1ヵ月足らずの会議 では見つけられなかったが、きっと私にも、私の限 られた能力で私にしかできない働きがあるはずであ る。この会議で得られた宝物、大切な仲間と思い出 をたくさん胸に抱えて、この「混沌」とした現代世界 を、歩き出そうと思う。

## 飯沼瑶子

息を潜めてアメデリの到着を待った暗闇、全く覚 えられなかった最初の自己紹介、回を重ねるごとに みんなの新たな一面に触れた分科会やスペシャルト ピック、71人の内輪ネタとなったイカ学、日本の良 さを再認識させてくれた町、タクシーでコインラン ドリーを探した夜、日米の教育について語り合った はなまるうどん、朝の5時に鳴り出す誰かのアラー ムの音、JASCmailを書きながら迎えた朝。

本会議が終わって、もうしばらく経つのに、ふと した瞬間ひょっこりと、いとも簡単にJASCの思い 出がスライドショーのように再生されて止まらなく なることがある。

JASCとは自分にとって何だったのか。この答 えは今もまだはっきりと出せそうにない。だが、 JASCに参加して私が得たものなら、数え切れない 程挙げることが出来る。一番大きなものはやはり、 これから先もずっと61回のJASCerというつながり で結ばれた仲間だろう。

JASCerとして私たちがつながったと強く思えた、 忘れられない日がある。それは8月6日、函館で迎え た8時15分だ。もしかしたら、お互い一度もこの出 来事について語り合うことなく終わったかもしれな い原爆を投下した側の国と投下された側の国の私た ちは、同じ時間に同じ場所で同じ画面を前にして、 共に黙祷を捧げた。私たち72人が、教科書で学んだ ことはそれぞれ違うかもしれない、これまで育って きた環境の中で培った考えもみんな異なるものだ ろう。しかし、1分間の黙祷を終え、視線を交わし あった時、私たちは日本とアメリカという異なる国 の人という関係から、思いや経験を共有しあえる JASCerとしての関係に変わることが出来たように 思えた。

JASCで得たものは、楽しい思い出ばかりではな かった。それは、この一ヵ月では何度も自分の知 識不足を痛感させられることとなったからである。 様々に広い興味や視野を持つJASCerから新しいこ とを学べば学ぶほど、自分が何も知らないことに気 づき傷つくことも多かった。だが、それに気づけば 気づくほとに、また学ぼうというモチベーションを 保ち続けることができたのは、その悩みを共有し、 支えてくれたのもまたIASCerだったからである。

この学生最後の夏に出会ったかけがえのない仲 間。当たり前のように一緒に過ごした、本当は何よ りも当たり前でない一ヵ月間。あの一ヵ月を恋しく 思う瞬間は確かにあるけれど、不思議と寂しくは思 わない。それは、それぞれにとってJASCが持つ意 味は違っても、72人の人生の中に組み込まれた一ヵ 月間はこれからも変わらず、これから先の未来を作 り上げていく土台となって私たちをつないでいてく れると信じられるからだ。

"そのときの出逢いが 人生を根底から 変えるこ とがある よき出逢いを" -相田みつを

#### 衣袋聡

私達の仲間の一人が会議前から計画していた暗闇 の歓迎から始まった第61回日米学生会議本会議も、 今の私達にとっては「思い出」になった。私にとって の日米学生会議はどんなものになったのか。私はこ の機会から何を得て、そしてこの機会に何を与える ことができたのか。皆がそれぞれ別々の答えを持っ ているだろう。そして1934年にこの会議に参加した 先輩方も、同じように何かを得て、何かを与えて世 界に散らばって行った。そして彼らが築き上げてく れた世界に私達は生かされてきた。会議の終わりを 目前にして、私はようやく自分が大きな歴史の一部 になったことに気がついた。

会議が始まる前、日米学生会議は人生を変える経 験になると語った先輩がいたのを覚えている。1カ 月に渡るBRICS、開発、健康、公と私、環境、教育、 食糧についてのディスカッションと、著名な専門家 たちによる講演を通じて私はどうなったのか?

安全保障や地域活性化や新興経済についての問題 意識や知見は日米学生会議に参加したことで飛躍的 に高まったと感じている。日米学生会議が始まる前 までの私の内部の変化の過程を簡潔に記すとすれ ば、留学1年間を含む大学生活3年間の勉強で考えた ことが、就職活動という社会との出会いを通じて社 会の現実を考えるツールへと応用されつつあるとこ ろであったように思う。日米学生会議という環境で、 私は安全保障や地域活性化といった、まさに日本の 国家デザインについてあるべき姿を模索した。4年 生として参加した私にとっては、学生としての生活 の総まとめとして、自分の信じる理想に対して専門 家の批判を仰ぎ、アイデアに一層の幅と深みを持た せるべく会議の刺激的な友人と語らうことができた ことは、非常に意義深い。

また、日米学生会議が持つこのような知的側面の 意義を超えた部分への言及も不可欠だろう。日米学 生会議に参加する以前の私と現在の私の間での最も 大きな違いは、71人の友達ができたことだ。私達に とって、日本・アメリカは「国・国」として存在して いた。共に過ごした時間を通じて私達にとっての日 本・アメリカは「人・人」としての存在に変わったよ うに思える。

更に言えば、「人・人」の関係として結びついたその友達は、単なる友達ではなく、「自分自身のために」という殻を超えて社会の問題について本気で議論することができる友達であり、一つの目標に向かって 邁進できるかけがえのない仲間だ。

国から人への関係の変化、そしてその人・人の関係を通じてなされる「社会・社会」のデザインこそ、まさに1934年に大先輩達が思いをはせた、よりよい世界を構築したいという願いそのものではなかったか。私はこの想いのバトンを私達61回の仲間はしっかりと受け取ることができたと思う。これからは私達がこのバトンをつないでいく役割を担う。それは私達の日々の仲間に対する想いと、社会に対する想い、によってのみ脈々と生かされ続けるのだと私は思う。

小説家の作品は、時間の経過とともに処女作に向かっていくという。皆どこかで人生を振り返り、今私が生きているような二十歳前後の青春へと心が向かっていくのかもしれない。そうした意味で、この夏に築くことができた友情は、真に一生の財産になるのだろう。

2009年の夏は、私にとって学生としての最後の夏だった。一度しかない人生の中で22歳の夏はもちろん一度しかないが、私はこの夏をここにいる仲間と過ごせたことをとても幸せに思うし、誇りに思う。ここにいる全ての人、一緒に過ごした全ての瞬間に感謝し、その気持ちをこの先ずっと忘れない。

#### 梅本勇基

私は昨年(2008年)8月に広島で開催されたサマー

スクールに参加したことで、60th JASCの参加者と知り合いになり、このことがJASCの存在を知り興味を持ったきっかけでした。その後、JASC Presents in Hiroshimaに参加し、また第60回日米学生会議日本側参加者報告書を読む過程で、自らもJASCに参加したいと思うようになりました。

私は正直なところ、選考書類を提出した時点では自らが61st JASCの一員になれるとは思っていませんでした。しかし、今までは失敗を恐れ挑戦すらしなかったことで後悔をしたことが数多くあり、「今回はまず挑戦をしてみよう!」と思い、活発な議論の場・有意義な時間が与えられるJASCを想像しながら、必要な書類を提出しました。実際に61st JASCに参加できることが決まったときの喜び・期待を今でも覚えています。不安なこともありましたが、今回は挑戦せずに後悔はしたくないとの思いで、参加を決意しました。

私がJASCに参加した目的は大きく分けて3つありました。第一の目的は、様々な背景を持ち様々な分野を専攻している学生と、幅広い話題について意見交換・議論をすることでした。それは、常に幅広いテーマに対して興味・関心を持ち、かつそれらに対する考え方が隔たらないようにするためには、他者との意見交換・議論が必要不可欠であると考えているからです。実際にJASCに参加してみると、多くの参加者は各人が大学で専攻する分野以外に関しても興味・関心を持っており、新たな知識を得ること、議論をすることを楽しんでいました。私はこれらを通じて、自らの専攻する医学以外の分野に関しても様々な知識・視点を得ることができました。また幅広い教養を身に付けることの必要性・面白さを再認識することができました。

第二の目的は、医療以外を専門とする人が、医療の分野に関してどのような興味・関心や考え・要望を持っているのかを知ることでした。それは、将来医療系の職に就く私にとって、これを専門としない人の立場を知ることは、患者さんの気持ちをより理解した上で医療を行うために重要なことであると考えるからです。どのような分野においてもそうだと思いますが、自らの専門分野における常識が必ず

しもそれ以外の分野の人にとっても常識であるとは 限りません。また、知識や考えには個人差がありま す。このような至極当然のことを理解しておくこと は、如何なる分野を専門とする人にとっても非常に 重要なことであると考えます。私は第一希望の分科 会「現代社会と健康」に所属することで、実際に医療 系以外を専攻する参加者と活発な議論を行うことが でき、大変貴重な機会となりました(分科会におい て話し合った内容に関しては、分科会活動の報告の 項を参照して下さい)。

第三の目的は、医療系以外の人にも現在の医療制 度や「健康」とは何かについて、より興味・関心を 持ってもらうことでした。医療系以外の人が医療に 関して興味・関心を持つことは、医療が医療従事者 の自己満足に終わらず、個々の患者さんに適した良 質な医療を提供していくために重要であると考えま す。現在は過去と比較すれば、患者さんが自身に対 する医療について医師に一任するのではなく、疑問 点や希望する医療を医療従事者側に述べられるよう になってきており、これは大変良い傾向だと思いま す。この傾向を推進すべく、私との関わりの中で一 人でも多くの参加者が自身の健康や現在の医療制度 等に興味・関心を持ってくれたなら、大変嬉しく思 います。

JASC本会議の一ヵ月で、私がどれほど成長する ことができたのかは分りません。しかし、大切な仲 間と出会うことができ、今後の人生においてとても 大きな意味を持つであろう、と言うことはできます。 このような大変貴重な機会が与えられたことに感謝 をしています。

末筆ではございますが、多くの方々より本会議の 準備過程においてご指導を賜りましたこと、また本 会議の開催においてご尽力を頂いたことに、心より 御礼を申し上げます。

#### 大谷 翔

これまでに私は米国へは高校留学で約10ヵ月間 滞在したことがあり、その時にすでに米国に魅了さ れた。また、それなりに米国という国を理解してい たつもりでいた。そして、日本開催である第61回日

米学生会議では、今度は自分がホスト国代表として 彼らを魅了させてやる番だという意気込みを持って 会議に臨んだ。そんな会議中、常々気になっていた ことがある。彼らは日本に来て何を発見、そしてど う考えるのだろうか。日本の国際的なプレゼンスが 下がり、中国などの他国が台頭していくことが懸念 されるもしくはすでに進行中という情勢のなか、果 たして米国は日本に何を求めるのだろうか。本当の 日本の良さとは何なのか。日本開催であった今年の 会議はそんな問いに対する答えを探していく意味合 いを含んでいたように思う。

東京、函館、長野、京都は米国人学生達と回るこ とで、私達日本人にとっても新鮮な体験をする場と なった。東京では、分科会で靖国神社へ行き、日本 の辿った歴史について深く考える機会を得た。歴史 から見る日本的な考え方、日本がとった行動の妥当 性、甘かったお互いの歴史認識を素直に話し合い、 相手視点から物事を見つめることで真実の違った側 面が見えてきた。函館の透き通った空気の中では、 現地海産物を一緒に笑いながら味わい、フォーラム では日本の防衛について米国との関わりを真剣に議 論した。長野では小さな観光都市、小布施町で受け た笑顔に溢れ、美味しい料理を振舞う歓迎に感動し た。京都では観光名所を回り、ファイナルフォーラ ムに向けての準備にメンバー全員で共に悪戦苦闘し

気がつけば、日を追うごとに日本と米国の距離感 が縮まっていった。それは米国参加者の発言から感 じられた。長野で行った全員リフレクションの際、 Dylanが英語の壁があるのは仕方ない、米国側参加 者達はもっと日本側参加者の話を聞く姿勢を見せよ うと提案してくれた。また同じ分科会で最初はシャ イだったDavidが戸惑いながらも会議を良くしたい 気持ちをみんなの前でシェアしてくれた。米国側参 加者達の日本を理解しようとする歩み寄りは確実な ものだった。私はこの会議を通して彼らが日本の良 さを知ってくれたと自信を持って言える。共に長く 深く過ごしたことでお互いのコアな部分まで知るこ とはできた。日米学生会議を通して得られた一番の 収穫は?と聞かれれば、それは間違いなく同じ時間

と空間を濃密に共有した仲間達である。

また、本会議の中で私は常に自問自答していた。 この日米学生会議への参加、経験が私の将来にどう 活きてくるのだろうか?私自身と社会はどのように 関わっていくのだろうか?事前活動の一環として、 OBの方々にインタビューをする機会があり、本当 に魅力的な人格者ばかりで憧れを抱いた。しかし、 彼らの多くは商社マンで、自分の将来と重ね合わせ ることは困難だった。そして参加者メンバーの大半 は文系であり、工学部所属でエンジニアを目指す自 分とは根本的に社会貢献の仕方が違う。幸せを作 るエンジニアへの模索が続いていた。会議中、バス 移動の際に一人の米国側参加者と将来について話し たときに、"That's interesting! Sho, you yourself can be a new model.:)"とあっさり答えてくれた。 ないものは作る、選択肢を自分で新たに加えるとい うcreativeな発想が私には欠けていたのだ。

会議後、友人から「日米学生会議どうだった?翔 は結局、将来何がしたいのさ?」と聞かれた。その 答えに私は思わず、日本で『産業革命』を起こすと大 口を叩いていた。私の中での産業革命とは技術革新 から社会革新を起こし、世界を率先するモデルと なっていくことである。こんなことを平気で言うよ うになったのも日米学生会議を通して何か作り上げ ることに対しての可能性を大きく感じたからだと思 う。

#### 大西すなほ

時間というのは、不思議なもので時間そのものは 均一な成り立ちのものであるわけですが、それは いったん消費されるといびつなものに変わってしま います。ある時間はひどく重くて長く、ある時間は 軽くて短い。おそらく、私にとってハイライトされ る一瞬が、ほかの人にとっては記憶にも残らないも のも多々あると思います。

あの場所に身を置いていますと、自分が日米学生 会議から何を得るのか、逆に一体自分のような人間 が日米学生会議に、そして他のJASCersにギブでき るものがあるのか、構築した人間関係が明日へと続 くものなのか、特殊な環境下だからこそ成立しえた

ものではないのかという漠然とした不安につきまと われるのも事実です。

しかし、過ごしている時は気づきませんでしたが、 日にちを追って振り返っていると、そのような重く て長い一瞬が確実に多くなっていたことに気付かさ れます。同時に得たものも数えきれない。自分の力 不足に頭を垂れることもありましたが、その経験も 限りなく学んだことに近い。重要なことは、「じゃあ、 その経験をどうするのか」と次のステップに繋げる ことだと思います。

10年後、20年後に私達が連絡を取り合っているか どうか、私にはわかりません。進路も価値観も環境 も変わっていくでしょう。ただ、私は、あそこで、 私にとって大切な瞬間があったことを、何気ない言 葉をかけてもらったこととか、一緒に歩いた道や、 くだらない出来事に笑いあったことを、そんな数あ る時間を私が記憶しているという、それでいいのだ と思っています。そして、私達が消費した時間を、 今度は自分で再生産していく作業、つまりハイライ トされる一瞬から、自分が何を考えられるのかを探 究する作業をどのように遂行していくか、そういう 意味において、私の日米学生会議はまだ終わってい

そして、この報告書をご覧になっている方々の中 には次の日米学生会議に参加するか迷っている方も いらっしゃると思います。ただ言えるのは、私もそ うだった、ということです。受かるなんて全く思っ ていなかった。正直、未だにわかっていません。

それでも最後に、このような機会を与え、運営し てくれたECの皆、特に私の健康分科会の皆に心か ら御礼を申し上げたいです。私にとってRT活動が 一番の実りあるものだったことも、エミをはじめと した皆のおかげです。

本当に行ってよかった。家にいて夏休みをただ過 ごしているよりも、みんなと話ができて、色々な物 を食べて、色々な場所に行って、実に恵まれていた と思います。本当にありがとうございました。

#### 大宮 透

日米学生会議に参加する前の私は、さしてアメリ

カに興味や知識があった訳でもなく、アメリカに対 して抱いていた印象も決して良いものではなかっ た。それでも、会議に応募しようと決心した理由は、 信頼できる会議以前からの仲間が、第60回会議を通 して大きな成長を遂げる姿を見ていたこと、また特 に教育の分野において、様々なバックグラウンドを もつ人々と意見交換をし、そこから自分ができる何 かを見つけたい、というこの2つの思いがあったか らだった。

会議は約3ヵ月の事前準備と約1ヵ月の本会議を もって、先日、一応の終わりを迎えた。事前準備の 中では、特に同じ地球市民教育分科会に所属してい たメンバーと、フィールドトリップやメール、スカ イプ等での議論を通して、強い絆を深めることがで きたし、分科会以外でも、5月の春合宿、7月のサハ リン訪問などを通して、日本側メンバーとの個人的 な繋がりを築くことができたと思う。私にとって、 年齢や学年、さらには各自が持っている知識や専門 を超えて、フラットな関係のなかで過ごす日米学生 会議での日々は、非常に刺激的かつ新鮮なものだっ た。時には就職活動や今後の人生について一晩中語 り明かし、時には日本や世界の未来について、真剣 に語り合える仲間を得られたことは、私にとってこ の上ない喜びである。会議の性質上、どうしても"日 米"での交流が話題の中心になるが、約4ヵ月間の会 議のなかで得られた日本側メンバーとの友情や信頼 関係は、私にとっては、この会議が与えてくれたか けがえのない財産の一つとなっている。

アメリカ側メンバーとともに過ごした本会議で は、事前準備の段階ではあまり見えてこなかった自 分自身の様々な問題が浮かび上がってきた。特に英 語力や絶対的な知識量の不足を感じることは毎日の 日課のようなものだったし、アメリカ側メンバーと の会話や議論の中では、これらの問題から派生する "自信の無さ"が、露骨に現れてしまっていたように 思う。しかし、その一方で、「何よりも重要なこと は、相手を理解しようとする心とそれを具現化した 積極的な行動である」という、最も根本的で、かつ 大切なことをも改めて確信することもできた。相手 に対して常に積極的に働きかけていく姿勢が、全く

違うバックグランドや考え方を持った両者の相互理 解のために、何よりも必要になってくると思う。日 本語でも英語でも、この姿勢を貫くことが本当の意 味での信頼関係を築かせてくれるということを、身 をもって実感することができた本会議だった。

はじめの方に述べたように、この会議に参加する までの私は、日米という関係をそれほど重要視した ことはなかったし、今までの自分自身の経験や知識、 人間関係が、どれほどこの会議の中で活かせるのか、 また、この会議で得たことがこの後の自分の人生に どのように関わってくるのか、全く予想することも できなかった。しかし、不思議なことにこの会議を 通して出会った多くの人々や、訪れた多くの場所が、 実は私の今までとこれからを繋ぐ不思議な関係性や 縁を持ち合わせているという確信を得ることが多々 あった。全てはどこかで繋がっていて、自分でもわ からない方向に私を導いてくれているような気がし てならない。私とこの会議を繋げてくれた友人が居 て、この会議の中で出会い、私の考え方を大きく変 えてくれた人々や場所があった。そして今、62回の 実行委員に立候補し、もう1年日米学生会議のなか で様々なものを吸収し、成長したいと願う自分が居 る。この不思議な縁が、今後どのように繋がってい くのか、今の段階では全く読めないでいるが、少な くとも今ここで言えることは、日米という関係がこ れからの自分の人生で重要な位置を占めていくだろ うという確信である。第61回日米学生会議から生ま れた国境を越えた友情や参加者それぞれの人生が、 この先どのように繋がっていくのか、楽しみで仕方 ない自分が居る。

#### 緒崎祐香

日本、そしてアメリカの各地から学生が集まり 一ヵ月間議論することの意義は一体何なのか。この 問いを考えずに、参加する本当の意義は見出せない と会議中感じていた。JASCが発足した1934年は太 平洋戦争直前でアメリカの対日感情が悪化する中、 学生が日米間そして世界のの平和を考えるという理 念があった。対して現在はグローバル化が進む社会、 懸念される国際問題はあっても日米は当時のような

緊張関係にはない。それならば、何故この会議が毎 年開催されていてOBOGを含む沢山の方が支援し て下さるのか。実行委員は何故、一年間IASCの準 備に全てをかけて精一杯取り組めるのか。最後の数 日間まで答えが見つからずにいたが、人と話をする 中で自分としての何かを導き出せたのではないかと 思う。JASCに参加することで、71人の仲間を得る ことができた。集団行動が苦手で自分の思う儘に行 動したがる人間だと自覚してる私が一ヵ月楽しく過 ごすことが出来たのは、素晴らしい仲間に恵まれた お陰だろう。住んでいる場所、通っている大学、専 攻の学問分野、生きてきた背景が違う人たちと一緒 に東京、函館、長野、京都と移動して交流すること は勿論楽しい。雑談からでもお互いに得るものは確 実にある。しかし、単に楽しい以上の価値を求める ことが可能な場がこの日米学生会議である。参加の 動機、求める意味や目標は各個人ごとに異なってお り、統一した見解を掲げようとすることは多様性の 否定だ。参加者がこれから先それぞれの分野で活躍 する中で考える事項の切欠となること、表層的な知 識ばかりでなく知恵を身に付けること、新しいもの に触れて興味を広げること。RTだけでなくフォー ラムやSpecial topic、自由時間の中で各自の目標を 追求する環境を提供できること。これがJASCの素 晴らしさの一つだと思う。私個人としては自分が今 まで漠然と抱いていた疑問について、沢山の人の意 見を取り入れることができたことがとても嬉しかっ た。特に大きな意味を持ったのは、長野サイトでの 新生病院の内坂先生との出会いだった。RTでの議 論が停滞していた時に新しい方向性を導く切欠を下 さっただけではなく、私が今まで考え続けてきた問 題についても実際に医療の現場で長年向き合ってき た人としての意見を頂けた。これから先、大学の卒 業論文だけでなく自分の生き方や考え方に対して も大きな影響になるだろうと現時点でも確信してい る。また、上手に役割分担しながら長い時間議論し 続け、ファイナルフォーラムで一緒に発表できた RT memberの皆に感謝したい。最後に、充実した 会議にする為に参加者それぞれが物事の本質を考え ようとすることは不可欠なのではないだろうか。例

えば「国際交流、理解、多様性、主体性をもって行 動すること」。単にこれらの言葉を口にすることも、 誰かが言っていることを聞いて解った振りをするこ とも容易い。しかし、本当にこれが何を示すのか。 自分との関わりが何なのか。自ら答えを得ようとし ない限り、只の楽しかったひと夏の経験というだけ で終わってしまう。JASCは、会議中だけで完結す るものではない。

#### 小野 元

自由――学生が繰り広げる議論の強みとして、す なわち日米学生会議のよさとして、僕がいろいろな 方々に説明してきたことだ。外部の利害を配慮する 必要もなければ、話し合った内容によって社会的制 裁を受けることもない。

だが、ことばを発するときに、自由であることを 徹底するのは難しい。例えば所属する会社のルール だとか、宗教の戒律だとか(決して宗教を軽んじて いるわけではないが)、自分以外のなにものにも拘 束されないことは、それらを自分の判断基準として 代用できないということだからだ。僕の場合、とき どき「実行委員だから」と、肩書きを自分の思考を避 けるための言い訳にしてしまい、後悔している。

外部から自由であることは、自分自身から自由で ないこと、自分はこの20年の経験からは逃れられな いことを浮き彫りにする。学生会議を何か特別な場 のようにとらえ、自分から切り離したことばを口に しても、意味がないのだ。例えば、僕が農業につい てどれほど理想主義的なことを語ろうとしても、農 業を体験していないことからくる後ろめたさが伴う が、この後ろめたさを拭い去ってしまえばもはや僕 のことばではなくなってしまう。自分から逃げなけ れば、それぞれのことばには、自分の中で、何にど のような意味を付与しているのか、すなわち何に価 値をおくのかがにじんでいる。

一般的には、価値が相対的であることが広く認識 されて以降、価値について語る無意味さや価値その ものの価値の崩落が指摘される。人それぞれの部分 は立ち入らず省略し、議論できる部分に焦点をあて るほうが合理的なのだろう。しかし日米学生会議で

は、分科会やリフレクションなどの機会で、何を重 要視するか、確固たる考えが定まっていなくても語 り出そうとする人が多く、またそれを正面から聞き 取ろうとする人も多い。僕はこの雰囲気に惹かれ、 この会議を通して、ことばを交わしながら、できる だけ他者の価値観に近づきたいと目標を立ててい

さて、目標が達成できただろうかと振り返ってみ ると、個人的には反省点が並ぶ。まず、体力不足や 実行委員としての仕事の準備不足から、参加者と話 す時間が少なく、さらに相手がなぜこう言うのかと 考えることが少なかった。例えば分科会セッション が終わる度に、日本側、アメリカ側ひとりひとりか ら意見をきこうと試みたりもしたが、伝達や応答の マナーも未熟だった。議論の組み立てに試行錯誤で、 より多くの参加者の意見を引き出せず、焦りから強 引に自分の意見を押し通そうとすることもあった。 「solutionという語でなくsuggestionを使うべきだ」 という意見のように、かすかな所に価値観は顔をの ぞかせていたのに・・。同様に、他者を鏡にして、 自分がなぜこう思うのかを突き詰め、表現すること からしばしば逃げ出した。

もちろん反省ばかりではない。会議を通して参加 者ひとりひとりが葛藤を乗り越え、それがことばや 姿勢にあらわれるのを見て、うれしく感じ刺激を受 けた。価値観はことばだけに表れるのではない、と いう当たり前のことも教えられた。数え切れないほ どの無言の行動が、ことばより重みをもつことを見 せ付けられ、そのような行動に励まされ、救われて きた。そして、行動が見えなくても、日本やアメリ カにいる彼らの存在そのものに、一年を通して支え られてきた。

この会議での様々な経験が自分の価値観の一部を 形成していくのだろう。しかし、それは絶対的なも のでない。自分にとって大事なことが固定されて、 省みられなくなってしまったら、それは何かのルー ルのように自分以外の外部になってしまうからだ。 状況に応じて何が重要なのかを自分の内部で問い続 けなければ、自由であることにはならない。それは ちょうど、75年の長きにわたり毎年のように、日米 学生会議がその存在意義を問い続けてきたことと似 ている。

#### 加藤 梓

日米学生会議に参加して学んだことは、限られた 時間を精一杯過ごす大切さである。

事前活動、本会議でのRT、フィールドトリップ、 ファイナルフォーラムに向けての準備、OBOGの 方々との話し合いの機会など、無限には存在しない それぞれの時間の中で私はたくさんの大切なことを 学べる機会に恵まれた。

日米学生会議の本会議中は日々、参加者に刺激さ れる毎日だった。初めは、参加者の中で日本人の参 加者、アメリカ人の参加者といった「壁」があったが、 その壁は徐々になくなっていき、日米学生会議が終 わるころには完全に、学問面で、そして何よりも人 としてリスペクトする一個人になっていた。心から 尊敬する学生に囲まれ、そしてかつてない程の多く の新たな機会に恵まれたことで、私にとっては本会 議中、毎日成長するきっかけがあった。

日米学生会議を通して学んだことはthe importance of making the most out of it である。2009年の夏に 私は一生忘れないことを学んだ。

#### 坂田奈津希

「参加者の声」を今日までに提出しなければならな い。しばらく何を書こうか考えているのだが、なか なか筆が進まない。友達から会議の感想を聞かれて も「楽しかったよ」の一言で終わってしまう。これほ ど充実した1ヵ月間は人生で初めてであったのに、 やはり感想という感想が出てこない。本会議が終わ り十日間経とうとしている今、ようやくその理由が 分かった気がする。それは、自分の中で「日米学生 会議」がまだ消化されていないから。だから、はっ きりとした感想が出てこないのではないだろうか。

たしかに本会議は終わった。分科会活動やフォー ラムを通じてたくさんの知識を得た。新たな仲間と も出会い、数えきれない刺激を受けた。しかし、こ れらはすべて最初の「きっかけ」にすぎない。仲間と の関係はまだ続くし、学ばなければならないこと

はまだたくさんある。私にとって日米学生会議とは「きっかけ」、スタートラインに立っただけと言えなくもない。しかし、その「きっかけ」こそ、私がずっと待ち望んでいたものであり、大きな意味を持っているのだ。

私は帰国生である。それをとても幸運なことだと思う一方、帰国生でなければ自分には価値がないのではという不安が常にあった。日米学生会議だって帰国生じゃなければ 受かっていない。分科会での話し合いも英語が喋れなかったら何も貢献できない。私は「帰国生」であるからこそ価値があって、「帰国生」じゃない私には何も残らないのではないか。日本に帰国して以来、そして会議が始まったときもずっとそう考えていた。

しかし、日米学生会議は、私が長らく抱えていたこの不安を取り払ってくれた。それまでは一人で生きていくことを「自立」と信じ込んでいた。しかし、頼り頼られ、刺激を与え与えられる中で人は成長していく。チームプレイにおいて、一人一人自分の役割をきちんと果たすことが重要である、といったとりであるというなことが正こに来てやっと共感するようになった。みんなが自分を頼ってくれるのが嬉しくて、自分もみんなのために頑張る。私には私の役割がある。今自分ができることを精一杯やろう。そう考えているうちに、自分が「帰国生」であるというコンプレックスが抜けていった。常に自分に対し否定的だった自分と打って変わって、自分に価値がないのならこれから自分を磨いていけばいいと前向きにものごとを考えるようになったのだ。

また、これまでは人に何か頼む、相談するといった行為は甘えのように思えて好きではなかった。自分のことは自分にしか分からないから、一人で考えて行動するべきだと常に自分に言い聞かせていた。しかし、学年も出身も経歴もバラバラのみんなと一か月過ごしたことで、閉鎖的だった私の世界はぐんぐん広がり、いかに視野が狭かったかにショックさえ受けた。もっと人に相談していればよかった。もっと人の意見に聞く耳を持てばよかった。その反省も踏まえ、これからはいろんな人と会って、いろんな話をして、たくさん刺激し合って、自分を高めてい

こう、と決心している。

私はまだスタート地点に立ったばかり。いかに自 分を変えていけるかはこれからの自分次第。でも、 今私は未来の自分に大きな希望を持っている。最後 に、そう思えるようになった「きっかけ」を作ってく れたみんなに心からお礼を言いたい。みんな、本当 にありがとう!これからもどうかよろしくね!!

#### 笹岡祐衣

日米学生会議が終わり1週間が過ぎたが、1ヵ月の間に余りも多くの事を経験し、考えたためか、まだ頭の中で整理がついていない。しかし、この会議が私に与えてくれたものはたくさんある、ということは確信できる。

1回生の冬にこの会議について知った。参加する 決心をし、1次試験の書類を送った時はすでに締め 切り1週間前を過ぎていた。長い間迷った理由は自 信がなかったからである。海外経験は中学生の時に 10日間アメリカに行っただけ、高校は理系、大学で 学んでいることは専門性がない、という状況だった。 歴史あるこの会議には経験・知識・語学力がそろった人が参加するものだと思っていたし、実際過去の 参加者の大部分がそうであった。それでも参加を決めたのは長い夏休みに何かに真剣に打ち込みたかったからである。面接試験を経て合格が決まった時は 嬉しいと思う反面、不安な気持ちが大きかった。

5月に初めてメンバーと顔を合わせ、本番までの約3ヵ月はペーパーを書くのに必死だった。講演会に参加したり、教授へ質問に行ったり、話を聞きたい人にアポイントメントをとったりと、あっという間だった。中途半端にはならないよう全力で取り組むことを目標に会議に臨んだ。気合いは十分だったものの、始めの1週間は英語を話すことが怖く、アメデリと積極的に交わろうとしなかった。それでも一緒に東京観光に行ったりするうちに少しずつだが緊張は解けたし、話さないよりは話した方が良い、という開き直りの精神に至ってからは少し楽になった。サイトが移るにつれアメデリとの距離は縮まってきたが、違う悩みも生まれた。それは自分の伝えたいことを英語で100%伝えられない苛立ちである。

日常会話はともかく、分科会では専門的な用語が 飛び交い、英語を聞き取ることはできても意見や質 問を英語で作ることができなかったからだ。英語で だめなら日本語を使ってでも意見を言うべきだとい うのは頭でわかってはいても、なかなかできなかっ た。これは今でも後悔している点である。自己嫌悪 になって落ち込むことも何回かあったが、その度に 慰めてくれる人がいたのはとても心強かった。

今の時点で日米学生会議が自分の今後の人生に大 きな影響を与えたかどうかはわからないが、この1ヵ 月を通してそれまで自分が見ていた世界は本当に小 さいものだったと感じたし、今までいかに消極的 だったかを思い知らされた。ここで得たことを忘れ ず、これからも頑張っていこうと思う。

#### 神馬光滋

#### 日米学生会議とは

日米学生会議一それは私の人生を変革し、潤いを 与えてくれた大事な場所であると同時に、私の存在 の起源でもあるのだと言うから、笑ってしまう。笑

大学2年生の春よりこのコミュニティに参画して 以来、本当に多くの方々との出会いを通して触発さ れ、これらが私の可能性を拡大するきっかけとなっ た。今でこそ「主体性」や「起業家精神」という価値観 に魅力を感じ、それらを軸に生きようとしているが、 これらがなかったら、どれほど今とは違う人間だっ たろうと思う。1934年、根強い問題意識から日米学 生会議を構想し、創設した先輩方、またそれらを継 続させ、多くの人が飛躍する場として保ち続けてき た先輩方に今改めて、深く感謝の念を申し上げたい。 また、第60回会議、第61回会議でお世話になった皆 様方にも、心の底から感謝の念が込みあがってくる のと同時に、十分に感謝をしきれてこなかった自分 が残念でたまらない。これを言語化できた今、手遅 れではないことを祈って、感謝のメールや手紙を送 り始めようと思う。

日米学生会議の活動を通して私は成長し、表面的 なスキルを超越する、より本質的な事柄を多く学ん だ。それは例えば、物事の意義を追求することであっ たり、多様性を受容し、価値観の強要はしないこと

であったりと、私の人生と人間性に深みを与えてく れるものであったと思う。第61回会議の実行委員活 動も至高な体験となり、私を語る上で、根源的な記 憶として活き続けることは疑いの余地がない。しか しながら、ただ一点、悔やまれる点がある。ドラッ カーは、「組織はすべて、人と社会をより良いもの にするために存在する。すなわちミッションがある。 目的があり、存在理由がある」と言う言葉を残した。 まさに、真理をついた格言であると思う。ところが、 実行委員であった1年間、私には365日も考える時間 があったにも関わらず、最後まで、第61回日米学生 会議のミッションを自分の中で言語化することがで きず、もちろんそれでは仲間と共有をすることもで きなかった。誰かに会議の目的を聞かれれば、「長 期間の共同生活を通じた人間的成長」や「グローバル な視野の獲得」など、もっともらしい言葉を使って 表現することはできたが、それだけでは未だに違和 感が残る。第60回会議が終わった時には、「尊敬し 合える最高の仲間たちができた」という感触が鮮明 に残っており、それ自体会議の本質であるとは思う が、それが日米学生会議の一義的ミッションである かは、まだわからない。恐らくこの戸惑いの根底に は、私が敬愛する、ミッションを組織の第一義とす る社会的企業やビジョナリー・カンパニーの存在が あり、日米学生会議にも、エスタブリッシュメント として存在するのではなく、リーダーシップを発揮 するような社会的大義を土台として活動することを 求めているのかもしれない。

この問いに対する明確な答えが出ないまま、現役 としての活動は幕を閉じてしまったが、無責任にも、 後輩たちにこの問いを投げかけ続けようと思う。そ して、彼らの中で共有された価値観を以て、未来を 創造していってほしい。もちろん、私の中での追求 が終わることもないだろう。

それでは、感謝をこめて。

#### 杉本友里

本会議の1ヶ月間は、本当にあっという間に過ぎ てしまった。思い返せば東京から函館、長野、そし て京都に至るまでにいろんなところに行って、いろ

んな人と話して、いろんなことをしたのだが、それ でもあまりに早く過ぎてしまって、私は未だに自分 に何が残ったのか思い返す日々が続いている。何も 学ばなかったわけでも、何も感じなかったわけでも ない。ただ、ことばにするには難しい体験ばかりだっ た気がする。

その中から、ことばにできた3点をまとめた。こ れらは、事前活動からの数か月の間に、私がJASC を通じて、正確には、ここにいる人たちと向かい合っ たことで学んだこと、意識するようになったことだ。

#### 『伝える意思と、自分のことば』

ひとの話を聞いてちゃんと理解するのは難しい。 ひとに話をしてちゃんと理解してもらうのも難し い。相手が持つ背景や意見が、自分のそれと違えば 違うほど、難易度は上がっていく。だからこそ、目 の前のその人自身のことばを聴けたとき、そして自 分自身のことばで伝えられたとき、そこにあるのは 自己満足ではなくて、「共感」だったと思う。

分科会での議論はもちろん、普段の何気ない会話 の中でさえ、わからないことが苦しくて、伝えられ ないことをもどかしく感じることが何度となくあっ た。考えが足りない、英語力が足りない、時間が足 りない。自分に課される様々な制約の中で、その 作業はいろいろな「痛み」を伴っていた。理解した と思った瞬間に誤解が始まるとはよく言ったものだ が、終わらない追いかけっこの中で、何かを得よう、 何かを紡ぎだそうと、もがいていたように思う。

#### 『相手を見つめる、自分を見つける』

それでも、今になって思えば、それらの時間はと ても愛おしい時間でもあった。なぜそう思えるのか。 それは、「難しい」の一言で片づけてしまうのではな く、粘り強く、お互いに時間と気持ちを差し出しあ い、お互いに自分自身のことばで伝えようとする意 思を持ち続け、お互いに相手のことばにも耳を傾け ていたからだと思う。

そうして誰かと向き合っている中で、自分との「違 い」や「同じ」の発見を積み重ねて、その人について 「この人はこういう風に考えるのか」と思ったり、「私 にはこんな部分もあったのか」と気づいたりするこ とが多かった。

ここでは、いやでも他者と向き合う。そしてそれ 以上に、自分と向き合うことになる。多様な他者が いるからこそ、発見は多い。そして同時に、自分が 見つけたものと同じくらいのものを、ひとに与えて もいる。日本側、アメリカ側に関わらず、あんなに 真摯なコミュニケーションができたことは私自身の 糧となったと思う。

#### 『はじまりときっかけの集合』

事前活動から本会議まで、JASCに参加したから 行った場所や、出会った人たちは数えきれない。社 会の第一線で活躍する大人たちとの出会い、留学生 や防衛大生、函館市の方々、小布施町の住民の方々、 長野の高校生との出会い、そして何より個性的で尊 敬できる仲間たちとの出会いがあり、その一つ一つ が刺激的だった。一人一人との会話の中で、今まで 真剣に考えたことのなかった社会問題が自分にとっ て興味の対象となり、特にアメデリとの出会いは、 今まで当たり前だと思っていた習慣や自分自身の感 覚も、日本で暮らしてきた私だから持っているもの で、これまで無意識だった「日本人である自分」が意 識されることとなった。運や縁に選ばれて、来たく て来た場所であり、出会いたくて出会った人たちな のだ。

しかし重要なのは、決してここにあるものが全て ではないということだと思う。むしろ、ここにある ものは、すべてのはじまりやきっかけに過ぎない。 ここで何を学び、これから何をするのか。ここで何 を得て、これから何を与えるのか。会議を終えた今 こそ、この会議に参加した真価が問われている。

以上が、JASCの数ヵ月を通して感じたことである。 最後に、私が本会議中に最も印象に残ったことば を紹介したい。函館フォーラムで、パネリストの尾 上氏が紹介していた一言だ。

"We must change to remain the same."

「変わらずにいるために、変わらなければならな し。」

もとは映画「山猫」(1963、伊)のセリフであるが、 民主党の小沢氏や多くの人が引用している。函館の フォーラムでは、日米の関係について当てられてい たと記憶しているが、しかし、この「変化」は、私た ち一人一人に、そしてJASCそのものにさえ求めら れていることではないか。

私は私であり続けるし、みんなもみんなでありつ づける。そして、そのために私の人生もみんなの 人生も常に変化している。JASCに参加したことも きっと数ある曲がり角の一つにすぎない。しかし、 JASCという接点のうえで、確かに曲がったのだ。 一度曲がればその先にはまた違う景色が広がり、新 しい道が連なっていく。私たちはまだまだ歩き始め たばかりだ。

この先に何があるかはまだわからない。もしかし たら、崖があるのかもしれない。もしかしたら、山 があるのかもしれない。それでも、私はこれからど んな景色が見られるのか、怖い反面楽しみでもある。

#### 高木あかり

途中で止まったままの場面は、あげればきりがな く、どれも記憶に鮮明である。思い返す度に緊張を おばえるこれらの場面が止まっているのは、その場 で唐突でもない正当な指摘があって答えに窮したか らであり、それらは返答を待っている相手の姿とと もに再開されるべく止まっている。

止めることが出来なかった場面もある。松代で長 野の高大生をまじえた小さなグループディスカッ ションの進行をした際は、苦心した。限られた時間 でそこにいるメンバーでたどり着きたい点があるか らである。あるいは、どうすれば議論可能になるの だろうと考えていたものを、きちんと書き起こさず ごちゃごちゃとしたまま迎えた本会議で忘れてかけ ていたことを、会議の数週間後ふと指摘されひどく 驚いたこともあった。

そして、数々の場面が、未だ再構成されないまま、 机の傍らに積まれている。

#### 高田修太

日米学生会議に参加して何が得られたのか、そ

の答えを自分の中で出すのは非常に難しい。会議 中、一体この会議に参加する意義はなんなんだろう か、なぜアメリカなのか、そしてなぜ留学ではなく JASCを選んだのか、そういう疑問に何度も立ち向 かった。そして会議中に答えは出すことはできな かった。私は特に日米関係を専攻しているだとか、 帰国子女だとかではないため、アメリカである理由 はそこまでなかったし、留学もしたことがなく、こ のような国際交流というものは初めての体験であっ た。しかし、会議が終わり、彼らと別れた後に再考 することで、何か漠然とした答えは得られたのでは ないかと思う。それはやはり「1ヵ月寝食を共にし、 同じ目標に向かって取り組む」という事実がネック となっていた。国籍が違えど、1ヵ月寝食を共にす れば、当然仲が良くなるのだが、その度合いという ものはホームステイや留学とはまた違ったものであ ろう。常に一緒にいるのだから、真面目なこと、く だらないこと、なんでも話すし、いいところも悪い ところも見えるであろう。こんな国際交流は他にあ るだろうか?そして今、なぜ日米なのか。それは… 正直わからない。今、アメリカの注目は中国へ向い ているから?そう言われることが多いが、自分自身 納得できる理由は得られなかった。さて、日米学生 会議と言えども、アメリカ側参加者はかなり多くの 国出身の者が多いということも非常に驚いた。もち ろん中国や韓国の出身者もいるし、コロンビアの学 生までいた。そのような背景を持つ学生と1ヵ月濃 密に交流できたことは、まさにかけがえのない経験 だったと思う。そしてかなり個人的なことだが、英 語力も間違いなく上がったと思う。もし今回の会議 に参加していなかったら、ここまで英語を話す機会 は得られなかったと思うし、英語の書籍を読んだり ニュースを聞いたりして、いろんな視点を得たいと は思わなかっただろう。また、今回が日本開催だっ たことも自分にとって大きかった。訪れたことのな かった函館、長野、一方訪れたことのある東京、京 都の違いは面白かった。なぜならば、アメリカ側参 加者に色々説明してあげることがこんなに難しいの か、ということや、説明する中で新たな気づきを得 られたからだ。日本の良さを再確認できたと思う。

ここまで真面目なことを書いてきたが、なんにせよ 今回の会議は本当に楽しかった。間違いなく「会議 どうだった?」と問われれば「マジ楽しかった」と答 えるだろう。分科会の勉強を通して新たに得た知識、 英語力、などがあったし、一方で、学問では得られ ない、日本の良さ、友情、そして涙。19歳の夏は永 遠に忘れることはないだろう。日本側、アメリカ側 参加者の皆がいたからこそ、precious experience ができたと思う。この場を借りてお礼を言いたい。

#### 高橋央樹

9月になり、あの第61回日米学生会議から約2週間が経った。普段の生活に戻ってからというもの、どこかまだ日常にはなれていない自分がいる。誰かしら近くにいて、会話が英語の非日常、途中でやめてしまいたいと何回も思った。けれど日米学生会議で得たものは数えきれず、全ては表現しきれない。それだけ私にとってのこの日米学生会議は、かけがえのない人生の転機となっただろう。

そもそも私が日米学生会議に参加したのは、高校の時から興味を持っていた食糧問題を扱う分科会があったというそれだけの理由だった。応募した時は、日米学生会議の伝統、歴史を全く知らなかったし、まず自分は試験に受からないと思っていた。そんな風に半分以上諦めから入った自分の挑戦は頭の隅に追いやっていて、合格のメールが来た時には最初はよく理解できずにいた。

それからというもの、参加が決まったからには私にはやるべきことがたくさんあった。英語がめっぽう弱く、分科会の知識も多数かけていたため、5月から7月の間とりあえず勉強の日々を送った。こうして毎日日米学生会議について考える日々が続くと、いつのまにか日米学生会議は私の日常の一部になってしまった。しだいに本会議ではこうしたい、ああしたいなど日米学生会議での理想を求めるようになって、きっと楽しい1ヵ月が自分を待っているという期待でいっぱいだった。

けれども本会議が始まると、私は早速うまくいか ない英語でのコミュニケーションとアメリカ人との 共同生活に楽しい一ヵ月の理想は打ち砕かれた。何 を言っても首を傾げる動作、聞き取れずとりあえず yeahの相槌、1週間が経った頃もはや自分から話し かけることはためらうようになっていた。分科会で は考えがあっても、英語という壁からただただ逃げ て、一言も話さずに終わってしまう時もあった。そ れが本当に悔しくて、毎晩一人で悩みこんだ。

しかし会議が進んでいくと、ファイナルフォーラムでの発表を皆意識し始めたが、私の分科会では京都に来ても何も進展がなかった。このままだと果たして何のために参加したのかよくわからないし、私が受かったことでこの会議に参加できなかった誰かに申し訳ない気持ちでいっぱいだった。おそらく今までの私ならば、またできない理由をかこつけて逃げていただろう。しかし今回、私は会議に対する参加者としての責任を意識していた。そして京都での夜、初めて食糧分科会で自分の意見を拙い英語で思いっきり話し、ぶつかった。

こうして自分の日米学生会議はようやく始まった。最後のサイトである京都では、分科会での議論は楽しくて仕方なかった。様々な質問が飛び交い、考えは修正されていき、分科会として一つの意見になった時、これまでの会議までの4ヵ月間が全て繋がった気がした。そして何よりも議論を重ねてきた大切な友がたくさんできた。こうして私の日米学生会議はたくさんの思い出とともに終わりを迎えた。

果たしてこの経験が今後私の人生に、どのようにつながっていくのかはまだよく分からない。ただ今言えるのは、この会議を通じて少なくとも自分の中で小さな変化が起こっている。それは絶対にこの会議を通してでしか、得られなかった変化である。だからこそ日米学際会議に関わったすべての人に感謝をするとともに、来年の会議にECとして最大限の貢献をしていきたいと思う。

#### 竹内友理

この一年は、私にとって全く違う一年間になっていたかもしれなかった。一年前第60回日米学生会議も終盤を迎えようとしていた頃、次年度実行委員選挙に立候補することについて私に全く迷いがなかったと言えばそれは嘘になる。いや、正確にいえば選

挙スピーチ時間中もまだかなり迷っていて、スピー チの順番を最後にまわしてもらう事態とまでなっ た。『もう、次が友理の番だよ。スピーチ、する? それとも、辞退する?』実行委員の一人が声をかけ にきてくれた。

たった、一瞬の決断だった。涙声でしたまとまり のない私のスピーチは、本当に聞き苦しかったので はないかと思う。しかし人生が木だとすれば、今振 り返ってみるとあの時の迷いは、確実にその中での 重要な枝分かれの瞬間だったのだろう。そんな風に 思える程、私にとって実行委員として経験した日米 学生会議の一年は本当にかけがえのないものであっ た。

私にとって、第61回日米学生会議を振り返るとい うことは日本側デリゲートとして参加した第60回 の始めからの一年半を振り返ることに等しい。

第60回日米学生会議春合宿後。同じ分科会だった 一人の4年生が、80文字の春合宿感想文でこんなこ とを書いた。

『就職活動終了後、入社までの1年間の予定を立て ていたが、JASCの春合宿から帰ってきて、その予 定をとりあえず全て白紙にした。 JASCにひと夏か けてみようと思った。』

志高く、非常に努力家な彼が学生生活最後の春、 そして最後の夏を、この会議にかけようとしていた。 それを聞いてすぐ、私は分科会内もう一人の二年生 メンバーに電話をかけ、そして二人で誓った。『史 上最高の一夏にしよう。』

最初は4年生の彼の気持ちに応えなければ、とい うどこか間接的だった意気込みも、事前活動のミー ティングやフィールドワークを重ねるうちにメン バー一人一人の願いとなってゆき、5人それぞれが 常に最高の分科会、最高の会議を作り上げようと心 がけるようになっていた。

そして私も、自分自身最後の夏をかけるような想 いで会議に取組み、全てのことを吸収しようと必死 になっていた。吸収すべきことは常にあった。公式 なフォーラムや分科会フィールドトリップはもちろ んだが、なにより参加者である仲間達から。バスの 中で将来の夢について語り合いながら、『日本人と

して生まれたからには、どんなにジャパンがパッシ ングされ、ナッシングになってしまおうと、日本 のために何が出来るかという視点で仕事をする』と 語ってくれた子。アメリカと日本で人生の丁度半分 ずつを過ごし、日米ハイブリッドとしての自分とど ちらでもない無としての自分を併せ持っているよう な感覚に陥っていた私としては新鮮な発想だった。 日本って何?国籍って何?愛国心って何?また、『講 演であろうと、誰かとの立ち話であろうと、常に質 問することを心がけてるんだよ。』と教えてくれた 子。そうだよね、人というのは大抵伝えたいことが あるから話すわけで、相手に質問すらできないとい うのは、失礼な話だ。自分も見習わないと、と思い、 そこからは毎講演彼の隣に座り疑問に思ったことに ついて質問をし合うことにした。学ぶべきことは多 く、とにかく日々自分が出来る100%の吸収と120% の貢献ができるよう心がけるのみ。会議の最後で格 好悪いスピーチをした私に60回のみんながなお第61 回実行委員というチャンスを与えてくれたのも、そ の必死さを認めてくれたからなのかもしれない。

第61回日米学生会議実行委員となってからは、60 回会議の仲間に教えてもらった以上3つの事柄を常 に意識し、軸としながら活動を続けてきた。まず、 『この会議に全てをかける想いで臨むこと』。実行委 員8名中2名にとって、そして私達が選んだ28名の 日本側参加者の中でも10名以上にとって、これが大 学、あるいは大学院生活『最後の一夏』であった。彼 らのためにも、最高の会議にしなければならないと いう使命感にかられていた。自分にとっても、日米 学生会議で過ごす夏としては最後。高校の頃から好 奇心の赴くままに様々な課外活動に関わってきてい たが、やるからには一年間日米学生会議だけに専念 すると決めた。

二つ目に、『日本』、そして『日米』の位置づけにつ いて考えること。実行委員として『日米学生会議の 意義』について企業の方や他大学生に語らなければ ならなくなってからは特に、日々それを考えるよう になった。長い歴史と二つの大国に関わることであ る分言葉は抽象的になりがちで、何を言ってもどこ か美辞麗句に聞こえてしまうのが嫌だった。日米学 生会議に関わる以前は、『自分は国籍を超えた立場 で仕事がしたい』と思っていたため、自分と日米関 係についても考え直すこととなった。

三つ目に、いかなる時も吸収の姿勢を持ち続ける こと。様々な方が、ご多忙の中日米学生会議のため に時間を割いて下さった。多くの場合、お返し出来 るものなどない。大抵の場合出来ることといえば、 精一杯その方々の想いを受け止められるよう努める という一点に尽きるのであり、そんな己の無知さ、 ちっぽけさを感じるに当会議は最適の場所なので あった。

副実行委員長として携わることとなった日米学生 会議の中で、私は分科会、函館開催地、そして委員 長松本との自主共同企画として立ち上げたサハリン 研修等様々な角度から第61回の会議形成に関わる機 会があった。1ヵ月の会議がどのように展開し、創 設から75年という日米学生会議の歴史の節目にどの ような軌跡を刻むのかということは、私達一人一人 の想像力とそれを形にしてゆく行動力にかかって いた。面白いことに実行委員になると本会議の1ヵ 月は日米学生会議の終盤であり、参加者にとって のドキドキワクワクの本会議開幕一日目の終わり、 は私達にとってのJASCカウントダウンでOne Day Downの感覚であった。だからこそ第61回日米学生 会議、について考えたときに思い起こすことの多く は参加者の56人が知りもしないような瞬間であった りもする。何百もの選考論文の山に囲まれていた 日々。Excelが使いこなせず、全ての書類をWord で仕上げてしまう私に苦笑する松本の顔。選考論文 課題の細かい言葉遣いについて何時間も議論した ミーティング。そして涙を見せるものが出てくるほ ど真剣にこの会議に対する想いを語り合うことに なった、ファストフード店での合宿反省会。

『で、どうだったの?』第61回日米学生会議も終わ り二学期に突入して間もなく、友人に聞かれた。

『どうだった、って?』

『やりたかったことは全部達成できたの?』

その軸でいえば答えは残念ながら否である。達成 出来たこともあれば、取り返せぬ後悔の念が残り悔

しくてたまらないこともある。実行委員としてはど んなに苦しくても笑顔でいたい、なんて思っていた のに、ある夜の事故で頭から血を出して他の実行委 員に心配をかけてしまったこともあったし、最後に もらった分科会メンバーからの手紙には「・・・で も時々心配になることもあった。体だけは気をつけ てね。」とあった。まだまだ力不足だなあ。

沢山挙げ連ねてもきりも意味もないが、やり直せ るならば改善し得た点は当然多々あったと思う。

ただ、それでも今第61回日米学生会議が素晴らし いものであったと思えるのは、単なる時間経過によ る経験の美化ではない。ひとつには、この会議を通 して参加者の様々な顔を見ることが出来たから。あ の子が悩んでいることを正直に話してくれた瞬間、 悩みを克服できた瞬間、この子が真剣に「自分の思 う日米学生会議」について、語ってくれた瞬間等、 様々な表情が、貴重な日米学生会議の財産として私 の脳裏に焼き付いている。そしてもうひとつには、 精一杯この会議を駆け抜けたという達成感があるか ら。8月21日は、お正月の箱根駅伝で自分の区を走 りきり次の走者へとバトンを繋いでトラックへ崩れ たランナーのような気分だった。気持ちの悪い久し ぶりの静けさと、『おわった・・・。』という解放感 に包まれる安堵の一時。暫くするとまた全力で走り たくなってしまうのも、ランナーみたいだなあ。

日米学生会議の75年。毎年、こうして夏学生が集 まっては、様々な経験をしながら素敵な仲間となっ てゆく。その中で選ばれた16名の実行委員は、一夏 を共にした友に見守られ、その応援を受けながら次 のゴールを目指して走るのだ。こんな風に、自分の 会議を終えると改めて日米学生会議の縦の連鎖を意 識するようになる。会議準備にあたり読み込んだ過 去何十年分もの報告書からは、世代・参加会を超え て共有されている感情の数々(会議後に残る、なん とも言えない虚しさなどは誰もが経験することだろ う)があることが分かるし、何十年前の『参加者の声』 もまるで自分のことのように共感でき、涙・笑い・ 悔しさ・充実感等、全てが伝わってくる。日米関係 の位置づけに対する危機感や日米学生会議のもつ課 題についても、過去数年間の実行委員全員が直面し ているものなのだ。だからこそ日米学生会議では実 行委員は勿論、参加者も『史上最高の回にしよう』と いう虫の目より、『史上最高の会議にしよう』という 鳥と魚の目を持つべきなのだろう、と今思う。

……さて、ここまで冷めきった紅茶を飲みながら この一年の経験を言葉にしようと試みてきた。書こ うと思えばあと報告書10冊分は書きたいことがある けれど、ここでやめるのは内に秘めておきたい想い や思い出があるからでもあるけれど、上手く文章化 できないからでもあり、また仮に出来てしまえばな んだか本当にそこで第61回日米学生会議が終わって しまうような気がして寂しいからでもある。

ただ一つ言えるのは、『偶然』『必然』何れと呼ぼう が、この一年半なくしての私は間違いなくひどく 違った私であったということ、そしてそんな自分は 想像したくもないということ。今後、日米学生会議 にかけたふた夏、そして一年半という期間は人生の 分数にすればどんどんどんどん数を小さくしてゆ く。しかしながら私にとってその経験の重さは一生 涯、大きくなり続けてゆくものだという期待と確信 を持って、私は次へと襷を繋ぐ。

私の活動を支えてくれた両親と昨年会議に応募し た当初から応援し続けてくれた祖父母、私が会議運 営に力を入れることを許してくれたディベートの パートナー、分科会に関連する新聞記事を送ってく れたり辛いときに電話で何時間も相談に乗ってくれ たりしてくれた60th JASCのみんな、様々なアドバ イスとサポートをして下さった財団法人国際教育振 興会の皆様、本当にありがとうございました。

そして何より第61回日米学生会議のみんな、あり がとう。

この一年間一緒に走り続けてきた実行委員のみん な、本当に有難う。何時間も夜中に電話しながらサ イト計画作業をした、知識人豪。新しいアイデアを 真っ先にシェアしたくなった、実行委員会の爆発剤 光滋。笑顔で癒してくれてミーティングにも電話参 加を続けてくれて、選考中夜遅くまで相談に乗って くれたもっちゃん。「妹よ!」と最近はもう呼んでく

れないのは、妹のような可愛げがなくなったから? 優しい恵輔。どんな時も冷静さを忘れず要所要所で 導いてくれた、えみと、「ゆりゆり企画」と盛り上がっ たり電話で悩みを相談し合ったりしたおゆり。ガー ルズ頑張ろう!って励まし合ったね。そしてサハリ ン企画実現目指して一緒に熱くなり、きっとこの一 年間一番沢山話した、チェア秀也。いざとなったら 絶対頼れるチェアだったからこそ必死で頑張れたん だと思う。バイスから言うのもなんだけど、61回は 素晴らしいチェアに恵まれたと思うよ。会議が終わ り、この8人、そしてアメリカ側実行委員8人を交え た16人での議論やメールが途絶えてしまうことの寂 しさは、予想を超えるものでした。みんなと仕事が 出来たこの一年間は私の一生の宝物です。またいつ か、一緒にいいもの作り上げよう!

第61回日米学生会議という箱の中身となり、それ ぞれの個性で虹色に飾ってくれた参加者のみんな、 本当に本当にありがとう。みんなと出会えて幸せで す。Once a JASCer, Always a JASCer. まだまだ、 これから。一生、よろしくね!

#### 田中 豪

森鴎外は小説『かのように』(1913年)のなかで、神 話を歴史から区別するべきかと苦悩する青年を描い た。では、歴史と神話を区別することとは何を意味 するのだろうか。日本は明治維新を経て近代化を成 し遂げ、西欧諸国の仲間入りを果たした。その過程 において、天皇制や国家神道が国家の軸に据えら れ、それに適合しない文化は切り捨てられ、日本人 は日本人として一つにまとめられ、国民国家が形成 された。富国強兵のためには、「国民」という観念が 必要であり、大日本帝国は国民の紐帯として矛盾の ない神話を創造し、歴史へと昇華させた。青年秀麿 は思い悩む。神話に対する実証的な切り崩しを試 み、近代化の原動力である国民の紐帯をなす基礎が 神話、すなわちフィクションに過ぎないと証明し暴 露すべきかと。もし暴露の先には無秩序しかないの だとしたら、その行為にいかなる意味があるのかと。 未来のない非生産的な破壊行為に手を染めるくらい なら、目前の矛盾に眼をつぶるほうがましなのでは

ないかと。小説の中では「山の手の日曜日の寂しさ が、二人の周囲を依然支配している。」と結ばれ、森 鴎外はこの問いに対する明確な答えを与えてはくれ

しかし、その答えを見つけることを促すかのよう に、『かのように』は私の中の二人の自分に質問をな げかけた。一人は日本人としての自分。そしてもう 一人は日米学生会議実行委員としての自分である。

2008年夏に第60回日米学生会議の参加者として 始めて渡米した。参加者の中には、生まれてから20 年間を同じ土地で過ごした私のような日本人もいれ ば、人生の半分をアメリカで過ごした日本人もいた。 生まれてから一度もアメリカを出たことのないアメ リカ人もいれば、小さいときに両親と一緒に外国か らアメリカに移り住んだ人もいた。学生会議で訪れ たボストン市役所で受けた選挙課からのブリーフィ ングによれば、投票の数を増やすために、市は英語 の読めない移民向けに各言語での投票用紙を作成し ている。エスニックコミュニティーから投票所まで のバスを手配することさえもあると言う。一方で日 本を見れば、戦後60年を経た今も在日韓国・朝鮮人 の方は選挙権を持っていない。日本人・アメリカ人 と言っても、それはそれぞれが拠って立つ制度に大 きく依存している。制度とはその国の神話を含めた 歴史や文化の集積でもある。そして、選挙権の例で 言えば、同じ民主主義という理念でも、その実践の 方法は地域によって異なり、同じフィクションでも その運用をめぐりさらに分化していく。出入国手続 きの際、税関でパスポートを手渡す。自分の持つパ スポートに記されたa Japanese nationalとはどう 定義されるのだろうか。

自分は彼らとは違う。そう思って自分は日本人だ と強く感じる瞬間もあった。自分と彼らが同じもの を見て、同じように感じていると実感したときも あった。それまではこうした共通点や相違点が存在 することは偶然の産物だと思い特段の理由付けを求 めなかったにもかかわらず、あらゆる差異が他の隠 された何かに基礎付けられているのではないかとす べてが急に気になりはじめ、こうした考えを避け ることを許そうとしない自分がいた。一方で、The World is Flat (Thomas Friedman) と言われ、スカ イプを使えば、太平洋を隔てていてもほとんどタイ ムラグなく会話できるという厳然たる事実もある。 こうした事実を前に、自分の問いが果たしてどれだ けの意味を持つのか、とさらに問いかけると、日本 人としての自分はますます答えから遠くへと離れて いっていているのかもしれない。

第60回会議が終わるやいないや、第61回会議実行 委員として新たなスタートが切られた。広報を担当 し、日米学生会議を外に売り出していく役目を担う ことになった。役柄上、よく聞かれた。「日米学生 会議って何ですか」「参加するとどんな体験ができま すか」「参加する意義は何ですか」・・・。また、日米 学生会議は社会発信を理念に掲げ活動している。何 を社会発信するのだろうか。社会発信の先に何があ るのだろうか。そう簡単に答えの出せる問いかけで ないことは分かっていたものの、答えを出さずに活 動することに逡巡した時もあった。自らの語る言葉 が神話にすぎないのではないか。もしそうだとした ら、神話を神話と分かって伝えることは道義的に許 されるのかと。しかし、一方では、その神話がある からこその日米学生会議であり、神話は出発点であ り終着点であるとも言えるのかもしれない。その二 つの考えの間を振り子のように、時に右に触れ、時 に左に触れ、神話の神話性を前に立ちすくみながら 活動してからおよそ1年が経ち、第61回会議は2009 年8月に京都で終わりを告げた。第62回会議の実行 委員も決まり、次の世代にバトンを受け渡す。責任 と神話と歴史とともに。

たしかに答えを見つけることはできなかった。し かし、この一年間を通じ自分の中で変化したことが 一つある。神話ではないかと疑い、それを伝えるこ とを怖れたかつての自分はもうそこにはもういな い。たとえそれが神話だったとしてもそうでなかっ たとしても、自分が誇りを持って次の世代にバトン を渡したという事実がある。では、はたしてこれは 質問に対する答えとなっているのだろうか。小説の 中で秀麿からの手紙を受け取った父は次のように語 る。「神話を歴史だと思わず、神霊の存在を信ぜず に、宗教の必要が現在において認めていられるか…

と推察せられる」。神話や歴史といった個別事象か ら宗教と信仰という形而上学的な段階へと質問の次 元を転化させただけではないのだろうか。もしそう だとしたらその転化はいかなる意味を持つのだろう か。かつての問いは新たな問いへと形を変え、実行 委員を終えた今もなお日米学生会議実行委員として の自分へ問いかけ続ける。

日米学生会議への参加を通じて、二人の自分に対 して投げかけられた問いのいずれにも私ははっきり と答えられていないのだろう。『かのように』に戻れ ば、秀麿はドイツ留学中にハナルックと出会い、ド イツの強さとは、元来宗教すなわち神話に基づいて いることだと感じた。日本に帰ってきてから再びこ の課題に思い悩み始めたとしても、彼はドイツでは 一度ある種の答えを見つけたのではないか。

民主主義を高らかに唱え、理念の下に結集してい るといわれる国、アメリカ。宗教がドイツの強さだ としたら、こうした理念がアメリカの強さなのだろ うか。だとすれば、日本の強さとは何なのだろうか。 そしてその土地に21年間住み続けてきた自分自身は いかなる存在なのだろうか。こうした思いから、私 は2010年の夏から一年間アメリカに留学することを 決意した。この先に何があるかは分からない。しか し、不思議なことに、その先に何があろうとも怖さ はない。その勇気は日米学生会議が教えてくれたこ となのかもしれない。

### 谷口貴大

私たちはヒーローになれるだろうか。私たちはこ の世界に生きる66億を超す人間のたった1人に過ぎ ない。私たちは何千年という人類の歴史の中で、長 くとも百年ほどしか生きることはできない。私たち が知っていることは世界に溢れる情報のうちのほん のわずかである。私たちは1人の学生であり、何の 社会的な権力も持たない。そんな、たった72人の日 本とアメリカの学生が、机を並べて世界や社会につ いて論じあったところで、それらは何か変わるだろ うか。一体、日米学生会議、JASCの意義とは何な のであろうか。本当に、私たちは世界を変えるヒー ローになり得るのか。

2009年の夏、私は尊敬する71人の仲間と出会い、 数えきれないほど多くの貴重な体験をすることが出 来た。ここにその全てを記すことはできないが、そ れらは、私に私の知らない世界を見せ、私の価値観 を大きく変え、きっと未来の私を変えていく。しか し、私を変えたのは私ではない。IASCで出会った 71人の仲間に、行く先で出会った人たちに、経験し た多くの出来事に、私は「変えられた」のだ。私が見 たのは彼らの、それらのある一面に過ぎないだろう。 しかし、確実に私を変えた。そして、私以外の参加 者も、きっと同じように変わった。多くの人と出来 事を伴ったJASCという時間は、その中で私を変え、 仲間を変え、そして、JASCの経験と記憶は、私た ち参加者それぞれが将来出会うであろう人々すら変 えていくのだろう。個人が持つ力は、他の個人にとっ て大きな大きな意味を持つ。JASCで学んだことの ひとつだ。

多くの考えや情報が渦巻き、ひとつであるはずの 事実を捉えることすら難しい現代の社会で、私たち はひとつではない真実を、その本質を求めていかな ければならない。それらすべてを手に入れることは 不可能なことだろう。それでも私たちは、一人の人 間として生まれた以上、それらを求め続けてゆく。 その過程で個人が導き出す考えや結論は、その個人 の経験を通し変わりながらも、ある時、ある場で出 会う人々の価値観を変え、さらに彼らが出会った 人々の価値観を変え、ひいては社会を、世界を変え る可能性を秘めている。その時、その場がJASCで ある必要性はどこにもない。しかし、JASCには72 人の個々に変化をもたらした出会いが、体験が、確 かにあった。多くの個人の価値観を巻き込んだアイ デアが、世界の多くの人々が待ち望む変化を社会に 引き起こした時、その一要素たり得た個人はヒー ローの一人であるに違いない。一人の人間の大きな 変化は、世界の変化の小さな始まりである。

共にJASCを過ごした仲間に、私の思いや信念は 伝わったのだろうか。それは私にはわからない。し かし、それを知る必要はないとも思っている。私は 真剣にJASCに向きあった。JASCは私を変え、仲 間を変え、そして私たちはこれからも共に時を過ご

す人々に変化を起こし続ける。2009年の夏、私は一 人のJASCerだった。

### 谷原英利

僕にとってのJASCとは何だったのか。正直それ が今なおよくわからずにいる。短かったようで長 かったようなこのひと夏の思い出からは何を得て また失ったのか。 JASC がlife changing であるとの 数々の前評判がそもそもの参加理由となった訳では あったが、僕は果たしてそうだとはっきりと言い切 れるだけの楽しく有意義な時を過ごせたのか。やは り自分の中でまだきちんと整理ができてはいない。 ただし、これだけは断言できる。この場を通じての 幾多の出会いが今後も絶えず折に触れて僕に知的刺 激を与える何物にも代え難い生きた財産として残り 続けるだろうということである。個人的には、これ こそがJASCの最大の魅力に他ならないのだろうと 結論付けている。

### 趙潤華

IASCを振り返ってみる。初めての顔合わせ。単 純に、みんなすごいなぁと。やる気も実力とユー モアも兼ね備えた人がたくさんいる!そして初め て会ったとは思えないほど一緒に居ることの楽し さ、わくわく感を感じたが、それと同時に何か違 和感のようなものも感じた。何だろう。事前活動。 OBOGの方達との交流や分科会でのフィールドト リップ。だんだんJASCに所属している感が増し、 自分の中での位置づけが少しわかってきた頃で、で もまだやる気全開!という訳ではなく、RTペーパー やプレゼンの準備をこなしていた。ただ、早く本 会議でみんなに会いたいという思いは募っていた。 ちょうどその頃にあったサハリン訪問。まさか「日 米学生会議」に参加して、ロシアの地を踏むとは思 わなかった。全員が参加した訳ではないが、参加し たデリとは宗教の話からダイエットの話まで、お互 いについても全く関係ないくだらないことについて も話す時間を持てて、さらにサハリンという異国情 緒もあり、とても濃い経験であったと思う。そして 直前合宿と本会議。この1ヵ月間は、短いようで長 かった。お互いをそんなに知らない人達と、こんな に常に一緒にいるなんて初めての経験だった。毎日 が刻々と過ぎる一方、一日一日誰かしらと議論した りふざけたり学んだり発見したり興奮したり落ち込 んだり、していた。なんといっても、ストレートフォ ワードな人が多い! そして小さい所まで見ている! 今まで気付かなかったことや気付いていても知らん 顔していた事実を正直にストレートに言うし言われ るしという環境であった気がする。おそらくこれが、 私が始めに感じた「違和感」だったのかもしれない。 長い付き合いの仲という訳でもないのにここまで言 い合える関係に、最初は慣れなかったのだ。その気 持ちもすぐに消し去られ、それこそがJASCerたち であるという事に気付くまで、全然時間はかからな かったが。

まとめると、考えれば考えるほど、JASCイコー ル「JASCで出会った人達」であったのだ。これまで、 「何をやるか」も重要だけど「誰とやるか」がもっと大 きな意味を持つと考えてきた私にとって、JASCは それをきれいに立証してくれた。RTミーティング や数々のフィールドトリップ、スペシャルトピック ス、カフェでのおしゃべり、ホームステイ、かなり がちでやったサイクリング、キャンプでの川の字睡 眠、イカ講義、炎天下でのトマトの収穫、移動バス での爆睡と真剣な話し合い、等等。ふと思いつく限 りでもたくさんの事を経験したのだが、それらが頭 にこびりついて思い出す度に様々な感情が湧いて来 るのは、この61回のみんなとの経験であったから。 色々なイベントを通しても学ぶ所は多かったが、そ の中での参加者や関係した人一人一人からの学びと 発見こそ、私にとっての日米学生会議であったのか もしれない。

私はJASCを通して、常にお腹が痛かった気がす る。一つは食べ過ぎ、そしてもう一つの理由は、笑 い過ぎ。この二つが原因で悩まされるとは思っても みなかったが、腹痛の記憶と共に、JASCでの出来 事や出会い、それを通じて考え感じたことは、頭 のどこかからずっと離れないだろうなあと思う。 JASCを通して私と少しでも関わりを持ち接してくれ たみなさん、ありがとうございました。大好きです。

### 徳地宜子

日米学生会議は私にとってとても奇妙な経験で あった。その経験が果たしてどのような意味があっ たかはまだ分からない。兎にも角にも、それはあま りにも多くの人のプラスのエネルギー、マイナスの エネルギーが充満した、得てして非常に人間的な経 験であったと感じる。そこには人間が生きていくう えで必要な衣食住より、もっとある意味高次な、あ る意味無駄な、プラスアルファがあった。それが日 米学生会議という箱が提供してくれたのか、若さと 暇を持て余した72人が集うことで生まれたものなの かは定かではない。しかし、日米学生会議にはある 種特別な空気が流れていたのは事実である。そこで は絶えず自分にとっての日米学生会議が語られ、そ れから派生して、自分の夢や弱さ、過去の傷や栄光、 そして生きることの意味について、たかだか二十歳 そこいらの若者が睡眠時間を削り、大真面目に語り 合うのだった。そこに日米学生会議の真髄があった と感じる。日中、我々は様々な講義やイベントに参 加し、日本、米国、そして世界の政治や経済につい て理解を深めた。また、分科会においては、時には 協力し合い、時には敵対心を丸出しにし、各々のテー マについて熱弁した。しかし、それらは日米学生会 議が本来有してあるはずアカデミックな一面を付与 するという役割を果たしつつも、会議自体が経験者 にとってどのような意味を有しているかを考える際 には、残念ながら議論にあがらない。それは経験者 にとってなんら本質的なものではないからだ。経験 者にとって、日米学生会議とは楽しみ、悲しみとと もに人間の美しさ醜さが詰まりに詰まった、自らを 映し出す鏡であった。我々は自らを絶えず振り返り、 新たに自分を定義づけた。10年後振り返った際には、 日米の政治よりも、アフリカの貧困よりも、イカの 生態よりも、自分はこういう人間かもしれないとい う思考プロセス、そして、その思考プロセスを可能 にした生涯にわたる友人が残るのみであろう。日米 学生会議とはそのような経験であった。

### 中村誠一郎

何か特別なことがしてみたい。日常を過ごすだけ

では感じられないものを感じられる経験をしてみた い。自分の力を試すような場所へ挑戦してみたい。 そんなことを考えていた私は、稀有な幸運に恵まれ、 JASCと出合った。参加が決まった春の日のことは 今でも忘れることが出来ない。

春合宿で出会ったメンバーは、私の目にはとても 眩しく映った。こんなスゴイやつらと仲間になれる のか、と思うと本当に嬉しかった。と同時に、皆に 負けていられないとも感じていた。高みを目指す皆 の中で、ヘラヘラして終わるのはつまらな過ぎる。

JASCで一番大きかったのは、個性豊かな参加者 と出会い、友人となれたことだった。そのおかげで 視野を広げることが出来たし、自分の現状をこれま でよりも深く知ることが出来た。会議の期間中、自 由な時間も、楽しい時間を共有するだけで終らず、 それぞれの将来について語り合うこともあり、新し い考えを知ることの連続だった。

これほどまでに価値のあることを一緒に出来る仲 間を、絶対に失いたくない。IASCはそう思わせる 人たちで一杯だった。

それはアメデリにも同じことを感じた。拙い英語 を使っていても、皆私が何を言おうとしているのか を理解しようと努めてくれた。おかげで、英語に対 して臆病になっていた気持ちは会議に参加する前に 比べてずっと小さくなった。帰国するアメデリたち と別れるときがあれほど辛いものになるとは、思っ ていなかった。

JASCはチャンスで溢れている。そしてチャレン ジする者を、周りの者はまず応援する。必ずしもい い結果が得られなくても、励ましや次に繋がるアド バイスを与える人間が沢山いる。私が思うに、それ はそれぞれが今までチャレンジし続けてきた人間で あるからだ。挑戦することに意味がある事や、挫折 する時の気持ちを良く分かっているんだろうな、と 思った。

しかし会議が進んでいくにつれて、私の中で疑問 もまた増えていった。

考え方は一人ひとりがそれぞれ違うのだから、ま して母国を異にする学生同士が一つの結論を導き出 せるのか。諦めそうになることなどざらだった。自 分が会議に参加する意味を見失い、会議の意味が分からなくなることもあった。

この会議のもつ、思い出作りや仲良しパーティー の学生交流との違いは何なのか。

それはやっぱり、集まった参加者が障壁を乗り越えながら議論を重ねること自体であり、一期一会のメンバーと協力した結果を何とかして出すこと、そしてこの後もずっと続いていくだろう、前へ進み続ける者たち同士が素晴らしい関係を構築すること、だと私は思った。そのために限られた時間をフルに使って、話して、悩んで、泣いて、歌って、笑って、踊って、飲んだりするんだろう。

その意味で、私はJASCのフルコースを存分に楽しんだ。苦しかったことも、辛かったことも今となってはあの夏、あの仲間たちとしか共有できなかった輝かしい経験だと思える。会議の最中に出来ずに悔しい思いをしたことも、日常生活では得がたい貴重な体験で、次の一歩に繋がる大切な出来事だ。

真っ暗闇でのアメデリ歓迎、皆で騒いだ六本木、 函館で見た夜景、ギャグ満載の自衛隊員の格好をした写真、小布施町での浴衣のコスプレ、長野の花市、 かもられたUFOキャッチャー、さくらを歌ったタ レントショー。数え切れない楽しかった出来事を思 い出して、やはり感じることがある。春合宿でのリ フレクション、口に出した後、後悔した恥ずかしい 言葉。でもやっぱり会議が終っても同じ言葉が頭に 浮かぶ。

そういう貴い気持ちを持たせてくれたJASCに、 参加者の皆に、そしてこの出会いを私に運んでくれ た先輩に感謝を。

会議の中で、私達をもてなしてくれた多くの人々 に敬意を。

新たな決意を胸に、吹き荒れる風を予感し、嵐の 中へ飛び込んでゆく。

今まさに、新しい旅がはじまる。

### 中村梨紗

午後2時、1時間昼寝しよう、そう思った。約1ヵ 月ぶりに足を踏み入れる自分の部屋は何一つ変わっ ていない。目覚まし時計を午後3時に設定し、ベッ ドに入る。JASCでの思い出を心の中で描く余裕もなく、ただただ疲れて眠りについた。

午前10時、1時間の昼寝は、超強力な目覚まし時計をも無視する20時間の睡眠に変わっていた。眠気も疲れも何もない。あるのはただこの思いだけ。「あれは夢だったのだろうか。」

JASCが終わり、ひたすら考えた。JASCとは一体何だったのか。何故あの場に私はいたのか。何故あのおが、何故あの時期に、あの場所で1ヵ月を共に過ごしたのか。私はそこで一体何を得て、何を失い、そこから何を生み出せるのか。

日常に戻り3週間が経った今、それを未だに考えている。「日米間の、そして世界の平和構築に貢献できる人間になる。」おそらくその為に私は参加したのだろう。しかし、その一行では収まりきらない何かが、答えを出させまいとしている。

ただ確実なことが二つある。それは、JASCで私は自信を失い、そして、友人を得たということだ。

失ったもの、自信。これは自分の弱点が明らかになったからである。伝えたいことがあっても、それを言葉にし、公の場で発表することができない。いや、正確に言うと「できない」のではなく、「しようとしない」のだ。約1ヵ月の会議中、多くの講演や、フォーラムが開催された中で、私は一度も発言しなかった。自分の中にそびえ立つ壁を壊す機会がどれだけあっただろうかと思うと、悔しくて仕方がない。挑戦しない自分に、苛立ちを覚え、自信を失った。

しかし、それは必ずしもネガティブなことではない。弱点が明らかになったことにより、成長の兆しが見えた。今しなければならないことはただ一つ、挑戦すること。第61回会議のテーマでもあった「発信」することの重要性も今一度確認し、これから実行に移したい。

失ったものがある一方で、得たものもある。それは、どんなに年老いても、どんなに離れていても連絡を取り続けたいと思える友人だ。皆個性豊かで多いに刺激を得ることができた。幼稚な感想文のようになってしまうが、事実なので仕方がない。彼らに出会えて本当に良かったと思う。

3週間が経ち、これら二つが明らかになった。果た して1ヵ月後は何を思うのだろう。半年後は何を考 えているのだろう。1年後は、2年後は、この夏の出 来事がどう作用しているだろう。10年後、20年後は、 JASCで体験したことを覚えているだろうか。自分 自身に、そして社会にどう影響を与えていくのだろ

今はまだ分からない。おそらく、時が経てばきっ と分かるようになる。ただ、単に時間を過ごすので はなく、挑戦し続けることを前提として。そして、 理解できるようになった頃には、またこの夏出会っ た仲間たちと語り合っているに違いない。

### 中村真理

今改めて、JASCを振り返る。とは言ってもそれ は、Facebookに並んだ笑顔の写真達を眺めること で、アメデリとメッセージを送り合うことで、そし て自分の記憶に在る気に入った場面を反芻するこ とで。その度に私のJASCは何かとても良いものに 書き換えられている気がして、もしかしたら自分に とってのJASCの全てを、きらきらした時間や、想 いや、満たされて流した涙に変えたい気持ちが強い のかもしれない。

けれどいつもそこで我に返って、この4ヵ月のこ とを、一つ一つ正直に振り返ってしまう。

JASCerに出会った春から、本会議直前までずっ と、多すぎる自分の課題に直面して、幾度となく立 ち止まってしまったこと。アメデリが日本に来た 夏、言葉の壁を越えられずに委縮してしまい、気付 けば活躍する誰かをひたすら見ていたこと。キャン パスでの日常から抜け出したくて、主体的に色んな 人や物事に出会いたくて、考えて、悩んで、頑張っ て、この1ヵ月を掴むことが出来たのに、思い入れ が強いにも拘らず機会を生かせない自分への悔しさ や、経験も能力も豊富な皆への羨ましさでいつも一 杯だった。だけれども同時に、いつからか「挑戦」に こだわるようになった自分と、勇気を出して行動す ることが出来た瞬間も、今、確かに思い返すことが 出来る。沢山の辛さの中に、少しの誇らしさと、嬉 しさと。この4ヵ月はきっと、一つ一つの感情が、

普段よりも強く、意味深く、押し寄せた期間だった のかもしれない。

JASCとは、単に気の合う仲間との楽しい時間の 連続ではない。満足も、達成も、笑顔も、理解も、 当然ながら自動的にやって来てくれる場ではない、 と私は実感している。それは一人一人が生きる日常 や、一生と同じように、そして様々な人生が重なり 合う社会や、世界といったものと同じように、「正解」 が無いものに向かって、困難やフラストレーション に耐えながら、それでも諦めることなく思考し行動 することが求められる場なのだと思う。この当たり 前に大切すぎて、だからこそ心掛けることが難しい 姿勢の必要性が、JASC中は特別に際立っていたよ うに思う。現状を変えたいのならば、どう在ってほ しいのか、どうしたらプラスの変化を起こしていけ るのか、そのために何をすべきなのか、まず自分が 考える。そして悩み考えた意見を、熱意を、言葉に して相手に伝える勇気と方法を体得し、また相手に ついても学ぼうとする気持ちを常に表現すること、 何より論破されることを怖れないこと。そうして自 分が他者と、周りと、皆と一緒に、行動を起こして いくこと。諦めなければこういった「人」が持つ可能 性を最大限に高められ、日常から世界へ向けて変化 を起こすことが出来る場所、がJASCなのだと思う。

第62回日米学生会議の実行委員として、この姿勢 を持ち続けることを忘れないようにしたい。そう強 く思うのは、JASCを通して困難にぶつかり、辛さ や悔しさを味わうその度に、何かが、そして誰かが 必ず乗り越えるための手助けをくれ、この時に感じ た「温かさ」や「大きさ」に加え今では辛ささえも含め たJASCの魅力が、決して私を離さないからである。 そしてふとした瞬間にJASCに懸ける驚くほどの熱 意と努力を見せてくれたECの皆と、ふとした言葉 で新たな世界を見せてくれ触発してくれたデリの皆 の存在が、私に諦めることをさせないからである。 日米関係の意義が問われるこの時代において、「人 と人のつながり」「そこから生み出される沢山の機会 と経験」「仲間」といったJASCの持つ財産を引き継 ぎながら、IASCに良い変化を加える一人になれる よう、挑戦と努力を重ねていきたい。

最後になりましたが、JASCの継続にご尽力くだ さり75周年という節目に私達を迎えてくださった アラムナイの方々、第61回会議のためにご協力く ださった全ての方々、そして姿勢や言葉を通して 沢山のことを教えてくれた実行委員の皆、共に'life changing summer'を過ごした参加者の皆に心から 感謝しています。どうもありがとうございました。

### 西野 緑

私にとってJASCは元々父親の背中のようなもの でした。私はいわゆるJASCer2世で29回、30回OB の父親を持ちます。父親の存在は憧れであり、そん な父が大学時代の誇りとしているJASCもまた、私 にとって手の届くはずもない別世界のはずでした。 だからこそ、私の直前合宿で提起した目標は「父の ものであるJASCを自分のものにする事」だったの です。

そして今、慌しく過ぎて行った61回JASCを終え て、私ははっきりとJASCを自分のものにする事が 出来たと言えます。それは自分がJASCの中で満足 の出来る成果を上げられたかとか、学生時代の父親 に追いつけたかとかそういうことではなく、でも少 なくともあの1日1日を他の誰でもない私が精一杯生 ききったと思えるからです。

JASCは私にいろいろな意味で自身のアイデン ティティーを考える機会を与えてくれました。まず、 日本開催であった61回JASCで、アメリカ側参加者 をゲストとして迎え入れる立場になり、改めて日本 人として自国を見つめなおせたと思います。東京だ けが日本ではない。地方に目を向ければ多様な顔が あるのだ。と、分かっているつもりではいたものの、 頭で理解するのと実際触れて感じるのでは全くの別 物でした。特に長野県の小布施町でのホームステイ では、葛飾北斎館の創設に携わられた方のお宅でお 世話になり、日本の伝統を守ろう、そして次世代や 世界に伝えていこうという熱い想いをひしひしと感 じました。このような市町村規模、そして個人規模 の努力が日本という国を形成し支えているのでしょ う。JASCのプログラムはその事実を再認識させて くれました。

今日の東京を中心とした日本は安易に世界に目を 向けすぎている気がしてなりません。私は地球市民 教育という分科会に所属していたのですが、真の意 味での"地球市民"とは自国を認識した上で、他国を 捉えられる人間であると思います。グローバリゼー ションとローカリゼーションは連動してこそ初めて 安定した地域間(国家間)の関係につながるでしょ う。春合宿から分科会のメンバーで議論し続け、定 義し続けてきたこの"地球市民"の概念を忘れること なく、自分自身もそれに少しでも近づけるように努 力を続けていかなければいけないと思います。

また、JASCの特徴である参加者の多様性も、自 分のアイデンティティーを再考出来た1つの要因で す。理系の人がいれば文系の人もいて、政治を専門 とする人がいれば医療を専門とする人がいる。この ような特殊な環境があったからこそ、ディスカッ ションにおいてはもちろん、普段のやり取りの中で も様々な観点からのアプローチがぶつかり、面白い 化学反応を起こしていたように感じました。

そんな中、自分の役割が見えなくて悩んだり、こ れまでの考えの浅さや知識の欠如に落ち込んだりす る事も多々ありました。しかし、互いに励ましあえ る仲間に恵まれていたからこそ、その事実を前向き に向き合えるようになりました。今はJASCの経験 を原動力にして自分の専門性を磨き、意見を洗礼し ていきたいと思っています。

今こうやってゆっくりとした時間の流れに身を 任せていると、いろいろなものが凝縮されていた あの1ヶ月が嘘のように思えます。しかし同時に、 JASC前の自分とJASC後の自分の意識の違いもし みじみと実感することが出来ています。2009年夏は 一瞬にして過ぎ去ってしまったけれども、第61回日 米学生会議の仲間はこれからもJASCの名の基に繋 がり続けるでしょう。そして私個人も、JASCを応 援してくれた各地域の人々やこの夏出逢った仲間、 また"自分のものとなったJASC "それ自体に恥じ ないように、一生挑戦し続けていきたいと思います。

#### 野津美由紀

JASCは不思議な場所だった。春合宿からそう感

じていた。というのも、猫かぶりのプロで、新しい 場所では半年以上演じる私が、JASCでは初めから 全開でいけたからだ。それも無理して開いたわけで はなく、自然とそうさせてしまうのがJASCだった。 どんな人でも受け入れることのできる、器の大きい 人たちが揃っていたように思う。72人のそれぞれ異 なる奇妙な色が混じり合い、見たことのないような 明るい色が漂う、そんな独特な場所、空気感が私は 大好きで、1ヵ月の間本当に居心地がよく、会議中 一度も帰りたいと思うことはなかった。JASCに参 加していなければ、この71人のほとんどと一生会う こともなかっただろうと考えると、何とも不思議で、 改めて出会いの面白さを感じる。

本会議中、多くの時間を過ごした分科会は笑いの 絶えない本当に素敵なグループだった。本会議前の ぎこちないSkype meetingや、本会議開始後早速日 本側とアメリカ側で意見が衝突して気まずくなった ことが信じられないくらい、壁のない分科会となっ た。正直に言えば、分科会での議論はやはり1ヵ月 という限られた時間の中で学生ができる程度のもの を超えることはなかったが、それでも分科会は有意 義だったと思っている。理由として、まず、自分の 興味が広がったことが挙げられる。この分科会に所 属するまで、そこまで興味の無かったBRICsであ るが、事前準備やフィールドトリップを通じて、今 では各国の名前を見るだけでテンションが上がって しまう。新興国、完全に鬼アツい!また、議論の中 で日本側とアメリカ側の視点の違いを感じられたの も貴重な経験だった。例えば、BRICsの急成長に 対して、日本側は「どうすれば勝ち残れるか」と必死 になりがちなのに対し、アメリカ側は「アメリカは 落ちてもせいぜい二番手」くらいの余裕があり、焦 りの度合いに違いを感じた。当たり前ではあるが、 同じ先進国でも日本とアメリカの置かれる状況は 異なるのだなと感じることが多く、その上で共通の ゴールを探すのは難しかった。

JASCで意外な収穫だったのは、他人、特にバッ クグラウンドが大きく異なる人々と生活を共にした ことで、自己をより理解できたことだ。JASC参加 前は、考え方の違いは結局のところ個人差で、アメ

リカ人と日本人という大きな区分による差異はない ものと思っていたが、アメデリと語らう中で、自 分の考え方がいかに日本製であるかを思い知らされ た。特に将来について話した際に、私はいわゆる「日 本的なレール」にためらいなく乗ろうとしていて、 夢もそこからはみ出ないよう、無意識に小さく押し 込めていたことに気が付いた。アメデリと話すうち に、そんな風に夢を見てもいいのか・・・と自分が 夢を見られていないことを初めて認識した。その違 いも個人差の域を超えるものではないかもしれない が、少なくとも私が将来について話した数人のアメ デリからは共通して「自分の未来を自分でユニーク に作り上げていく意志」を感じ、それは普段私が日 本の友達と話す中で感じとったことのない新鮮なも のだった。自己の思考にストッパーがかかっていた ことに気付けたおかげで、私の視野と選択肢は大き く広がった。その意味で、JASCは私にとってLife Changing Experienceであったと既に確信してい る。しかし、JASCが本当に人生を変えるかどうか は全てJASC後の行動にかかっていると思う。生か すも殺すも自分次第。そう肝に銘じながら、日常を 大切に過ごしていきたい。それぞれアプローチは違 えど、72人で少しでも良い世の中を創っていけたら と願っている。

ECのみんな、1年間本当にお疲れ様でした。最高 の会議を有難う!滑り込みセーフな感じで奇跡的に 皆と夏を共にできて、本当に良かったです。本会議 開催に御協力下さった全ての方々に感謝致します。 どうも有難うございました。

### 林 藤彦

ソーシャルデザインをする場としてJASCに来 た。そんなアツい奴がJASCにはいた。

日本人は議論が嫌いか?

答えは人によって違うと思うが、少なくとも議論 をする相手を選ぶと思う。自分の考えや意見をぶつ けることで他人との摩擦を極力少なくし、その場を 和やかなものに保ちたいからなのかもしれない。自 分はこのことをアメリカに留学した時に感じた。

建設的な議論をすることは大事だが、別に学校の

授業ではないし、実際の交渉現場でもないのだから 合意が得られる必要はない。何か答えが出る必要も ない。思うに、議論をすることで、またひとつ自分 の中で新たな多様性が生まれるし、別の折にその問 題について考える機会があれば、新たな視点や深み をもってその問題を捉えることが出来る。これが議 論のメリットだと感じる。

自分を含めて、日本人にはその感覚がなんとなく 薄い気がする。空気を読むことと議論を避けること が混同されているのかもしれない。また、ついつい 答えを探しがちなのかもしれない。答えを知らない 問題については議論をしたくないということもあ る。ただ、基本的にそれはすごくもったいない気が する。時と相手を選ぶ必要もあるが、自分も随分もつ たいないことをしてきたと思う。

そんな中、JASCに参加をした。そこにはアツい 奴がいた。

「どうしてそうなのか?」

「この立場の人から考えるとどうなのか?」

「なにが問題の本質なのか?」

意見をぶつけることは質問を投げることでもあ る。独りよがりに論じるのではなく、相手の意見を 求め、それに対して議論を建設的に積み重ねていく。 JASCで東京、函館、長野、京都と回る中で、安全 保障問題、漁業問題、農業問題、地方分権、核エネ ルギー問題など、様々な問題について考えさせられ る機会があった。その都度、意識の高い日米の学生 と議論が出来たことは非常に有意義だったと思う。 自分自身は、最後のアメリカ側からの手紙で「あな たは非常に相手の意見を尊重する一方で、基本的に 日本の立場で論じることが多いよね。世界全体の最 適を一緒に考えていけたら嬉しい。」といったフィー ドバックをもらった。「日米から地球へ」という今年 のJASCのテーマから考えても、一人の世界市民と してもその通りだなと感じた。今後の自分の課題で もある。

会議中、何度も思い出していた言葉がある。直前 合宿の時にECの瑛美に言われた言葉だ。

"Time is limited. Space is unlimited."

時間は1ヵ月というスパンで本当に限られてい

る。だが、JASCという空間の中でどう動きまわっ て、デリや会議中に出会う人たちとどう絡むかは本 当に自分次第。だからとにかく動き回りなさい、意 見をぶつけなさいということだった。

楽しく動き回れた素晴らしい1ヵ月だった。

最後に、あのJASCという空間を作るために一年 間膨大な時間を費やし、大きな犠牲を払ってくれた ECに心から感謝したい。本当に、本当にありがとう。 ECの裏方での尋常でない準備がなければこの素晴 らしい会議はなかったと思う。自分もこれから何ら かの形でJASCに貢献できたらと思う。そして、会 議中、時にはストレスや疲労で発狂しそうになるこ ともあったが、その都度無理やり笑わせてくれた分 科会のメンバー、MY DB IMD、友理、Alisa、歩美、 Emily、聡、Michelle、美由紀、Naoki、全員に本 当に感謝したい。

JASCがソーシャルデザインについて論じること も出来る、そんな場であり続けてほしいと思う。

### 誉田有里

第61回実行委員が発足した去年の9月からの一年 を振り返り、改めてでてくる思いは感謝の念であ る。実行委員としての仕事は、今まで私が経験した ことないことばかりで毎日が手探りだった。それま で比較的のんびりと学生生活を送っていた私にとっ て、実行委員としてのこの一年は衝撃的だった、と 終わってみて思う。忙しいと思う暇も、不安を抱い て立ち止まる余裕もなかったほど突っ走った。どこ で何をしていようとも、JASCが頭から離れたこと は一日もない。睡眠時間を大幅に削りながら次々と 襲ってくるタスクをこなし、決して楽だったとは言 えないこの一年であったが、一度たりとも辞めたい と思ったことがなかったのは、純粋にそんな日々も 楽しかったからであり、純粋に61回会議が楽しみで あったからであり、何より、力を貸し、支えてくれ た人々がいたからである。一人では生きていけず、 周りの人によって自分が生かされていること、多く の人の汗と涙で社会が成り立っていることを痛感す る日々であった。

思い起こせば、去年9月に実行委員になってから

本会議を終えるまで、私が一貫して自分に課してい たことは「逃げないこと」であった。不安やプレッ シャー、怠惰や悲しみに直面しても、それを理由に 逃げるのではなく、受け止め一つ一つ乗り越えよう と決め、立ち止りそうになるたびにそう言い聞かせ ていた。しかし、一貫して「逃げない」でいようにも、 自分の限界をつきつけられ、逃げなくとも何も貢献 できない自分の無力さに悲しくなることもあった。 実行委員としての責任は果たさなくてはならぬも、 実行委員であることによって皆から線引きされぬよ う、本会議では皆と語り合い、仲良くなろうと意気 込んでいた。しかし、実際は本会議が始まるや否や、 改めて72名という人数のボリュームを感じ、焦燥感 と不安に飲まれ、余裕がないように見せないことだ けでエネルギーを消耗してしまい、自分の心のキャ パシティーのなさに悔しくなることもあった。しか し、ひとりひとりからもらった、温かい言葉や思い やりに、毎日のように励まされ、ひとりひとりの魅 力に毎日魅了されていたのも事実である。また、皆 が笑っているのを見るのが何よりも嬉しく、相当な 活力になっていた。

この1年間、学生である私たちにできることは何 か、なぜ今日米なのか等、問うべきことは多く存在 した。明確な答えを見出そうとする一方で、企画運 営をするにあたり、考えることだけに費やせる時間 も限られており、行動に落としていかなくてはなら ない葛藤もあったように思う。動きながら考えるこ と、それには是非があるだろう。しかし、動きなが ら見えてくることがあり、動かなくては見えてこな いこともある。時としてリスクを伴うこともあるが、 行動を起こすことによって開けてくる視野も変わっ てくるだろうと思う。リスクを取った分だけ、きっ と得られるものがあるに違いない。

私が一個人として多くのことを学ばせてもらった 日米学生会議は、実に多くの人の支えがあって開催 されている。特にこの一年は、一つ一つの企画が遂 行されるたびに、ご協力いただいた方々の顔が浮か び、実行委員としての責任を感じながら活動してき た。しかし、実行委員を終えた今、改めて結果とし て責任を果たせたどうかを問うと、至らなかった点

や未熟だった点も多く浮かんでくる。今回、本会議 を通じて見えてきた会議の今後の課題を忘れず、こ の先も是非続いていってほしい。国境を越えた十人 十色な仲間と出会い、様々な価値観とぶつかること のできる、かけがえのない貴重な一夏を一人でも多 くの人が経験してほしいと強く思う。

### 松尾恵輔

第61回の会議で常に、私は昨年参加した60回会議 の残像にとらわれていた。たとえば、春合宿を終え、 JASCに対する思いを強くさせていく参加者。本会 議の中で壁にぶつかり、悪戦苦闘する彼らの悩み。 そして本会議を通してデリゲート同士が互いに親交 を深める様子。それらの光景を魅力的に頼もしく思 う反面、既に昨年見た光景をリピートしているよう で新鮮味にかけているように感じた。「参加してい る人は違っても、会議で発生する事態は変わらない。 そんな中で自分が学べることは何かあるのか。」と、 時には他の参加者との間に意識的に線を引き、考え ていたのだ。

残念ながら、会議が終了するまでこのような感覚 が消えることはなかった。そこにいた個々の人間や 事象に深く注目せず、事態を過度に一般化していた 自分の態度は悔やまれる。

そんななか、会議に2年関わったからこそ再認識 できた、社会における会議の意義がある。それは参 加者たちの「海のむこうの人」に対する想像力の醸成 だ。JASCの参加者達は1ヶ月をかけ、真剣に互い と向きあう。その中で、アメリカと日本の意見の習 慣の差に愕然とし、お互いの距離を感じてしまうこ ともある。だが、1ヶ月という時間でさまざまな話 をする中で、違いにあるバックグラウンドに目をむ け、相手の言っていることを理解し、納得できるよ うにしようという姿勢になる。さらに、はじめは価 値観の違いにより一瞥して通り過ぎてしまっていた 人とも丁寧に向き合い、「友達」になることができる。

この想像力は、これからの社会で一人ひとりの人 間が持っているべき資質になるだろう。思うに、格 差や差別、環境問題といった現代社会が抱える問題 は、それによって苦しむであろう人々の事情への、

理解不足や無関心から起こり、解決が難しくなる。 途方もない話ではあるが、我々 JASCerが社会でこ の「想像力」をひろめ、さらに自分自身も「想像力」を もって働く中で、この社会を少しでもよいものにし ていきたいという使命感をもった。

思い出は美しく、できればこの辺りで筆をおきた いところだが、IASCが大好きであるからこそ恥を 承知で、書く。今のJASCには改めなければならな いところもある。それが、「学生の質の悪い甘え」だ。 学生の立場だから言える意見があり、多くの方々が 寛大な心でそれを支援してくれる。しかし、学生で あるからといって、一度言い出したことへの責任感 のなさや、人の親切や行為に対する敬意のなさは許 されない。私も含め、今のJASCにはその意識が足 りなかった。JASCという活動を更に多くの方に理 解してもらえるよう、発展させられるよう、今後は 改善していかなければならないと思う。

最後に、すばらしい思い出を下さったホストファ ミリーの冨岡さん、国際教育振興会の皆様、会議を 一緒に作ってきたECの秀也、おゆり、もっちゃん、 えみ、たくま、こうじ、ゆり、活動を見守ってくれ た家族に心から御礼申し上げたい。本当に、ありが とうございました。

### 松本秀也

1934年、歴史の教科書でしか見たことのないよう な数字。日米学生会議が、形を変えながらも続いて きた75年という歳月、築かれてきた歴史。およそ想 像もつかない過去の参加者の苦労や想い入れを、会 議の準備期間に強く意識し、その結果様々な葛藤が 自分の中で起こった。会議をすることにどれだけの 意味があるのか、1年間悩み続けた。60回会議終了 後に確かに感じ、心に秘めた、この日米学生会議の 意義を、新しい61回という会議を通じて参加者の皆 に伝えたい。委員長になった当時はその一心だった。

1ヵ月という限られた時間の中で、日米の学生が 成せる事。その限界に挑戦しようという想いとは裏 腹に、しばし自分を見失い、仲間を見失い、今にも 残る後悔は数え切れない。それらを振り返るたび、 自分が会議に何を残せたのか、委員長として成せた

ことがあったのかと反芻してみるが、金塊を求めて 深い海を彷徨う海人のように、暗闇の中、ひたすら 下降し、海水越しにゆらめく上空の陽光を振り返っ ている。会議が終わり1週間が経った今も、実行委 員発足当時に感じていた気持ちを61回の会議で伝え ることが出来たのか。未だに答えは出ていない。

参加者として終えた60回の会議では、米国の学生 との理解がいとも簡単に出来たと感じていたが、そ れは大きな誤りであったと今回の会議では気付い た。確かに仲良くはなった。皆を友人と呼べ、親友 として一生付き合っていく者も多く在るだろう。し かし、分かり合うということ、お互いに全てを受け 止め、いかなる場にあっても相手の気持ちに推測を たてて相互協調していくというレベルでの「理解」に は、程遠かった。国際交流の難しさ、異文化理解の 最たるものを感じた気がした。

また委員長として、実行委員の皆には多くの場面 で支えられてきた事も触れておきたい。京都に1人 で居ながら、JASCへの熱い想いを胸に、自分とは 全く違う思考を持ち、常に自分を「ハッ」とさせてく れたもっちゃんには、人間として、また違った価 値観を学ばせてくれたことに感謝したい。有難う。 Webを中心にした広報に尽力し、唯一の平成生ま れの独自さを持つKOJIは、同じく東京サイトコー ディネーターとして、いつも迷惑をかけてしまった が、いつまでも情熱を絶やさず、実行委員内にいつ も新しい風を吹き込んでくれた、有難う。副実行委 員長として、大きな期待と重圧で大変だったであろ うユリ。サハリン企画の時、マクドナルドで情熱の ままに、締め切り日を設定し、実行したことは、一 生忘れないよ。色々と大変な事もあったけど、いつ も元気に仕事をこなしてくれて有難う。たくま、こ のエリートがまた厄介だった。今年は私立組と国立 組の意見の対立が絶えなかった。そしていつも的確 で批判的な意見を言うのがたくまだった。本当に今 まで会ったことのない人種で、なんとか論破しよう と試みたこともあったけど、無理だったね。分科会 リーダーとしてのたくまは、俺には到底出来ない立 派さであったと、本当に感心しています、有難う。 今度数学教えて。おゆり、経理としてミスの許され

ない仕事は、実は一番大変で時間もかかったと思っ てる。いつも俺の文句や中傷にめげず、ひたむきに 実行委員の活動をやってくれて、本当に助かりまし た。おゆりが居てよかったです、有難う。けいすけ、 60回の時から同じ分科会メンバーとして、色々な話 をしたね。俺の奔放さにいつも笑顔で対応しながら、 しっかり自分の意見も持って、皆に愛される存在で した。俺が吹聴するまでは・・・。独特の雰囲気で、 実行委員内に束の間の休息をもたらしてくれて有難 う。就職活動の時期は励ましてくれて有難う。そし て、60回の選挙でチェアに立候補するときに声をか けてくれたエミ。いつも冷静に、かつ感情的に会議 の事を思い、献身的に仕事をこなしてくれて有難う。 エミの仕事にミスはなく、いつも助けられてました。 そして様々な場面での相談役としてのエミは、一番 頼れる存在だったよ、有難う。

会議終盤、ふと「この瞬間は、もう二度とこない んだね。」という言葉を発した。ありきたりな言葉で あり、かついつも意識すべきことなのかもしれない が、京都でこう感じた事は、とても印象に残ってい る。第61回日米学生会議で起きた全ての瞬間は、今 後の私の人生の中で、これほど幅広く経験し、出会 いを果たしたという意味で、最も大きな教訓になっ たことは間違いない。そして、二度とは戻らない瞬 間であっても、それを限りなく再現可能にする仲間 が出来たことは、一生の財産であり、いつまでも自 分の中で見失うことの無い、深い海の底の宝物であ ることは間違いないと断言できる。心から、61回会 議に参加し会議を創ってくれた72人に有難うと言い たい。

最後に、このような素晴らしい経験、出会いを可 能にしてくださった、主催団体の国際教育振興会、 その他第61回日米学生会議に携り、並々ならぬご支 援ご指導を賜った全ての皆様に感謝申し上げ、委員 長として、会議終了の報告をさせていただきます。

### 安川瑛美

JASCは箱だ。私たちは真新しいJASCピンをつ け、その箱の中に入る。この箱を宝箱にするか、ガ ラクタの詰まった段ボールにするかは個人次第であ

ることは間違いない。箱の中で色々な出会いや気づ きを経験し、その結果箱の価値が決まってくる。ぶ つかり合いをすればするほど、もがけばもがくほど 箱の価値は高まるのではないかと思う。実行委員同 士、分科会メンバーとの議論、OB/OGの方々、サ イトでお世話になった方々とのコミュニケーショ ン、これらの対話は衝突でもあり理解しあうことで もあり、つまり61回会議の創作過程である。私はと にかくこの創作過程の一瞬一瞬から学びぬき、楽し もうと決めていた。この過程が終了して何が残るの か、会議の存在意義への疑問の問いが見つかるかど うかは、最後にならないとわからないだろうと思っ ていたからである。

会議中いくつかの発見があった。

あるアメリカ側の参加者は、東京一長野間の移動 中に車窓から見える雄大な日本の自然に、「まさか 日本にこんなに神秘的な自然があるとは思わなかっ た」とパシャパシャシャッターを切りながら、寝て いるみんなが見逃した日本の美をひそかに堪能して いた。同参加者は、小布施町がどこにあんなにも美 しく町を保つことができるのに十分な財政があるの かと悩んだ末、この町は実はケシを栽培しているの ではないかとユニークな論を展開していた。発見の 場を提供した上で、企画側の醍醐味は"予測してい ない反応"が生まれた際の驚きなのではないかと思

コミュニケーションの難しさも日々痛感した。一 年ぶりに実行委員全員がそろった東京では日米間に 不穏な空気が漂っていた。それは、JASCへの熱き 思いの空回りと会議が始まっているという焦りや戸 惑いに、不安・期待・葛藤が混ざり合い生まれた齟 齬であった。ミーティングでは涙も流れた。しかし、 こういう青臭い経験もJASCに必要であるとも再確 認した。アカデミックさを追求したいなら、学会 にでればいい。真理の探究なら1人でだって可能だ。 結果や解決策だけに軸を起きたいならビジネスコン テストやコンペに出ればいい。英語で交流をしたい なら駅前留学とHUBで事足りる。ビジネスコンテ ストでも学会でもない。JASCの意義は、個人個人 の価値観という変数に影響されながらこれらの要素

の中間点を取るべく、模索されてきたのではないだろうか。

分科会の議論からも発見があった。日米の女子ツートップであるひろかとAmieは議論の質に多大に貢献してくれ、冷静派かつ草食系のゆーきとDylanの発言は議論に深みを与えてくれた。しゆーたとYudaiのコンビは持ち前の地頭の良さをもちながら皆の弟分であり、キュートななおとMadisonはマイペースながらも場を盛り上げてくれた。実は二人とも泣き上戸(私も否めないが)だった。いつだったか、「良い議論がしたい。解決策は二の次」と言っていた。なんという名言だろう。過程(=対話)の質を上げる、過程に価値を置く。問題解決能力とはよく言ったものだが、問題把握・分析といった泥沼にどっぷりはまる覚悟がなければ、産み出てくる解決策の質自体さえ限定的なのだ。

思えば、去年60回会議が終わり61回の実行委員に日本側8名が出揃ったときには知るすべも無かった一人ひとりの個性がぶつかり合った。ポーカーフェイスだが情に弱い実行委員長秀也、常に明るく責任感の強いゆり、緻密な論点と反論を可能にする思考回路を持つたくま、Interactive empowermentを「対話と発信」と和訳し皆をうならせたもっちゃん、既存のものの踏襲をよしとしない改革派のこうじ、頑張り屋さんかつ安定しているおゆり、そして世渡りが上手いけど繊細なけいすけ。共通項を見つけるのに苦労をするようなメンバーで、案の定、衝突を多々重ねながらも作り上げた61回は、私の一生の宝物の箱になるであろうと会議後には素直に思うのである。

2009年の夏をJASCで過ごせてよかった!みんな ありがとう。

### 安川皓一郎

JASCは学生としての最後の場だったはずだった。

しかし、それは始まりの場になってしまった。

私は春合宿で「日々学び、日々変わり、日々を変える」人間でありたい、そして周囲の人間がそうであって欲しいと言った。

一人で本を読むのではない。

一人一人の人間という、一つの人生の本棚と向き 合う面白さ。

その本棚が71もあった1ヵ月間。

それは、大きなChangeを私にもたらしてくれた。 Life Changing experience

JASCの謳い文句はいつもそうだ。

1ヵ月で人生が変わるのか?そう思った気持ちは嘘ではない。

しかし、私の人生は変わってしまった。

JASCとの出会い、JASCで出会った人たちとの 交流・・・

それらは私の中で次第に大きな物となり、私の次の「選択」を左右するほどのものになった。

社会人か、学生か。

まだまだ青い、学生同士が持てる最大限の知識・ 意見をもって語り合う。

そんな魅力に改めて気付かされてしまった。

私は幸いなことに、第62回日米学生会議を創る事ができる。

新たな71人との出会いは、いかにして私を変える のだろうか?

そして、いかにして私は彼らを変えることができるだろうか?

1年間を賭けた挑戦を、私は今始めている。

Yes, We can ではなく Yes, We did it と言えるように。

それぞれがそれぞれの担う世界を変え、そんな言葉をみんなで語り合える日がいつしか来るのだろうか?

### 山本佳世

社会人学生としてJASCに出会った。

「日米学生会議」の存在を知ったのはもう10年以上前であったが、そこに何か大きなエネルギーを感じたことを覚えている。その後、約10年間の社会人生活を経て、思いがけないタイミングで再び学生となり、しばらくしてJASCを思い出した。今の自分が学部生の皆に交じって共同生活を送ることに全く抵抗がなかったと言えばウソになるが、それ以上に、

気になっているチャンスにチャレンジしないで終る 後悔の方が怖かった。そして、運よくJASCerに選 ばれた時は嬉しかった。異色の私を選んでくれた実 行委員の器の大きさに本当に感謝している。

参加が決まり、何かJASCに貢献できることはな いかと考え始めた。今振り返ると少々肩に力が入っ ていたようにも思うが、その時にまず浮かんだのが 広報だった。広報を専攻する学生として、地元北海 道での認知、理解の向上を図れないものかと考えた。 お役に立てたかどうかはわからないが、新聞取材の 実現などを通じて、北大をはじめ、道内での認知度 は幾分上がったと感じている。また、今回の活動か ら広報の実践やメディアとの関わりについて、自身 も学ぶことが多かった。

JASCで得たものは大きい。だが、それは何かと 聞かれると上手く言葉にまとまらない。社会人と して心身ともに無理をした時期もあったが、思っ ていた以上に健康だと自信が持てたことも収穫だ し、JASCに参加しなければ訪れることもなかった かも知れない場所での発見も収穫であった。しか し、何よりも嬉しかったのは、学部生を中心とする JASCerのみんなが気軽にファーストネームで呼ん でくれる、敬語なしで話をしてくれる、ということ

だった。JASCに参加しなければなかなか得ること のできない関係だと、このことにも感謝している。

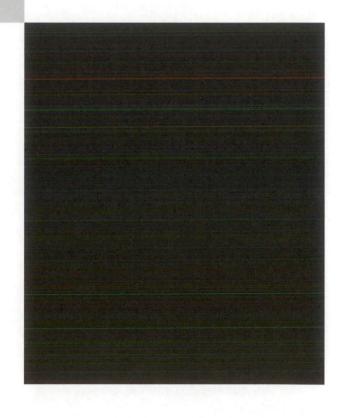
JASC期間中で特に印象的だったのは、長野県の 小布施町で過ごした時間だ。町を挙げて歓迎して下 さり、町長の市村さんから直接まちづくりについて お話を伺うこともできた。ホームステイも体験でき、 ホストファミリーになって下さったご両親とは短い 時間ながらも色々な話をした。また、この町では何 度も美味しい食事に舌鼓を打った。ホストマザーに ごちそうになった栗ソフトも美味しかった(笑)。

JASCerのみんなからも多くのことを学んだ。行 動力と積極性を兼ね備えていたり、他人を思いやれ たり、学部の三、四年目にして既にかなりの専門知 識を持っている人がいたりと、個性溢れる多様な顔 ぶれだった。そして私は、そんな彼ら彼女らを羨望 と応援の眼差しで見ていた。

全体を通じて、春合宿から数ヵ月間一緒に活動し てきた分科会のメンバーと、実行委員の皆には特に 感謝している。様々な場面で支えになってもらい、 勉強もさせてもらった。現役学生の仲間たちは今後、 社会に出てそれぞれの道で活躍していくのだろう。 私もそれを励みに、明るく前進していきたい。

# 第6章

第62回 日米学生会議概要



# 第62回日米学牛会議テーマ

"-To Understand, To Unite, To Act: Continuous Evolution through Integrated Perspectives-" 「世界の問題を、私達の課題へ ~異なる個の生む衝突と共鳴から~」

日米学生会議、それは異なる個が集まり、様々な 体験をもとに「共に考え抜き」、そして「衝突と共鳴」 を繰り返す場である。第62回日米学生会議は、こ の二つを重要なコアとして1ヵ月間の活動に取り組

2009年、オバマ大統領は就任演説で「新たな責任 の時代」というメッセージを世界に発信した。その メッセージの中で彼は、我々に全世界の一人一人の 個人が社会に対して確かな責任を負う時代の到来を 説いていた。それでは今、学生である私達の責任と は一体何なのであろうか?それは、未来の担い手と して、今ある複雑な世界の問題を「自ら解くべき課 題」として捉え直し、真摯な姿勢で「共に考え抜く」 ことだ。学生である今だからこそあらゆる縛りを超 え、異なる背景と考えを持つ個人が自由に意見を表 明できる。そして誰にも縛られない本音の対立から 逃げないことで、未来を作る「絆」が生まれる。これ が「衝突と共鳴」である。

第62回日米学生会議はまず、なぜ今「日米」なのか

という問題を共に考え抜く。日米関係の基軸となっ てきた日米安全保障条約改定50周年を迎える2010 年。その目前に、日米両国では歴史的意義のある政 権交代が起きた。同時に世界レベルでは、金融危 機、東アジア安全保障等、様々な問題の中心に両国 はいる。日米を取り巻く状況が大きく変わりだした 今、いかに両国は未来を志向して行くのか?それは 直接、これからの「日米」学生会議自身の意義という 参加者が真摯に考えるべき課題ともなるだろう。

アメリカ開催の第62回日米学生会議では、リッチ モンド、ワシントンD.C.、ニューオーリンズ、サン フランシスコの4都市におけるフィールドトリップ や、ホームステイなど様々な経験を通して、新たな 問題意識が両国学生に生まれる。あらゆる問題を考 え抜く1ヵ月間が、全ての参加者の人生へのインパ クトとなることを期待している。異なる個が「新た な個」となる最初の一歩として、互いに考え抜き高 めあう"Life Changing"な1ヵ月を、第62回日米学 生会議は全員で創り上げていく。

### 主催

財団法人 国際教育振興会

### 企画・運営

第62回日米学生会議実行委員会

### 開催期間

2010年7月26日~2010年8月21日

### 開催地

リッチモンド(インディアナ州)

「アメリカにおける日本の再発見 ~日米の地 域間交流から~」

広大なトウモロコシ畑が広がり、アメリカの田 園風景の面影がありながら、自動車関連産業を中 心に多くの日系企業が進出しているインディアナ 州。州都インディアナポリスは国内交通の要衝と して、各産業を結ぶ「アメリカの十字路」とも言わ れる。そして、ジャパニーズ・スタディーズで有 名なEarlham Collegeのあるリッチモンドが、第 62回日米学生会議始まりの地となる。Earlham Collegeが1873年に日本人卒業生を輩出し、イン ディアナと日本の地域間交流の歴史は教育から始 まった。そして今日では、インディアナと日本の 各都市が相互に姉妹都市関係にあるなど、その 関係は深い。第1サイトでは、日本との繋がりが、 いかにインディアナの産業、教育、文化に影響を

与えてきたのかを確認し、「アメリカにおける日 本」を再発見したい。

### ワシントンD.C.

「アメリカの「力」を探る ~国家としての歩み と未来~」

ホワイトハウスや連邦議会など連邦政府三権の 最高機関をはじめとして、合衆国を動かす英知と 情報が集まるワシントンD.C.。イラク派兵から、 金融財政政策や産業貿易政策の決定まで、国際政 治、経済の全てに影響を与えるこの地はいまや、 米国内はもとより世界の政治、経済の中心たる都 市である。ワシントンD.C.での活動を通して、学 生達は他国にはない「アメリカの力」を改めて認識 するだろう。未来志向の「日米」関係を知るために、 強大な国家「アメリカ」とは何かを、対話を通して 探りたい。第2サイトでは、政治、経済…様々な 分野の第一線で活躍する方々との対話を通し、ア メリカ合衆国の「力」を直に感じていきたい。

### ニューオリンズ

「カトリーナからの再出発 ~歴史、人種を超 えた協働~|

19世紀フランス植民地時代の街並みを残すフレ ンチクォーター地区やジャズミュージックで有名 なニューオリンズ。「アメリカの中のヨーロッパ」 とも言われ異国情緒漂うこの地は、かつては全米 最大の奴隷市場として栄え、人種間差別や対立が 絶えない場所でもあった。そのニューオリンズに 2005年8月、ハリケーン・カトリーナが上陸し、 人口の半数を占めるアフリカ系アメリカ人居住地 区を中心に甚大な被害を与えた。しかし、その復 興への願いは人種、地域、さらには国を超えた協 力を生み出し、町は今生まれ変わりつつある。第 3サイトでは、復興の途上にあるこの地で地域住 民との対話や交流を重ね、大災害の現実と歴史や 人種を超えた恊働の理解を目指す。

### サンフランシスコ

「世界最先端都市とアジア移民 ~マイノリ

### ティの歴史を探る~し

最先端技術産業が集積するシリコンバレー、毎 年多くの観光客で賑わうノースビーチやフィッ シャマンズウオーフ。様々な顔を併せ持ち、世界 中にその名を轟かせる全米有数の都市、それがサ ンフランシスコである。観光都市としてその華や かさが有名でありながら、「移民の国」であるア メリカにあって、特にアジア系移民が多いことで 知られる。マイノリティーに対する厳しい偏見や 差別の矛先は、排日移民法や西海岸の移民の玄関 Angel Islandを象徴的な存在として、彼らにも向 けられてきた。第4サイトでは、移民への差別や 排除の歴史について学び、人種や民族の融合の過 程に見る「自由の国」アメリカの本質を探り、1カ 月に亘る会議の終着点を迎えたい。

### 会議の過程

第61回日米学生会議の参加者から選出され、発 足した実行委員会が、日本側主催団体の財団法人 国際教育振興会、米国側のInternational Student Conference (ISC), Inc.の支援の下、本会議開催の ための準備活動を行う。4月に参加者決定後、各参 加者は所属分科会のテーマに関するレポートを作成 し、5~7月の期間には、自主的に講演会や勉強会、 合宿などの事前準備を行い、夏の本会議に臨む。

本会議では、日米各36名、合計72名の学生が約1カ 月に亘って共同生活を送る。本会議の主な活動とし て、討論が中心となる分科会、各種のフィールドト リップ、そして様々な社会活動、最後に開催される フォーラムなどが挙げられる。参加者は7つの分科 会に分かれ、第62回日米学生会議として「共に考え 抜く」こと、そして「衝突と共鳴」を重視したディス カッションを行う。また、フィールドトリップでは、 アカデミックな知識を得るのみならず、各地の文化 に触れる活動を行うなど、各自の視野を広げ、討論 と対話の充実を図る。さらに、学生同士の討論に止 まらず、ホームステイやフォーラムなど積極的に地 域の方々との交流を図っていく。フォーラムでは、 分科会での討論の結果など本会議の成果を社会に向 けて発信する。本会議終了後には、参加者は会議に

### 第6章 第62回日米学生会議概要

おいて得られたもの、そして1ヵ月の結果を、報告 書と東京における報告会という形で外部へ発信す る。会議で得られた成果が長期的な社会的貢献、社 会還元されることを期待している。

### 会議中のプログラム

### 分科会

本会議においての活動の中心となる分科会は 7つ設けられており、日米双方5名ずつの学生が、 本会議期間中を通じて議論を重ねることとなる。 事前活動に加え、本会議中もフィールドトリップ で関連機関や専門家を訪問するなど、議論の質の 向上を目指す努力が続けられる。なお、第62回会 議における分科会は以下の通りである。

### ●学生の社会参画

Empowering Today's Youth: Overcoming Challenges in Society

- ●21世紀における日米の教育 Revitalizing Education: The Promotion of Individual Character
- ●安全保障と日米 Security, Military, and Peace: The United States and Japan
- ●社会起業家

Social Entrepreneurship: The Power to Transform

- ●新興国と地球環境問題
  - Spreading Environmental Awareness in **Industrial Developing Nations**
- ●地域再生-都市、農村が生き残るために-Sustainable Regionalism: How Can Urban Cities and Local Communities Coexist?
- ●国際社会とナショナルアイデンティティ:対立 から共存へ

The Role of National Identity in the Globalizing Society

### Field Trip

分科会の議題や各開催地に対する理解を深める ことを目的に、政府機関、国際機関、企業、大学、 NGO、NPO、及び研究所などへの訪問研修を実 施する。事前活動におけるものと同様に、社会と 直接関わることのできる貴重な機会であり、議論 をより現実的視点から行うための礎とする。

### Special Topics

限定された議題を扱う分科会とは異なり、参加 者が個々の関心に沿った議題を自由に設定し、異 なる視点からの議論を行うことを目的としてい る。また参加者の主体的、自発的な参加により、 問題発見、及び議題設定能力を養う、同時により 広い参加者同士の交流を促し、新たな視点や発想 の獲得により、会議をより充実させることも求め られる。

### Conference Wide Discussion

分科会では扱わないテーマを対象とし、日米学 生会議アラムナイや専門家をゲストスピーカーと して招き、第62回会議のテーマである「世界の問 題を私達の課題へ」を掲げ、参加者の見識を広め、 新たな課題や視点を発見することを目的とする。

### Conference Wide Reflection

参加者が一同に集い、会議中に感じた悩み、不 安、感動、喜びなど、様々なことを自由に話し合 う。自分の思いを全体に伝え、また他者と思いを 共有することで、自己を振り返り、他の参加者と の相互理解を促進することを目的とする。

#### Forum

第62回の各開催地のSite Themeに沿って随時 行われる。第一線で活躍する専門家や有識者の講 演、または学生を交えたパネルディスカッション など、参加者に学術的経験を得てもらうことを目 的とする。

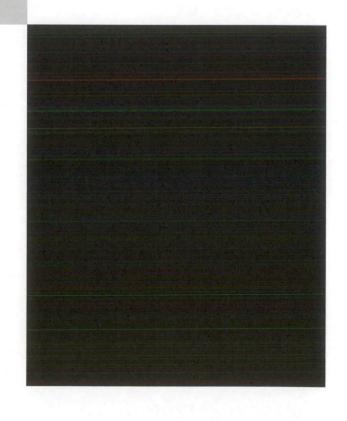
### Final Forum

最終開催地において行われるファイナルフォー ラムでは、1ヵ月の総まとめを行う。主として1ヵ 月間を通しての分科会ごとの成果の発表を行い、

現代社会が抱える問題とそれに対する学生なりの 視点を来場者の方々と共有することによって、第 62回日米学生会議において得られた、学生達の成 果や発見を社会に発信する。

# 第7章

日米学生会議に ご協力いただいた 方々



## ●第61回日米学生会議 主催・後援団体

### 会議全般

主催:財団法人国際教育振興会

後援:外務省、文部科学省、米国大使館、日米文化

センター、社団法人日米協会

### サイト後援・協力団体

### 【函館サイト】

### ●後援団体

函館市

函館市教育委員会

社団法人函館国際観光コンベンション協会

財団法人北海道国際交流センター

函館日米協会

函館大学

北海道新聞社

●協力団体

函館市農林水産部市場課

### 【長野サイト】

### ●後援団体

長野県

長野市

財団法人ながの観光コンベンションビューロー

財団法人長野国際親善クラブ

長野県小布施町

清泉女学院短期大学

信濃毎日新聞社

SBC信越放送株式会社

株式会社NBS長野放送

株式会社TBSテレビ信州

Abn長野朝日放送株式会社

INC長野ケーブルテレビ

信州大学

### ●協力団体

信州大学国際交流センター

長野高等学校

俊英高等学校

文武学校

松代文化財ボランティアの会

### 【京都サイト】

### ●後援団体

京都府

京都府教育委員会

京都市

京都市教育委員会

京都商工会議所

財団法人大学コンソーシアム京都

立命館大学

### ●協力団体

独立行政法人日本原子力研究開発機構
関西電力株式会社

### 講演・フォーラム・勉強会・講師、協力者 【サハリン】

中山 智夫 ITC Aerospace 代表取締役社長 コンスタンティン スホレブリック サハリン航空

代表取締役社長

秋山 光人 日本経済新聞 国際事業担当・対外情

報発信担当 常務取締役

井上 和美 株式会社JALキャピタル 取締役

城 宏和 日本航空 広報部 業務・企画グルー プ長

川勝 一成 日露交流センター 事業局長

岩城 美里 日露青年交流センター

小林 銀河 在ユジノサハリンスク領事館 専門調 香昌

近藤 将基 北海道サハリン事務所 主査

ミシコフ ボリス ラマザノビッチ サハリン国立総 合大学 総長

ビクター コルスノフ サハリン国立総合大学 副 総長

### 【防衛大学校】

五百頭旗真 防衛大学校 学校長

太田 文雄 防衛大学校 安全保障・危機管理教育 センター長

### 【東京サイト】

青山学院大学

東京ウィメンズプラザ

独立行政法人国立青少年教育振興機構

横須賀海軍施設

猪瀬 直樹 東京都副知事

明石 康 日本紛争予防センター 会長

降旗 健人 イー・モバイル株式会社 取締役

小田 康之 Vital Japan社長

仙波 研一 青山学院大学国際政経学部 学部長

氏家まりこ 青山学院大学 学生部

南 壮一郎 株式会社ビズ・リーチ 代表取締役

金子 一義 前国土交通大臣

佐々木 公 金子一義事務所 秘書

Hiroki Shioji Pacificova Consulting

David C Coker 米国海軍省 在日本軍司令部法曹 田沼 千秋 株式会社グリーンハウス 代表取締役 社長

### 【函館サイト】

高井 晓 函館市企画部国際課

長野 章 公立はこだて未来大学教授

手嶋 龍一 慶應義塾大学教授

尾上 定正 第二航空时司令兼千歳基地指令

中野 晋 五稜郭タワー 常務取締役、函館日米 協会事務局長

東井 勇治 自衛隊函館地方協力本部長 1等空佐

飯嶋 功昇 自衛隊函館地方協力本部 総務班長

清水 光 自衛隊函館地方協力本部

Allen Miner 株式会社サンブリッジ 代表取締役会

鈴木 知恵 手嶋メディアオフィス

長野 章 公立はこだて未来大学 情報アーキテ クチャー学科教授、函館イカ学研究所

渡辺 邦浩 イクサンダー大沼カヌーハウス 代表

長谷山裕一 函館市企画部企画管理課 主杳

若山 直 株式会社五島軒 取締役社長

高橋 一幸 株式会社五島軒 本店・工場・函館カ レーエクスプレス部門担当 取締役本 店長

枡本 選司 株式会社五島軒 本店営業部フロント 課 課長

前川 未来 Goes Around Cafe 代表

國分 晋吾 Goes Around Cafe 代表

福井 晶 函館市青少年研修センター 主事

佐々木浩司 函館市青少年研修センター 社会教育 主事

吉田 明彦 社団法人函館国際観光コンベンション 協会 専務理事

洒井 康次 一般財団法人函館国際水産・海洋都市 推進機構 事務局長

伊藤 晶 一般財団法人函館国際水産・海洋都市 推進機構 総務・経理部門

福田 覚 一般財団法人函館国際水産・海洋都市 推准機構

調査・研究部門産学官連携コーディ

小林 育子 一般財団法人函館国際水産・海洋都市 推進機構

> 調査・研究部門産学官 連携コーディ ネーター補佐

平田 明 函館水産連合協議会 函館水産物商業 協同組合 事務局長

高林 浩司 ホーワス・アジア・パシフィック、ジャ パン ディレクター

溝田 春夫 函館大学 学長

黒澤 幹生 函館大学 事務局長キャリア開発課長

Jonathan Hall Pomona College 准教授

野口由紀子 同時通訳者

丹下 浩子 同時通訳者

岩成 真一 防衛省航空幕僚監部 総務部長

山川 健二 防衛省航空幕僚監部 広報室広報班長

田村 玲子 特定非営利法人 US-Japan LINK 理事长

山本 健策 スーパーホテル 代表取締役常務

### 【長野サイト】

村井 仁 長野県知事

関昇 一郎 長野県 総務部秘書課 企画幹

芹沢 隆史 企画課 ブランド推進係 主査

田中 達也 企画課 ブランド推進係 係長

酒井 登 長野市 副市長

小林 正明 財団法人ながの観光コンベンション ビューロー 事務局長

### 第7章 日米学生会議にご協力いただいた方々

小川登志晃 財団法人ながの観光コンベンション ドューロー

コンベンション部 部長

今井 俊史 長野市青少年練成センター長

栗原 健爾 長野市教育委員会 生涯学習センター 所長

市村 良三 小布施町 町長

内坂 徹 花と実 栗の木診療所

内坂由美子 花と実 栗の木診療所

中嶋 聞多 信州大学人文学部・人文科学研究科教

林 靖人 信州大学 産学官連携推進本部 イノベーション&地域ブランド 担当 研究員

中邨 章 明治大学 教授

岩井まつよ 信州放送株式会社 取締役 情報セン ター担当

南山 宏之 株式会社アクサム代表取締役

市村 次夫 小布施堂株式会社 代表取締役

青木 忍 小布施堂株式会社 文化事業部

セーラ・マリ・カミングス 株式会社 桝一市村酒 造場 代表取締役

增尾 芳人 日本旅行 長野支店 課長

金井 博行 峠の釜飯本舗 おぎのや長野店 マ ネージャー

啓司 学校法人篠ノ井学園 長野俊英高等学 猪熊 校 学校長・理事

土屋 光男 学校法人篠ノ井学園 長野俊英高等学 校 教頭

藤沢 衛 長野県長野高等学校 英語教諭 教務 主任 英語クラブ顧問

寛 日本貿易振興機構 齋藤

小出 博治 社団法人長野国際親善クラブ 会長

牧 長夫 社団法人長野国際親善クラブ 常務理 事

### ●まち歩きご協力団体

ア・ラ・小布施、e-CLUB、農村女性いきいきプラ ン推進協議会、さ~けんせってみね会、小布施塾、 風の会

### ●小布施町ホストファミリーの皆様

山口 勇 小布施町商工会青年部、小林希用志、川 上真、池垣由美子、鶴田紀久子、小出俊雄、川上 健一、冨岡義仁、関谷明生、花井裕一郎、小渕三年雄、 小山洋史、木下 豊、竹節志げ子、北村信子、樋田 富子、久保英法、中條雄三、輿石多美子、市村良三、 内坂 徹、佐藤敬一郎、市川健夫、久保敏幸、市村 由美子、飯沼正治、土屋信子、久保田基雄、高野雄 志、畔上理子、小林暢雄

### 【京都サイト】

武山 精志 立命館大学国際部 次長

田中 清子 立命館大学国際部 BKC国際センター 国際部

BKC国際教育課 課長補佐

西田 純子 立命館大学国際部 国際企画課 課長 補佐

竹花 安子 立命館大学国際部 衣笠国際教育課 課長補佐

桐村 和彦 京都府知事直轄組織 国際課 課長

山口 浩司 京都府知事直轄組織 国際課 副課長

鍋崗 崇 京都府知事直轄組織 国際課 主任 国際交流担当

小林 貴子 京都府知事直轄組織 国際課 主任 推進・迎賓担当

宮野 文穂 京都府教育庁 教育次長

橋本 幸三 京都府教育庁 管理部長

高村 恭子 京都市総合企画局国際化推進室

在田 正秀 京都市教育委員会総務部

末永 祐介 京都市教育委員会事務局 指導部?学 校指導課 高校教育担当

蔦谷 朋美 京都商工会議所 企画室

天江喜七郎 財団法人国立京都国際会館 館長

金子 智美 財団法人国立京都国際会館 総務部庶 務課

重田 裕之 財団法人大学コンソーシアム京都 事 務局次長

西村 宗也 社団法人京都日米協会 副会長・専務 理事

梅田 哲 関西電力株式会社地域共生本部 部長 エネルギー研究開発拠点化プロジェク トチーム

大塩 稔 関西電力株式会社地域共生本部 エネルギー研究開発拠点化プロジェク トチーム

此川 勝博 関西電力株式会社地域共生本部 エネルギー研究開発拠点化プロジェク トチーム

佐久間 実 独立行政法人日本原子力研究開発機構 敦賀本部 中・西地区連携協力推進統 括者

北端 琢也 独立行政法人日本原子力研究開発機構 敦賀本部 経営企画部 研究主席 兼 国際協力グループリーダー

入江 勤 経営企画部 国際協力グループ技術副 主幹

增田 蓉子 独立行政法人日本原子力研究開発機構 敦賀本部 経営企画部 国際協力グ ループ

久野 裕輔 独立行政法人日本原子力研究開発機構 核不拡散科学技術センター次長 東京 大学大学院工学研究科客員教授

竹田 敏一 福井大学付属国際原子力工学研究所所

澤田 哲生 東京工業大学 原子炉工学研究所

松崎 晃治 小浜市長

出雲路康照 福井テレビ 嶺南支社 報道部専任部 長

志穂 福井新聞社 敦賀支社 副部長 泉

立石 智保 中日新聞・日刊県民福井 敦賀支局 記者

村田 晃嗣 同志社大学法学部教授

玉城 泰信 財団法人京都市国際交流協会 総務課 舞台主任

藤岡 考史 株式会社ルヴェソンヴェール

金剛 永謹 金剛流宗家 財団法人金剛能楽堂財団 理事長

宇高 竜成 金剛流能楽師

有田外喜彦 社団法人茶道裏千家淡交会総本部国際 部部長

ブルース浜名 社団法人茶道裏千家短淡交会総本部 国際部

総本山仁和寺 御室会館

武藤 景子 クリエイション株式会社ガクシン事業 部 編集担当

鈴木 啓晋 第7回京都学生祭典実行委員会 おど り普及部部長

西村健太郎 第7回京都学生祭典実行委員会 おど り普及部戦略統括

独立行政法人日本原子力研究開発機構(IAEA) 敦 賀本部の皆様

裏千家センター茶道資料館のみなさま

金剛能楽堂のみなさま

第7回京都学生祭典実行委員会 おどり普及部のみ なさま

宇多野ユースホステル

鶴島 正尋 日本国際学生協会第55回国際学生会議 実行委員長

高橋 実希 日本国際学生協会会長

中島 啓雄 大阪大学大学院国際公共政策研究科教 授

内藤 裕彬 京都大学農学部

広岡 義雄 オムロン株式会社 取締役室参事

Edward Dong 駐大阪·神戸米国総領事館 総領 事

佐貫 恵造 駐大阪・神戸米国総領事館 広報・文 化交流部 企画広報官

大喜多理沙 UNN関西学生報道連盟

寶槻 徹 株式会社ワイズポケット 会長

竹本 秀人 財団法人海外職業訓練協会大阪事務所 OVTA国際アドバイザー

中村 信之 大阪大学大学院国際公共政策研究科

### 【分科会活動でお世話になった方々】

財団法人 国際環境技術移転研究センター

仲本 千津 特定非営利活動法人TABLE FOR TWO International事務局

桜井 裕介 特定非営利活動法人 国際連合世界食 糧計画WFP協会 事業部

佐々木幸枝 日本モンサント株式会社 バイオ作物 情報部課長

内田 健 日本モンサント株式会社 バイオ作物 情報部

金子 理史 JA東京中央 経済部経済課 ファー マーズマーケット二子玉川

橋本 隆男 JA東京中央 ファーマーズマーケッ 下二子玉川

学校法人 アジア学院

鵜戸口昭彦 農林水産省大臣官房国際部国際協力課 国際情報分析官

大澤 誠 農林水産省大臣官房食料安全保障課 課長

牛草 哲郎 農林水産省大臣官房食料安全保障課 食料自給率向上対策室室長

内藤 紘子 農林水産省大臣官房食料安全保障課

強谷 雅彦 農林水産省大臣官房国際部国際協力課 課長

矢武 正行 農林水産省大臣官房国際部国際協力課 総務班

柴本 勤 柴本無農薬菜園 代表

聖 IA須高小布施支所 営農生活課 支 滝沢 店長代理課長

小渕由美子 JA須高小布施支所

薫 生活クラブ生活協同組合長野ブロック 高野

清水 浩 慶應義塾大学環境情報学部教授

增井 利彦 独立行政法人 国立環境研究所 社会環 境システム研究領域 統合評価研究室 室長

NPO法人「持続可能な開発のための教育の10年」推 進会議(ESD-J)

岸上みち枝 一般社団法人イクレイ日本 事務局長 齊藤 誠一 北海道大学大学院 水産科学研究院 I Nyoman Radiarta 北海道大学大学院 水産科学

### 研究院

Robinson Mugo 北海道大学大学院 水産科学研

C.W.ニコル 財団法人 アファンの森事務局

小池百合子 衆議院議員

Hugh T. Patrick Director, Center on Japanese Economy and Business Columbia Business School

井上 博雄 経済産業省 大臣官房秘書課 政策企 画委員/課長補佐(企画担当)

晋 経済産業省 地球環境対策室 首席交 岡本 渉官(Chief International Negotiator on Global Environment Affairs)

石川 浩 経済産業省 大臣官房秘書課課長補佐 (Deputy Director)

アジア経済研究所 開発研究センター 三尾 寿幸

黒屋 宏明 株式会社野村総合研究所 コーポレー トコミュニケーション部

小原 愛 株式会社野村総合研究所 コーポレー トコミュニケーション部

好彦 株式会社野村総合研究所. 上級コンサ 岩垂 ルタント

新田 淳一 アジア経済研究所 成果普及課

福島 義和 専修大学社会知性開発研究センター (都市政策研究センター) 教授

加藤 弘之 神戸大学大学院経済学研究科 教授 上田 慧 同志社大学商学部·商学研究科 教授

### 【日米学生会議アルムナイ協力者】

天野順一、秋間修、荒島由也、飯田智紀、市川裕康、 井上敏之、井上雅章、井上裕太、岩崎洋一郎、梅崎 涉、 江川響子、大高 巽、大原 学、金井 隆、木ノ上高章、 久保 勲、小林悦子、小林規威、佐藤広大、真田雄太、 塩崎哲也、島村明子、杉田道子、須藤俊男、住野 豪、 高井裕之、高林浩司、竹内幸美、武田興欣、竹本秀人、 田辺和子、千代明弘、辻喜久子、出浦寛子、冨川秀二、 中瀬正一、中村信之、中山智夫、西田尚弘、乗竹亮 治、波多野綾子、林友美、樋口宏、廣田良平、グレン・ フクシマ、船瀬俊介、降旗健人、寶槻 徹、細野恭平、 増田剛、見市礁、三浦俊章、源 飛輝、宮崎あゆみ、

山田裕一朗、山室勇臣、山本東生、吉野次郎、吉原 健吾、

第59、60回日米学生会議実行委員会/参加者一同

### 【替助団体・企業、替助者】

独立行政法人国際交流基金日米センター

財団法人双日国際交流財団

財団法人平和中島財団

財団法人三菱UFI国際財団

財団法人石橋財団

社団法人東京倶楽部

社団法人日米協会

京都日米協会

函館日米協会

函館市

財団法人ながの観光コンベンションビューロー

日米学生会議同窓会

アサヒビール株式会社

イオン株式会社

株式会社オリエンタルランド

キッコーマン株式会社

株式会社三和

新日本製鐡株式会社

セコム株式会社

株式会社セブン&アイ・ホールディングス

禅林寺

大成建設株式会社

株式会社竹中工務店

株式会社電通

東京海上日動火災保険株式会社

東京ガス株式会社

東京電力株式会社

トヨタ自動車株式会社

中辻産業株式会社

日産自動車株式会社

日本アイ・ビー・エム株式会社

日本生命保険相互会社

野村ホールディングス株式会社

株式会社日立製作所

富士ゼロックス株式会社

富十通株式会社

本田技研工業株式会社

パナソニック株式会社

三井不動産株式会社

三井物産株式会社

三菱地所株式会社

三菱重工業株式会社

三菱商事株式会社

株式会社三菱東京UFI銀行

明食サービス株式会社

メルシャン株式会社

橘・フクシマ・咲江

堤 清二

冨川 秀二

南原 晃

西田 尚弘

橋本 徹

平竹 雅人

山田 勝

和田 昭穂

いちごアセットマネジメント株式会社

伊藤忠商事株式会社

オタフクソース株式会社

協和発酵キリン株式会社

株式会社公文教育研究会

住友商事株式会社

東京ナイロン商事株式会社

株式会社グリーンハウス

高井 裕之

内古閑 宏

アレン マイナー

### 【主催および後援団体協力者】

財団法人国際教育振興会

理事長 大井 孝

参 与 稲田 脩

事務局 後藤明子

国際教育振興会賛助会

名誉会長 高円宮妃殿下

顧問 椎名武雄

会長 南原 晃

事務局長 伊部正信

事務局 好中由起惠

International Student Conferences, Inc

理事長 Stephen C. Moss

事務理事 Regina Dull

事務局 Michelle Jones

### 外務省

広報文化交流部部長 門司健次郎

人物交流室長 丸山市郎

人物交流室 外務事務官 小山久子

### 文部科学省

大臣官房 国際課 課長 柴田政之

大臣官房 国際課 総務係長 平田純一

### 米国大使館

経済部経済政策課長 ウィリアム・ダフ

広報・文化交流部 教育・人物交流担当官

ウィリアム・M・コールマン

広報・文化交流部 文化プログラム担当官

ケビン・オルブリッシュ

広報・文化交流部 レファレンス資料室 室長

笠 優子

広報・文化交流部 教育・人物交流室 落合安代

社団法人 日米協会

会長 大河原良雄

専務理事 渡辺 隆

日米文化センター

日本代表 伊部正信

# 編集後記

暑かった夏もあっという間に過ぎ去り、季節はうつり変わっていく。四谷にある日米学生会議の 事務所では、新たに選ばれた実行委員達が、早くも62回会議の準備を着々と進めている。1ヵ月を 共にすごした第61回会議の参加者たちは、留学、サークル、仕事、起業など、世界各地で次の目標 へと歩き出した。「それぞれ違うステージに進む仲間たちが、困難にぶつかった時に、社会の問題を 本気で考えた自分の原点を、そこにいた掛替えのない友のことを思い出せるように。」この報告書に はそんな思いがこめられている。気の遠くなるような作業であったが、作成に携わってくれた参加者、 実行委員にお礼を言いたい。

最後に、これまで日米学生会議をご支援いただいたすべての方々に、この場を借りて厚く御礼申 し上げます。皆様にこの報告書をご一読いただき、日米学生会議へのご理解を深めていただければ 幸いです。この報告書が、日米学生会議と支援者の皆様、そして日米学生会議にご興味をお持ちの 学生の皆様を結びつけることを祈りながら、61冊目の報告書を社会へ送り出します。

> 第61回日米学生会議実行委員 松尾恵輔 2009年12月28日



第61回日米学生会議実行委員

### 編集スタッフ

松尾恵輔、松本秀也、安川皓一郎、 谷口貴大、高橋央樹、中村真理

発行 財団法人国際教育振興会

企画・編集

第61回日米学生会議実行委員会 〒160-0004 東京都新宿区四ツ谷1-21 http://www.jasc-japan.com/

# Japan-America Student Conference Since 1934

主催



財団法人国際教育振興会

企画·運営 第61回日米学

第61回日米学生会議実行委員会